
死の先に待っていた新たな世界

Kazuya2009

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死の先に待っていた新たな世界

【Nコード】

N5224H

【作者名】

Kazuya2009

【あらすじ】

中国への出張の折、不幸にして墜落事故にあってしまった俺。悲しむ家族もいないため、その死に身を任せたら赤子になっていた。そして、そこは俺の世界とは異なる場所だった。注：この小説は、ゼロの使い魔の二次創作です。また、独自設定や独自解釈、歴史も改変がされています。そのため、真に「ゼロの使い魔のファン」の方は気分を害する可能性があるため、ご遠慮下さい。二次創作である以上、そこには望むものとは違う形の作品があるのをご理解戴いた上で読んでいただけると幸いです。

プロローグ（前書き）

この小説は、ゼロの使い魔の二次創作です。

また、独自設定や独自解釈があるため、真に「ゼロの使い魔のファン」の方は気分を害する可能性があるため、ご遠慮下さい。

二次創作である以上、そこには望むものとは違う形の作品があるのをご理解戴いた上で読んでいただけると幸いです。

ブローグ

全てが赤く燃えていた。

日本から中国への出張の中、俺は墜落事故にあったのだ。

墜落したのは中国の山岳部らしい。

最後に見たのが山だったから間違いないだろう。こんな山の中ではとても救助が来れる場所ではない。

そして、何よりも俺の体は飛行機の扉で腹から下が切断されていた。

不思議と痛みは感じない。それで分かった。

俺は死ぬんだと……。

幸いなのが、家族がとくにいないことだ。

両親は俺が二十五の時に交通事故で亡くしている。

元々、一人っ子だった俺には俺が死んでも悲しむ家族がない。

それが唯一の救いであった。

あとを三十を目の前にして、妻はおるか、恋人すら居ないのも良かった。

いたらその人がとても悲しんでいただろうから。

もつとも、仕事の方は大変だろう。

かなり大きなプロジェクトを引継ぎもなにも無しでいなくなるわけである。

大いに業務に支障をきたすだろう。

でもいい。

それすら時間でどうにか解決するだろう。

所詮、悲しんでくれる人間などいるわけがないのだから。だからだろうか？

俺は目を閉じるとそのまま、死の待つ闇へと身を任した。

長い間、闇の中をさまよっていたと思う。

時間の感覚は、無い。ただ闇の中にいるだけだ。そこに小さい光を見つけて、次の瞬間、俺は目を覚ました。そう、死んだはずなのに俺は目を覚ましたのだ。だが、どうもおかしい。

体が妙に軽い。そして、誰かに抱えられている。

「エレナ。良くやった！ 男子じゃないか！」

そう言葉が聞こえてきた。

英語に近いが英語ではない？

聞いた事のない言葉だ。

しかし不思議と俺は、彼らの言葉を理解していた。

「はい……。あなた、我がヴァルガード家の跡取りです」

ヴァルガード？

跡取り？

「何とも可愛らしい四肢をしているのだろうな。この子は。だが、瞳はそれでも意志が強い」

「あなたに似るのかも知れませんね。 ” 風神 ” のあなたに……」
そうか……。俺は生まれ変わったんだな……。

この二人の会話から、それを理解することが出来た。

俺の第二の人生。

しかも前世の記憶とやらが残ったままだ。

そう理解した時、俺は父親らしい人に高々と掲げられてこう言われた。

「お前の名は、生まれる前から決めていたのだ。男子ならそう、アレスだ。アレス・ジルアス・ド・ヴァルガード。それがお前の名前だ」

アレス・ジルアス・ド・ヴァルガード。

これが俺の名前になるのか。

前世の記憶をもった第二の人生。

こっちでも、また寂しい最後になるのだろうか？

第一話（前書き）

この小説は「ゼロの使い魔」の二次創作になります。

また、独自解釈、独自設定などあり、表現も作者の都合で書いています。

そのため、真に「ゼロの使い魔」のファンと言う方には不快な思いをさせる可能性があるのをご了承ください。

また、読んでいる途中、感情的になったり、気分が悪くなった場合はすぐに閲覧するのを止めて気分を落ち着かせることをお勧めします。

第一話

俺がアレス・ジルアス・ド・ヴァルガードとして生を受けて早十二年がたった。

言葉がしゃべれる様になり、文字が書けるようになると、俺はこの世界の書物を読み漁った。

前世での三十年の経験と知識、こちらの世界での新たな常識と知識体系、文化体系の違いが面白い。

特に、魔法に関しては衝撃的だった。

ここハルケギニアには魔法の文化があり、工業、農業などは魔法で行ってしまう。そのせいで逆に科学は全く進歩しておらず六千もの歴史があるのに中世ヨーロッパ並である。

貴族の文化も中世ヨーロッパに似たり寄ったりだったが、俺は現代人。彼らの考え方が好きにはなれなかった。

前世ではプログラマーだった俺は、とにかく魔法の研究には力を入れた。

まるで新しい言語を覚えたように、それはとにかく面白い。言語が分かれば、あとはいろいろと試してみる。

どんな技術であれ、元の技術から新しいものを作る試みは面白いものだ。

魔法は俺にとって、新しい玩具を買ったときの子供の感覚を呼び起こしてくれていた。

ここで両親について少し話そう。

父はグレイア。二つ名が”風神”。

風のスクウェアメイジだ。その風は神の如く、時には優しく、時には激しく、そして全てを無に返すほど力を持っている。

烈風力リンで知られるカリィヌ夫人といい勝負と言われるほどだ。金髪で、長身。そして誰もが安らぐ優しさと、強さを兼ね揃える。

爵位は第二位の侯爵だ。

侯爵ではあるもののトリステインの公爵家であるヴァリエール家と対等なほどの実力を誇り、ラ・ヴァリエール公爵とも戦友の中である。

軍事、政治などにも手腕を発揮している。

母、エレナ。二つ名は”水の女神”。

水のトライアングルメイジで、その治癒魔法はトライアングルメイジでは随一。

治療に際する、人体の知識に富むため、適切な処置が出来るのでも名が知られている。

また、女神の名が付くほど人間が出来ており、トリステインでは異端視されるが平民への理解が深い。

その影響があつてか、ヴァルガード領の平民は他の領の平民より扱いが良い。

彼女の髪は水の名と同じく、青い。

間違いなく美人の部類にはいり、パーティなどの時には注目を浴びる。

元々は隣国ガリア王家の血筋でもあるらしいが権力抗争に負けて三百年前に、トリステインへ亡命。この地の貴族と血を交えたと言う。

詳しいことは俺も良く知らない。

こんな名門中の名門に生まれた俺である。

血筋とは恐ろしいもので、俺の魔法の才能はすぐに開花した。

七歳で父親と同じ風の系統に目覚めると、すぐさま九歳でライン、十一歳でトライアングルとなった。

スクウェアメイジになるのも時間の問題とも言われている。

まさに名実ともに良血の血統に恵まれた。

俺の容姿は父親譲りだった。

見た目も父親そっくりで、唯一瞳だけはエメラルドの色をしてい

た。

ちなみに母親はエメラルド、父は髪の毛と同じ金瞳だけは母親譲りである。

さて、この世界で生きて十二年になるが、俺はある少女と出会った。

ヴァリエール公爵家の三女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。

桃色の髪に、少しきつい瞳でありながら、優しさを持つ少女。歳は三歳下なのだが、とてもいい子だ。

この手の女の子は将来とても綺麗なるのは間違いないだろう。

俺が彼女に初めてあったのは十歳の時だった。

両親が戦友ということもあり、俺は父、これからは父さんと呼ぶことにしよう。父さんに連れられてヴァリエール家に遊びにいったのが最初である。

お姉さん二人は印象的だった。あの二人は対極に位置するんじゃないかと思うほどである。

それでも俺はルイズが一番気になっていた。

俺が一番興味があったのは、彼女の魔法が爆発するということだった。

十歳になる頃にはありとあらゆる魔法書を読み漁った俺に、衝撃を与えたものだった。

何より、失敗した時の、彼女の悔しそうで悲しいそんな顔が忘れられなかったのが、一番である。

好奇心が人一倍旺盛なのと、研究から、俺は彼女の爆発の原因を調べることにした。

その日も俺はヴァリエール家を訪れた。

ヴァルガード家から馬で二時間ほどの場所がヴァリエール家である。

もつとも、俺は魔法の鍛錬も含めて、いつもレビテーションを使
って来ていた。

フライよりも、魔力の効率が良く、その気になればフライと同等
な速度で飛べる。

ヴァリエール家の前に降り立つと、衛兵にあいさつをする。

「アレス・ジルアス・ド・ヴァルガードです。ルイズお嬢様に会い
に来ました」

「アレス様、お待ちしておりました。どうぞ、お入り下さい」

門が開けられると、衛兵に一礼すると、玄関に向かって飛んでい
く。

玄関まで来ると、そこにはルイズが迎えに出てきていた。

桃色の髪に、同じ色の服を着ている。

「アレス様、お待ちしておりましたわ」

九歳の子供ながら、スカートを少しつまんで礼儀正しくお辞儀を
する。

俺も胸に手を当てて軽くお辞儀をする。

「こんにちわ。ルイズ」

「ふふふ。アレス様、楽しみにしてました」

そういうとルイズは俺の手を取ると、急かすように庭へと行く。

俺は、ルイズの爆発の原因を調べるに当たって、彼女と過ごす時
間を増やしたのだが、俺はどうやらかなり気に入られていた。

そして、彼女には爆発の制御を試みるようにと言っていたのであ
る。

俺が二年間、爆発の原因を調べた結果、可能性の一つとして”虚
無”が上げられたからだ。

これは俺も推測の域を脱していないが、もしそうだとしたらやは
り力の制御は出来たほうがいい。

庭に着くと、俺は芝生に小石を置いて、椅子に座わる。

「さて、今日は小石を最小限の力で内部から爆発させてみよう」

「はい」

そういうと、ルイズは杖を構えて俺が置いた小石に向かって魔法を使った。

「バースト！」

杖を突き出して、ルイズが魔法を唱える。

ちなみに、バーストは俺の考えたルイズ専用のコモンスペルである。

コモンスペルは、イメージが大切なのだ。

イメージさえ出来れば口語でも発動できる。だからこそコモンスペルと言われるのである。

ルイズの魔法は全てが爆発だ。

だったら最初から爆発をイメージしたコモンスペルを用意するのが妥当である。

ルイズが唱えた魔法で、親指大の小石が音を立てて破裂した。

必要以上の爆発は起きない。あくまで小石を内部から爆発させただけ。

「もう、随分と細かい制御が出来るようになったね。ルイズ」

「アレス様のおかげです」

そういうとにっこりと笑うルイズ。

最初のうちは、彼女は魔法が爆発だけということに、劣等感を抱いていた。

ただ俺が魔法の無い世界での三十年からすれば、何もせずに爆発させるのは脅威である。

そして、どの魔法書も爆発させる魔法は存在しない。

だから俺はこう言ったのだ。

「アレス様が、『これはルイズだけの魔法だ』と言ってくれたからです」

それだ。

俺が行き着いた可能性が”虚無”なら、この爆発という現象はルイズしか起こせない。

世界広しと言えど、単純な爆発を起こす魔法はないのだ。

火のメイジでさえ、土と風の複合した魔法でなら似たような現象が起こせるが、それでもトライアングルクラス以上の力が必要である。

それに威力だってルイズの何気なく魔法使って、爆発させた威力には勝らないのだ。

まだ系統魔法に目覚めないルイズが、同等の魔法が難なく使えるのは脅威としかいいようがなかった。

「ルイズ。僕はね、事実を言っただけなんだ。この爆発だけは誰にも真似が出来ない。これは事実だよ」

試しに、ルイズの両親にも進言したことがあった。

ルイズを無能と落胆していたラ・ヴァリエール公爵とカーリーヌ婦人。この二人にルイズと同じ威力の爆発の魔法が使えるか？ と。

最初は子供が何を馬鹿なと笑っていた。

ルイズの爆発を起こすのにトライアングル以上のメイジでないと出来ないことを言うと、真顔で確かにと考えを改めてくれた。

系統魔法が使えないのには何か理由があると説き、俺に任せてもらえるように言ったのである。

もっとも出来るものならやってみるがいい、と笑われたが。

「アレス、来てたのね」

その声で振り返る。

そこには金髪の長身の女性が立っていた。

ルイズの姉、エレオノールだ。

確かルイズとは九歳離れていて、今は十八歳の女性である。

釣りあがった目は母親譲り、そして金髪は彼女の父親譲り。

ルイズと違って、かなり優秀で、確か昨年からアカデミーに入っていた。

「ミス・エレオノール。お邪魔しています」

俺は立ち上がると、エレオノールに一礼をする。

「ちびルイズの方はどうなの？」

エレオノールはルイズの魔法が使えないことに、何とかしたいと

思っている一人だ。

それだけに、彼女の魔法の制御にとっても興味があるらしい。

「とても順調です。今、小石を内部から爆発させることをさせたところですよ。ルイズ、小石を持ってきて」

「あ、はい」

ルイズは、今爆発させた小石を持ってこさせる。

それをテーブルの上に置くと、それをエレオノールに見せた。

「……。とんでもないものね。あなたの魔法は」

エレオノールは小石を手にとって見ている。

「どういことですか？ お姉さま」

「こんなこと、どんなメイジだって出来ないってことよ。いいこと？ 普通、小石を内部から破裂させるなんて芸当はスクウェアメイジでも出来ないの」

小石の断面を見ながら、答えるエレオノール。

それもそうだ。

錬金対象の物質を変質させるが、内部から力を加えるわけじゃないのだ。

「わたしって凄いということでしょうか？」

「そうね。こんな魔法でも使い方によつては有効的ってところかしら？ アレス、あとで少し時間もらせるわね？」

「あとで、ですよ？」

「ふん、子供のくせに生意気ね。でも、いいわ。時間が出来たらわたしの部屋に來なさい」

「わかりました」

そう言うつと、エレオノールはやや複雑そうな顔をしながら去っていく。

その後、ルイズに力の制御の練習が終わると、一緒にお茶を飲む。こっちのお茶は紅茶だ。

どうも、食文化もヨーロッパに近いらしい。

俺は紅茶を一口飲んで、テーブルに置く。

「アレス様」

ルイズが、俺の方をやや顔を赤くしながら見ている。
なんだろう？

「どうしたんだい？」

「えっと……。お父様からお話があったんです。将来、わたしをヴァルガード家に出すと」

「え？ ヴアルガード家に？」

確か、以前ルイズからワルド子爵と婚約しているという話を聞いたことがあった。

ワルド子爵は、ヴァルガード家の近くである。俺も何度かあったがとてもいい人だ。

優しく、強く、そして何よりも礼儀正しい。

その彼と婚約していたはずなのだが？

「はい。何でもワルド様との婚約はお酒の席で正式なものじゃないからって仰ってました」

「でも、どうしてヴァルガード家に？ それ、その話が本当ならルイズとは将来結婚することになるんだけど？」

「わ、わたしが……。アレス様の事が好きだと言ったからです。そして少し考えられてから、ヴァルガード家に出す方がいいかもしれないと」

これは何と言ったらいいんだろうか？

まあ、俺もこの子のことは嫌いじゃないが、貴族はいつもこの手の話が早い。

「ルイズは、僕のこと好きなんだ？」

「はい。ア、アレス様はどうでしょうか？ アレス様が望まれないなら、わたし……」

「好きだよ」

まあ、取り分け他に好きな女性もないしな。

妹みたいな存在だけど、将来が楽しみな子であるのも間違いない。

俺の言葉を聞くと、ルイズは花のような笑顔を見せる。

「嬉しいです！ わたし、アレス様とならずと一緒にいたいと思
ってました」

「僕も、ルイズに好きだといわれて嬉しいよ」

正直、九歳の子供に好きと言われても精神年齢がすでに四十を超
えているからな……。

まあ、見た目は大丈夫だろう。

三歳差なんて、貴族の世界からしたらむしろかなり理想的だ。
普通なら十歳くらい歳の差があってもおかしくないのだから。

「後で、アレス様に贈り物がありますので、受け取ってくださいね」
「それは楽しみに待ってるよ」

その贈り物を貰った時は俺は何ともコメントに困ったものだった。
贈り物はマフラーだったのだが、どうも彼女は編み物など細かい
作業は苦手のようだ。

何せ、マフラーと言うよりは、毛糸が絡まった帯にしか見えなか
ったのだから。

それでも、俺が首に巻いてお礼を言っていると、とても喜んでくれたが。

第二話（前書き）

”虚無”について独自解釈があります。

アニメを第二部までと、原作はまだ三巻の途中なので間違った認識もありますが、ご了承下さい。

ゼロの使い魔ファンの方には申し訳ありません。

第二話

ルイズと別れて、俺は一人エレオノールの部屋に行く。

扉の前に立ち、二回ノックすると、部屋から入るように言われた。

「失礼します。アレス・ジルアス・ド・ヴァルガード、参りました」
「相変わらず、子供らしくないわね。そこに座って」

俺は一礼すると、椅子に座る。

もう何度も入っている部屋だが、本棚ばかりが並んでいて、いつも圧倒される。

「用件の方ですが」

「用件はあなたが言っていた”虚無”についての考察と、ルイズのことね」

「では、まず”虚無”についてからお聞きします」

「そうね」

そう言うのと、ため息を付きながらこういった。

「あなたの考察ではぼ間違い無さそうよ」

「やはりですか？」

「そういうこと」

俺の”虚無”の考察。

それは系統魔法が五つあるのに、”虚無”だけが扱えないことについてである。

俺が調べた結果、三つの理由があると考えた。

一つ目。”虚無”の魔法の担い手について。

これは現在、”虚無”の担い手がいない理由について、文献が無いこと、伝説であること、その両方の理由から扱える人間がたとえ居たとしても使い方が分からずに気づかないまま一生を終えているのではないかと考えた。

それと同時に、魔法は血によって伝わる以上、”虚無”が使える人間は必ず居ると言うこと。

そして、これはルイズにも関わる可能性があるのだが、魔法を行使して正しくそれが発動しないのが、その”虚無”の証ではないか？　と言うことである。

二つ目。系統魔法と”虚無”の違い。

これは俺が調べた限りであるが、使い魔にあると思うのだ。通常の使い魔と”虚無”の使い魔には明らかな差異がある。

それは、使い魔すら伝説となっていることであるのだ。

神の左手・ガンダーヴル。

神の右手・ヴィンダーヴル。

神の頭脳・ミヨズニトニルン。

語られない第四の使い魔。

第四の使い魔はともかく、始祖ブリミルが従えた使い魔は、そのルーンとして存在していた。

そして、ガンダーヴルについては、”虚無”の魔法には長い詠唱が必要で、尚且つその長い詠唱の間主人を守る役割があつたのだ。使えない魔法なら、わざわざ守る必要が無い。

守らざるを得ないと言う事は、その魔法が脅威であることの裏返し。

そこから分かるのは、”虚無”が非常に強力であることだ。伝説になるくらいなのだから、それくらいであつてもおかしくない。

つまり”虚無”の使い手は膨大な魔力を秘めているのではないか？　そして、それだけ強力な魔力を必要とする魔法は系統魔法には存在しないと推測できる。

三つ目。その強大な力から来る現象。

これはルイズを通して考え付いたことだ。

ルイズの魔法は爆発する。

これは、魔力が膨大だから起きるのではないか？　と思うのだ。さっき言った”虚無”の魔法を行使するのに強大な魔力が必要なら、一回に使用される魔力もまた半端じゃないと思うのだ。

つまり、系統魔法ではその器が小さすぎるのでは？　と思うのである。

どの系統魔法を使っても、恐らくスクウェアクラスの魔法でさえ、“虚無”の担い手が使用する魔力には耐えられないのではないか？　少々極端だが、水の出方から考えるなら、普通の蛇口から出る水が系統魔法。ダム放水が“虚無”と例える。

もし、双方をコップで受け止めたら？

蛇口の水なら問題なく、受け止められて、まあ超える分は溢れるだけだ。

だが、ダムの放水をコップなどで受け止めたらコップは割れる。

まあ、ダムの放水じゃ意味が通じないと思ったから滝と言う形で進言したが。

ともかくそういうわけだ。

“虚無”の力で系統魔法を操るには器が小さすぎる。また系統魔法から“虚無”を扱うにはその魔力は不足すると考えたわけである。「全く、推論の域を出ないのにも関わらず、アカデミーレベルのことをよく考えたわね」

エレオノールは俺を見ると、そう言っただけで半分呆れていた。

こちらとは、前の人生三十年分の知識と経験がある。

ましては魔法がない世界だからこそ、先入観さえ捨てて調べられたのだ。

「たぶん、子供だからこそだと思います」

「それもそうね。でも、これが本当なら、ルイズは……」

「おそらく“虚無”の可能性が出てきました。そう思っただけで一年前から力の制御が出来るようにして来ましたが」

「“虚無”ね。わたしとしてはあのちびルイズが伝説の使い手とは思えないんだけど？」

「ですが、それ以上に考え付くものはありません。単なる失敗なら、何も起きませんから」

そうだ。失敗なら魔法は発動しない。

ルイズはルーンの発音や行使の方法に間違いはない。

なのにも関わらず爆発だ。

「ルイズの魔法が爆発しなかったら、この推論には辿り着かないわけね」

「そういうことです」

俺がそういうと、少し空気が硬くなった。

たぶん、ここからが本題だろう。

「この話はすでにお父様とお母様に話したわ。その上で、アレスは聞いて頂戴」

「はい」

「ルイズが”虚無”である可能性は、一先ず保留にするわ」

妥当だろう。

俺は無言で頷いた。

「驚かないのね？ てつきりどうしてか理由を聞いてくると思ったわ」

「いいえ。さっきの話の通り、”虚無”の担い手なら不都合が生じると思いますから。強大な力はいつの時代も戦争に利用されます」

「ここまで来ると、あなたは天才かしら？ その歳で良く戦争のこ
とまで……」

「ただ知識があるだけです」

「そういうことにしておきましょう。それで、この話はお父様とお母様、わたし、アレス、あと魔法学院のオールド・オスマン氏だけで留めておくことにするわ。理由はあなたが述べたとおり」

「わかりました。オールド・オスマン氏が加わるのはルイズ嬢様が魔法学院に通うからでしょうか？」

「そういうことね」

このまま”虚無”を隠していたとしても、魔法学院へは入学することになるのは確実だ。

そうなれば、ルイズの事情を知っていた方がいいのだろう。

「あと、もう一つ理由があるわ」

「理由とは？」

「彼は、とても人格が優れているからよ」

「なるほど。優れた人格の人なら、情報が漏れることがないからです
すね？」

「ええ。ところで、わたしが説明する前に先読みするのはやめなさい」

「すみません」

俺が謝ると、ため息をついてこういった。

「あなたが、もう少しわたしと歳が近かったらわたしが貰ってあげるのに」

俺はこの言葉に、曖昧な笑みを浮かべるしかなかった。

第三話（前書き）

今回から、独自設定としてコモンスペルでの攻撃魔法が登場します。また主人公がかなり目立っています。ご都合主義である以上申し訳ありませんが、ご了承ください。

二次創作である以上、原作者と心情が異なるため、表現方法、また物語の進め方、世界のあり方なども異なります。

原作の世界観が多少崩れるのを覚悟の上、お読みください。

ここから先、二次小説にて、普段から感情的になると思われる方は、閲覧のご遠慮を願います。

第三話

ルイズの”虚無”を俺、ヴァリエール公爵夫妻、エレオノール、オールド・オスマン氏で情報を共有するようになって二年が過ぎた。その間、ルイズには特別な力があるだけに留めて、”虚無”については伏せて置いた。

また、”虚無”については引き続き調査を続けていたが、一応終了することになる。

これ以上は情報が集まらないためだ。

最終的に、”虚無”が魔法の根本を源流であることまでは突き止めたのだが、それ以上の情報を得るのに文献が無かった。調査を終了するにはもう一つ理由がある。

ヴァリエール家、庭にて。

俺は、エレオノールともう一人のルイズの姉であるカトレアの三人で、ルイズのコモンスペルを見ていた。

そこにはルイズが見事、レビテーションを成功させて、石を浮かせていた。

「アレス、見て見て！ レビテーションが出来たわ！」

十一歳になったルイズが嬉しそうにそう言った。そう。

これが、”虚無”の調査終了のもう一つの理由だった。

”虚無”が魔法の根本。ならば、イメージも魔力を系統魔法のさらに奥から取り出すイメージをすればコモンスペルくらいなら使えるのではないか？

それが、俺とエレオノールで結論したことだった。

そして、その考えは正しかったのだ。

「凄いよ、ルイズ！ やったじゃないか！」

「良かったわね、ルイズ」

「ちびルイズにしては上出来よ」

俺たち三人からの言葉に、照れたように笑う。

本当に嬉しそうだ。今まで、一部の悪意ある人間からはゼロだと言われてきたが、これで少なくともゼロではなくなる。

今まで、力の制御の訓練もして来た甲斐があったのだろう。

「そのまま自分に掛けて御覧なさいな」

エレオノールの言葉に、ルイズは頷いて、コモンスペルを唱える。
「レビテーション！」

ふわっと、ルイズの体が地面から二十センチ程浮かんだ。

「アレス！ エレオノール姉さま！ ちい姉さま！ 見て！ わたし飛んでるわ！」

飛べたことが余程嬉しいのだろう。

そのまま、魔法を維持すると俺たちの方まで飛んできた。

そして、俺の前に着地すると、思い切り抱きついてきたのだ。

「アレス！ 本当にありがとう！ わたし、何てお礼をしたらいいのか！」

「その笑顔が何よりものお礼だよ。喜ぶルイズを見るだけで、僕は嬉しいからさ」

俺はそう言っただけでエレオノールを見える。

エレオノールも頷きながら言う。

「その通りね。わたしもアカデミーに入った甲斐があったものよ。もつともアレスがいなかったらここまで出来なかったでしょうけどね」

やや、とげがある言われ方をしてしまった。

確かに、俺の推論がほとんど当たっていたからこそ、ここまで来たのだ。

「でも、ルイズがコモンスペルが使えるようになって良かったわ」「ちい姉さま。ちい姉さまもわたしをいつも励ましてくれてありがとうございました」

「わたしにはそれくらいしか出来なかったもの。本当に、アレス君

には感謝しないかね？」

カトレアがそういうと俺を見て、微笑んだ。

この人の笑顔はとても優しい。

ルイズと同じ桃色の髪、だがとても優しい雰囲気はこのヴァリエール家では彼女の右に出るものはいないくらいだ。

あと、母親ゆずりなのか……。いや、その母親をも超える胸もまた凄い。

まあ、あまり女性の胸を見るのは失礼に値するため止めることにする。

「はい！ アレスには感謝しても仕切れません！」

ルイズは俺を見てから、恥ずかしそうに言う。

「だから、その……。ちょっとお礼をしたいのだけど……」

齒切れの悪いものの言いをしながら、二人の姉をちらりと見る。

エレオノールはともかく、カトレアはすぐに分かったらしい。

ずっと立ち上がると、エレオノールの肩に手を置いて、この場を去ろうというしぐさをする。

エレオノールはその意味にやや驚いたようにして、ルイズを見ると、珍しく優しい眼差しで彼女を見てカトレアと共に庭を去っていった。

二人が屋敷の中に入ったの確かめると、俺と後一步と言うところまで近づいて来た。

「ア、アレス……。その、目を閉じていてもらえる？」

女の子がこういうと、することはだいたい分かる。

とても勇気があることだ。それを止めるのは無粋と言うもの。

「いいよ」

俺は優しく微笑むと、すっと目を閉じた。

少しの間が空くと、空気が揺れる。

甘い香りが俺の鼻をくすぐるのと、唇にやわらかく温かい感触を感じた。

三秒くらい、そうしていてその感触が離れる。

「もう、いいわ」

その言葉に俺は目を開けると、目の前には顔を真っ赤にしたルイズがいた。

「感謝の気持ち。わたし、こんなことしか出来ないけど……」

「十分すぎるお礼だよ」

俺はそういうと、ルイズを優しく引き寄せた。

彼女はそれに逆らうこともなく、俺の胸に寄りかかるようにしてくる。

「ルイズが、コモンスペル使えるようになって本当に良かった」

「わたしも。もっと先だと思ってたけど、アレスのおかげでこんなに早くコモンスペルが使えるようになるなんて思わなかったわ」

感動が波及する。

俺自身も、彼女の爆発の原因を探るのが主だったが、いつの間にかルイズが魔法を使えるようにすることに変わっていた。

そもそも”虚無”である可能性があると分かった時点で、爆発の原因の八割は突き止めたようなものだったのだが。

「ねえ、アレス」

あ、ちなみルイズは俺をアレス様とは呼ばなくなった。

それだけ親しい仲になったと言っておく。

「なんだい？」

「わたしが系統魔法が使えない原因って、何なのかな？ 特別な力だって言われたけど」

「特別な力だよ。それ以上は、僕達もまだわからないんだ」

俺はそう言っただけをついた。

本人は今、知るべきじゃない。

”虚無”だということが知られればルイズが信用出来る人物に話してしまうかもしれない。

ルイズが信用できても、また本当に話さないにしても、その会話を聞いている人物がいたら大変だからだ。

水の秘薬に自白させるものもある。ルイズが誘拐されて、そんな

ものを使われたら？

あまりに危険すぎるのだ。

だが、俺の考えは甘かった。

「虚無”なんでしょ？”

「！」

俺は思わず、ルイズから離れてしまった。

ルイズはやや寂しそうな顔を俺に向けている。

そして、やっぱりと小声で言うと、こう続けた。

「どうして、隠すの？」

悲愴な面持ちで俺を見る。

どうする？ 話すべきか？ とりあえずは……。

「どうして、それを知ってるのかな？」

「わたしだって知リたかつたの……。だからアレス達が話しているのを盗み聞きしたわ」

うかつだった。

ルイズは聡明だから、俺とエレオノールが話すの聞かないと思っていた。

サイレントは掛けずに、話していたのがまずかった。

「そうか。じゃあ、もう隠す必要はないね。ただ、これは僕の推論であつてまだ確定したわけじゃないんだ。それはいい？」

俺の言葉に頷く。

「話さなかつたのは、危険だからだよ。例え、”虚無”でないにしろ何らかの力があるのは確かだしね。」

それにもし、”虚無”だとして、それが誰かの耳に入るとルイズが危ないんだ。

だから、教えなかつた。ルイズも知らなければ情報は漏れないからね」

「わたしが誰かに話したりするから？」

「攫われて、水の秘薬を使った尋問でもされたら？ 知らなければ答えずに済むけど、知っていれば知られてしまう。使い方も分から

ないのに、知られて実験でもされたらって思ったら怖かったんだ」
まあ、それもあるが”虚無”なんて伝説の力、ルイズは知らなくていいと思ったのが一番だ。

貴族の子として育って、結婚して、幸せになる。

メイジとしては力不足だけど、コモンスペルが使えれば全くメイジである証は示せる。

平凡だけど、それでいいと思っていた。

もっとも結婚相手は俺ってことになってるけど、違う人でも構わないわけだ。

「大きすぎる力は人を不幸にも幸福にも出来るんだ。でも、大概は自分の意図しないところで使用され、利用される。それで多くの人が不幸になったら、ルイズだって嫌でしょ？」

俺の説明を聞いて、顔を青くしながら頷くルイズ。

まだ、早かったか。

でも、自分が”虚無”と言う自覚があるなら、尚更知っておかなければならない。

願わくば俺のただの推論であって欲しいが、コモンスペルまで使えるとなるともう現実味がかなり帯びている。

「わたし、そんなことまで考えなかった」

青い顔をしたまま、ルイズが言う。

怖いのだろう。自分の力が。

良く見ると、小さく震えているのだ。

俺は何も言わずに彼女を抱きしめる。

細い。力をこめたら壊れてしまいそうな体を俺は優しく抱きしめた。

「知ったなら、強くないとね？ ルイズの心が強ければ力を間違った方に使わないよ」

俺の世界はそうではなかった。

間違った使い方がほとんどだ。だから小さい戦争がいつまでも続く。

ルイズは俺の言葉に、力強く頷くのだった。

数日後。

珍しく、ヴァリエール公爵が俺の家に訪ねてきていた。

確か、このところ宮廷での会議が多く、家を開けていたはずだ。

俺は挨拶をそこそこに済ませると、庭で、新しい魔法の開発をしていた。

開発している魔法は、コモンスペルの改良版である。

厳密にはコモンスペルを更に向上させて、戦闘に特化したものにするためだ。

平和な日本で暮らしていた頃とは違う。

十四になった俺は、度々小さい紛争地域へ鎮圧の任務などを受けていた。

だからこそ、俺は新しい技術の開発に力を入れていたのである。

「さて、始めますか」

俺はそういうと、ゴーレムを数体、鍊金で出して訓練をする。

普通、ゴーレムはこちらの意志で動かすのだが、半自動で動くようにゴーレムだ。

いわゆる自動追尾に近い。そして攻撃範囲内になったら攻撃を仕掛けてくるようにしてある。

ターゲットは当然、俺自身だ。

新しい魔法の開発の第一弾の試験運用である。

ゴーレムをスタートさせると、一気に俺へ詰め寄ってきた。

俺はそのゴーレムを避けながら、魔法を唱えた。

「ライト・ブリッド」

コモンスペルだ。

ライトの進化版。熱量と魔力による外殻強度を持たせたライトだ。大きさは成人男性の頭ほど。

それとレビテーションの力も上乘せして自由に動かすことが出来る。

魔力の込め方次第で、強度も硬く出来て、鉄板くらいなら貫けるし、精神力さえ持てば誘導性もあるのだ。

今のところ、ライト・ブリッドを三つ同時に展開することが出来る。

「行け！」

俺はそのライト・ブリッドを三つ同時にゴーレムへ向けて放った。実は、動いている相手に使用するのは初めてである。

まずは一体、ゴーレムを貫いた。

胴体を貫かれたゴーレムはそのまま崩れてなくなる。

続いてもう一体だが、済んでのところで避けられてしまった。

そのまま、三個のライト・ブリッドへの集中を途切らせないまま、ゴーレムの攻撃を受け止め、避けて、ライト・ブリッドで貫いてく。だいたい五分くらいして、自分で練成したゴーレムを全て崩した。

まだ、集中が甘い。戦闘においてのライト・ブリッドの三個同時制御は厳しいと認識する。

「見事なものだな」

俺はその声を聞いて、振り返る。

そこには父さんとヴァリエール公爵が、一階のバルコニーから俺を見ていたのだ。

集中しすぎていて見られていたことに気が付かなかった。

俺は呼吸を整えながら、二人が居る場所へと行く。

「見事な動きだった、アレス。ところで今の魔法は何なのだ？ あんなものは見たこと無いぞ」

そっけなのはヴァリエール公爵だ。

確かに、あれは俺が開発中の新魔法なのだ。知るわけが無い。

「あれは私が開発中のコモンスペルです」

「話には聞いていたが、本当だったのだな」

「アレスはどうも新魔法などの研究が好きなようで、こうして暇を見つけてはいろいろと試しているようですな」

父さんの言葉に、興味深そうに俺を見る。

「して、さっきの魔法は何と言う？」

「ライト・ブリッドといいます。明かりを灯すライトに、熱量、外殻強度を持たせて、レビテーションの原理で飛ばしています。ライトとレビテーションの組み合わせで動くライトを作って遊んでいたら思いつきました」

「ほう！　しかし、ゴーレムを打ち抜いていくのは見事だった」

「ありがとうございます」

俺はそう言つて一礼する。

「この発想の豊かさ、また戦闘能力。やはりアレスが適任かもしれないな」

ヴァリエール公爵がそういうと、父さんも頷いた。

「何をですか？」

「私から話します。アレス、実は今、アルビオンの方で良くない噂を聞いているのは話したな？」

「はい。何でも、聖地を取り戻すための組織を作っているとか」

俺も政治関係に少しずつ首を突っ込むようになっていたから、父さんからその話を聞いたのだ。

エルフに奪われし、聖地を奪還しようと呼びかける人間がいるらしいのだ。

ただ、わずかに賛同する人がいるくらいで、ほとんどの人間がそれに耳を貸そうとはしていない。

夢物語もいいところだと。

「最近、その話にもう一つ厄介な話があるのだ」

「厄介な話？」

「共和制を敷こうという動きがあるらしい。貴族同士がそれぞれ平等に発言を持ち、その話し合いの中で国を動かす」と

民主主義的な発想が生まれてきたのか。

ここから平民にも波及すれば、ハルケギニアも民衆主導になっていくかもしれない。

これは、なかなか面白いな。

だが、二人はあまりいい顔をしていない。

「共和制、それ自体はいいことなのではないのですか？」
それだけならわざわざ俺に話は来ないだろう。

「まあ、それ自体は悪いとは思わん。だが、先程の聖地を取り戻すと叫んでいる輩も、その共和制とやらに乗り気らしい。そして、王国を倒そうという動きがあると」

「反乱ですか？」

「まだ噂の域を出ていないがな。それで、アルビオン王国も最近それに過剰な反応が出ていて、いくつかの不穏な動きを見せる貴族を警戒しているらしい。それもあつて王国に反発を示す貴族も徐々に出てきている」

「つまり、アルビオンの情勢を探って来い。そう仰られる訳ですね？」

俺がそういうと父さんは頷いた。

「こんな噂程度のこととで、それに外国の内政に関わることもある。一々国に進言することは叶わぬのだ。だから実力もあり、信用もできる君に頼みたい」

そういうとヴァリエール公爵は俺に頭を下げたのだ。

ヴァリエール侯爵が頭を下げるなんて、ただ事ではない。

冷静に考える必要があるが、まあアルビオンに渡ってみるのもいい。

「公爵様、頭をお挙げ下さい。私でいいのであれば、その任務引き受けしましょう。父上」

「うむ。ヴァリエール殿、この一件。ヴァルガード家、全面的に協力させていただきます」

「すまん。だが、私も頼む以上、何もしないわけには行かぬ。部下を二名ほど、アレスにつけよう」

「ありがとうございます」

俺と父さんはそう言って頭を下げた。

俺はこのとき、この世界にも民主化の流れが徐々に起きるのだろ

うと漠然と考えていた。

しかし、後に、この出来事がハルケギニアを巻き込んだ戦争に発展するとは思ってもしなかった。

第四話（前書き）

注：この小説は、独自設定や独自解釈があるため、真に「ゼロの使い魔のファン」の方は気分を害する可能性があるため、ご遠慮下さい。二次創作である以上、そこには望むものとは違う形の作品があるのをご理解戴いた上で読んでいただけると幸いです。

第四話

アルビオン行きが決まって、俺は父さんにあるものを頼んだ。

それを話したとき、何とも驚いていた。

「しかし、お前は魔法の開発といい、ヴァリエール殿の娘の事といい、常識を悉く覆すな」

「若いからでしょうか？　もしかしたら私の代でハルケギニアが変わるのかも知れません」

「ふふふ、なかなか言うな。しかし、杖の代用品に手袋に出来ないか？　とはな。それなら確かに杖を使わずに魔法が使える」

俺が、父さんに頼んだもの。

それは、杖の代用品としての手袋だった。

杖に使う材質のものを編み合わせて、杖から手袋にしてもらうように頼んだのだ。

普段は杖を使うつもりだが、戦闘の際にはこれがいいだろう。

「たしか、アルビオン行きは再来週、イングの曜日だったな？　今日から始めれば契約も出発までに間に合うだろう」

「無理言つてすみません」

俺が頭を下げるが、父さんは笑いながら言った。

「よいよい。お前の発想は面白いからな。お前が言うことはできるだけ実現してやりたいさ」

愉快そうに笑う。

父親として、息子が自分を追い抜いていくのが嬉しいのだろう。

「いつか、私にお前の考える世界を見せてもらいたいものだな」

そういうと、早速俺の杖の代用品の手袋を作るよう指示しに行くのだった。

一週間後、ヴァリエール家にて、部下を紹介してもらい、情報収集のためのルート、定期連絡手段などを話し合った。

部下二人は俺より年上である。

ヴァリエール侯爵が、俺の力になってくれるだろうと、若手のメイジをよこしてくれた。

一人は土のラインメイジのラウド。

茶髪の短髪で、気さくな感じのお兄さんといった感じた。

もう一人は水のラインメイジでシルファ。

金髪で、ポニーテルが良く似合う女性だ。

どことなく母さんに似ていている。

歳は二人とも十九歳だ。

二人とは、出発当日にヴァリエール家の門の前で落ち合う手はずになっている。

この打ち合わせは二日間にわたって行われた。

そして、俺は客人として部屋が用意された。

ヴァリエール公爵が気を利かせてくれたのか、はたまた娘に甘いだけなのか。

まあ、ともかく必然的にルイズは俺の部屋を訪ねてくることになる。

打ち合わせ初日の夜。夕食を食べ終わって、部屋でくつろいでいると戸がノックされた。

俺が返事をする、声が聞こえてきた。

「入ってもいい？」

その声でルイズだとすぐに分かった。

俺が入室を許可すると、ネグリジエ姿のルイズが入って来る。

念のために言うておくが、彼女のネグリジエはレースではないため透けて体は見えない。

「ルイズ、何て格好をしてるんだ」

「ご、ごめんなさい。今日はアレスが忙しくて全然、お話できなかったから」

「寂しかった？」

俺の言葉に恥ずかしそうに頷く。

しかし、ネグリジェ姿で来るといのはちょっと、な。

まだ子供とは言え、もうそろそろ子供ではなくなる年齢でもある。特に、貴族の教育は早い。

ルイズは十一歳とは言え、貴族としての常識などからすれば大人と同じだけの知識があるのだから。

女性が、男性の部屋に、しかも寝巻きで来る意味がわからないわけでもない。

「入り口で立ってても仕方ないから、ほらベッドに腰掛なよ」

俺が促すと、赤い顔をして、ベッドに腰掛けた。

ネグリジェは白く、ルイズの髪の毛と合っていて思わず見とれてしまう。

十一歳の子供に見とれるとは、俺もちよつとまずいかもな。

そんなことを考えながら、俺も椅子から離れると、やや離れてベッドに座る。

俺がルイズをじっと見ていたためだろうか。

「あまり見られると恥ずかしい」

そういいながら、ルイズがシートをずっと自分の方に引き寄せて自身を隠す。

ルイズが、あと五歳くらい歳がいていたら、もしかすると理性を保つのが難しかったかも知れない。

この子はこの歳ながら男を誘う魅力を持っているらしい。

「そう思うなら次はちゃんと普通の服を着てくること。いいかい？」

「はい。でも、わたしアレスならいいって思うの」

シートで隠しながら言う言葉じゃないだろう？

娘に甘いのはいいですが、もう少し貞操教育もしっかりとさせてください。

俺は心の中で、ヴァリエール公爵にそう愚痴った。

「そう言うことはあと、五年は言わないこと」

「もう、アレスは硬いのね」

「君はもう少し、自分を大切にしないとダメだよ？」

「婚約者なのには？」

「婚約者でもだ」

恋する乙女は大胆とは言ったものである。

俺の精神が老けてなかったらどうするつもりだったんだ。

「そう言うことは歳相応になってからだよ。体がまだ作られてないんだから」

これは医学的に見てもそうだ。

早すぎる行為は、体への負担も大きい。

この世界では十六歳で政略結婚なぞ普通にあるから、そういうた医学的なことは無視されるのかもしれない。

早い子なら、十二歳くらいで嫁ぐこともありえるのだ。

精神的に大人にならざるを得ない環境だから仕方ないのかも知れない。

「まるで、お父様みたいな言い方をするのね」

「僕としても、ルイズは妹であり、娘であり、そして大切な恋人でもあるから」

妹、娘と言う辺りでむっとした顔をしたが、恋人と言うと嬉しうにはにかむ。

この子は感情がすぐに顔に出るから分かりやすいな。

「アルビオンへ行くのね」

少し暗い顔をして、確認するように言ってくる。

「ああ。アルビオン国内の情勢を探りにね。もしかしたらトリステインも無関係とは言えないから」

共和制はともかく、聖地奪還の動きはハルケギニア全土の問題となる。

国家間どころの話ではない。

まあ、それが本当に実行するとなればの話だが。

そうなれば、賛成派と反対派でまた対立が起きる。

中にはトリステイン国内にも似たような考えの人間がいたってお

かしくないんだ。

杞憂に終わってくれるならそれでいい。

「危険ではないの？」

「安全ってことはないだろうね。だからヴァリエール公爵から二人も部下を預かることになったんだ」

ましては反乱の準備があるのだから何かしらのトラブル巻き込まれてもおかしくは無い。

「なんで、アレスなの？」

「信用してるからだって、君のお父上は言っていたよ」

そこまで言くと、ルイズは俺に抱きついてきた。

「わたし、心配で堪らない。もし、アレスが異国の地で何かあったらと思うと胸張り裂けそう」

「ルイズ」

俺はこの小さな子が、もう立派な大人と同じだと思った。

他者を心配する。

これは子供に求めるのは難しい。

それ、この子はこの歳でもう出来ていた。

「優しいね、ルイズは」

「だって心配だもの。わたしの大切な人に何かあったらって思うと」
「何度も言うが十一歳の女の子だ。」

元の世界ならロリコンだとか言われてもおかしくない。
だが、俺は嬉しかった。

前世では、恋人はおるか、友達さえ皆無だった。

そんな俺が、今一人の少女に心配してもらっている。
大切な人だと言ってくれている。

「ありがとう、ルイズ」

俺はこの小さな子を抱きしめる。

こんなに心が温かくなったのは何時以来だろう？

「ねえ、アレス。キスしてほしいの」

「いいよ」

言っておくが、これはあくまで愛する人だからだ。
愛情表現だということを強く言っておく。

「ルイズ」

俺は優しく髪を撫でながら、そつと顔を近づける。
ルイズはすでに目を閉じていてそのときを待つだけだ。

明かりが邪魔だと思い、俺はライトの魔法を解除すると、月明かりが部屋に差し込む。

その二つの月が優しく見守るなか、俺はルイズに優しく口付けをする。

この日はアルビオンへ旅立つ前の、優しい思い出となった。

そして、更に一週間が経った。

まだ日が昇る前のヴァリエール家の門前。

そこに二人のメイジが馬車を用意して待っていた。

ラウドと、シルファだ。

二人とも旅人特有の外套を着ていた。

俺も似たような服装である。

「ラウドさん、シルファさん。お待たせしました」

俺は必要最小限の荷物を持って、二人の前に行く。

二人も同じく必要最小限の荷物だけを持っていた。

「お待ちしてました、アレス様」

「それでは参りましょうか？」

年下の俺に丁寧と言う二人。

精神年齢がとっく二人の年齢の倍は言っているが、これから一緒に旅をするのにこれは硬い。

「アレスで構いません。あと言葉使いもそんなに丁寧でなくていいので」

俺の言葉に、二人は小さく笑って改めて自己紹介をしてきた。

「ラウド・シェバリエ・ド・サリファンだ。よろしく頼むぜ、アレス」

「シルファ・クレシア・ドルス・ド・ジルドよ。よろしくね」
「アレス・ジルアス・ド・ヴァルガードです。二人ともよろしく」
俺は二人と握手をすると、アルビオンに旅立った。

第四話（後書き）

前回に続いて、ルイズとの絡みでした。

最近ルイズが甘えるようなシーンばかりで、すみません。

次回はアルビオンにて、旅立った三人はトラブルに巻き込まれます。

第五話（前書き）

注：この小説は、独自設定や独自解釈があるため、真に「ゼロの使い魔のファン」の方は気分を害する可能性があるため、ご遠慮下さい。二次創作である以上、そこには望むものとは違う形の作品があるのをご理解戴いた上で読んでいただけると幸いです。

第五話

外を見上げると、二つの月が交差していた。

確か、二つの月が交差するのはアルビオンが、トリスティンにもつとも近づく時だったと思う。

俺はその月から視線を手にかけていた手紙に移す。

綺麗な字で書かれた手紙だ。

差出人はルイズである。

定期連絡時に一緒に送られてきた。

アルビオンに来て、すでに三カ月が経っていた。

「ルイズお嬢様からの手紙かい？」

隣に、簡単な食事を持ってきたラウドが言う。

「ええ。僕が居なくて寂しいと言ってたさ」

「まあ、俺も国に恋人置いてきてるから、彼女の気持ちはわかる」

俺は食事を受け取った。

どうやら簡単にサンドイッチを持ってきたようだ。

俺はそれを一口食べる。

「しかし、お前さんの砕けたしゃべり方もまあ様になって来たよな」

「ラウドは、その話し方が似合ってる」

ちなみにこんな話し方をしているのは身分を隠すためである。

一応、俺達は落ち貴族として、傭兵と言うことになっていたのだ。

まあ、実際に誰かに雇われて仕事をするわけじゃないが。

ただ帰る前に言葉遣いを直しておかないと少々、厄介だ。

「そう言えば、シルファは？」

俺の質問に、ラウドが下を指差した。

「あの子は、また聞き込みだよ」

「仕事熱心だよ。彼女は。ただ、可愛いだけに心配だ」

「それは同感だ。一回、情報収集のために本気で体売ろうとした

時は本当に焦った」

「真面目なだけに、割り切るところは割り切るみたいだしね」

そうシルファはとても仕事をしていた。

俺も聞き込みをして回ってはいるものの、彼女の情報収集能力には舌を巻く。

だいたい、俺は前世において情報収集で自分の足を使うことは少なかった。

資料はだいたいオフィスにあったし、知らないことは電話で聞けばよかった。

まさか、こういう地道な情報収集がここまで大変だったとは、今更ながら実感している。

「お前はどうも、来た情報をまとめる方があつてみたいだな」

「うーん。根っから貴族ってわけだね」

「だろうな」

俺はもらった資料をまとめて報告書にする方があっていた。

これもたぶん、前世からの癖だろう。

つつい集めた情報をまとめる癖があるのだ。

「ま、適材適所だろう？」

「そうだね。で、ラウードはどうも酒場での情報収集に長けてるわけか」

「まあ、友人作るのは任せろってな」

そう話していると、部屋のドアが開けられる。

入ってきたのはシルファだ。

「おかえり、シルファ」

「ただいま」

ラウードが出迎える。

国に恋人がいるとは言っていたが、ラウードは結構、シルファの事が好きなのだろう。

良く、彼女をエスコートすることが多い。

今も何か食べるか？ とシルファに聞いていた。

「俺、ちょっと下に食事取って来るわ」

「了解」

「お願いね」

ラウードが下へ降りていく。

代わりに、シルファがラウードが居た場所、つまり俺の隣に来た。

「ルイズお嬢様から？」

「そうだよ。寂しいって書かれてる」

「それなら、返事を書いてあげるといいわね」

シルファが優しくそうに俺を見て言う。

この人には適わない。

こう、やんわりと促すのだ。

「報告書、書かないとならないんだけど」

「それならわたしが続き、書いておいてあげるわ」

「悪くない？」

「いいわよ。可愛い恋人に返事を書いてあげるのもジェントルメンのお仕事よ？」

人差し指で俺の額を軽く押す。

どうも、この人は俺を子ども扱いして参ってしまう。

ただ俺も少し甘えてしまつところもあるのだが、精神年齢が、すでに四十を超えているのを意識すると複雑だ。

「で、何か面白い情報があった？」

「あつたわよ。とんでもない情報が」

真剣な表情だ。

「じゃあ、ラウードが戻ってきてからにしようか」

「ええ」

そういうと、シルファに報告書を渡す。

代わりの俺は、紙とペンを渡された。

ラブレターなんて、前世では中学以来だ。

そのせいだろうか？ 妙に緊張してしまう。

見た目がアレスでなければ、四十過ぎの親父が十一歳の女の子へ

のラブレターを書くのだから滑稽だ。

まあ、向こうは純粹に俺の歸りを待っているんだ。

俺も、それに応えよう。

「出だしはどうするか」

俺はそんなことを呟きながら、まずは失敗した報告書の裏を使って下書きを始めるのだった。

ラウドが戻って、シルファが食事を終わると、サイレントを掛けて俺達は整理した情報を確認する。

情報をまとめた紙を俺は読み出した。

「それじゃ、今までの情報のまとめ。

共和制推進組織パブリック・ユニオンが最近活発な動きを見せている。

活動内容は、情報操作による王国への信賴失墜、街道での生活物資の輸送馬車襲撃、王軍の駐屯地への襲撃が主。

メンバーはどうやら下級貴族がほとんどらしく、また名前は全員偽名。

王軍の駐屯地襲撃と輸送馬車の襲撃からして、一個大隊くらいの軍事規模を持っている。

で、どうも大規模な反乱を起こそうとしている。

その場所はアルビオン王軍が一番規模の小さい北部をターゲットにしている」

そこまで言って、俺が区切ると情報を持ってきたシルファが頷いた。

「次に聖地奪還組織レコン・キスタ。

彼らはオリヴァー・クロムウェルを筆頭にほぼ本気で聖地奪還を願う信者を集めている。

その規模は小さくせいぜい百人ほど。

活動は地味で、呼びかけて街で演説をするくらい。

最近、クロムウェル氏がパブリック・ユニオンとの接触回数を増

やしているらしい。

パブリック・ユニオンはあまり相手にしていないものの、全く無視をしているわけじゃない。

彼らは聖地奪還に向けてハルケギニアの統一も掲げているらしい。パブリック・ユニオンの中には彼らの必死な姿に共感するものも徐々に増えている。また聖地奪還はともかくハルケギニア統一の思想自体はかなり好ましいという声もある。

パブリック・ユニオンが全く無視しない理由はたぶんここだね。

脅威ではないものの、注意が必要」と

言葉を区切ると、ラウードが頷いた。

「これらの情報からすると、まだ二つの組織が脅威と言うほどじゃないものの、将来的な脅威になりうることも考えられるわけだ」

「そういうことね」

「レコン・キスタはともかく、パブリック・ユニオンが暴走し始めているのは確かだ」

俺の言葉に二人が頷いた。

そして、一番厄介なのが。

「アルビオン王国の反応だ」

「一部の貴族が過剰な反応を示していて、やられる前にやるという考えが先行し始めているわ。このままだと、他の貴族にも影響が出始めると思う」

「で、過剰反応で貴族を潰せば、正気を疑う貴族も出てきて、パブリック・ユニオンについてもおかしくない」

「一応、国王がそれを何とか押し留めようとしてるけど、心無い貴族がそれを台無しにしているのも頭が痛いわ」

このままだと、パブリック・ユニオンへの賛同者が増えてもおかしくない。

特に地方貴族は実情を良く知らないため、いきなり王軍が攻め込んできたと思ってもおかしくないのだ。

そして、レコン・キスタのハルケギニア統一も場合によっては危

険な考えだ。

「パブリック・ユニオンの情報操作は上手く行っていると考えた方がよさそうだね」

「確かに。これが幸をなして、内部から切り崩しに掛かれるわけだ」

「それでも、アルビオン王家を打倒するにはまだ数年時間が掛かるわ」

「僕達はいくまで情報収集だから、手出しできないわけだけど、警告くらいした方がいいのかな？」

「いや、アルビオンも馬鹿じゃない。このくらいの情報は向こうも押さえているだろうさ」

そこまで話すと、俺は一度話を区切った。
異変を感じたからだ。

俺はサイレントを掛けたと時に同時に、結界も張っておいた。
これは風の魔法の一つで、空気の流れと温度から異変を察知できる。

「どうも外の様子がおかしい」
俺はそういうと必要な荷物だけ持って、杖の代わりの手袋をはめる。

それを見て、二人も必要な荷物を持ち杖を構えた。
壁に背を付けて、そつと外を見る。

外には十数人のメイジと思われる人間達がいた。

廊下の方には七人くらいのメイジと思われる人間が配置している。
いや、あの服装は……。

「アルビオン王国正規兵？ ラウード、何かへました？」
シルファがやや冗談交じりでラウードを見る。

「まさか」

ラウードは冗談はよしてくれと手を振る。
それは冗談だろうとして、だ。

もしかしたら、動きに敏感になった王軍が何やら情報を集めている俺らを警戒したかも知れない。

「どうするの？」

「彼らに僕達の素性を話せば理解はしてくれるだろうけど、自分の国の事情を探られているとなれば気分は悪いよね」

「そうすると、逃げるしかないわけね？」

逃げることは事態は難しくは無いだろうな。

それに場所を移しても、たぶんまた嗅ぎ付けられる。

「そうだね。活動は中止。早いけど本国に戻ったほうがいいのかも」
「だいたいの情報は集まったし、ここで引き返しても問題はないはず。」

出来れば、パブリック・ユニオンの本拠地や活動拠点も抑えてたかった。

「落ち合う場所は？」

ラウードが俺を見て言う。

「ロサイス。期限は三日以内」

「バラバラで逃げた方が生還率が高いってわけね」

シルファの言葉に、俺は頷いた。

「かく乱は任せて。僕なら彼らを殺さずに、気絶させられる。その間に二人は逃げてほしい」

「年長者に逃げろ、ね」

「まあアレスが適任ってのは反論できないけど」

「効率的に敵と戦う方法も勉強したからね。あ、ラウードにまとめた情報は渡しておくよ」

「ああ」

僕はさっきまで読んでいた紙をたたむとラウードに渡した。

「二人とも無事にね？ 合図と共に、窓をぶち破るよ。降りたら目を閉じて合図を待って」

俺はそういうと、一歩前に出る。

どうやら、向こうも配置が完了したみたいだ。

「行くよ！」

俺は思い切って窓をぶち破った。

それと同時に、部屋のドアが破られる音が背中越しに聞こえた。宿が二階だったために急な落下感を感じるが、慌てずに体制を整える。

着地すると、素早く魔法を唱えた。

「ライト！」

明かりをつけるコモンスペルだ。

だが、ここからは俺のアレンジが入る。

「ブレイク！」

照明用の光の玉が、強烈な光と共にはじけた。

その光に、外で待ち構えていた敵が悲鳴を上げる。

それもそうだろう。

今のはかなり強烈な光だ。何人かは目をやられただろう。

フラッシュグレネードのようなものだ。

「行って！」

俺の声に、二人が走り出す。

二人が逃げやすいように俺は殿についた。

森の中を逃げる。

自分が引き受けたとは言え、厄介なものだった。

「くそ！ 待て！」

王軍の正規兵を一人ずつ、ライト・ブリッドで静めていく。

逃げながらの攻撃は、精神を使いすぎる。

足はうかつに止められない以上、逃げ続けなければならなかった。

「いい加減、諦めてくれないかな」

向こうの余裕がなくなつて来ているせいか、攻撃が激しいのだ。

全系統の攻撃魔法が容赦ない。

森であっても火の系統もお構いなしで、俺の進路方向にファイアボールを放ってくれる。

着弾した側から、風のメイジが酸素を操って過剰燃焼を誘発して爆発も起こしてくるのだ。

「あまりやりたくないんだけど」

俺はそう言いながら、魔法を唱える。

使うのはトライアングルスペル。

たぶん、俺が使える非殺傷性の魔法の中では最強だ。

逃げ切るにはこれしかない。

詠唱を唱え終わると、俺は後ろを振り返って魔法を放った。

「ソニック・ウェイブ！」

オリジナルの魔法だ。ウィンド・ブレイクの強化版と言ってもいいだろう。

ちなみにネーミングセンスは昔からない。知っている言葉をそのまま命名した。

名前のごとく、これは衝撃波。

相手をただぶっ飛ばすだけなら、この魔法。

幅十メートルくらいの空気の帯が、音速を超えて打ち出される。

その音は轟音だ。

まさに衝撃波。

その轟音に、吹き飛ばされる王軍の正規兵の悲鳴すら聞こえない。

魔法を放つてすぐに逃げる。

たぶん、追っ手は来ないはずだ。

数秒待って、後ろから王軍の正規兵が追ってくる気配がないのを確認すると、俺は走るペースを落としながら森の中は走った。

安心していただけだろうか、俺はその接近に気が付いたときにはとっさにシールド張るのが精一杯だった。

放たれたのはエアーハンマーだ。

地味だが、食らえばかなり強力な魔法である。

「良く防いだものだ」

籠った感じの声。

俺の前に立っていたのは、黒いフードを被った仮面の男。

男だと思っるのはその声が低いからだ。

「誰だ」

俺は物凄く警戒しながら相手を見る。
物音立てずに俺に近づいてきた。

しかも気配も消していたと見る。

かなりの使い手だというのが伺えたのだ。

「知る必要はない」

そういうと、いきなり接近してきた。

レイピア式の杖なのだろう。

接近と共に突きを繰り出してきた。

「シールド！」

俺はそれを何とかシールドで防ぐ。

だが、そのシールド越しからでも強烈な一撃だったのが分かった。
まともに相手したらやられる。

俺はそう思っただけでバックステップで下がりながら魔法を唱える。

「エア―ニードル！」

風の渦で生成される針。

生身の人間くらいなら用意で体を貫ける。

だが、仮面の男はそれを難なく横に避けると地を蹴って一気に詰める。

「エア―ニー……」

「遅い！」

エア―ニードルで迎撃しようとするが、それより早く仮面の男が俺の杖を蹴った。

杖は、空中を舞って大地に落ちる。

「これで魔法は使えない」

メイジは杖が無ければ魔法は使えない。

だが、俺は右手に杖代用の手袋をつけている。

「甘いね。ライト・ブリッド！」

「何だと！」

目の前に突然現れる光の弾に驚愕する仮面の男。

その一撃が、男の左肩に当たる。

今のは無誘導弾だ。

ライト・ブリッドはそのまま直進して、消える。

「その手袋が杖代わりか……。子どもの割にはやるな」

「パブリック・ユニオンだな……」

たぶん、そのはずだ。

そして、逃げている最中での襲撃。

王軍への情報を流したのもこいつなのだろう。

俺らをあぶりだして、仕留めるつもりなのだ。

そこで、気が付いた。

「二人は！」

そう、ラウドとシルファだ。

あの二人はまさかこいつに……。

「あの二人には興味はない。危険だと思っるのはお前一人だ」

「なんだって？」

「トリステインに新しい魔法の開発している子供が居る。噂でだが聞いていた。そして、この三ヶ月。妙にわれわれを嗅ぎ回るネズミがいると。見慣れない魔法を使うものが嗅ぎまわっているとな」

情報が漏れている？

いや、単に俺の噂がアルビオンにまで行っただけか。

だが、そんなのは関係ない。

目の前の敵は危険な人物だ。

「僕は見たとおり子供だ。危険だとどうして思っのさ」

「さっきの戦いを見れば十分だ」

「あの二人はいいの？ 情報を持っているけど」

二人を売る訳じゃないが、これで動揺するなら隙ができる。

考えは甘かったが。

「外国の人間が知ったところでどうともなるわ。だが、来たる統一の時にお前のような人間は邪魔なのだ」

来る統一。

レコン・キスタとパブリック・ユニオン。

どうやら、二つの組織の利害は一致しているようだ。

仮面の男はかなり殺気を俺に向けてくる。

俺は思わず怯んだ。

ここまで殺気だった人間は知らないからだ。

だが、それでも冷静さは失えない。

「その割にはべらべらしゃべるのはどうしてさ？」

「死に行くものには、土産が必要だろう？」

冥土の土産ってやつだな。

男は不適に笑うと魔法を唱える。

この詠唱は！

「偏在か！」

俺がその声を上げると、仮面の男は目の前で五人になった。

これは非常にまずい。

偏在と言うことは風のスクウェアメイジだ。

しかも、さっきの戦闘で分かったが、奴はかなり戦闘能力が高い。

そんなものが五人だって？

そして、五人が魔法を唱えだす。

この詠唱はかなり危険だ。

「つく！」

俺は即興で魔法を考え出す。

この状況は理論を持って何とかするしかない。

向こうは魔法が完成する。

「ライトニング・クラウド！」

電撃の魔法だ。

こんなの食らったら黒こげなのは間違いない。

だが、向こうが完成させたのと、俺が即興で考えた防御魔法はほぼ同時だった。

「ガード・フィールド！」

シールドの応用だ。

それをドーム状にして、俺を魔力障壁が覆う。
間一髪だ。

電撃が、俺を包むのと魔力障壁が俺を守るのは同時。
魔力障壁に電撃は阻まれた。

「恐ろしい子供だ……。新魔法で電撃を全て防いでしまうとは」
俺は何も言えない。

実は、かなり無理やりだったのだ。
検証もくそもない。

ぶっつけ本番の、文字通り力業だった。
成功したのは良かったが、ライトニング・クラウドを五人分防いだのだ。

今のでほとんどの魔力を使ってしまった。
もう強力な魔法はほとんど撃てない。

「これは使いたくなかった」
そういうと俺は懐からある秘薬を取り出した。
俺が最近開発した秘薬だ。

秘薬作りの方も結構試している。創作は俺の得意分野だ。
この秘薬、飲むと一時的に異常な興奮状態になり痛覚を切り離すことができるのだ。

つまり、攻撃を食らっても一時的にダメージはない。
また体のリミッターを解除するのに等しい。興奮状態が異常な運動能力を引き出すのだ。

もちろん、副作用もある。
ダメージがなければ考えられないくらいの疲労を感じるくらいで済む。

ダメージを食らっていれば痛覚は異常に敏感になって、針で軽く皮膚を刺すだけで激痛が走るのだ。

例えるなら怪我した傷口に、うっかり石鹸が入ったときのような痛みである。針で軽く刺した痛みがそれだ。

一度試したが、丸一日眠ってしまい父さんと母さんにもの凄く怒られてしまった。

使用するのは当然禁止されたが、製造禁止も言い渡された。正直に言っと、自分で作っておきながら飲みたくない秘薬でもある。

今回は万が一と思いこつそり作って持って来た。

これを飲むの自体は、まさに生か死かという場面でもある今のままでは確実に殺される。

なら、賭けるしかなかった。

「切り札かね？　ただ殺すのも面白くない。使ってみるがいい」
向こうは俺を見下しながらそういう。

何をしようと子供と大人。

しかもスクウェアメイジだ。余裕なのだろう。

「後悔、するなよ」

俺はそういうと、その秘薬を一気に飲み干した。

すると、頭がカツとなりそれと同時にとてもない高揚感が襲ってくる。

「行くぞ！」

俺がそういうと、一気に土を蹴った。

あまりの踏み込みに土が決れる。

「何だと！」

仮面の男は驚愕した声を上げた。

それもそうだろう。

だいたい五メートルくらいあった間合いを一瞬で詰めたのだ。

「ライト・ブリッド！」

そして、仮面の男の一人の頭を掴んで魔法を食らわす。

俺の放ったライト・ブリッドでその一体目の頭が吹き飛んで、消える。

「エアハンマー！」

反対側にいた奴が俺に向かって魔法を放つが、俺はお構い無しで

二体目に向かう。

他の仮面の男も素早く対応し始めた。

横から俺にレイピアで突いて来るが、俺はそれを左手で受けながらその顔を掴む。

左手はレイピアに貫かれるが、痛みは無い。

「ライト・ブリッド」

その一撃で仮面の男は消えた。

こいつも偏在らしい。

その直後、俺の体が揺れる。

右肩から金属のとがったものが見えた。

後ろからどうやら肩を貫かれたらしい。

だが、痛みはない。俺はすぐさまレイピアから逃れると、刺してきた仮面の男をライト・ブリッドを操って、後頭部に打撃を入れる。

仮面の男はそれで霧のように消えた。

「なんてことだ！」

残りは本体含めて三体だ。

これで引いてくれるといいのだが。

「なら、これでどうだ！」

仮面の男はそう言いながら、杖を振り下ろす。

「エアーカッター」

風の刃だ。

見えない刃が高速で俺に向かってくるのを感じる。

俺はとっさに魔法で防ぐ。

「シールド」

だが、シールドは威力を軽減するに留まり、俺の体を切り裂く。もうエアーカッターを防ぎきるだけの魔力は使えないのだ。

しかし、痛みを感じない俺はそのまま攻撃に移った。

「おおおお！」

高速で仮面の男の一人に、接近すると蹴りで喉をつぶした。

本来なら冷静に対処できるだろうと思われる仮面の男。

せつかく冷静さを取り戻しつつあった仮面の男。

だが、今の俺の状態に、再びパニックを起こし始めているらしく簡単に蹴りが決まった。

「こ、この！」

男が、化け物を相手にしているかのように忌々しく言う。

「ライト・ブリッド」

光の弾が二個現れた。

この二つの光の弾が、残っていた魔力の全てだ。それを敵に放つ。

高速で飛ぶ光の弾が、残り二人の仮面の男に向かう。

仮面の男も何とかそれらを避けるが、これは誘導弾だ。

終いには腹や顔を殴りつけられて、一人は偏在のため消えて、本体の男はその場に倒れた。

「くそ……」

本当なら止めを刺しておきたい。

だが、この秘薬の効果はもって十分だ。

止めを刺すにも、魔力はもう残っていない。

しかもこの後、秘薬の副作用が襲ってくるのだ。

今は、出来るだけこの場を離れて、残り時間で出来るだけ人がいる場所まで行くしかない。

秘薬が切れれば、間違いなく俺は気絶をするのだから。

人が来る可能性がある場所へ、せめて街道に出られれば誰かに発見されて生還できる可能性は高い。

俺は仮面の男から視線を外すと、急いでこの場を離れるのだった。

最悪だった。

身体機能が向上していたおかげで、数分の間にあの場からかなり離れる事が出来たまでいい。

しかし、街道には辿り着く前に、秘薬の効果が切れたのだ。

俺の負傷は左手をレイピアで貫いたのと、右肩、それと体を切り

裂かれたいくつもの傷だ。

切り裂かれたほうは、深くは無いが、また浅くも無い。

秘薬が切れた瞬間に、俺は形容詞することの出来ない激痛が襲った。

頭が一瞬、真っ白になってショートしそうになる。

喉が潰れてもおかしくない悲鳴が口から無意識に上がった。

俺はバランスを崩して目の前に迫る大木を避けれずに意識を失う。気を失う瞬間、俺の脳裏に浮かんだのは……心配して待っているだろうルイズの顔だった。

第五話（後書き）

後の神聖アルビオンになるレコン・キスタ。

いきなり出しても良かったのですが、下級貴族など、待遇が低いものたちによる反乱が先にあった方がいいと思い設定を追加しました。原作では、アンドバリの指輪で虚無を語ることになるクロムウエル。最初は本気で、聖地奪還を目指していたと言う方がいいかと思いました。

この後、シェフィールドにアンドバリの指輪をもらい大き過ぎる力でパブリック・ユニオンとレコン・キスタを統合すると言っ形になります。

ちなみに現在はまだ小説第一巻にすら入っていませんが、あと二話か三話くらいで第一部を終了。

第二部を小説第一巻相当にしようかと考えています。

今後とも当作品をよろしく願います。

第六話（前書き）

注：この小説は、独自設定や独自解釈があるため、真に「ゼロの使い魔のファン」の方は気分を害する可能性があるため、ご遠慮下さい。二次創作である以上、そこには望むものとは違う形の作品があるのをご理解戴いた上で読んでいただけると幸いです。

第六話

暗い闇の中、誰かが泣いている声が聞こえる。

その声がルイズだと分かったが、俺は目を開けることが出来なかった。

「なんで！ アレス、アレス！ どうして、なんで！ 目を覚ましてよぉ！」

体が揺らされているのも分かる。

しかし、駄目だ。

体がいうことをきかなかった。

「ルイズ、止めなさい。アレスはもう……目を覚まさないかも知れないわ」

この声はエレオノールだ。

とても悲しそうに聞こえる。

「嘘よ！ アレスは絶対に目を覚ましてくれるわ！」

「もう、一週間よ？ 発見されてからならもう二週間。傷は、左手以外は治ったのに、彼は一向に目を覚まさないわ」

二週間？

俺はそんなに気を失っていたのか。

よく、発見されたものだな。

俺は冷静に今の状況を考えていた。

左手以外は治った。これは恐らく、左手はもう使い物にならないのだろうと。

「でも！」

ルイズの叫びが悲痛である。

本当ならすぐにでも手を伸ばしてやりたい。

意識はあるものの、俺は体を動かすことが出来なかった。

「ルイズ。冷静になりなさい！」

冷静なエレオノールが、毅然とルイズに言った。

ルイズの息を呑むのが聞こえると思ったら、ドアを開け放つ音が聞こえる。

どうやら、ここから去って行ったらしい。

「アレス。早く目を覚まして……。あれじゃルイズが壊れちゃうわよ」

顔に温かい感触を覚えた。

どうやら、エレオノールが俺の頬を撫でたらしい。

「また、来るわ。次、来たときには目を覚ましてなさいよ」

それが出来たらいいだろうな。

俺は闇の中でそう思った。

時間が過ぎていく。

父さんが来て、母さんが意外にも優しく俺に声をかけてくれる。

父さんは、馬鹿だと、罵りながら早く目を覚ませと言ってくる。

ラウドが来て、馬鹿やろうと言いながら。

シルファが、俺を労い、そして母さんと同じく優しく。

みんなが俺に目を覚ませと言っていた。

俺はみんなの声に応えなかった。

しかし、指一本動かすどころか、瞼さえ動かなかった。

俺の体が衰弱しない様に、母さんは毎日、水の魔法をかけて衰弱するのを防いでくれていた。

使用人も俺が寝ているだろう部屋に来ては声をかけながら掃除をして、俺の体を拭いてくれている。

それなのに、俺は感謝の言葉さえ発することが出来なかった。

また時が去っていった。

俺は時折、意識が戻るがいつも闇の中だ。

だから、どのくらい時間が経ったのか分からない。

今日はエレオノールが来ている。

「ルイズがね。あの子、系統魔法が使えなくても秘薬の勉強は出来

るって、秘薬の勉強を始めたのよ」

ルイズが秘薬の勉強か。

あの子は頭がいい。きつと秘薬の知識も、ものにするだろう。

「あなたのためにつてね。わたしはアカデミー出身だから知ってるわ。あなたを目覚めさせる秘薬はない」

そうか。

俺を目覚めさせる薬はないのか。

だが、俺は何も感じなかった。もともと一人だったからだろうか？
アレスとしてはとても幸せだった。

これだけの人に愛されている事実だけでも十分すぎるくらいだ。

「今、あの子には集中できるものが必要だから、何も言わないわ。

アレスならどうやってルイズを元氣付けさせられてたかしらね」

「わたしも、アレス。あなたがいないと張り合いがないわ。唯一、わたしと対等に話せる相手があなたなのよ」

エレオノールと対等に話せる人物が他にいないのか？

だとしたらトリステインの男はだらしがないな。

「それに」

空気が止まる。

何だろうか？ この空気は。

まあ、寝ている俺には関係ないか。

「わたし、どうやらあなたが好きみたいね」

俺が好きだって？

ルイズだけじゃなくて、エレオノールも俺が好きだと言うか。

「ふふふ。寝ているからつてわたしも何を言っているのかしら。それじゃ、また来るわ」

そう言つて、エレオノールは俺の部屋から出て行く。

再び時間が流れた。

空気が最近冷えているところを感じる。冬になったのか？

この日は、ルイズが久しぶりに来ていた。

「アレス。こんにちは」

ああ、こんにちは。全く、あいさつすら返せないとはな。

「もう、そろそろ今年も終わるわ。ねえ、覚えてる？ 去年の冬は年の終わりに北へ旅行に行こうかって言っていたの」

そう言えば、そんなことを言っていたな。

北の地は、ここより早く雪が降ると聞いている。

それで、俺が来年は一緒に北へ旅行しに行こうと言ったんだ。

「約束とまでは言わなかったけど、わたし楽しみにしてたの。アレスと一緒に旅行するの」

それは申し訳ないことをしたなと思う。

何も出来ない今は、ただルイズの言葉に耳を傾けるしかない。

「それと、ね……」

言葉が続かない。

どうしたのだろうか？

しばらくして、ルイズのすすり泣く声が聞こえてくる。

「もし、年内中に、あなたが目を、覚まさないなら……」
辛そうな声だ。

何があると言っただろう？

「お父様が、ワルド様と…… 婚約させると言っただわ
な、に？」

つまり、婚約破棄ってことか。

ヴァリエール公爵も、たぶん苦渋の決断だったんだろう。

目覚めぬかも知れない俺より、ワルド子爵の方がいいと思う。
娘の幸せを考えるなら、それがいいだろう。

「アレス……。わたしは、嫌よ。あなたじゃないと…… あなたじゃないとわたしは嫌！」

「ねえ、アレス、目を覚まして！ お願い！ わたし、あなた以外の人と結婚なんてしたくない！」

「わたしが嫌いな？ わたし、何か悪いことしたの？ どうしてわたし……こんなに辛い思いしないとならないのよお！」

俺にルイズが覆いかぶさるのを感じた。
ルイズの声が、心が、痛い。
彼女の思いが、俺の胸に響く。

「アレスうう……」

ルイズは俺の胸に顔を埋めている。

ルイズの頭を何とか撫でてやりたい。

俺はどうなつてもいい。今だけでいい。

だから、体よ動け！

今まで何度と試しても体は動かなかった。

だが、今はそうも言っていられない。

これで死んでもいい。

せめて、最後にルイズの頭を！

「ア……レス？」

その願いが通じたからだろうか？

俺の右腕が奇跡的に動いたのだ。

ぎこちない、動かすだけで激痛が走る。

それを全て耐えて、右腕をルイズの頭に置いたのだ。

しかし、撫でるまでには至らないらしい。

それだけじゃない。

「ル、イズ」

かなり掠れた声だが、俺の口から声が出る。

目も開いた。

「アレス？ アレス？」

そこに移っていたのは、ルイズの驚きとも喜びとも付かない表情だった。

「心配……掛けて、すまない」

聞き取れるかどうか、ギリギリの声だ。

それでも、俺は、俺の意思で言葉を発することが出来た。

「アレス、目を覚ましたのね！ 今、おば様を連れてくるわ！」

そういうと、ルイズは大慌てで部屋から出て行った。

俺は、そこで再び瞼を閉じる。

とても、疲れた。

今ので全体力を使い切ったらしい。

再び、俺の意識は闇へと落ちる。

それから、またしばらくしてだろうか？

俺は今度こそ、目を覚ました。

それはその年が終わる日だった。

ルイズとワルド子爵との婚約という話は再度消えた。

これに関しては……少しだけ悪い気がしたが、仕方ない。

俺が完全に目を覚ましたということにルイズはこれまでにない喜びを表していた。

この時の笑顔が俺には忘れられない。

一度目を覚ました、と思って戻って来たルイズが、再び俺が寝ているのをみた時、とても落胆したらしいが。

そういう話を聞いて、また今回のことで俺は思った。

俺はこの子の笑顔を守りたい、と。

命がある限り、この子の笑顔を守りたいと思った。

年が明けた。

俺は自室のベッドに寝ている。

何とか上半身を起こせるまでに体は回復した。

まだ下半身には力が入らない。ただ、抓れば痛みを感じるので、神経がやられたわけではなかった。

目を覚ましてから把握したが、左手は手首から先は切断されてない。

話に聞くと、傷口が化膿して水の魔法で治療しても使い物にならなかったらしい。

最初、その事実を知ったルイズが泣き叫んで大変だったと聞いた。

俺はベッドの上から外を見る。

近くの森の木々は、半分くらい葉を落としていた。

葉の落ちていない木も、茶色の葉がいつ落ちるか分からない感じである。

「結局、十カ月もの間寝ていたとはな」

誰もいない部屋で自虐的に言った。

詳しく話を聞いたが、ラウドとシルファが逃げ切った後、俺を搜索してくれたらしい。

二日探して、俺を街道付近の森の中で見つけたらしいが、その時点でほとんど虫の息だったと聞いた。

「よく、生きていたものだ。あの時のように死ぬと思っていたからな」

前世では事故で死んでいる。

今回もこういう最後なのだろう。そう漠然と思っていたが、まだ俺にはやることがあるらしい。

「アレス、入ってもいい？」

部屋の外から声が聞こえる。

ルイズだ。

このところ、ヴァルガード家に泊まる事が多くなったルイズ。

昨日からルイズは泊まっていた。

「どうぞ」

俺がそういうと、はにかんだ笑顔で入ってくる。

静かに扉を閉めて、俺のベッドの前に来ると備え付けの椅子に座った。

「こんにちは。アレス」

「こんにちは」

会話らしい会話はない。

ルイズは俺が目を覚ましてからというものの、とにかく俺の傍にいたがるが多くなった。

「足はまだ動かないの？」

「そうだね。抓れば痛いから、単に筋力が落ちてるだけだと思うよ」
「そう。ねえ、ベッドの中に入ってもいい？」

恥ずかしそうに尋ねてくる。

最近のルイズは、どうも俺とのスキンシップを求めてならない。

「いいよ」

俺がそう言うと恥ずかしそうにしながらも、俺のベッドの中に入ってくる。

実は、最近俺のベッドの中に入ってくることが多いから俺は少しスペースを空けておくことにしていた。

ルイズは俺の隣に座るとそのまま、俺にもたれ掛かる。

「アレス。温かい」

「ルイズも温かいよ」

そういいながら、俺は頭を撫でてあげる。

そうすると、気持ち良さそうに目を閉じるのだ。

とても可愛らしい。まるで、子猫のようだ。

「甘えん坊だね」

「だって……。アレスがいなくなったら嫌だから」

そう言って、俺の服をぎゅっと握ってきた。

俺を失いかけたのが、怖いのだろう。

だが、これでは単なる依存だった。

ルイズはとてもいい子である。

それは俺が良く知っていた。

たぶん、誰よりも一緒にいることが多かったから。

傷つけたくはない。

ルイズを泣かしたくない。

この子を守りたい。

しかし、俺が死んだらそれは出来ないのだ。

それで、もし彼女が生きる希望を失ったらと思うと俺は、怖かった。

「僕も、ルイズがいなくなったりしたら嫌だよ」

「アレス、もうどこにも行かないで……。ずっとわたしの傍に居てほしいの」

俺は、ルイズの支えになっていたつもりでいた。

魔法が使えないと、悲しんでいたルイズ。

それを何とかしたいと思っていた。

それが自然と俺へ依存するようになってしまっていた。

また俺が死にそうになったら、いや今度は死んでしまつかも知れない。

ルイズを俺に依存させたままでは駄目だ。

「ルイズ、僕はいつ死ぬかわからない」

はっとしてルイズは俺の顔を見る。

悲しそうな顔だ。

「それに、僕はヴァルガードの男だ。この家を継ぐことになるし、戦争が起これば戦争に出なければならんだよ」

言わなければならない。

ルイズに俺を、頼っても依存しては駄目だと、伝えなければならぬ。

「だから、ルイズ。君は強くなつて」

「強くつて……。何？」

「負けないことだよ。どんなことにも。僕が死んでも、悲しみに負けてはいけない。一時的に負けても、最後は乗り越えて」

「アレス、何でそんなこと言うの？　せつかく助かったのに……。そんな悲しいこと言わないで」

ルイズが、俺に抱きついた。

彼女にしては強く、絶対に離さないと言う様に。

「アレスにいてくれないと、駄目なの。アレスがいないと寂しくて堪らないの」

「ルイズ」

自由が利く右手で、ルイズの頭を撫でる。

そして優しく説いた。

「それでも、いつかは死んでしまっただよ。僕に頼ってもいい。でも、依存はしないで。」

僕がいなくなっても強く生きるって決めてほしいんだ。そうじゃないと、僕は君が、ルイズが、心配で堪らないんだ」胸に何か熱いものが広がる。

ルイズの涙だ。

彼女は声を殺してないている。

「僕は生きている限り、ルイズを守るよ。」

寂しいというならいてあげる。

抱きしめてあげる。

キスだつてしてあげるよ。

でも、僕がいなくなったらそれは全部出来ないんだ」

ルイズは嫌々と首を振る。

辛いだろう。

十一歳の女の子だ。

こんなこと理解しろと言う方が酷なんだ。

俺は、きつとルイズを傷つけた。

だけど、その傷がルイズを強くしてくれるなら、俺に依存しないなら、通らなければいけない道。

「ルイズ、僕は君を愛してる」

「え？」

涙に濡れた顔が、俺に向けられた。

俺のせいで、辛い思いをさせている。

「僕はね、ルイズ。君を愛しているんだ。だから、辛いけどこういうんだよ。愛しているからこそ、愛している人が悲しみで不幸になつてほしくないから、言っているんだ」

「アレス……。でも、わたし、怖いよ。怖くて怖くて堪らないよお」

「今すぐ理解しなくいい。でも、いつかは理解してほしいんだ。それまでは僕は絶対にルイズをどんなものからも守ってあげるよ」

ルイズは俺の言葉にしっかりと頷いた。

理解は出来てはいないだろう。

でも、彼女なりに、俺の思いに応えたいと思ってくれたのだと思う。

小さい、小さい決意を俺は彼女の中に、見出していた。

そんな彼女を、俺は片手で強く抱きしめるのだった。

第六話（後書き）

次回で、第一部を終わりに出来たらと思います。

また、今回は重いテーマですみません。

もっと明るい内容にした方がいいんですが、ルイズに強くなっても
raithたいと思う気持ちがあるのでこうなりました。

しかし、こうなると才人がどう活躍するのか？

それが気になってきますね。

私の中ではある程度、才人の位置づけは決まってはいるのですが。

本当に「ゼロの使い魔」を愛している方には、こんな話にしてしま
ったこと、改めてお詫び申し上げます。

第七話（前書き）

注：この小説は、独自設定や独自解釈があるため、真に「ゼロの使い魔のファン」の方は気分を害する可能性があるため、ご遠慮下さい。二次創作である以上、そこには望むものとは違う形の作品があるのをご理解戴いた上で読んでいただけると幸いです。

第七話

春になった。

俺は、何とか杖を使えば自分の足で歩けるようになるまで回復した。

杖が無くても一応、歩けるがほぼ回復した右足に対して、左足がややぎこちない。

生死をさまよっていたことを考えるなら、これくらいはなんてことは無かった。

もっとも、リハビリを続ければ左足も治ると思う。

今、俺はルイズと共に屋敷の庭を散歩している。

リハビリ代わりだ。

「ルイズ、少し早いよ」

「あ、ごめんなさい」

目の前に広がる花畑。それを見たかったのだろう。

ルイズが俺を引く手が強くなっていた。

「あの花かな？」

「ええ。とても綺麗だからつい見たくて」

あの一件があつてから、ルイズは少し大人びた気がした。

余裕が生まれたのだろうか？

今、俺に向けた笑顔も十二歳になった女の子よりも、人生に何かを感じた人間の笑顔に近い。

「アレス。わたし、将来は秘薬で多くの人を救いたいと思うの」

「立派でいいことだよ」

俺はそう言つて微笑む。

系統魔法の使えないルイズに、それがどれ程難しいか分かってい

る。

錬金が出来れば、物質の変換も容易だ。

それによる調合作業をスムーズに行えるからだ。

鍊金が出来ないルイズには、唯一ハルケギニアで進展のある化学反応を用いた秘薬作りを行うということである。

それでも自分で見つけた道を、俺は応援したい。

「大変なのは、わたしも分かっているの。でも、目の前で大切な人が苦しんでるのに何も出来ないのは嫌」

出来る事はやっておきたい。

大切な人がいるなら必ず思うことだ。

「ルイズ、君は本当に凄いい子だよ」

「そんな、わたしは何も出来ないわ。魔法だって、アレスがいなかったら未だにコモンスペルすら出来なかったのよ。みんな、アレスに支えられてたから」

「でも、そんな君は今、自分の力で秘薬の勉強に取り組んでるじゃないか。これは素晴らしいことだ」

そう。誰に言われたからじゃない。

彼女は必死に考えて、自らの意志で道を開いたんだ。

きっかけは俺であつたとしても、自らが動くというのは大人でさえ難しいものだ。

「アレス」

「なんだい？」

「足の具合はどう？」

「相変わらずだよ。でも、少しずつ良くなってる」

左足は、ぎこちなくも動くのだ。

少しずつ、時間を掛けて治せばいい。

「もし、それ以上良くならないなら、わたしがきつと治して見せるわ」

「ルイズ……」

なんていじらしい子なのだろう。

この子の強い意思を感じる。

前世の俺が十二歳の時はどうだったろうか？

こんなに立派ではなかったな。

「アレス。きつと、わたし強くなるからね」
その笑顔は決意とも取れる笑顔だった。

その日、俺は父さんに連れられて王宮へと来ていた。
ヴァリエール公爵も一緒である。

王宮へ来た理由は、アルビオンの情勢についてだった。
報告書はすでに父さん達が処理して、王宮へ送られている。

その報告書の内容から、実際にアルビオンへ行った俺に意見を聞く
こうなのだ。

俺は十五歳になったとは言え子供とも大人とも言えぬ子供だ。そんな子供が、そこまで重要な件に俺が意見することになるとは思わなかった。

王宮に着くと、応接間に通されて俺とヴァリエール公爵、父さん
で備え付けのソファに座った。

「アレスよ。お前の率直な意見を聞きたいと、マザリー二枢機卿は
言っておる。無礼にならない範囲で自由に意見を述べるがいい」

ヴァリエール公爵が言うと、父さんも頷いていった。

「おそらく、今一番アルビオンについて知っているのは、アレスお
前とあの二人だけだ」

「わかりました。私の思うままに話をしたいと思います」
そういうと、俺達は会話がなくなった。

一応、国のトップと会うのだ。

いくら慣れている二人でも、やはり子供を伴ってくるとなれば少しは緊張するらしい。

少し、待ってから部屋の扉が開けられた。

入ってきたのは、マザリー二枢機卿、マリアンヌ皇后だった。
国の重要人物のみ。

これはアルビオンへの潜入をしたということを知っているのが、
このマザリー二枢機卿とマリアンヌ皇后の二人のみだからだ。

俺達は一度立ち上がると、あいさつのために礼を示す。

マザリー二枢機卿、マリアンヌ皇后が手を上げてそれを応えると、俺達は向かい合った形で座った。

「それで、君がアレス君でいいのかな？」

マザリー二枢機卿が俺を見て言う。

俺は頷くと、自己紹介をした。

「アレス・ジルバス・ド・ヴァルガードです。以後、お見知りおきを」

「ふむ。なかなか礼節に富んだ若者だな。ヴァルガード侯爵、なかなか良き教育を施しているようだね」

「いえ、倅が勝手に育ったまです」

父さんがそういうと、マザリー二枢機卿が笑いながら言った。

「謙遜するでない。お主の育て方もあるからこそではないのかな？アレス君、君はどうか？」

「父と母のおかげだと、存じております」

今度こそ、マザリー二枢機卿は大きく笑った。

良く出来た子供だと。

「わたしの娘のあなたくらい、堂々としていたら頼もしいのですが、そういったのはマリアンヌ皇后だった。

最近、公務へ連れて行くことが多くなった娘、アンリエッタ王女がまだ子供と言うこともあるせいか駄々をこねて仕方がないと話す。

「アンリエッタ王女はこれからではありませぬか、皇后陛下」

ヴァリエール公爵が、フォローを入れるが小さいため息と共に、マリアンヌが言う。

「アレスは何でも十歳の時から、アカデミーの人間と意見交換が出来たとか。それだけでも驚くべきことかとお思いますわ」

「倅は少々好奇心が旺盛なもので、研究熱心なのです」

「それだけでも、羨ましいもの」

「確かに、羨ましい限りですな。さて、話の本題に入りたいのですが、よろしいですか？」

マザリー二枢機卿が、全員を見る。

どうも俺の話で盛り上がったようだが、雰囲気がそれで変わった。それを感じ取ったマザリー二枢機卿が改めて俺を見て言う。

「アレス君。君はアルビオンの情勢についてどう思うかな？」

「はい、まず報告書は読まれていると思いますので、その内容については省きます」

俺が一度全員を見て、言葉を続ける。

「これはご存知かも知れませんが、私はアルビオンにて殺されかけました。これはその時の傷です」

そう言っ て左手を差し出した。

手首から先が、ない。

これにマリアン又は小さい悲鳴を上げて、マザリー二枢機卿は身を乗り出すように俺の左手を見る。

殺されかけたというのは事前に聞いていたと思う。

しかし、十五歳の子供がこのような仕打ちを受けたということに、改めて信じられないと思ったのだろう。

「これは、アルビオンの共和制推進組織パブリック・ユニオンと思われる人間の一人に負わされた傷です。そして、その者はこう口にして私を殺そうとしました」

― 来たる、ハルケギニア統一の時に邪魔になると。

「な、んと？ ハルケギニア統一とな？」

「そんな、馬鹿げたことを彼は言ったのですね？」

俺は二人の言葉に頷いた。

そして、続ける。

「その者は偏在で、四人に自身を分けることが出来るほどの使い手。いかに下級貴族と言えど、あれほどの強者がいるとなればアルビオンも苦戦を強いられます」

「確かにそうだな。しかし、ハルケギニア統一とは、な。続けなさい」

「はい。また、聖地奪還組織レコン・キスタに関しては、その統一を叫んでいました。」

つまり、彼らは共に道を歩む準備が出来ています。

今は共に弱小な組織ですが、この先はどうなるかわかりません。

私が殺されかけたところからしても、平和的な交渉をするような連中にも思えませんでした」

「報告書にはそこまでは無かったが、殺されかけて数ヶ月も意識が戻らなかったことを考えれば納得も行くな」

実際に意識が戻らず、そういった危険性を訴える時間も無かったのは事実だ。

今思っても、子供さえ殺そうとする組織。正直怖いものを感じる。
「ここからが、私が一番言いたいことですが、アルビオンへの援軍が必要になると私は感じております」

「うむ。それは私も感じていたところだ。このまま奴等を放置するにしても、アルビオンが傾きかける、もしくは滅んでしまったら次は我々が標的だ」

ヴァリエール公爵が俺を見ていった。

俺もそれに頷くと、こう続ける。

「もっと言うと、この戦は下手をすればハルケギニア全体の問題になりかねません。

少なくとも革命がアルビオンで成功すれば、トリステインをはじめ各国でも反乱を良しとする貴族が出てもおかしくないでしょう」

これは現ロシア、旧ソビエト連邦を見てもそうだ。

他の国が独立を訴えて、それを許せば他の場所も同じく独立を訴える。

国に不満を持つ人間は少なからずいるのだ。

アルビオンでの革命が、飛び火する可能性もある。

前世の記憶が無ければこんな考えにならなかっただろうな。

「また、アルビオンが負けるとなれば、空軍の戦力は彼らの手に落ちるというのも同義です。

空を制するものは戦を制するに等しいでしょう。

私の不安が杞憂で終わればいいですが、もしそうなれば後手に回

ることになります。

アルビオンへの援軍の準備、もしくは迎え撃つための軍備を整える必要があると私は思っています」

そこで、俺の意見は終わる。

全員、感心したように俺を見ていた。

それを代表するように、マザリー二枢機卿が口を開いた。

「なるほど、的を射た意見だ。そのことを踏まえて今後、トリステインはどうするべきか考えることにしよう。アレス君、ご苦労だったね」

「いえ、ありがとうございます」

こうして、俺はアルビオンで感じたことを全て話したのだった。

この意見が、今後歴史に大きく関与することになると考えもせず

に。
その後、俺はヴァルガード家の私軍において將軍の地位を与えられた。

ヴァルガード家の私軍は常備兵が五百。志願兵を集って最大で一
万五千の兵力を誇る。

俺は父さんから指揮官を命じられて、来る戦いに向けて軍備を
整えることになった。

どうも、前世といい今といい、厄介なものを背負うことが多いと
感じざるを得なかった。

時は過ぎて三年の月日が経った。

俺はこの三年間で徴兵し私軍を強固にしていた。

まず、常備兵力を五千まで拡大。

メイジの数は変わらないが、歩兵の数を増やした。

あとは兵の質の向上も欠かさなかった。

メイジには自分の開発した魔法を伝授することで一人当たりの兵
力を増強した。

これにより、防御と攻撃は格段に上がったのだ。

ドットのメイジでも、シールドを用いた防御魔法が使えるため、フレイムボール辺りまでは防げる。

ライト・ブリッドは高速に打ち出す、誘導性を持たせるなどでドットメイジでもライン以上のメイジと戦うことが出来るようになっていた。

またライト・ブリッド以外にも攻撃魔法を用意した。
ライト・ブラスト。

魔力を拳大くらいの魔力の波動に変えて打ち出す魔法だ。
レーザーみたいなものだと思うてくれればいい。

込める魔力を大きくすることで、数十メートルの大岩を砕くことくらいは出来る。

俺が試しに限界まで魔力をこめた時は、恐らく戦艦を数隻落とすくらいは出来そうな威力に仕上がっていた。あれはレーザー砲のレベルだ。

また、魔法の使えない平民の兵に関しても武器の改良を施した。
三国志を参考に、連射式の弓を開発した。

正直、どうやって矢を放っていたかは知っていたものの構造は、一から練ることになった。

その結果、矢の詰まったマガジンを交換する連式弓を開発できた。
矢はマガジン一つで二十本。連射速度は秒間二発。射程は百メートルくらいだ。

後は手榴弾のような手投げ弾だ。

こんな時代でも歩兵の武器は少しでも強力な方がいい。

手榴弾の構造は火薬を込めた筒を二段にして作成した。

一段目は燃焼用だ。通常は密閉しているが穴を空けることで中の火薬が燃える。

二段目はその一段目の火が、時間にして五秒くらいで引火するような構造にして、爆発させる。

威力は、小屋くらいなら簡単に破壊できるレベルだった。

最後は、籠手にショートソードを仕込む構造の籠手である。

これはメイジじゃないもの同士が戦うのに有効なもので、防具としても使え、剣がなくなったらこれを使える。

剣や槍に関しても、製鉄技術を用いて量産体勢を作るなどした。平民でも作れるため、メイジの負担もかなり減るのだ。

これらの案はゲルマニアのようで野蛮な技術と一部のメイジから蔑まれたが、父さんは理解を示してくれていた。

だいたい戦争になるなら、勝つための準備が嫌でも必要になる。

前世で、プロジェクト成功のために、常に情報を集め、必要な人材の確保、また開発環境を整えるということしていたからこそ仕事が続いていたのだ。

それが戦争になっても考え方は変わるものじゃないのである。

全てが杞憂で終わればそれに越した事はない。

それに製鉄技術は平民の工業、農業も発達するため、平和的なものにも繋がるのだ。

ルイズは十五歳になっていた。

背はそれ程伸びず、十五歳の割りには幼い感じも見受けられるが、ルイズは綺麗になった。

桃色の髪は艶やかで、綺麗になっていた。

驚くべきことに、以前ルイズは俺の足を治すと言っていたが、それを実現させていた。

彼女が十三歳の時に作った秘薬で、俺の足は完治したのだ。

これには俺の母さんも協力していたことなのだが、それでもこの功績は大きかった。

俺以外にも戦で体が不自由な人間がいるが、その六割近い人間に効果を発揮したのである。

秘薬の使い手として、ルイズの名前は、トリステインで広く知られるようになっていた。

この年、ルイズと俺はトリステイン魔法学院に入学した。

俺とルイズが同学年なのは二つ理由があった。

一つ。ルイズが俺と離れたくないということ。

二つ。俺が將軍として軍備を整えていたため、学校に行く時期がずれたのだ。

今は副官に任してある。

有事の際は呼び戻されるが、基本は副官に任しておけば問題ない。だいたい、十九になったとは言えやはり若者の俺よりかは百戦錬磨の副官の方が皆、いう事を聞くのだ。

ルイズは、秘薬の勉強を続けていて、魔法が使えないにも関わらず文献にある秘薬は材料さえあれば作れるようになっていた。

本当なら、魔法学院よりアカデミーへ行った方がいいのと思うが、ルイズは使えなくとも水の魔法をより詳しく学びたいと言っている。

水のメイジと協力して、傷ついた人を救いたいと言っていたのだ。入学してから、ルイズには二つ名が、二つ出来た。

これはシャレではなく、事実である。

好意的な人たちからは、秘薬の知識に詳しいルイズを“癒し手”のルイズと。

悪意ある人たちからは系統魔法が使えないため“ゼロ”のルイズだ。

後者は明らかにこじつけ。コモンスペルが使えるのだ。ゼロはな

いと俺は思った。

公爵家の娘として位が高いが、系統魔法が使えないからというこ

とで攻撃する材料を作ったのだ。

しかしルイズ自身、俺が今まで一緒にいて辛いことも超えてきたこともあり、程度の低い人間の発言は無視していた。それだけじゃない。

「いい奴には言わせておくわ」
と言うのだ。

それに、ルイズは自分の系統が何か知っている。

その力が大きいことも、またその扱い方が分からないと言う事も

だ。

そう言うこともあり、“ゼロ”と言われても彼女は無視をしている。

その日、授業が全て終わると俺はいつものようにルイズに声を掛けた。

最近、授業が終わると一緒に図書室へ行ったり、俺の作ったコモンSPELLを教えたりしていたのだ。

だから、今日もどちらかになるかと思ったのだが。

「ごめんなさい。これからモンモランシーに秘薬のことを聞く事になってるの」

ルイズは申し訳無さそうに言うのだ。

モンモランシーは水のメイジで、秘薬に関しては学年でもトップクラスだ。

入学してすぐにある部門別筆記試験で、秘薬部門はルイズと共にトップだった。

「そうなんだ。それなら仕方ないよ」

「ごめんなさい」

「謝らなくていいからさ。それより、新しい友人が出来て良かったじゃないか」

それに関して、俺は嬉しかった。

昔は俺ばかりに頼っていた。一緒にいる時間は少なくなるが、こうして徐々に自分以外の人間に関わっていくのは嬉しい。

少し寂しい気もするが、それは問題ない。

「ルイズ」

そういうと俺の後ろから声がする。

振り向くと、金髪縦ロールの美少女、ミス・モンモランシだ。

「ミスタ・ヴァルガード、ね。ルイズの婚約者の」

「ええ。ミス・モンモランシ。話すのは初めてですね」

「モンモランシーで、いいわ。ミスタ・ヴァルガード。硬いあいさ

つは無しにしましょ」

「わかった。僕もアレスでいいよ。よろしくね、モンモランシ」

「ええ、アレス」

ルイズがずっと俺とモンモランシーの間に入る。

ちらりと俺を見たとき、少し怒ったような顔をしていた。

それはわたし以外の女性とあまり仲良くしないでと言う感じでもある。

「それじゃ、モンモランシー行きましょう」

「そうね。わたしの部屋でいいの？」

「いいわ」

「それじゃ、行きましょう。それじゃ、アレス。またね」

「ああ、また」

ルイズとモンモランシーは談笑しながら去っていく。

俺はそれを見ながら、心の中でルイズをよろしくと、モンモランシーに言うのだった。

学院での生活は平和そのものだった。

この時間がいつまでも続けばいいと思っていたのだが、現実はどうも行かなかった。

そうこの平和な学院生活は、運命の輪が回り始める前の、束ぬ間の平和だったのだ。

第七話（後書き）

かなり、駆け足的な展開となりました。

これで第一部は終了したいと思います。

次回からは小説の本編の内容に入ります。

今回は、ルイズが精神的に大人になっていく伏線を張りました。

また、アルビオンとの戦争も予想した準備もする形にしています。

これらを本編の歴史にどれだけ影響を与えることになるかはまだわかりません。

また作中に出てくる連射式の弓は、適当に考えています。

三国志、レッドクリフを見た方なら知っているかと思いますがあの連射式の武器はかなり凄いと感じました。

中世ヨーロッパ並みで、尚且つ知識があって作れそうなものと言うことであれが限界かと。

あと手榴弾はトリスティンで作れるか知りませんが、大砲と鉄砲はあるので、工夫次第では作れるかな？と。

蒙古襲来の際にも火薬は使われていましたし、文化レベルは同じか少し上かも知れないので。

毎度おなじみですが、本当に「ゼロの使い魔」を愛する方にはそぐわない内容かと思います。

すみません。

第八話（第二部）（前書き）

注：この小説は、独自設定や独自解釈があるため、真に「ゼロの使い魔のファン」の方は気分を害する可能性があるため、ご遠慮下さい。二次創作である以上、そこには望むものとは違う形の作品があるのをご理解戴いた上で読んでいただけると幸いです。

第八話（第二部）

魔法学院に入学して、一年が過ぎようとしていた。

俺は、この一年の間、將軍としての仕事がほとんど無く安心して
いたが徐々に変わりつつあった。

定期的な連絡でアルビオンの情勢を聞いている。

パブリック・ユニオンとレコン・キスタは合併をして、貴族連合
レコン・キスタを名乗ってアルビオン王軍と衝突を繰り返している。
レコン・キスタの勢力はおおよそ三万。

アルビオンは押され続けて、二万まで勢力を落としていた。

特に空軍を抱える貴族の寝返りで、一気に後退しざるを得なくな
っていたのだ。

不利な立場に陥ったアルビオンにトリステインは同盟を持ちかけ
た。

トリステインはこの四年もの間に、軍事力の強化を図った。

特に、アルビオンへの援軍を意識して空軍は従来の二倍の戦力を
有している。

トリステイン王軍は現在、陸空で計五万の兵力を蓄えていた。

俺の武器の改良、新魔法の効果もあり、小国でありながらも軍事
力は侮れないものになっていたのだ。

現在、アルビオンの国土の三分の二がレコン・キスタに奪われて
いる。

残っている砦の数も少なくなっているがトリステインからの派兵
が約一万、アルビオン王軍が二万で計三万の兵力を集中投入するな
どして、レコン・キスタの侵略を何とか防いでいた。

だが、このままではアルビオン陥落が時間の問題である。

そのため、現在タルブ領の駐屯地に兵を集中させていると話も聞
いている。

情勢次第だが、場合によっては俺も学院を休学して出兵すること

になるかも知れなかった。

それはヴァリエール公爵と父さんと三人で会った時に、そういう話が出ていたのだ。

魔法学院での生活は平和で久しぶりに学生生活と言うものを楽しんでいた。

授業の単位は俺もルイズも問題なく取って、共に二年への進級がほぼ確定している。

あとは二年への進級で必須になる春の使い魔召還儀式が残っているだけだった。

これは春休み後の最初の授業で行われることになっている。

春休みが終わる日。

この日は、朝から国に帰っていた生徒の全員が学院へ戻ってくる。二年に進級する生徒達は戻ってくると、翌日の春の使い魔召還儀式で話題がにぎやかだ。

俺はルイズと共に魔法学院に戻ってきていた。

俺とルイズは魔法学院を卒業すると、結婚することになっていて今回はその準備も多少含まれていた。

ヴァルガード家にルイズがいることも多くなり、着実に話は進んでいたのだ。

「母さんには参ったよ。まだ一年以上も先なのに、子供の話まで出すなんて」

俺は馬車から荷物を降ろしながら、隣にいるルイズへと話しかける。

ルイズも顔を赤くしながら頷いて言った。

「ええ。おば様も早く孫の顔を見たいって言ってたけど、やっぱりあの手の話は恥ずかしいわ」

「父さんも、さすがに話が早いと焦ってたしね」

下ろした荷物のうちルイズの分を渡す。

ルイズはそれを受け取りながら、小さく笑った。

「おじ様があんな風に慌てるのは、おかしかった」

「僕も同じだよ。あ、ここまでありがとう。帰りは気をつけてくださいね」

俺は騎手の人にそういうと、騎手の人は気遣いのお礼を言って馬車を走らせた。

その馬車を見送る。

馬車が門を潜るのを確認すると、俺はルイズの方を向いた。

「それじゃ、行こうか」

「ええ。荷物を置いたら、アレスの部屋に遊びに行くから」

「わかったよ」

自分の部屋に戻ると、俺は荷物を整理した。

持って行ったものは、ほとんどが書物。

着替えなどは向こうにあるためその手の荷物は無かった。

ルイズはやはり女の子と言うこともあり、着替えの類で多かったが。

「結婚か」

俺はベッドに倒れこむとそう呟く。

前世と含めると精神年齢はそろそろ五十代だ。

もういい年である。だが、肉体は若く、頭もまだ柔軟に動く。

妙な感覚であった。

「前世では二十代の前半に何人か彼女は居たけどな。結婚とは無縁だったよな」

それが、今度はちゃんと結婚の話が進んでいる。

これは俺の中では少し戸惑うものだった。

ルイズが婚約者と言うことは間違いないのだが、前世の記憶があるせいか、歳の離れた妹、もしくは娘のような感じた。

ルイズもだいたい大人になり、落ち着いている。

ゼロのルイズと罵る人間にも、なら爆発する理由が講義できて？
と言う風に返すのだ。

面と向かってゼロと言う人間はそれでかなり減ったが、それでも陰口は叩かれているのは知っていた。

精神的に成長したルイズは、魅力的である。

見た目以上に、彼女の魅力は華やかだ。

他人への思いやりの心もあり、母さんの影響が平民の生活改善にも最近は力を入れていた。

考え方も母さんに似てきており、たまに俺への発言もだいぶ大人びていた。

「だからだろうか？俺では勿体無い気もする」

俺の中で引つかかる理由のもう一つが、ルイズが本当に俺と結婚していいのだろうか？と言うことだった。

俺は彼女を愛すると決めている以上、何を今更なのだが、それでも俺以上の人もいるのではないか？

そう俺は考えてしまうのだ。

部屋の扉が、ノックされて、思考はそこで終わる。

「アレス、入るわね」

断りを入れてルイズが入ってきた。

当たり前だが、制服姿である。

「お茶菓子持ってきたわ」

そう言いながら、包み袋を二つ持ってきていた。

「あ、そうなんだ。じゃあ、紅茶を入れるよ」

魔法で水を沸かして紅茶を入れる。

十年以上、魔法を使っているが、本当に便利でいい。

ティーカップに紅茶を注ぎ、それをテーブルの上に置いた。

「ありがとう」

「お茶菓子はマルトーさんからかい？」

「ううん。シエスタよ。彼女が今日のおやつに作ったらしいの。今日わたし達が帰ってくるの知ってからわたし達の方も用意してくれたいわ」

前述したようにルイズは平民の生活改善にも力を入れている。

それは、この魔法学院においても変わらないのだ。

一年目から、平民のメイドやコック、衛兵の待遇の改善を求めたのはルイズだった。

俺も協力はしたが、主立ってやっていたのはルイズである。

だから、ルイズはこの学院の平民の使用人たちからとても好かれていた。

俺も彼らと良く話しているため、同じく好かれている。

ちなみにマルトール学院の料理長。貴族嫌いで有名だが、俺やルイズあと俺達とつるむ友人には良くしてくれる。

シエスタはメイドの女の子で、とても気の回る子だ。

「じゃあ、いただくのか」

「ええ」

包み袋を開けると、そこにはクッキーが入っていた。

なかなか凝ったクッキーだ。

犬や猫の形を象ったものが焼かれている。

向こうの世界なら、お料理教室くらいは作れそうだ。

それを一口食べる。

「おいしいね」

「ええ、おいしいわ。いいわよね、シエスタは料理が得意で」

ルイズも料理はするが、やはり貴族である。

あまり調理場に立たせては貰えず、腕は悪くないがルイズには不満だった。

「ルイズも悪くないんだよ？」

「悪くないじゃ、やつぱり納得行かない」

ぷくつと膨れて紅茶を飲む。

こういう仕草はまだまだ可愛らしい。

そうして雑談していると、ふと暗い表情になる。

「ねえ、アレス。アレスは明日の使い魔召還儀式に不安はないのよね？」

「そうだね。僕は風のメイジだし、何が召還されるか大体は予想で

きるからさ」

風竜や風の妖精、グリフォンやふくろうと言った使い魔になるの
だろうと思う。

使い魔はその人にとっても必要となるパートナーを召還する
といわれている。

だから、俺の性格上から偵察や情報収集といったことが得意な使
い魔になると思っていた。

まあ、小鳥や大型でも鷲や鷹と言ったものだろうと考えていた。

「ルイズは不安なのかい？」

「だって、アレス。わたしの系統は虚無かも知れないのよ？ アレ
スが調べたんだからアレスの方が詳しいと思うけど」

そう、ルイズの系統は虚無の可能性が高いのだ。

結局、証明するには至らずにコモンスペルが使えるようになった
というのと、相変わらず系統魔法は爆発すると言っ状況証拠から虚
無であると推測するまでに留まっているのだ。

「もし、ルイズが虚無なら明日の使い魔は人間、もしくは亜人。エ
ルフということも考えられるよ。それらが召還されれば虚無である
証拠だ」

「人間と亜人はともかく、エルフって言ったらわたし達の敵よ。っ
て言ってもアレスから散々、種族間の相互理解に関して聞かされて
るから今更敵視すつもりはないわ」

人間と亜人なら十分対応できるだろう。周りが。

だが、エルフとなると敵視する人間も出てくるのだ。

俺としては人種差別と同じレベルとしか思えない。

エルフも人間も意志の疎通ができるのだ。歴史が互いを憎むが、
対個人で接すれば誤解を解くのも難しくは無い。

まあ、使い魔がエルフとなると、攻守ともかなり凄いいことにな
りそうだ。

「わたし、ね」

ティーカップを両手で包むように持ちながら、小さく言う。

「本当は系統なんてどうでもいいの」

「ルイズ？」

「伝説じゃなくていいの。本当に系統魔法が単に使えないだけでもいいの。」

わたしは、アレスさえ居てくれたら、メイジとかそんなのどうでもいいのよ」

小さい頃から見てきたルイズ。

最初は魔法が使えなくて、悔しいと思っていたルイズ。

いつの間にか、魔法よりも大切なものに気が付いたようだ。

「それにね、貴族でなくても良かったと思うの。アレスと一緒に小さい家で二人で暮らす。そんなささやかな暮らしでいいって」

華やかさはいらない。

一緒に愛する人が居れば、生活できるだけのものでいいと言うのだ。

「ルイズ……」

俺は、どうなのだろう？

前世においても激動とも言える人生だった。

こっちに生まれても、やはり激動といわざるを得ない人生を歩んでいる。

ルイズの言うささやかな、と言う人生からはほど遠いものだった。「秘薬に関してはもう、十分知識を身につけたし、魔法もアレスからコモンスペルの開発を教えてもらったわ。わたしの爆発の魔法も制御出来てるし、ね。」

強くなるって決めたんだけど、明日のことを考えたら急に、アレスと静かに暮らしたいって言う願望が出てきたの。

弱くなって思うわ」

俺はすつと立ち上がると、ルイズを後ろから抱きしめた。

少女から大人への成長段階。

細いが、それでもルイズの体は女性のそれである。

柔らかい。そして儚く壊れそうな程だ。

「アレス？」

「ルイズ、君は十分強いよ。一緒にいたからね？　ずっと見てきたから分かるんだ。」

君は強い。だから、悩みながらも前に進もうと思ってる。

本当に弱い人間は悩みから逃げるだけだからね」

実際、俺の下についた部下で、困難な仕事を与えたときすぐに音を上げてチームを抜けていた。

強い者は、自分の手に余るとわかるとすぐに相談して、どう対処するべきかを仰いできた。

自分で出来なさそうなら、出来る人間のサポートが欲しいと言うのだ。

強いものは辛い環境下でも、前を見る。

弱い人間は、環境が悪いと、人が悪いと、全てを他人のせいにして後ろを向いてただ逃げるだけだ。

もともと、俺もそうやって逃げたり逃げなかったりしながら成長したわけだが。

結果、逃げないことがどれ程重要かが分かったが。

「アレス……。でも、わたしはやっぱ怖い」

「怖いなら、僕がその怖さを取り除いてあげるよ」

そう言っただけはルイズの頬に手を当てると優しく自分の方を向かせる。

ルイズも何をするのかわかるのか、顔を朱に染めながら静かに目を閉じた。

ルイズの唇に、自分のそれを優しく重ねて、優しい大人のキスをした。

そつと唇を離すと、ルイズは目を潤るませて俺を見ている。

「ずるいわ。わたしが弱気になっっている時に、キスを迫るなんて」

「でも、怖いのは消えたんじゃない？」

「もう、ホントにずるい」

そう言っただけはルイズは立ち上がると、窓の方に歩いていき、窓から

空を見た。

外はもう陽が傾き、空を赤く染めている。

赤い光に照らされたルイズは危うい雰囲気を出している。

儚く散ってしまいそうな、どこか遠くへ行ってしまうような、そんな雰囲気漂わせていた。

「ねえ、アレス。ずっと、一緒に居てくれる？」

「僕が生きている限り、いるよ」

俺もルイズの隣に立つと、そっとルイズを引き寄せた。

ルイズは何も抵抗せずに、寄りかかる。

「うそつき」

聞こえるか聞こえないくらいの小さい声で、ルイズはそう呟いた。

それは本当の意味で、ずっと一緒にはいられないという事を意味しているのだと感じた。

翌日、朝から新二年生は大騒ぎだ。

どんな使い魔が召還されるかだの、わたしはこんな使い魔がほしだの、お前よりいい使い魔を召還するだのかなりはしゃぎ捲っていた。

使い魔の召還はメイジとして一人前と認められる儀式でもある。使い魔を持つて、初めてメイジになると言う人もいるくらいだ。騒がしくもなる。

新二年生は全員広場に集まることと昨日、全員に言い伝えられていた。

俺は、ルイズと共に広場へと向かっていた。

「ルイズ、アレス！」

俺達を呼ぶ声で、後ろを振り向くとモンモランシーとその彼氏であるギーシュ・ド・グラモンがこちらに來るところだった。

ギーシュはそこその二枚目で女の子にモテる。やや細身のキザな少年だ。

俺は二人に手を上げると、ルイズと共に彼らが追いつくのを待った。

そして互いにあいさつ交わす。

「久しぶり、ルイズ」

「モンモランシーも、久しぶり。実家はどうだった？」

「相変わらずよ、そっちは？」

二人はお互いの実家のことを話しながら歩き出す。

俺もギーシュとその後についていった。

「アレス、久しぶりだね」

「そうだね。久しぶりの我が家はどうだった？」

「アルビオンの情勢が悪いせいか、少しピリピリしていたよ。アレスの方も似たような感じだったんじゃないのかい？」

ギーシュの家、グラモン家は父親に元帥を持つ名門の家系だ。

戦略家としても知られるグラモン家は、どんな戦でも常に先陣を切るので有名である。

彼はグラモン家では末っ子で、まだ部隊は任されていない。

そのため学院に戻ってきたのだが、彼とて今後の情勢次第ではどうなるかはわからないのだ。

「まあ、ね。僕も一応指揮官を任されているから、情報は大抵知ってる」

「そうだったね。“創造”の二つ名を持つ君は、王宮への出入りもしていると聞いているよ」

“創造”の二つ名はルイズの姉、エレオノールに付けられた名だ。俺が新魔法の開発と、武器の改良や創作をすることからエレオノールに付けられた名だ。

エレオノールはアカデミーで知らぬものは居ないくらいの名のあるメイジ。

そんな人から付けられた名は瞬く間にトリスティン中に知られることになったのだ。

そうこう話をするうちに、俺達は広場に着いた。

広場に集まった生徒達を、壮年の教師、コルベールがまとめる。彼の周りに集まった生徒を見て、授業を開始した。

「さて、今日は春の使い魔召還儀式です。この儀式はメイジとしても重要で、今後の進路を左右するものでもあります。みなさん、心して儀式に望んでください」

召還の順番は、名簿順で一人一人呼ばれて、広場の中央で召還をする。

あるものは、猫を。あるものは犬を。また様々な使い魔を召還していく。

そこで一際大きい歓声があがった。

「竜だ！ 風竜だぞ！」

「凄い！ 竜を召還するなんて！」

その騒ぎの中心にいたのはタバサと名乗る少女だ。

母さんと同じ青い髪をしていて、背は小さいが美少女だ。

ただ、とても無口なため冷たい人間と誤解を受けている。

ガリアからの留学生と言うが、髪の色からして恐らく王族だろう。

一年から成績優秀で俺と同じくトライアングルだ。

「さすが、タバサね」

そっけなのはモンモランシーだ。

タバサとはあまり接点はないのだが、その実力をいつも目の当たりにして居るだけに納得が行くらしい。

「ええ。彼女の実力にはいつも驚かされるわ」

ルイズもそう言って頷く。

ルイズはゲルマニアの貴族キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーと友人関係にあり、そのキュルケという少女の友人がタバサなのだ。

ちなみ、ヴァリエール家とツェルプストー家は互いに国境を守る貴族。

ヴァリエール家もツェルプストー家も時代によっては殺し合いを

してきただけに互いに因縁のある家柄だが、ルイズがそんな不毛な戦いはわたしの代で終わらせるわと言って彼女と仲良くし始めたのだ。

外交でお互い、協力関係にあった方が余程建設的だと言っていた。
「彼女はやはり凄いな」

隣に立って、周りと同じく感心しているギーシュ。
彼も召還は終えている。

「だが、僕のベルダンディーの可愛さには敵わない」
召還した直後にも関わらず、すでに使い魔に彼は惚れ込んでいた。即興で名前までつけてしまう惚れっぷりである。

俺も見だが、巨大モグラだ。

しかし、彼の言葉も満更ではなく、目が異様に可愛らしかった。
手のひらサイズなら、ぜひとも飼いたいものだ。

「そう言えば、モンモランシーはカエルを召還してたね」
ルイズを挟んで、モンモランシーに話しかける。

ルイズはカエルと言う言葉に反応していた。

「ええ。ロビンって名前をさっき考えたわ」

「ね、ねえ、モンモランシー？ 出来ればわたしのいるところでは使い魔を出さないでね？」

実はルイズはカエルが嫌いなのだ。

「わかってるわ。大丈夫だからそんなに震えないでよ」

「う、うん。お願いね」

そう話していると再び歓声があがった。

「サラマンダーだ！」

「これもまた凄いぞ！」

歓声の先を見ると、赤毛の美少女キュルケが自慢げにサラマンダーを見せていた。

女性としては背が高く、かなり魅力ある女性である。

そのプロポーションはおそらく学年一で、多くの男子生徒を虜にしていた。

実は俺も何度もアプローチを掛けられては、やんわりと受け流している。

また、見た目の軽さとは裏腹に知的で、知識に富んでいた。火の系統で、トライアングルでもある。

「キュルケもさすがだね」

俺の言葉に三人は頷いた。

召還が進んで、俺の番になる。

ルイズ達の方を見ると、期待と若干の不安が籠った視線が送られてきていた。

俺は広間の中央に出て、魔法を唱えた。

「我が名はアレス・ジルアス・ド・ヴァルガード。五つの力を司るペンタゴン。我の運命に従いし、使い魔を召還せよ」

光の鏡が、俺の目の前に現れる。

「おいで、僕の使い魔」

そう優しく語り掛けるように、言っと光の鏡が一際輝いた。

そして、光の中から声が聞こえる。

「あなたが、あたしを呼んだのね？」

「そうだよ。君が、僕の使い魔かい？」

まばゆい光が収まると目の前に居たのはフェアリーだった。

身長はせいぜい三十センチ程度、髪は金色で長い、半透明の羽を持っている。そして何より可愛らしかった。

「フェアリーだ！」

「小さくて可愛い！」

ところどころから声上がる。

確かに可愛い。

だが、俺は周りの声を気にしない。

そして、静かにフェアリーに問いかけた。

「君は使い魔になるのを許可してくれるんだね？」

「そうじゃなかったら、光の鏡を通らないわよ」

やや気性が荒そうなフェアリーだが、使い魔となるのは問題ないらしい。

俺はそのまま、儀式に入る。

「我が名はアレス・ジルアス・ド・ヴァルガード。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

俺はフェアリーを手に乗せると、彼女には大きすぎる唇を彼女の唇に合わせた。

この時、思った。なぜこの魔法はキスなんだと。

それはともかく、これで儀式は終了。

フェアリーの手にルーンが刻まれる。

「ふーん、これが使い魔のルーンね」

刻まれたルーンを見ながら、面白そうに言うフェアリー。

「これからよろしく」

「オッケー、あたしのマスター」

フェアリーは可愛らしくウィンクするのだった。

その後、コルベール先生にルーンを見てもらい、召還終了のチェックが名簿に付けられた。

俺はフェアリーを肩に乗せてみんなの待つところへ行く。

「そう言えば、君のことなんて呼べばいいかな？」

「うーん。フェアリー同士の名前ならあるけど、人間には発音しにくいわよ？ だからマスターがつけて」

「僕がかい？ そうだね……」

こんな可愛い使い魔だとは思わなかったから俺は名前なんて考えてなかった。

フェアリーは風の妖精か。

使い魔はある意味運命のパートナーだし、北欧神話から名前を引っ張ってくるか。

「ノルン。こんな名前はどうかかな？」

運命の女神を意味する名前だ。

我ながらなかなかいい名前だと思う。

「ノルン……。いいわね。気に入ったわ！　ありがとうマスター！」
ノルンと言う名を気に入ってくれたらしい。

彼女は嬉しそうにお礼を言った。

「アレス、それってフェアリーよね？」

三人の下に戻ると、早速ルイズが興味深そうにノルンを見る。

「何？　この子？　それとか言って失礼しちゃうわね」

それと言われたのが気に障ったのか、ノルンが怒った。

でも、本気ではないらしい。

「ごめんなさい。わたしはルイズ。彼の婚約者。あなたは？」

ルイズがすぐに謝ると、ノルンも気を許したのか、ルイズに自己紹介する。

「あたしはノルン。見ての通り、フェアリーよ。で、この名前はさつきマスターに付けてもらったばかりなの」

嬉しそうに言うノルンに、ルイズが目を細めて俺のことを見てくる。

何故だか知らないが、温度が一度下がった気分だ。

そして、少しふて腐れたこういうのだ。

「女っ垂らし」

「ちょ、ちよつとルイズ、それはないよ」

「まあいいわ。アレスは誰にでも優しいものね」

そう言って、今度はモンモランシーに視線を送る。

モンモランシーは慌ててながら言った。

「あ、アレスとは何にも無かったって言ってるじゃない！」

実は一年時にギーシュが、他の女の子にちょっかいを出していると言って、泣いていたことがあったのだ。

それを偶然見かけた俺が、話を聞いてあげて慰めた。

その時、優しい言葉を掛けたのをきっかけに、モンモランシーが再び泣き出したので胸を貸した。

泣くなら思いつきり泣いたほうがスッキリするよと言って。

俺の胸で泣くモンモランシー、それをタイミング悪くルイズに見られて……。

俺は五十年くらい人生を歩んでいるが、あれほどの修羅場を体験したことは無い。

「そうなんだけど、ねえ……」

もう一度俺に視線を戻すと釘を刺すように言う。

「他の子に優しくしないでとは言わないけど、あまり誤解するようなことは避けてよ?」

嫉妬するルイズ。

実は可愛い魅力の一つだが、やはりルイズを困らせるのはよくない。

俺が頷くと、ルイズもあとは何も言わなかった。

「さて、次はミス・ヴァリエールの番ですな」

その言葉にルイズが返事をする。

「アレス……」

とたんに不安そうな表情で俺を見た。

たぶん昨日言っていたように怖いのだろう。

何が出るかわからないからこそ尚更だ。

「大丈夫だよ。僕たちが着いているから」

そう言つて背中をそつと押してやる。

ルイズは頷くと、広間の中央へと行った。

ルイズを見守る俺に、ギーシュがそつと俺の耳元で言った。

「アレス、君も僕のこと言えないじゃないか」

モンモランシーが隣にいるため小声で言うギーシュ。

ギーシュはモンモランシーがいるのにも関わらず、未だに他の女の子に手を出していたりする。

「ギーシュのは単なる節操なし。僕のは行き過ぎたお節介だよ」

そういう俺達に、ノルンがため息をついていった。

「マスター。行き過ぎたお節介は時として、女の子に期待させるから気をつけないとダメよ? まだ節操なしの方が分かりやすいわ。」

ああ、こいつは遊びたいだけなんだって」

「う、反論が出来ない」

「わ、わかったよ」

俺とギーシュはもう何もいえなかった。

そしてルイズの召還が始まる。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。我の運命に従いし、使い魔を召還せよ」

そう唱えると、ルイズの目の前に光の鏡が現れる。

その鏡が光を放ち、一際眩いまでに輝いた。

強い光に、誰も目が開けられない。

「うわ！」

そんな声が聞こえて、徐々に光が収まってくる。

光が収まって、俺はルイズがいる場所を見た。

そこには俺の予想通りに人間が召還されていた。

だが、それだけじゃない。

「馬鹿な……」

俺はその人間を見て愕然とする。

こんなことがありえるのか？

一体どうなっているんだ？

この魔法はハルケギニアの生物しか呼ばないんじゃないのか？

そこに居たのは、パーカーにジーンズと言う現代日本人の格好をした少年。

手に持たれていたのはノートパソコンだったのだ。

第八話（第二部）（後書き）

第二部のスタートになります。

今回は、ルイズとの絡みと、主要人物を登場させる感じでした。

ルイズの性格が年齢のわりに落ち着いているので、友人関係とかも少し代わります。

ちなみにキュルケは本編でもルイズをそれ程悪く思っていないので、敵対関係だけにお互い苦労が分かるためにいい友人関係になると勝手にしています。

タバサに関しては、主人公の母親が元ガリアの王族だったために王族だろうということにしています。

最後、サイトが召還されたところで終わらせて、次回からは今度こそ小説一巻の冒頭から入れるかと思っています。

第九話（前書き）

注：この小説は、独自設定や独自解釈があるため、真に「ゼロの使い魔のファン」の方は気分を害する可能性があるため、ご遠慮下さい。二次創作である以上、そこには望むものとは違う形の作品があるのをご理解戴いた上で読んでいただけると幸いです。

第九話

日本人が呼び出されただと？

俺は少し、混乱をしていた。

サモン・サーヴァントはハルケギニアの生物を召還する。

幼い頃からの魔法書にそう書かれていたはずだった。

「マスター、どうしたの？」

その言葉で、俺は我に返る。

そう言えば、ノルンはハルケギニア出身なのか？

「ノルン、君はハルケギニアのフェアリーだね？」

「え？ ええ、そうね。人間が言うならガリアって国の方面かしら？」

「そうか、ありがとう」

俺はそう言って、ルイズ達を見る。

どうやらいきなり呼び出された事に驚き、混乱をしているようだ。

ルイズが、その彼に落ち着いてと言っている。

使い魔の儀式を続けていいのか？

彼はこの世界の人間じゃないんだぞ？

ルイズと少年のやり取りを見ながら、俺はここから先の行為を止めるべきか迷っていた。

周りは平民を召還したと驚いている。こんな事は前代未聞だとか、ゼロのルイズだから変なものを召還したとかだ。

そんな周りをお構いなく、ルイズは少年に何かを話している。

いろいろ言っていた少年は一応何かに納得したように頷き、大人しくなった。

ルイズが、彼の前にしゃがんでコントラクト・サーヴァントを唱える。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使

「魔となせ」

そして、ルイズは少年に唇を合わせた。

少年はそのことに驚いて一度、飛びずさる。

「い、いきなり、何をするんだよ！」

「ごめんなさい。こうしないと儀式が終わらなくて」

そう申し訳無さそうに謝るルイズに、少年も強く言えずに黙る。

次の瞬間、少年の左手が急に光りだした。

「なんだよ、これは！」

痛いのか、苦痛に顔をゆがめながら少年は左手を押さえる。

「ちよつとだけ、我慢して。すぐに終わるから」

「ちゃんと、説明しろよ！」

少年は痛みに耐えながらそういう。

どうやら、ルイズは少年に説明をするからと言つ理由で、とりあえず先に進めたようだ。

だが、どうなのだろう。

「ノルン」

「何、マスター？」

「君は彼から何か感じる？」

俺の言葉に、ノルンが目を閉じる。

少しだけそうしてから、驚いたように目を開けた。

「今、風の精霊に聞いてみたんだけど、彼のこと異質だって」

「異質か……。ありがとう」

精霊は人間と違い、彼が少なくともこの世界から来たものじゃないことはわかるようだ。

「異質といえば、マスターも少し人違うみたいね」

この言葉には俺は驚いた。

「わかるのかい？」

「うーん、何となくだけだね？　こう二つ魂があるというのかな？　そんな感じに思えるの」

「そうなんだ」

二つの魂。

本来の俺とアレスのものと言うことか？

「アレス、さつきからどうしたんだい？ 確かに平民が召還されて驚くのはわかるが、様子が変じゃないか」

ギーシュが不思議そうに俺を見て尋ねてきた。

モンモランシーも同じく俺を見てる。

「そうよ。さつきから馬鹿なとか、何かを感じるだとか、どうしたって言うの？」

「ごめん。今はまだ何も言えないよ。ちょっとだけ混乱することがあつてさ」

「平民を召還しちゃったからかしら？」

その声に俺は振り向いた。

そこにはルイズと、さつきの少年がいたのだ。

「平民、平民言うなよ」

少年は不満そうにそう言つてルイズを見る。

ルイズは悪気は無かつたらしく、すまなそうに少年に謝罪をした。

「ごめんなさい。えっと、サイトでいいのよね？」

「ああ。で、どうすんだよ？ これから」

サイトと言われた少年は、俺達を見ながらうさんくさそうに言う。その時、丁度最後の人間が召還し終わつたらしくコルベールが生徒全員にこう言つた。

「それでは、全員召還が終わつたので教室に戻りますぞ」

その声に皆がレビテーションで空に浮びながら学院へと戻つていく。

「な！ 空を飛んでる！」

そんなサイトにギーシュが呆れながら言つた。

「何を驚いているのかね？ 魔法が使える貴族が空を飛ぶのは当たり前だよ。モンモランシー教室に戻ろう」

「ええ。じゃあ、アレスにルイズ。わたし達は先に戻ってるわ」

ギーシュとモンモランシーが空を飛んで帰っていく。

「じゃあ、わたしは彼に説明しないとならないことが多いから授業は一先ず休むわね」

「わかったよ。サイト君って言ったね？」

「ああ、何だよ」

「彼女、ルイズといろいろと話してみてよ。そして二人とも話して、混乱が生じるような僕のところに来て欲しいんだ」

俺の言葉に、サイトはどうして？と言うように首をかしげる。

会ったばかりの人間の事情を知っているような言い方だからだろうか。

ルイズは何か感じる何かがあるのか素直に頷いた。

「さて、それじゃ僕らもとりあえず校舎に戻ろう。サイト君の方は僕のレビテーションで連れて行くよ」

「わかったわ。お願いするわね」

「それじゃ、ノルンも行こう」

俺はサイトと自分にレビテーションを掛けると、三人とノルンで校舎へ戻るのだった。

戻る途中、サイトが空を飛んでいることに興奮して少し賑やかだったのを追記しておく。

その後、俺はルイズ、サイトと別れて残りの授業を受けて放課後になった。

ノルンも授業が終わったなら呼ぶからということでは別れていた。

「ふう、終わったね」

隣のギーシュがそう言って伸びをする。

「ねえ、アレス。ルイズのこと何だけど」

「何かな？」

モンモランシーが俺の机に来て、少し不安そうにしていた。

「あの子の使い魔のこと。彼って平民じゃない？ だからルイズが周りから凄く馬鹿にされて傷ついたりはしないかしら」

「それは確かに心配だね」

そういうのはギーシュだ。

「大丈夫だよ」

「どうして？」

「ルイズは系統魔法が使えないよね？」

俺の言葉に二人は頷いた。

これはもう学院にいるものならメイドですら知っている事実だ。

「僕はルイズと一緒に育ってきたのは知ってるね？ 昔はコモンズペルすらルイズは爆発したんだ」

「コモンズペルも爆発！」

「とんでもないことじゃないか」

ルイズの爆発を俺はただの爆発じゃないことをすでに周りに説明していた。

失敗だとしてもあの威力は脅威だとね。

「それは置いておいて、ともかくルイズはどの系統にも当てはまらない。未知の系統かも知れないと思ったんだ」

「虚無とか、かい？」

ギーシュの質問はなかなか鋭い。

どの系統にも属さない、未知の系統、ならば虚無では？と考え付くのはなかなか無い。

「でも、それって伝説じゃない？ 伝説の系統がそうはいはい出てくるものかしら？」

「僕も、それはわからない。ただ、どの系統にも属さないルイズが召還するんだ。」

どんな生物が召還されるかはわからなかったんだ。

だから、それを不安だとルイズが言ってきたときがあつてね。

で、僕がもしかしたら人間とか、亜人とか、エルフを召還することもありえるかもしれないって言ったんだよ」

「エルフはともかくとして、アレスの言うことは確かにそうね」

モンモランシーが納得したように頷いた。

「しかし、そうなるとルイズは少なくとも確認されている系統には

属さないと言う事になるのかい？」

ギーシュの質問に俺は頷いて見せた。

モンモランシーが何か気が付いたのか青ざめた顔で俺に尋ねた。

「ねえ、アレス。ルイズは大丈夫なの？」

「どういうこと？」

「だって、どの系統にも属さない未知の系統ってことならアカデミーが黙ってないと思うわ」

「そこも大丈夫。昔にルイズの家族と、この事は話してあるんだ。もちろんオールドオスマン学院長もね。で、国には単に系統に目覚めてないだけと言うことにしてあるんだよ」

俺の言葉に、モンモランシーとギーシュは感心したように俺を見た。

「アレス、君は凄いな。先を見越して、先手を打っておくなんて」

「ルイズもとても頭がいいけど、こんな婚約者が相手なら頭もよくなるわね」

「そんな、僕はただ不安な要素を消していったただだよ」

そういう俺に二人とも謙遜だと言った。

「マスター！」

そこで、ノルンがやや怒ったような口調で俺のところへやってきた。

「ノルン。どうしたの？」

「どうしたの？ じゃない！ 授業終わったんでしょ？ いつまでも待たさないでよ！」

「あ、ごめん。ちよっと二人と話してたから。他の使い魔たちと話したりとかはしてなかったの？」

「それはそれ、マスターが呼ぶっていうから待ってたのよ。すぐに来ると思って待ってても来ないんだもん」

ふくれてそっぽを向くノルン。

そんな僕達のやりとりにギーシュとモンモランシーが笑いながら言った。

「まるで、恋人同士のやりとりね」

だとしたら俺は尻に敷かれた恋人ってどこか？

「全くだ。さて、もう行くよ。疑問はだいたい解けたからね」

「そうね。じゃあ、ルイズによろしく」

二人は談笑をしながら、教室を去っていった。

「僕達も行こうか。お腹空いたでしょ？ 厨房に行って食事の準備をしてみよう」

「わかったわ」

俺達も教室を後にするのだった。

夜。

部屋で俺は、秘薬の研究をしていた。

ノルンは、小箱にハンカチなどをつめた寢床を作ってあげてそこで横になっている。

研究している秘薬は、五年前に使った興奮と共に身体能力を上げる秘薬の改良版である。

あまり褒められたものではないが、いわゆる興奮剤のようなものに変えていた。

五年前の正直やり過ぎだった。

下手をすれば命の危険すらあるもの。

だから、今度は危険性が少ないものに変えているのだ。

あとは依存性を低くして、人体への影響を抑える。

こうすることで、戦場でも使える代物になるはずだった。

夕方に伝書鳩が来て、定期連絡を受けたがやはりレコン・キスタの勢いが尋常じゃないらしいのだ。

その勢いに、兵士もやや弱り始めているらしい。

「そろそろ、俺も出るのかな？」

そう考えていると、部屋の戸がノックされた。

「どうぞ」

そついうと入ってきたのはルイズとサイトの二人だった。

二人とも眉間にしわを寄せながら入ってきたのだ。

俺はベッドに座り、椅子は二人に座らせた。

「さて、ここに来たと言うことは話がまとまらないってわけだね？」

俺の言葉に二人は頷いた。

「なあ、あんたはここに来いと言ったけど、あんたなら解決できるのか？」

「アレス、正直に言ってわたしも彼もお互いの言っていることが食い違ってどうにもならないのよ」

それはそうだろうと思った。

サイトは名前からして、恐らく日本人。

そして、ここはハルケギニアだ。

話が纏まることなんてない。

「たぶん、大丈夫だよ。さて、まずはサイト君」

「何だよ？」

「月はもう見たかい？」

「ああ、二つもあるなんて信じられない。少なくとも俺は違う世界へ来てしまったとしか思えないんだ」

「でも、月が一つしかない世界なんて聞いたことないわ」

「だから、さつきから言ってるだろう！」

言い合いになりそうなので、俺が割って入る。

「まあ、まずサイト君の言っている事は本当だよ」

「え？」

「な、何言ってるんだ？ お前、俺の話聞いてないじゃないか？」

「日本、アメリカ、ロシア、イギリス、フランス。二人とも今言った国名に聞き覚えは？」

俺の言葉に二人とも驚いたように言う。

「なんで、知ってるんだ！」

「どうして、アレスが彼と似たようなこと言うのー！」

「まあ、まずは二人とも落ち着いてほしいんだ」

そう言っ二人にとりあえず深呼吸をさせる。

何度か繰り返すと、二人とも落ち着いたようだ。

「僕、いや、俺が何で彼と似たようなことを言っているのか？ それをこれから話すことにする」

口調が変わったことにルイズは驚いたように俺を見た。

サイトもさっきまでの口調と違うことに首をかしげている。

「まずは信じる信じないは別として、前世、過去世でもいい。そう言う言葉があるのを二人は知ってるか？」

「ああ」

「一応、概念はわかるわ」

その言葉に俺は一度頷く。

「単刀直入に言おう。俺は前世の記憶を引き継いだまま、このハルケギニアに生れ落ちた。

前世では彼、サイトと同じ世界に住民だったんだ」

ルイズは俺が何を言っているという表情で俺を見る。

サイトもまた、同じ様だ。

「まずはサイト、君から言おう」

「あ、ああ」

「俺は前の世界ではプログラマーと言う仕事をしていた。ほとんどシステムエンジニアの仕事も兼任していたがな。俺の仕事がどういうものかは、わかるか？」

「あ、ああ。パソコンで動作するソフトウェアの開発、もしくは装置とかの制御とか。で、いいか？」

「その通りだ。そして、俺はその前世で、不幸にも飛行機事故で死んだ」

「死んだ……」

「そう。そして気が付いたらこの世界の赤ん坊だったんだ」

「前世では、日本の東京に住んでいたよ。毎日通勤が大変だった。サイト君の出身は？」

「東京だ」

「なら聞いたことはあるだろう？ 中央線のあの地獄を」

あれは死ぬ。

正直に言つて、あれを毎日体験するのは拷問に近い。通勤だけで恐ろしい程の体力と気力が奪われるのだ。

「うげ、中央線かよ……」

「乗ったことあるみたいだな。あの地獄を知っているんだな？」

「俺、絶対もうあの時間帯に乗りたくないね」

そう言つてうんざりした表情になる。

「で、だ。君から見て俺はどう見える？」

「金髪の外人さんつてどこか？ 今の話聞かなきゃ信じられないところだな」

「そうだろうな。と、ルイズ」

「はい！」

俺の口調が変わつたからだろうか。

ルイズがやや緊張した面持ちで答えた。

「今の会話で理解できることはあつた？」

「いいえ。ほとんど聞いたことの無い単語ばかり。でも、分かつたことが二つあつたわ」

「何？」

「サイトとアレスが会話できるということ。これは共通の知識があるって意味でね？」

もう一つは、もし普通にハルケギニアの人間として生まれて育つたなら絶対に知りえない知識をアレスが持っていること。

つまり、アレスもサイトも嘘をついていないってこと」

ルイズのじつと俺達の会話を聞いていた。

それで考えた。

二人とも言っていることが間違っていないと。

「ご名答。少なくとも、サイトがこの世界の住民じゃないっていうのがわかつたな？」

「え、ええ。ねえ、アレス。話し方なんだけど」

「これが前世での話し方なんだよ。今の俺はアレスじゃない俺で話

してるからな。あとで元に戻すさ」

そう言っただけはサイトを見る。

「で、サイト。君も理解できたかな？ 君はこの世界に呼び出されてしまったということが」

「あ、ああ。で、実は問題があるんだけど、いいか？」

サイトの言葉に頷いてみせる。

「俺を元の世界に戻す魔法がないのはホントなのか？」

「確かにない。俺も小さい頃からこの世界の魔法書を読み漁ったが、少なくとも送り返すような魔法は無い」

「はあ……。本当なのかよ」

サイトは力が抜けたように言う。

確かに、召還したものを送り返す魔法はない。

だが、サモン・サーヴァントで呼び出すことは出来た。

「送り返す魔法はないが、研究次第では送り返す魔法を作り出すことも出来るかもしれない」

サモン・サーヴァントはコモンスペル。

コモンスペルで、世界すら超える魔法が存在するのだ。

サイトを呼び出す事が出来るということは、少なくともコモンスペルで世界すら超越する魔法の開発が可能と言うことだ。

これは、サイトが呼び出されてからずっと考えていた。

実はそのせいで授業の九割は聞いてなかったりする。

「なに！」

「それ、ホント！」

ルイズもサイトも前に乗り出すように聞いてきた。

「ま、待て。あくまで研究次第で、と言うわけだ」

「だとしても帰れるかも知れないってことだろ。え、っと、あなたの名前は？」

そう言えば自己紹介をした覚えがない。

「自己紹介がまだだったな。さて、ついでだから口調も元に戻すことにするよ」

そういつとルイズが安心したように胸をなでおろしている。

自分の知らないアレスだったから戸惑っていたからな

「じゃあ、改めて。僕の名前はアレス。アレス・ジルアス・ド・ヴ
アルガード」

「俺は平賀才人。才人でいい」

「よろしく、サイト君」

「ああ」

そう言って俺達は握手を交わした。

「話を戻すけど、ルイズ。君はコモンスペルがメイジなら誰でも使える簡単な魔法だというのは知っているよね？」

「ええ」

「その簡単な魔法で、世界の壁さえ無視して召還が出来るんだよ？」
「どういうこと？」

「つまり、コモンスペルは世界をも超える魔法が作れるってことさ。
少なくともサモン・サーヴァントは世界すら超えたんだからね？」

「あー！」

ルイズも気が付いたらしい。

この世界は系統魔法ばかり重視しているが、実はメイジにとって重要な魔法であるサモン・サーヴァント、コントラクト・サーヴァントはコモンスペルだ。

そのコモンスペルを、始祖ブリミルが作ったとは言え、少なくともブリミルには世界を超える魔法が作れたのだ。

なら、研究次第で世界を超える魔法が作れないという道理はないのだ。

この場合、悪用されないように気をつける必要はあるが。

「じゃあ、俺は帰れるんだな？」

「確証はないよ？ 戻れないって事もありえる。でも、その場合は僕が力になるよ」

「そうか。ま、帰れるかも知れないならそれでいいや。それに魔法とか面白そうだし」

あ、そうか。サイトは知らないんだな。

「サイト君、この世界の魔法。少なくともメイジといわれている人たちが使う魔法は遺伝によるものなんだ」

「へ？」

「つまり、遺伝子レベルで魔法が使える使えないが決まっているわけ。だからサイト君は使えないんだ」

「そ、そんな……」

そういうとサイトが床に手をついてうなだれる。

そこで、彼の左手のルーンを見た。

「そう言えば、使い魔の契約はしたんだよね。ルイズ、使い魔についでの説明はした？」

「ええ」

そういうとサイトが再び復活する。

「そうだよ！ 使い魔つてのは死ななきゃ解除出来ないって聞いたんだけどどうなんだ！」

「事実だよ」

「何だよ、それ！」

憤るのも無理は無い。

勝手に呼び出して、勝手に使い魔にして、死ぬまでいろって言うほうが無理がある。

ハルケギニアの人間ならともかく異世界から呼び出されれば尚更だ。

「まあ、それも研究してみるよ」

どうして契約出来るのか？

それを探って、根本が理解できればこちらも何とかなるだろう。

「頼むぜ！」

「だけど、これも確証がないってことだけ覚えておいてもらえるかい？」

「あ、ああ」

「それで、その使い魔の力なんだけど」

そう言つて俺は立ち上がつて引き出しからナイフを出す。

メイジがナイフを持つているのはおかしい話だが、まあ杖がないメイジほど無力なものはない。

護身用に持つていて損はないのだ。

「君のルーンだけど、ちよつと見せてもらえる？」

そう言つて、俺はサイトの左手を見た。

刻まれたルーンは、俺の予想通りのもの。

ルイズが虚無だったらの場合のため、伝説の使い魔のルーンは記憶しておいた。

「やっぱりガンダールヴだ」

「がんだー、なんだ？」

「ガンダールヴ。伝説の使い魔のルーンだよ」

「伝説！ 俺つて伝説なのか！」

「あ、ちよつと落ち着いてね？ で、このナイフ。君は使いこなせる？」

そう言つて取り出したナイフをサイトに渡す。

「使いこなせるわけ……。なんだ！ 何か頭に使い方が流れてくるぞ」

サイトはそう言つて戸惑いを隠せないようだ。

それと彼の左手のルーンが光っている。

「やっぱり、ね」

「どういうこと？」

ルイズが尋ねてきた。

「うん。彼は向こうの世界でも平民。しかも平和な国に生まれてるんだ。そんな彼は武器を使いこなせるわけ無いんだよ」

そう。

俺達の世界。とりわけ日本に生まれたなら武器を使って戦うようなことはまずない。

自衛隊にでも居ればいいが、普通に暮らしているならちよつと喧嘩が強いくらいである。

あとは極道の人間でもない限りは。

「そんな彼が、ガンダールヴのように戦いに適しているとは思えないんだ。だからルーンの力で武器が使えるようになるんじゃない？ っと思っただ。あ、サイト君、他に何か変わりはある？」

「体が異様に軽い。なんか今なら何でも出来そうな気がするぜ」

「身体強化も能力にあるってことかな？ サイト君、そのナイフは君にあげるよ。それでいろいろと試してみて」

「ああ」

さて、これでほとんど問題は解決ってとこか？

しかし、ノルンはこんなに騒いでもびくともしないな。

「ね、ねえ。アレス」

「どうしたの？」

「今更になってなんだけど、サイトが伝説の使い魔ガンダールヴってことは……」

そうだった。

サイトが伝説の使い魔と言うことは、そうルイズは。虚無ってことになるね」

その言葉にルイズの表情は暗くなっていた。

第九話（後書き）

結構、難しいものですね。複数人が居る場合の会話って。

今回のルイズは丁寧にサイトに説明をしたり、根気良く話を聞く感じにしています。

過去の暴露ですが、どうも上手く行きませんね。

アレスとしては、サイトがハルケギニアの人間じゃないと思った時点で、ルイズと話をさせてから話すのが理解が早いんじゃないか？と言うことにしたんですが、難しかったですね。

アレスは基本的小節介です。

なので、これからいろいろと暗躍させるつもりです。

コモンスペルで送り返せるって話ですが、そもそもコモンスペルってメイジなら誰でも使える魔法なんですよ。

そう考えると、サモン・サーヴァントとコントラクト・サーヴァントって凄い強力なコモンスペルだと思ったので、送り返せるかと思いました。

第十話（前書き）

注：この小説は、独自設定や独自解釈があるため、真に「ゼロの使い魔のファン」の方は気分を害する可能性があるため、ご遠慮下さい。二次創作である以上、そこには望むものとは違う形の作品があるのをご理解戴いた上で読んでいただけると幸いです。

第十話

ルイズが暗い表情になるのを見て、サイトが不思議そうに尋ねる。

「虚無って何なんだよ？ 伝説だつてのはルイズに聞いたけどさ」

「そのままさ。伝説の系統なんだよ」

「じゃあ、何で暗い顔をするんだ？」

現代の日本に住んでいて、尚且つゲームとかする人間なら分かるだろう。

伝説つての存在となれば自分が特別なように感じると。

憧れに近いものがある。

「現実的に言おうか？ 地球出身だからわかると思うけど、核の怖さは知ってるよね？」

「ああ、あれはとんでもない代物だ」

「じゃあ、それが自分の自由意志で発射ボタンが押せるとしたらどうう？」

「……。そういうことか？」

「虚無つてのは未知の力なんだ。もしかしたら世界をも手に出来るかもしれない。そんな力、自分にあつたら怖いでしょ？」

「ああ」

伝説。

とりわけ、強力な力だつたら尚怖い。

それが下手をする则自分の心一つで左右できるようなものなら。

「あと、もしそんな力があると知られたら、周りが黙ってる？」

「黙らないな」

「そうだよ。ルイズ、君が落ち込んでる理由は、そうだよな？」

「ええ。今までは、かもしれない、程度だったから。」

彼が伝説の使い魔なら確定したのと同じなもの。

これからわたしの周りがどう変わるか考えると怖いわ」

サイトもわかつたらしい。

自分のルーンを見て青ざめていた。

「な、なあ。そうすると俺もやばいってことか？」

「知られればね？　だから、二人ともこの事は誰にも言わないようにね？」

言うなら僕を通して欲しいんだ。

ちゃんとした説明がないとみんなが怖がるからね」

そう言えば、昼間、モンモランシーとギーシュに仄めかしたな。

あとでフォローを入れておこう。

「ルイズ、君は今まで通りにしていればいい。僕がフォローをするから」

俺はルイズの側に行くと、肩に手を当てて言った。

「うん」

「力は正しく使えば、怖いものはないから。怖がらないでね」

ルイズは小さく頷く。

まだ、不安は取れないだろう。

「それと、サイト君」

「なんだ？」

「帰るまでの間でいいから、彼女を支えてあげてくれないか？」

「アレスだったよな？　お前、婚約者なんだろ？　俺が支えて良いのか？」

「僕は婚約者だけど、ヴァルガード家の後取りでもあるんだ。

君は来たばかりだから知らないと思うけど、実は戦争中でね？

僕も戦場に出るかも知れないんだ」

その言葉にサイトが驚いたように言う。

「戦場って、お前、まだ学生じゃないか！」

「ヴァルガード家では將軍だよ。それでも四年前から軍備を整えているんだ」

「んな、馬鹿な。四年前って、アレスは今いくつだよ？」

「十九歳」

「十五歳で軍備を整えてるだって？　おかしいだろ、それ？」

それはそうだろう。

この世界でも十五歳で將軍はありえない。

まあ、それにはからくりがあるわけなんだけど。

「前世の記憶だよ。知識と経験だけならすでに五十年分あるんだ」
その発言にサイトとルイズがあつと声を漏らす。

「じゃあ、なんだ？ 見た目は子供、頭脳は大人つてやつ？」

「名探偵じゃないよ？ まあ、でもそういうこと」

「アレスが大人びてるのつて、そういうことだったのね？」

「そうだよ。ルイズ。想像すると面白いんだけど、君とは七歳から付き合いだよね？」

「ええ」

「僕は前世では二十九歳だった。で、君と会ったのは……」

俺は、三十六歳のおじさんが七歳の女の子と遊んでいたのと、三十九歳で十歳の女の子と婚約したというのを話した。

すると、サイトがロリコンとか言つて笑っていたが。

「まあ、とにかく僕は知識と経験なら豊富なんだ。で、それを披露したからこの歳で將軍なんだよ」

「理屈はわかった」

サイトも納得したようだ。

「そうだ、一つ気になったんだけど左手どうかしてるのか？」

その言葉にルイズが反応を示す。

辛そうな表情だ。あの時のことを思い出しているらしい。

「これは五年前に、今戦地になつてるアルビオンつて国へ情報収集の任務を行つてゐる時の傷だよ。」

襲撃されて交戦している時に左手が貫かれてね、その後使い物にならなくなつて切り落とされたんだ」

そう言つて、俺は左手を見せた。

左手は手首から先が無い。

そして、皮の様なものを巻いている。

実は、これはあの杖代わりの手袋と同じものになつてゐるんだ。

杖が無くて常時、魔法が使えるって訳である。

「なんだよ、それ」

サイトは信じられないという表情で、俺と左手を見る。

「僕に出来ることだったから、任務を引き受けたんだ。これは予期せぬトラブルだったんだよ」

「俺、とんでもない場所に来ちまったんだな」

サイトは不安を隠しきれない。

未知なる場所で、知り合った人間の過去を知った。

それが普通の子供なら耐えられないようなものだ。

「滅多にこんなことはないよ。僕がたまたまこうなっただけさ。交通事故だと思えば良いよ」

実際、戦争になれば腕を切り落とす、足が無くなる、そういったことが日常茶飯事になるが。

「ま、そういうことだからさ。それに使い魔のすることの三つ目は聞いたでしょ？」

「主人を守ることだよな？」

「そう。だから、ルイズのこと頼みたいんだ」

「まあ、どうせ帰るまで何も出来ないんだ。

いいぜ、まあ伝説の力もあるし何とかなるだろ。

あ、そう言えば、俺、アレスに敬語で話したほうがいいのか？

一応、年上だし、前世のまで含めれば大先輩だ」

「ああ、それなら普通にしててよ。僕は気にしないし。

それに、今はアレス・ジルラス・ド・ヴァルガード。十九歳なんだから」

「わかったよ」

「さて、それじゃ、話はここまで。二人とも、もう部屋に戻りなよ。そついうと、サイトは再びあつ、と声を上げる。

「な、なあ。俺ってルイズの部屋に居ていいのか？ 一応、俺男なんだけど？」

ルイズの方をちらりと見ながら俺に尋ねる。

俺は一応、婚約者だから気を遣ってくれるんだろう。

「あ、そうか……。ルイズはどう？」

「わたしは……、変なことしないなら構わないわ。それに仮にも使い魔だし、しっかりと守ってもらわないと」

「と、言うことだから、大丈夫だよ。あ、でも、サイト君」

「なんだ？」

そういうと俺は笑顔で、でも目だけはしっかりとサイトを見て言う。

「ルイズは一応、君を信用して言っているから、裏切っちゃダメだよ？」

「あ、ああ。わかったよ」

サイトは身震いをしながら、そう応えてくれるのだった。

翌日。

俺は学院長室へ向かっていた。

教室ではない。

「マスター、どこ行くの？ 教室はそっちじゃないでしょ？」

肩に乗ってるノルンが尋ねる。

「学院長室」

「学院長室？ 学院長ってここのお偉いさんでしょ？」

「そうだよ」

「昨日の婚約者のこと？」

「聞いてたんだ？」

「あんだけ騒いでたらね。あそこで起きても話に入れないから寝てたけど」

会話をしているうちに学院長室に着く。

部屋をノックする。

少しして、ドアが開いた。

「どちら様？」

そう言って出て来たのは緑色の髪的女性だった。

確か、一年次の終わり頃にオールドオスマンの秘書として雇われた人らしい。

名前は、ロングビルだったか。

「アレス・ジルアス・ド・ヴァルガードです。学院長に大事な話があつて来ました。」

学院長はいますか？」

「いいえ。オールド・オスマン学院長は朝から王都へ公務で出ています」

学院長は公務で王都か。

まあ、急ぐ話じゃないからいいか。

「伝言があれば伝えておきますよ」

「そうですか……。それではこう伝えてください。」

七年前の件、進展がありました。

それで分かるはずですよ」

いくら学院長秘書でも、固有名詞は使えない。

「七年前？　どういうことですか？」

「いえ。オールドオスマンと個人的に相談していることがありました」

「そうですか。伝えておきます」

俺はお辞儀をすると、そのまま学院長室を去った。

学院長に会えないなら、授業に参加するべきだろう。

今度は教室へと向かうことにする。

「マスター、もしかして授業サボるつもりだったの？」

「サボるなんて、人聞きが悪いね。報告しようと思ったただだよ」
虚無の話になれば、授業どころじゃなかっただろうけど。

「へえー アレスがサボリね」

後ろから声が聞こえ、俺は振り向いた。

「ミス・キュルケ」

「だから、いつもミスはいらないって言ってるじゃない？」

そこにいたのはキュルケだった。

足元には昨日、召還したサラマンダーがいる。
サラマンダーは結構、上位の幻獣だったな。

「それが、あなたの使い魔ね。昨日もみたけど可愛い」

「ありがとう。あなたのサラマンダーも、立派じゃない」

「あら、分かる？」

ノルンの言葉に嬉しそうなキュルケ。

確かに、立派である。

「君の使い魔は、なんて言うんだい？」

「フレイムよ」

「あたしは、ノルン。よろしくね、フレイム」

ノルンは肩から離れると、フレイムの前に浮かんで自己紹介をする。

フレイムも嬉しいのか、尻尾の炎の勢いがいい。

そして、なにやら話始めるノルンとフレイム。

「ノルン、これから授業だし僕たちは教室に行くから」

「あ、それじゃ、あたしはフレイムと広場で待ってるわね。いこ、フレイム」

そういつとフレイムはノルンと一緒に広場へと行く。

結構、気が合うようだな。

しかし、フェアリーとサラマンダーの組み合わせか……。

なかなか無い光景だ。

「あ、そうそう、アレス。ルイズの使い魔って人間だったじゃない？ あの子の属性ってなんなのかしらね？」

キュルケが首をかしげながらそう言った。

使い魔の召還で自分の系統が決まるのだ。

「あなたは、フェアリーじゃない？ 風の系統ってアレスが自分で言っただけだ。」

で、わたしはサラマンダーを召還したから火の系統。

タバサはウィンドドラゴンで風。

モンモランシーはカエルで水。

ギーシュはジャイアントモールで土よ？

でも、ルイズは人間。未だに系統魔法も使えないし、どうなってるの？ まさかとは思うけど」

「キュルケ、それ以上は言わないでくれないかな？」

今、虚無と言おうとしていた。

彼女もメイジとしては優秀な部類に入る。

頭もかなりいい方だ。つまり、四大系統に属さないなら、虚無と思っても間違いないじゃない。

「まさか、本当に？」

「確かめようがないでしょ？ それに、未知の系統ってこともありえるんじゃないかな？」

それに、仮にキュルケが言おうとしていた系統として、下手に聞かれたらルイズ達が危ないよ？」

今、周りを見て小声で言う。

キュルケもことの大きさがわかったらしく、頷いて応えた。

「未だ、系統に目覚めず。その程度に考えていてもらえないかな？」

「ええ、いいわ」

そこでちょうど教室へと着く。

「じゃあ、この話は終わりで」

教室に入ると、俺はルイズの隣に座った。

婚約者ということもあって、いつも俺はルイズの傍にいる。

今日は、その隣にサイトが床に座っていた。

「アレス。おはよう」

「おはよう、ルイズ」

「ねえ、どこに行ってたの？ 朝食が終わったらどこか行っちゃったじゃない」

「学院長室にね。例の件で」

「あ……。そうだったの」

ルイズはそういうと少しだけ俯く。

だけど、それはわずかなこと、すぐに顔を上げてやや怒った口調でこういった。

「キユルケと一緒に教室に入ってきたのはどうして？」

どちらかというところがメインのようだ。

「こつちに来るときに一緒になっただけだよ。何も無いから安心して、ね？」

そういうと俺はルイズの顔をそつと撫でた。

ルイズは顔を真っ赤にして、顔をそらす。

「み、みんながいるところよ？　少しは自重して」

「君の機嫌が悪いと授業も受け辛いからね？」

「も、もう」

先生はその直後にやって来て授業が始まるのだった。

事件が起きたのは、俺がルイズと昼食をしている時だった。

サイトは平民の人たちと食事をしていて、一緒ではなかったのだ。俺らが食事を終える頃に、メイドのシエスタがルイズを呼びに来た。

「ルイズ様、大変です！　サイトさんが！」

その叫びに、ルイズはすぐさまシエスタの方に駆け寄る。俺もその後を追った。

「サイトがどうしたの！」

「申し訳ありません。わたしのせいなんです。」

わたしが、少し余所見をした時に貴族の方とぶつかってしまって、それをサイトさんが庇ってくれて。

でも、そしたらサイトさんが生意気だってことでヴェストリの広場に連れて行かれました」

「なんですって！」

ルイズを良く思っていない連中だろうか？

面と向かって言えないから、都合よくシエスタを庇ったサイトをリンチにするつもりだろう。

「相手は何人だい？」

「あまり、良く覚えていませんが、三人くらいだったかと」
メイジ三人で平民を蹴りものにするつもりか？

プライドばかりでかいやつらだ。

「ルイズ、行くよ」

「ええ！」

俺と、ルイズは急いでヴェストリの広場へと向かった。

その光景は、見る人間が見れば異様だっただろう。

歓声などはない。

静かだった。野次馬たちさえ、声を出すのを忘れてその戦いを見ていた。

火、水、風の魔法が入り乱れる中、その者は右に左にと避けている。

もちろん、左右に避けているのはサイトだ。

「心配してきたけど、ルーンの力をうまく使っているじゃないか」
そう、サイトは俺が上げたナイフを持ってルーンの力を引き出していたのだ。

今朝、食事の時にルーンの力を試してみたと言っていた。

「あれが、あのルーンの力なの？」

ルイズは驚いたようにサイトを見ていた。

「くそ！ 何だ、こいつ！」

「当たらない！」

サイトに向けて魔法を使っている生徒は五人いた。

全員、ラインクラスであるようだが、サイトを捉えられずにいる。それだけじゃなく、すでに二人が地面に倒れていたのだ。

「ファイアーボール！」

「エアーニードル！」

二つの魔法が、サイトを挟むように放たれるが、どちらもサイトは当たる前に動いていた。

ファイアーボールが地面に着弾して、燃えがる。

サイトは、一人の生徒に前に一瞬で近づいた。

「うわ！」

その生徒は怯えるように驚く。

サイトはそんなのもお構いなく、鳩尾に拳を叩き入れた。
ナイフは使っていないようである。

「残りはもう、二人だな。まだやるか？」

「僕たちの負けだよ」

その宣言と共に、周りが歓声を上げた。

「凄いぞ！ 平民が五人のメイジ相手に勝ったぞ！」

「癒してのルイズの使い魔らしいぞ！」

その歓声に、駆けつけていたルイズも注目を浴びる。

ルイズは照れながらも、サイトの方に近づいていった。

「アレス」

その声に横を向くと、モンモランシーとギーシュがいた。

「二人とも見てたんだ？」

「ええ。ルイズの使い魔が、五人の生徒と決闘よ？ 最初は止めに入ろうと思ったんだけど……」

「瞬く間に、二人の生徒を倒してしまっただけね。思わず見入ってしまったのだよ」

なるほど、二人とも止めに入ろうとしてくれてたのか。

ルイズは友人に恵まれている。

普通なら、貴族に齒向かった生意気な平民として見られるのが一般だ。

「それにしても、彼の強さはなんなのかね？」

「分からないけど、ルーンの力なのは確かだよ。昨日、僕の部屋に二人が尋ねて来てね。」

そこで、丸腰だと何かと物騒だから、彼に武器を上げたんだ。

その時に、ルーンが光ってね」

「そうなの？ でも、どうしてアレスは武器なんて持ってたの？
メイジは杖があれば十分じゃない？」

モンモランシーが不思議そうに俺を見る。

普通は、メイジが杖以外の武器を持つのはありえないからだ。

「護身用。昔、任務で負傷したときに、杖がないと無力だったのが嫌ってほど思い知らされたからね」

「あ……。左手の」

モンモランシーがバツが悪そうに言うと、ごめんと謝ってくる。俺も別にと行って流した。

二人に以前、左手が無いことにどうしてか尋ねられて話したのだ。その時、ちょっと大げさに話して、二人に同情させてしまったのだ。

「しかし、例えルーンの力とは言え、彼らは上級生だ。全員ラインのメイジ。決闘が始まってから十分と経ってないのに倒してしまうとは……」

ギーシュは土のドットメイジだ。

さっきの五人と戦って、勝てはしなくてもいい勝負が出来る。それをサイトはガンダーヴルの力とはいえ、素手だけで勝ったのだ。

「彼の戦いは賞賛に値するよ」

自分の友人の使い魔の強さに、純粹に感心している。

ルイズとサイトが人ごみを掻き分けて俺の方へとやってきた。

「サイト君、お見事だったよ」

「いや、昨日、お前にナイフをもらってルーンの力を試しておけて言われなかったらまずかった」

「僕はきっかけを与えたに過ぎないよ。それより、庇っただけで決闘かい？」

俺がそういうとサイトは嫌な顔をしながら、こういった。

「あいつら、俺のことはとかくルイズをゼ口とか呼びやがったんだ。

系統魔法の使えない無能だぞ？

しかもアレスをゼ口の腰ぎんちゃく。

俺の事なら我慢できるけどよ、呼び出した責任を感じて、親切にしてくれるルイズと、帰る方法を探してくれるっていうアレスを悪く言われるのが我慢できなかったんだ」

右の拳を握って明らかな怒りを見せる。

サイトは、シエスタを庇っただけじゃない。

俺とルイズのことを考えてくれたんだ。嬉しいことをしてくれる。
「サイト君、ありがとう。僕たちのことで怒ってくれるのは嬉しいよ」

「あ、いや、悔しかったからな」

俺がお礼を言うと、頬をかきながら照れたように言う。

「でも、サイト。お願いだから無理はしないで？ わたしはゼロって言われなれてるし、アレスも。」

怒ってくれたのは嬉しいけど、それで怪我したらダメだからね？
ちゃんと、元にした場所に帰るのに死んじやったら元も子もないわ」

そう言うって俺を一瞬だけチラリと見た。

そう、一度は死に掛けた俺だ。

そのことがあってからはルイズは大切な人を失う怖さを知っている。

サイトが大切かどうかは別にして、自分が呼び出した使い魔が死んだり怪我をするのはやはり嫌なのだ。

「わかったよ」

サイトも心配してもらったのが嬉しいのか素直に頷いた。

さて、そろそろ退散しないと、騒ぎが大きくて堪らない。

「次の授業もあるし、教室に行こう！」
「賛成！」

周りに集まり始めている野次馬をかき分けながら、俺たちは教室へと向かうのだった。

午後の授業をしている時だった。

教室にロングビルが入ってきた。

「ヴァルガードさんはいますか？ 学院長が呼びですよ」
その言葉で教室にいた全生徒が俺を見る。

「アレス、何かしたのか！」

「お前でも悪さはするんだな！」

「アレスがあんた達みたいな野蛮なことするわけないじゃない！」
周りは大騒ぎである。

学院長も何も、授業中に呼ばなくても。

「僕は昔にオールド・オスマン学院長に用事があってね。今朝、伝言を頼んでいたんだよ」

そう言って立ち上がる。

ルイズを見ると、少し硬い顔をしていた。

「サイト君」

「なんだ？」

「ルイズをよろしくね」

「え？ あ、ああ」

俺はそういうと騒ぐ周りを気にせずに、ロングビルに着いて行っただの。

廊下をロングビルと歩いていると、彼女が話しかけてきた。

「確か、あなたは創造の二つ名を持っていましたわよね？」

「え？ ええ。良くご存知で」

「有名ですよ？ ティーンエイジャーで武器の改良と、新魔法の開発すると」

それなりに名は通っているらしい。

あまり自分の二つ名には興味がなかった。

自分が何て言われているか、それを気にしていても仕方が無いと言うのが理由だ。

「好奇心が旺盛なだけです」

「いいいえ。それより、新魔法ですが何でもかなり強力とか？」

ライト・ブラストなら使い手次第で戦艦を二、三隻は落とせる。

それをそのまま話していい気がしないため、俺はこう言った。

「大岩くらいなら容易で打ち抜くくらいには」

その言葉を言うと、ロングビルが驚いたような顔をした。

そして何かを考えるようにして、言う。

「それだと、城壁とか崩せてしまうのでは？」

「まあ、使い手次第ですが、可能でしょう」

「なるほど……。今度私にも魔法を教えて貰えますか？」

「いいですが、なぜです？」

城壁を破ると聞いて、何かを考えるそぶりをしていた。

その上で教えてほしいとなると、どうも怪しい。

「実は、私、落ち貴族なんですの。その時大切な人たちを助ける力があれば、と後悔してまして。

オールド・オスマンに拾われてこうして学院に勤めさせていただいています。

また、大切な人たちが奪われたりしたらと考えると、怖いのです。だから、戦う力がほしいと感じていました」

そこまで言うと、言葉を区切り、俺の目を見てきた。

俺もその目を見つめ返す。

真剣そのものだ。だが、その目には何か黒いものが感じる。

もしかしたら、それが守れなかったと言う後悔の念なのかも知れない。

「二つ、約束してくれるなら教えます」

「約束ですか？」

不思議そうに俺に尋ねてきた。

まさか約束なんて言い出すとは思わなかったのだろう。

「一つ。僕が教える力を決して悪用しないこと。

一つ。守るために力は使ってください。

復讐などには使わないでください。

それが、守れるならお教えします」

その言葉に驚いたように、目を開いていた。

それから何かを考えるように目を閉じて、次に開いたときは強い意志の目をもって俺を見る。

「その約束、守ります」

「分かりました。放課後、僕は図書室か、自室にいます。好きな時に尋ねて来てください」

そういうと、ロングビルは頷いた。

俺はそれを確認すると、同じく頷いて見せる。

その時、ちょうど学院長室に着いたのだった。

学院長室に入ると、そこにコルベールと学院長が何やら話しているところだった。

「オールド・オスマン。ヴァルガードさんをお連れしました」

「おお、ありがとう。ミス・ロングビル。

アレス君、さあ入りたまえ」

そういうと俺は一礼して、学院長室へ入った。

そして、オールド・オスマンの前に立つ。

「オールド・オスマン学院長、二人で話がしたいのですが？」

「そうじゃな。すまんが、コルベール君、ミス・ロングビル。二人とも席を外してくれんかの？」

「？ わかりました」

「オールド・オスマン。それでは失礼します」

ロングビルとコルベールは学院長室から出て行く。

それを確認して、オールド・オスマンは口を開いた。

「ミス・ヴァリエールの件だと思うのじゃが、彼女は虚無。そう報告にしに来たのじゃな？」

俺はその言葉に強く頷くのだった。

第十話（後書き）

第十話、お待たせしました。

ルイズの性格が違ったり、オリジナルキャラが歴史を多少変えているところからどう進ませようか試行錯誤していたら遅くなりました。とりあえず、ガンダールヴのイベントは入れようと思い、やや強引に入れました。

しかし、キャラが多いと動かすのが大変です。

未だ、タバサは説明でしか登場していませんし。

キュルケは少し、大人しいですがたまに、アレスへ誘惑を掛けようとは思っています。

それでは、また次回をお楽しみに。

第十一話（前書き）

注：この小説は、独自設定や独自解釈があるため、真に「ゼロの使い魔のファン」の方は気分を害する可能性があるため、ご遠慮下さい。二次創作である以上、そこには望むものとは違う形の作品があるのをご理解戴いた上で読んでいただけると幸いです。

第十一話

学院長室にはやや、重い空気が漂っていた。

内容が内容だけに、明るい話題と言っわけにはいかない。

「オールド・オスマンは考えるそぶりを見せると、俺にこう言った。実は、昼間の決闘じゃが、ワシらも遠見で見ているの。」

あの動きは、普通の平民ではありえなかった。

「コルベール君が、ミス・ヴァリエールの使い魔がガンダールヴだと言っておったのじゃが、君の見解はどうかね？」

あの決闘は覗かれていたらしい。

「俺達は最初から止めるつもりだったが、どうもオールド・オスマンはサイトの力を見たかったようだ。」

「覗きとは趣味が悪いですよ？」

「ガンダールヴかどうかですが、私もルイズのことですと虚無を調べてきました。」

結論からすれば、ガンダーヴルで間違いありません。

「ルイズが虚無だと報告に来る決定的な証拠でした」

「そうじゃったか。」

しかし、そうなるとあの二人の力は周りに知られるわけにはいかんの」

「その辺は大丈夫です。」

「ルイズは周りに、単に系統に目覚めなかったと言えはいいのです。」

「また、サイト君に関してはルーンの力で十分通るでしょう。」

「事実、ルーンの力なので」

「オールド・オスマンは小さいため息を付きながらこう返した。」

「昔から先手先手を打つ子供だとは思っていたがの、ここまで来ると大したものだ」

「不安要素は出来るだけ消すに限ります」

仕事の時の習慣だが、これは日常生活でさえ役に立つ。

危機管理能力も、普段から不安要素を消す努力をすることで養われるものだ。

「ワシに会いに来たのは、ミス・ヴァリエールとその使い魔に関する待遇についてかの？」

「ええ。今までと変わらず、また王室から何かを聞かれても知らず存じずを通して頂ければいいです。

私がわざわざ言うまでもないと思いますが」

「そうじゃな」

オールド・オスマンは目の前にある本を操りであるページまで捲る。

そこには、ガンダールヴのルーンについて書かれていた。

「コルベール君が探し出したものじゃ。

あやつは切れ者じゃからな。自分で、しかも短時間でここまで来たわい」

「そうですか。

それで、コルベール先生には何と？」

「この事は内密にすると言う事にしておる」

「それはありがたいです。

それと、サイト君についても言うっておかなければならないことがあります」

「何かの？」

「彼は異世界から来た人間です」

その言葉に、オールド・オスマンの表情が険しくなった。

「それは誠か？」

「ええ。彼が持っていた機械がありますが、機械技術の発達したゲルマニアでさえあと数百年は掛かるような技術で作られていました」
ノートパソコンのことだ。

まだ見せてもらっていないが、あれを作るとなるとこの世界ではまだ無理だろう。

半導体技術以前に、真空管を使ったコンピューターの開発さえあ

りえない。

口から出任せだが、大きく間違っではないのは確かのはず。

「なんと！ そんな異世界からガンダールヴとして呼び出されたというのかね！」

驚く、オールド・オスマン。

それから何かを考えると俺に、こう言った。

「破壊の杖と言う名を聞いたことあるかの？」

「噂程度ですが、何でもドラゴンさえ仕留める杖だとか」

「それじゃが、ワシの私物での。」

三十年前にワシがワイバーンに襲われたときに助けしてくれた者が使っておった。

たった一撃でワイバーンを倒してしまつての。

その者がこういつていたのじゃ。

ここはどこだ？ 元の世界に帰りたい。とな」

何だつて？

元の世界に帰りたい？

自分の居る場所が、異世界に居るとわかるのはそれなりの知識がある人間でないとわからない。

「サイト君が、同じ世界の人間である可能性が高い。」

そう仰りたいのですね？」

「うむ。今度、サイト君を連れて、破壊の杖を見せてみてはくれんかの？」

「わかりました。」

それで同じ世界から来たとして返す方法に心当たりはありますか？」

実はこれが一番重要だ。

さっきの話だと、どうもオールド・オスマンを助けた人間は元の世界に帰れたとは思えない。

オールド・オスマンの応えも俺が予想した通りのものだった。

「ないの」

やはり。

この世界はどうも、勝手に呼び出すしか考えが無いらしい。もっとも幻獣などを使い魔にするとすると、送り返すも何もないからな。

「わかりました。最後になりますが、近日中にアカデミーへ出向く予定があります。

なので、その間、二人をお願いしたいのですがよろしいですか？」
「わかった。

ワシで出来る範囲内で二人の助けになろう」

そこまで話すと、俺は頭を下げた。

出来れば、何も起きないのがいいのだが。

学院長室を出たのは夕方だった。

授業は完全に終わっている。

「ノルンを迎えに行くかな？」

確か、朝からずっとフレイムといたはずだ。

授業が終わっているし、キュルケもフレイムと合流していればノルンは俺を待つしかない。

俺は使い魔が待つ広場へと足を向けた。

広場にはまだ、何匹か使い魔がいた。

中には、眠っているものもある。

その中に、ノルンはいた。

「ノルン」

呼ぶと、振り向いて俺を確認した。

それから、ふわふわと浮びながら俺の肩に乗る。

「マスター、待ちくたびれたんだけど？ 何してたの？」

「学院長に会っていたんだ。ごめんね？」

「ああ、朝言っていたわね。帰ってきてたの？」

「そう。呼ばれたから会ってたんだ」

「昨日の件ね？ あたしはあまり関係ないから興味はそんなにない

けど」

ノルンにとってはマスターは俺だし、俺に関わることじゃなければそれ程興味はわかないのだろう。

「そう言えば、フレイムとはどうだった？」

「フレイムって結構優しいのよ。フレイムのマスターに似たのかもね」

その言葉を聞いて、俺は感心した。

フレイムのマスター、キュルケは見た目は派手で、男遊びも凄まじいが、その内面はかなり優しいものがある。

それは、年下の友人タバサと接する時の彼女がそうなのだ。

俺も何度か、彼女達と行動をしたことがあるから分かるが、基本的にタバサの意見を尊重し、引いちゃいけない時はしっかりとタバサに言い聞かせていたのだ。

お姉さんのな役割をキュルケはタバサにしていた。

思いやりの無い人間には到底不可能な行動だ。

「ノルンはいいい友達が出来て良かったね」

「ええ」

俺は友人の内面を、使い魔から見抜いたノルンが誇らしかった。

その後、俺とノルンは夕食を終えて、自室に戻る。

ルイズとサイトにはタイミングが合わなかったのか、見かけなかった。

自室に戻った俺は、まずやるべきことをまとめた。

一・ヴァリエール家への報告。

これは今日、オールド・オスマンに報告したのとやることは大して変わらない。

また、近々アカデミーにエレオノールに会うことにしているため、それで済ませてしまおう。

二・ハルケギニアと地球とのワープ法の確立だ。

これは、そう簡単には出来ない。

まずは瞬間移動的な魔法の研究から始める必要がある。

安請け合いしてしまったが、五年、十年単位で研究が必要だろう。当分は、ある二点への転送魔法の開発に力を入れるつもりだ。

三・使い魔の契約解除法。

これはサイトが地球に帰れることになった場合に必要になるだろう。

まあ、ルーンが刻まれたままでも不都合はないだろうが、やはり主人が近くに居ないのに使い魔でいる必要はないのだ。

「まあ、こんなところか？」

これらを紙に書きながら、俺は言った。

その時、窓に一羽の鷲が止まった。

王宮の連絡用の鷲である。

「俺に、か？」

窓を開けると、鷲が部屋の中に入ってきた。

ノルンが、やや警戒をしながら鷲を見る。

「王宮からの使いだよ」

俺がそう言っていると、ノルンは警戒を解いて鷲に近づく。

「立派ね。あなた」

ノルンがそう言うと、鷲は翼を広げて応える。

なかなか素直な鷲だ。

俺は鷲の脚に括りついた手紙を外す。

それを広げて内容を目に通した。

“ 明後日、王宮にて会議あり。来られたし。マザリーニ ”

そう書かれていた。

マザリーニ枢機卿から直々とはな。

何か悪い知らせなのだろう。

「一応、返信がいるな」

そういうと、俺は簡単に返信の文章を書くと、再び鷲の足に括りつけた。

「頼むよ」

俺の声に鷲が鳴いて応える。

鷲を自分の左手に乗せると、そのまま窓から飛び立たせた。

鷲は優雅に翼を広げて、夜の空に消えていく。

「マスター、何だったの？」

ノルンが、俺の肩に乗って話しかける。

「王宮に呼ばれた。明後日、王宮に会議があるらしい」

何も無ければいいと思っていたが、そうも行かないようだな。

しかし、二年になった途端、急に忙しくなった。

「そう言えば、マスター」

「なんだい？」

「マスターってたまに俺って言うけど、そっちが本当のマスター？」

ああ、そう言えば一人でいたりすると、どうも俺という言い方を
するんだよな。

人に聞かれている可能性が少ないと、どうも素に戻るらしい。

と、考えるところちが本当の俺だな。

「きつとそうだな。俺は、アレスであると同時に、前世の記憶も引き継いでる。昨日、聞いてたんだよな？」

「ええ。でも、変なものね。マスターが俺という時はこう、偉そうな感じ。僕の時優しく導く感じ」

「どっちも俺だからな。」

本来はこう論理的に考えるくせがあるから、このしゃべり方はやや冷たさを感じるんだ」

「確かにね。でも、あたしとして今のマスターの方が素敵」

「ありがとう」

女の子から素敵と言われるのは悪くないな。

「でも、みんなの前だと僕になるんでしょ？」

「そうだな。今の俺はアレス以前の俺。みんなの前ではアレスだからな」

区別する必要はないんだが、一応、俺も貴族の端くれ。

それ相応の態度と言葉使いの方が何かと周りの信用は得やすい。

「マスター」

「なんだ？」

「あたしと居る時は、そのしゃべり方なのは気を許してるから？
あ、でも朝はそうでもなかったわね」

「朝は、誰が聞いているかわからないからな。
ノルンはある意味運命共同体だ。気を許すも何も、俺の一部みたいな感じさ。」

「だから、ノルンは俺の大切なパートナーだ」
ルイズはどちらかと言えば、支えたい子だ。
本当にパートナーと言うなら対等な関係が一番。そういった意味だとノルンがその関係になる。

俺の言葉にノルンが驚いたように見上げる。
そして嬉しそうに言うのだ。

「あたし、マスターに召還されて良かった」
ノルンの言葉は、俺にとっても嬉しい言葉だった。

翌日の昼休み。

俺はルイズの部屋に居た。

サイトは居ない、この時間は厨房で賄いを受けているのだ。
俺とルイズは食堂で簡単な食事を済ませて、ここに来ている。
「それで、話って何かな？」

ルイズがやや思いつめた表情で俺をここに連れてきたのだ。
それが何なのかは聞いても、部屋に来てからと言われていた。
「卒業まで、あと二年よね」

「そうだよ」

「戦争が、激化しているって昨日、お父様から手紙が来たわ」
昨日の驚は王宮からだが、ルイズにも別の形で来ていたのか。
しかも、戦争が激化しているとはつきり。
それで思いつめているのはどうしてだ？

「お父様の軍団も参加することになったの」
ヴァリエール公爵も参戦か。

それは確かに思いつめるのも無理は無い。

「アレス。あなたがヴァルガード家の軍を率いているのは知ってるわ。

お父様は、あなたの家の力も借りることになるって言うてた」

明日、王宮で会議があるのは知ってる。

ほとんど、予想はついてたいが、ルイズの言葉で確定した。

たぶん、俺も前線に出ることになるんだろう。

そう考えていると、突然、俺はルイズに抱きつかれた。

「アレス、戦争に行かないで！」

悲痛な叫びだった。

きつと、昨日ルイズの元に届いたという手紙が、不安にさせるの
だろう。

俺は抱きつくルイズを優しく抱き返す。

「ルイズ、僕を案ずる君の気持ちは嬉しいよ」

「もう、あんな思いはしたくないの。お願い、もし参戦して欲しい
と言われても断って！」

「それは、出来ないよ」

そう言つて、ルイズは俺から離れた。

目には涙が溜まっている。

表情は、明らかに怒っていた。

「どうして！ あなたが行く必要はないわ！」

「僕はヴァルガードの将軍だよ？ 軍をまとめているんだ」

ルイズを蔑ろにするつもりは毛頭ない。

しかし、俺はルイズを守るのと同時に、ヴァルガード家の長男と
しての責任がある。

それを放棄することはさすがに出来ない。

「家の名誉のために、戦いに参加はしないとならないんだ」

「嫌！ 前にも言つたわ。貴族なんかじゃなくてもいいって、わた
しはあなたが居ればいいの！

名誉なんていらない。

わがままも言わない。

ただ、あなたと一緒に居られればそれでいいの！」

「ルイズ……」

俺はこの時、失敗したと思った。

ルイズを導いていたつもりだが、強くなっていたと思っていたが、やはり不安は消えない。

俺へ依存度は高いと感じた。

「アレス。わたしは弱いわ。あなた無しじゃ生きていけない。強くなるって言ったけど、無理よ。」

あなたを失ったら、わたしどうすればいいの？」

「戦争に行かなくても、いつかは死ぬよ？　もしかしたら事故で死ぬかも知れない。」

人を助けて死ぬかも知れないんだ。

ルイズ、昔に言ったよね？　僕に頼っていいけど、僕に依存しちゃダメだった」

「うん。でも、わたしはアレスが居たからこそまで来れたの。」

サイトの事を受け入れられたのだってアレスのおかげよ？

アレスが居なかったら、わたしはサイトを胡散臭い平民と思っていたわ。

サイトの事、面倒見ようと思えたのもアレスが今までわたしに優しくしてくれたから。

わたし、アレスが居たからこそしてられる」

「それは違うよ？

きっかけは僕かも知れない。

僕はルイズに優しくしたし、支えもした。

だけど、それを他人に出来るようにとまではしてないよ？

ルイズが自分で考えて、自分で行動した結果さ。

君は知らぬうちに大きくなってるんだ。

僕が……いつか、いなくなっても大丈夫さ」

最後の言葉はどうか迷った。

別にまだ死ぬと決まったわけじゃない。

それに、俺だってサイトのことやルイズのことを考えたら戦場に行っても死ぬわけには行かないんだ。

もつとも、まだ俺が参戦すると決まったわけじゃないんだが。

でも、丁度いい機会だから、敢えて現実を見るように仕向けた。ルイズは俺の言葉に、泣いていた。

たぶん、こんなに言っても聞かないことに嘆いてることだろう。今は俺がいるから、俺が居なくなつた時が怖いと思う。

だけど、俺が本当に居なくなつた場合、俺はルイズが自分で思っているほど弱くはないと踏んでいた。

依存度は高い。

しばらくは悲しみに老けるだろう。

しかし、ルイズはきつと立ち直ると思っていた。

そうじゃなければ、癒し手のルイズなんて名は生まれなかつただろう。

自分の意思で動くという事を覚えたからこそなのだから。

「どうしても、行くの？」

でも、一つだけ安心させて上げていいかな。

「ルイズ、実は肝心なことを忘れていないかい？」

「え？」

「僕はまだ戦場に出向くと決まったわけじゃないんだけど？」

そう。

まだ俺は正式に言われたわけじゃない。

ヴァリエール公爵は、ルイズに自分が戦場に出向くことになったことと、ヴァルガード家に協力を要請したことくらいしか書かれていないはず。

名指しで俺を連れて行くとは言われていないのだ。

「あ……」

ルイズも気が付いたらしい。

俺も言い方が、まずかつたのは事実だ。

戦場に行くようなことを言っていたから。

「でも、もし依頼されたら行くけどね」

「やっぱり……」

「ごめん。こればかりは、ね。」

それにルイズだけじゃないよ。こういう思いをするのは。

他の貴族だって恋人を残して戦場に行っている人だっているはずさ。

今は僕がいるけど、他の人はすでに寂しい思いをしている人だっている。

だから、僕だけ行かないのはフェアじゃないよ」

今、アルビオンには一万の兵がいる。

この中には恋人を残して来た兵士だっているはずだ。

「僕もルイズを残していくのは辛いよ？ でも、責任を果たさないと行けないときはあるんだ。 分かってくれるね？」

「わかったわ。 だけど、一つだけお願いを聞いてくれる？」

そのお願いを聞いてくれるなら、わたし、もうわがまま言わないわ」

「何かな？」

次の言葉は俺にとって衝撃的だった。

ルイズが思いつめていた理由も、知ることになる。

「わたしを……。 わたしを抱いて下さい。」

アレスが愛していると言う証を、わたしに下さい」

「ル……ルイズ」

俺は以前、言ったことがあった。

結婚するまで、そういうのは無しだよって。

だが、ルイズの顔は真剣そのものだった。

「アレス。 それだけでいいの。 それでわたしは、覚悟を決めるから」

そう言つと、ルイズはマントを外した。

床にマントが落ちるのが、妙に遅く感じる。

それから、ルイズはシャツに手を掛けた。

一つ、一つ。

震える指でシャツのボタンを外していく。

その手に俺の右手をそつと添えた。

「ルイズ。怖いんじゃないの？ こんな事辞めよう。結婚したとしても遅くないんだよ？」

「アレスが居なくなったら、結婚はなくなるわ。

お願い。せめて、こういう形でわたしに覚悟をさせてほしいの。ケジメを付けさせて欲しいの」

潤んだ瞳で、俺の目を射抜く。

覚悟を持っているのが、嫌でも分かった。

俺は、どうしようもない奴だと思う。

女の子に、こうさせるなんて最低だと思った。

だから、俺はルイズの手から自分の手を離して、顔を優しく撫でる。

「だったら、せめて優しくはじめよう」

そう言って、俺はルイズの唇に自分の唇を重ねる。

ルイズもそれに応えて、しばらくの間お互いを感じあった。

午後の授業はサボった。

ルイズの望みをかなえるために、俺も力を尽くした。

今、俺の左腕を枕にルイズが甘えるように寝ている。

サイトの事が気になったのだが、午後の授業が終わるまで自由にしたらしい。

「アレス」

甘えた声で俺を呼ぶルイズ。

その顔は、幸せに満たされた表情だ。

「今、幸せ。アレスと一緒になれて本当に幸せよ」

幸せ、か。

しかし、今ルイズが感じている幸せは、一瞬で崩壊する幸せだ。華やかにして、切なくも散っていく桜の花と同じだ。

ルイズに感じて欲しいのは、なにものにも負けない強さなのに、

だ。

だが、俺もこの時だけはルイズにその華やかな幸せを感じていてもらいたい。

「ルイズが幸せだと、僕も嬉しいな」

右手でルイズの髪を撫でる。

ルイズはそれに身を任せるように目を閉じる。

願わくば、俺が居なくてもルイズが強く生きていけることを。

俺はそれを強く祈らずには居られなかった。

その夜、俺はルイズとサイトに見送られる形で王都トリスタニアへと馬を走らせるのだった。

第十一話（後書き）

まずは、すみません。

ちよつと、ルイズを大胆にしてみました。

こういうのを望んでいない方には申し訳ない限りです。

それではまた次回に。

第十二話（前書き）

注：この小説は、独自設定や独自解釈があるため、真に「ゼロの使い魔のファン」の方は気分を害する可能性があるため、ご遠慮下さい。二次創作である以上、そこには望むものとは違う形の作品があるのをご理解戴いた上で読んでいただけると幸いです。

第十二話

王都トリスタニアに着いたのは夜明け前だった。

夜中のトリスタニアはさすがに眠りついており、明かりがついている場所はほとんど無かった。

ノルンはすぐに戻るという事で、ルイズに預けて、留守番である。ちなみに何かあった場合は、テレパシーのようなもので通信が出来るらしく、それで会話は出来るようだ。

俺はライトの魔法で周囲を照らしながら、馬を歩かせて王城へと向かった。

王城に着くと、そこに魔法衛士隊が城門を守っている。

確か、グリフォン隊、ヒポグリフ隊、マンティコア隊の三部隊がローテーションで守っていたのを思い出す。

俺はその城門に出向くと、馬を下りた。

「こんな夜更けに何奴！」

城門を守っていた二人の兵士が俺に杖を向けてきた。

俺は、マザリー二枢機卿から貰った手紙を取り出すと、それを見せる。

「私は、ヴァルガード領、ヴァルガード侯爵の息子。アレス・ジルアス・ド・ヴァルガード。

マザリー二枢機卿から、本日行われる会議への出席を要請されて参りました」

兵士は俺が見せる手紙を手取る。

短い文章ではあるが、直筆に王宮の印が押されている代物だ。

兵士はそれを見ると、俺に敬礼をする。

「失礼しました。アレス様はマザリー二枢機卿から手厚く出迎えるように申し付けられております。

部屋が一室用意されています。中の者に案内をさせましょう」
「ありがとうございます」

俺は一礼すると、城門の横にある衛兵や魔法衛士隊が使う通用口から中に入った。

部屋まで案内されると、俺は朝起こしに来ることになっているらしく、俺はそのまま寝ることにした。

翌朝、俺は王宮のメイドに起こされた。

顔を洗い、身だしなみを整えると、俺はある部屋に通された。

そこはトリステイン王家の食卓だった。

豪華なテーブルにいくつかの料理が置かれている。

「アレス君、良く来てくれた。まずは朝食としようじゃないか」

そういうのはマザリー二枢機卿だ。

しかも、マリアンヌ皇后、それと昔ルイズが遊んでいたアンリエッタ王女もいる。

紫掛かった綺麗な髪に、まさに国の花と言うに相応しい可憐な容姿だ。

もつとも、微笑んでいればの話で、少々不機嫌なようだ。

「マザリー二枢機卿、これは？」

「何、昼から始まる会議前に、少し話をしておきたくてな。

皇后殿下、アンリエッタ殿下にも出席していただいて話を聞いてもらおうと思っているのだよ」

なるほど、会議前の打ち合わせをここですするというのか。

しかし、これは相当なVIP待遇だと思った。

父さんが侯爵家とは言え、俺自身は何も爵位がない。

だというのにも関わらず、直接呼ばれるとなると、かなりの待遇だろう。

「それでは失礼します」

そういうと俺も席に着いた。

話がしやすいように、全員近くでまとまっている。

「王女様にお会いするのは、お久しぶりですね」

「ええ。ルイズは元気にしてるかしら？」

ややとげがある言われ方である。

それもそのはず、俺は何かと王宮に出入りをして意見を述べる機会がある。

そして、アンリエッタより二つ年上ではあるものの、十代でかなりの実績を収めているのだ。

ただ王女としているアンリエッタとは違う。

そのため、何かとマリアンヌ皇后様が、アンリエッタと俺を比較すると聞いたことがあった。

知り合いでなければ、険悪にはならなかっただろう。

「ルイズは元気ですよ」

「あなたがいつも一緒にいるから、わたくしはあまりルイズとは遊べなくてつまらない幼少を過ごしたわ」

「これ、アンリエッタ」

「すみません」

アンリエッタは謝るも、俺に向ける視線は冷たかった。

「さて、アレス君。君を呼んだのは他でもない。

昼からある会議に出席して話を聞いてもらいたいのだ。戦況が悪化しているのは知っているかな？」

「一応は」

「その対策を立てているのだが、今一つまとまりが無い。

一部の貴族が自分の手柄だけを考えていたり、面倒ごとはごめんと言っやからなどがあってな」

そもそもトリステイン自体が戦争しているわけじゃない。

アルビオンとの軍事同盟を組んでいる以上、他国の支援だ。

それでも、万が一に備えてタルブ周辺は強化をしているが。

他国の戦争において、手柄を立てて名声を上げようというものの、面倒ごとを国内に持ち込みたくないものなどの思惑から話はまとまらないのだろう。

「アレスには、その会議の内容を率直に申し上げてもらいたいので、そういうのはマリアンヌ皇后だ。

つまり、会議の評価をしろと言っののだろうか？

「口は出さなくてもいいのですか？」

「今日は話を聞くだけでよい。ヴァリエール公爵や、君のお父上も来る予定だ。」

君の意見はその二人に聞いてもらい、後日反映しようと思うのだ」
「なるほど」

若者が出しゃばったところで、聞く耳を持たないというわけだ。
それなら聞き手に徹して穴を探していた方がいい。

「そう言うことなら、わかりました」

「そうか。すまん。」

どうも政治が絡むと利害に対して敏感な輩が多くてな」

「仕方ありません。それが貴族です」

その言葉に、全員が苦い顔をするのだった。

食事が終わり、時間が来るまで俺は自由になった。

そのため、王宮のバルコニーで俺はお茶を飲んでいた。

このバルコニーは客人用なため、王宮に用事があるものなら誰でも使用できた。

何人かの貴族が、俺と同じくお茶を飲んでいる。

そこへ、アンリエッタはやって来た。

「隣、よろしくて？」

その言葉に俺は、首を傾げながら答える。

「どうぞ、椅子は空いていますので」

そう言っ て俺は立ち上がり、椅子を引いた。

一応の社交辞令である。

「何ゆえ、私のところへ？ 私は王女様に恨まれています。罵られることや、疎まれることがあっても隣に来られることなど、ないと存じていましたが」

「別にいいですよ。硬い言葉を使わなくても、今はただのアンリエッタです」

意外だった。

昔、まだルイズとアンリエッタが花畑を駆けずり回っていたころ

は、確かに俺は硬い言葉を使つては居なかつた。

ルイズと同等に接していたのだから。

しかし、今は昔とわけが違う。

「申し訳ありません。周りの目がありますゆえ、勘弁願いたいのですが」

「ならば、わたくしの部屋に」

今度こそ、俺は耳を疑つた。

さっきまで俺を睨みつけるような人が、こういう風の吹き回しでアンリエッタの部屋へ行かなければならないんだ？

「失礼ですが、どうして私に？ ご自分の部屋に私を招くということがどういふことが存じてはいないのですか？」

王女が、若い男を部屋に入れる。

それは、もし理由があるにしても褒められる行為ではない。

王族でなく貴族の娘であっても、それは同じだ。

「知っていますよ？ はしたない事くらい。これは王女としての命令です」

命令と来たか。

こうなると断るに断れない。

「分かりました。お供します」

何となく、嫌な予感だけを感じて、俺はアンリエッタの部屋に着いて行つた。

アンリエッタの部屋は小綺麗な部屋だつた。

いわゆる派手好きな貴族とは違い、嫌味の無い気持ちのいい部屋だつた。

俺は部屋に通されると、椅子を勧められる。

その椅子に座りながら俺は聞いた。

「どうして私をここに呼ばれたのですか？」

「もう、人はいないわ。普通に話したらどう？」

砕けたしゃべりに驚きながら、俺は小さいため息と共に話す。

「アンリエッタ。君はどうして僕なんかを呼んだんだい？」

「わたしだって、あなたを招き入れるなんて真似したくなかったわ。わたしからルイズを奪った人だもの」

不機嫌な表情で俺に言う。

しかし、不機嫌な顔でさえ、絵になるのだから大した美貌だ。

「なら、どうして？」

「……。ルイズは、あなたを好きなのよね？」

「ま、まあ。僕とルイズは婚約済みだから。卒業したら正式に結婚することになってるよ」

「あなたは？ あなたはルイズをどう思うの？」

「好き、いや愛していると言うのが正しいね」

彼女の心も守りたいと誓った。

誓った以上、好きだ何て感情的な表現ではない。覚悟を持った愛である。

「そう……」

アンリエッタはやや俯きながら答えた。

何がいいたいのだろうか？

わざわざ俺にこれを言わせるためではないはず。

まるで、俺を例としてあげただけに感じる。

アンリエッタが恋をしているのか？

まさか……。

いや、そんな馬鹿な。

それは無いだろう？

アンリエッタはトリスティンの王女だぞ。

だが、もしそうだとすると相手はまさか……。

「まさかとは思っただけど」

ルイズが以前、アンリエッタの影武者のようなことをしたことがあると聞いたことがある。

その時、アンリエッタは夜の散歩に行っていたと聞いた。

十四歳になっても、アンリエッタはおてんばだったからな。

ラグドリアン湖で開かれたパーティーには俺も出席はしてる。

その時に、アルビオンのウェールズ皇太子が来ていて、決まった時間になると姿を消していたのを思い出していた。

「ウェールズ皇太子と恋仲なのかい？」

俺の言葉に見て分かるほどの同様を見せた。

「な、なぜわかったの！」

おいおい、本当か？

これはかなり不味いんじゃないのか？

同盟を組んでいるにしても表立って公表は出来まい。

「男の感ってことにしておいて？　けど、そうだとすると僕に相談するのは筋違いじゃないか？」

僕は君に恨まれてるんだ。

この場で殺されても文句が言えない立場だしね。

そんな嫌味嫌う人間に、どうして相談なんて？」

「別にあなたをそこまで嫌った覚えはないわ。

確かにルイズの事は、わたしには寂しいことだったけど。

あなたくらいですもの、はっきりと不快だったら不快だと言える人は。

気を許してるのよ。あなたには」

そして、少しはわたしの事も見てくれればいいのに、最後はそう小さく言って顔を赤らめた。

好意をもたれていたのだろうか？

ずっと、嫌われていたと思っていたのだが。

「その割には僕に結構冷たかったんだけど？」

「当たり前じゃない。表立って気を許せる人はあなたくらいよ？

ちよつとした嫉妬と、ストレス解消に付き合ってもらってもいいじゃない？」

冗談じゃない。

そんな理由で、俺は王宮で顔を合わすたびに嫌味を言われ続けていたのか？

「まあ、それはもういいけど。で、やっぱり三年前に密会をしてた

のかい？」

「そ、そこまで知ってるの？」

頬を赤らめて、悪戯がばれたような顔をする。

ああ、この子はやっぱり恋する少女なんだなと思った。

王族に生まれさえしなければ、もう少し自由な恋愛が楽しめただろうに。

「勘違いしないで貰いたいんだけど、君とウェールズ皇太子がそういう関係だと思ったのはさっきだからね？」

ただ、あの時いつも決まった時間にいなくなるウェールズ皇太子に、同じ時間帯にルイズが君の影武者なんてすると考えると、考えられることはそう多くないさ」

「たったそれだけで……？ あなたの頭の速さにはいつも舌を巻くわ」

「慣れだよ。で、ウェールズ皇太子と何かあったのかい？」

「誰にも言わないで頂戴？ ウェールズ様に、愛を誓ってほしいと三年前に言って誓ってもらえなかったの。」

それでも、いつか人の目を憚らず一緒に湖を歩けるようになると誓ってくれたわ。

最近、アルビオンとの会議が多くなって、つい先日久しぶりにお会いしたのよ。

その場では会話は出来なかったけど、また夜に密会したわ。

変わらず、いいえ、昔よりも凛々しくなったウェールズ様にわたしは言ったの。

前線に立たないでほしい、と。

ウェールズ様さえ良ければトリスティンで兵を増やすから、その指揮を後方で取って欲しい、と。

でも、ウェールズ様は首を立てには振ってくれなかったわ。

前線で戦う義務があるって言って。

アレス、あなたはルイズに戦わないでって言われたらどうするの？」

類は友を呼ぶとは言う。

ルイズの友人でもあるアンリエッタも、またルイズと同じ悩みを持つていたのだろう。

本当なら俺に相談することじゃないと思う。

ルイズが適任のはずなのだが。

奇しくも、俺がすでに答えを出している状態でこの質問をされるとは。

「僕は、ルイズに強くなってと言うよ。

戦いに出ないわけには行かないからね。

すでに、国の命令で多くの貴族が傭兵が、大切な人を残して戦っているんだ。

僕だけ、ルイズと一緒にいたからって拒否なんて出来ないよ？

それに、戦いに出れば死ぬ事だつてある。

知ってるでしょ？ 僕が死にかけたことがあるのは？

だからルイズには強くなって、言うしかないんだ。

僕が死んで、嘆き悲しんで、後を追われたら悲しいから。

それに、幸せは心の強さで決まると思うんだ。

強くなつてさえくれれば、僕を思い出して生きて行ってくれるはずだからね」

アンリエッタの白いドレスにしわが出来る。

服を握っていた。

「殿方はいいわね。そういうことを言つて。

残される人はどうするの？

ルイズだつて、あなたじゃないと生きていけないかも知れないわ。

それでも戦いに行くの？」

「行くよ。ルイズには乗り越えてもらうしかないからね」

「そう……。やっぱり殿方は勝手ね。そうやって自分の意志を通すのは殿方の特権だわ」

ふて腐れるように言うアンリエッタ。

アンリエッタの求めていた答えとは、結局正反対だったんだろう。

だから、俺はアンリエッタにこういった。

無責任かも知れないけど、今のアンリエッタには一番いいだろう。
「だったら、アンリエッタ。君も前線に出たらどうだい？」

君の水の魔法は優秀だ。

ウェールズ皇太子のサポートにいたらいいんじゃないかい？」

「え？　そ、そんなこと周りが許さないに決まってるわ」

「意志を通すのは、人の特権だよ。」

君が強く望めばいい。

そして、向こうの王子が戦っているのに、どうして王女が城でのんきに過ごさなければならぬ理屈があるのんだって言えばいいんじゃない？」

「アレス、あなた……」

「それに、そうなればウェールズ皇太子も前線から引かざるを得ないかもしれないよ？」

自分が愛する人が、前線に出てくる。

しかもそれが、自分が前線から引かないせいだとすれば考えざるを得ないんじゃないのかな？」

「出来るの？　そんなこと？」

「出来るか、どうかはわからない。でも、やってみる価値はあるんじゃないかな？」

俺は挑戦的な笑みを浮かべてアンリエッタを見た。

どうだ？

やるか？

それとも怖いか？

そう言った感情をぶつけてみた。

「いいわ。それは面白いわね。わたし、やってみるわ。」

ふふふ、アレスありがとう。

やっぱり、あなたはわたし達のいいお兄さんね？」

その笑顔は俺が知ってるおてんば娘の笑顔だった。

アンリエッタと話をしているうちに、会議の時間がやって来た。俺は、アンリエッタと共に会議室へと向かう。

この会議室は、かなり大きかった。

主要な貴族がほとんど一同に介している。

俺は後ろの方に、アンリエッタはマザリー二枢機卿とマリアンヌ皇后殿下の隣に座った。

そして会議は始まる。

内容は、二つだ。

現状の情勢と、今後の対応の二つ。

現状は正直芳しくない。

ニューカッスル城を本陣に、砦をいくつか設けて敵の動きを止めている。

しかし、徐々に砦が落とされていて、現在ニューカッスル城の三十キロまで攻められていた。

今後の対応として、挙げられていたのは総力戦とタルブに戦力集中させた決戦が上げられていた。

総力戦だと、国内の兵力の大半を投入することになり、周辺国への守備が薄くなることがデメリットだ。

また、タルブに戦力を集中させるにも相手は空から来る以上、制空権を確保する必要があるアルビオンの艦隊に勝つには船の性能が弱かった。

戦略の変更も声上がるも、良い案が浮ばない。

そのうち、論点がずれて行き、そもそも同盟組んでメリットがあったのかなどの話しまで上がってきた。

俺は、すでに彼らの話は聞いていなかった。

話していた内容から、現在出せる戦力とアルビオンの戦力を考えて出来ることを考えてみる。

現在、砦が複数存在するために戦力は分散されて守りにも攻めるにも人が足りないことがわかった。

総戦力は、アルビオン、トリステイン連合軍が二万。

対してレコン・キスタは四万だった。

倍近い戦力差、普通なら負けてしまうのだが、当初行っていた戦力を集中した先方に変えればまだ勝機はあると考えた。

守る砦の数を減らして、尚且つ主要な砦は死守する。

後は情報を上手く使って相手を混乱させられれば、少しは押し返せるはず。

「いい加減にしないさい！」

そこで俺の思考は止まった。

アンリエッタが怒鳴ったからだ。

普段、怒鳴ることがないアンリエッタが怒鳴ったことで他の貴族は驚いて押し黙った。

「今は、今後の対応を考えているのです！ それを同盟をするべきではなかったただの、今からでも全軍を撤退させるだの、恥ずかしくないんですか！」

「しかし、姫様」

一人の貴族が声を上げる。

「黙りなさい！」

その一喝で会議の場は静かになった。

「戦場では今も多くの命が失われているのです！ アルビオンに至っては皇太子自らが指揮を執り現場の士気を上げていると聞きます。それなのに、ここにいる貴方達は何ですか！

自分の事ばかりで、なすりつけ。派兵でも少しでも名誉を我が物にしようと言う画策ばかりではありませんか！

決まらないのなら、わたくしが軍を率いて前線に出ます」

奇しくも、俺が進言したことをここでアンリエッタは宣言した。

当然、それは無茶だと、戦場に出た事がないのに指揮が取れないだの声上がる。

しかし、それを治めたのはマザリー二枢機卿だった。

「指揮が執れずとも、周りの将軍がサポートすれば良い事ではありませんか。」

確かに、今の現状では士気も盛り下がり、戦いに勢いがないのも確か。

すでに疲れが溜まっている兵士も多い。

そこに姫様が出陣して前線に赴けば、それだけで士気が上がるもの。

姫様の治療魔法は非常に優秀なのは皆も知つての通り。

姫様自らが治療に回ったりするだけで、兵に力が沸くでしょう。

姫様のお命に関わる事が無いように、十分に配慮すれば場合によつては戦況も変わるのではありませんか」

俺は感心した。

アドバイスはウェールズ皇太子を引かせるためのものだったが、アンリエッタは話が進まないこの現状を打破しようと自らが立ち上がった。

どんなプロジェクトでもそうだが、リーダーに勢いがあるチームはどんな困難もやり遂げてしまう。

そして、そのサポート役も優秀なら問題はないだろう。

「それならば、サポートは私達が付きましよう」

そう言つて立ち上がったのはヴァリエール公爵と父さんだった。

「ヴァリエール公爵、ヴァルガード侯爵」

「ならば、私も姫様のサポートにつきますぞ！」

「私もだ！」

そう言つて一人、また一人と立ち上がっていく。

リーダーの覚悟が、周りのものに決意をさせていく。

この人になら付いていくぞと。

俺のアドバイスが、意外な方向で動いた。

アンリエッタが、俺を見つけると笑顔を向けてきた。その笑顔は、決意みなぎる力強さに溢れていた。

「細かい作戦は、ヴァリエール公爵、ヴァルガード侯爵を交えて行います。」

会議は終了。

これにて解散」

こうして会議は終わるのだった。

第十二話（後書き）

すみません。独自路線を突っ走ります。

これ以降のイベントもどうなるかわかりません。

独自路線が嫌いな方は、申し訳ありません。

この作品、最初からルイズを支えてくれる人がいたらというIFもなかったで、歴史もだいぶ変わります。

第二部の方針が決まりまして、アルビオンへ舞台を移して戦争になります。

ただ、戦争の早期解決を目指しますので、戦争背景は長引かないとは思いますが。

今回、アンリエッタ初登場です。

実は第一部でも出そうか考えていましたが、敢えてスルーしました。アレスとはルイズを通じての友人と言うことにしています。

かなり碎けた話し方が出来るので、アンリエッタもだいぶ心を許していると思ってください。

何せ、面と向かって嫌味など言っているのです。

本編だとだいぶ先になる、アンリエッタ前線イベントを強制的に発動してみました。

また、そのためウェールズ皇太子には前線で指揮を執っていることに。

トリステインとアルビオンの同盟を組ませると、どうしても戦争が激化しざるを得なくなりました。

いろいろな意味で、真のゼロの使い魔ファンの方には申し訳ありません。

第十三話（前書き）

この小説は「ゼロの使い魔」の二次創作になります。

また、独自解釈、独自設定などあり、表現も作者の都合で書いています。

そのため、真に「ゼロの使い魔」のファンと言う方には不快な思いをさせる可能性があるのをご了承ください。

また、読んでいる途中、感情的になったり、気分が悪くなった場合はすぐに閲覧するのを止めて気分を落ち着かせることをお勧めします。

第十三話

会議後、俺は父さん、ヴァリエール公爵、マザリーニ枢機卿、マリアンヌ皇后、アンリエッタ王女で話し合いが行われた。

本当は、俺が会議の意見をここで述べる予定だったが、思わぬアンリエッタの声にその必要は無くなった。

「しかし、驚きましたな。まさか姫殿下が、自ら前線に赴くと言うとは」

「あ、あれはわたくしも勢いで言ってしまったものです。

ただ、あのままでは収集が付かないのも確かでしたので」

「とは言え、勇敢になられましたな」

それには俺も同感だった。

さっきまで相談を受けていたのは、アンリエッタと言う一人の少女だった。

しかし、今はアンリエッタ王女と言う責務を背負っている。

その責務を全うしようと言う姿は勇敢以外何者でもない。

一見すると無謀だが、要は周りがしっかりとサポートすれば言いだけの事だった。

「アレス君、君は会議の間何かを考えていたようだが、何かいい案があるかね？」

「ええ。現在の戦力で巻き返しを図る策を練っていました」

「話してみなさい」

「はい」

俺はさっき、会議で考えていたことを述べた。

現在の戦力が分散していることに敗退の原因があること。

戦力を集中させることによって勢いで敵を退けること。

守る皆も主要な箇所のみ。

攻め入るときは、敵の捕虜からレコン・キスタの傭兵に成りすまして情報を下から混乱させること。

情報の混乱は例を挙げると次のような感じだ。

実際に攻めたい場所は敵戦力が集中しているため、落とすのは難しい。

そのため、わざとその場所に連合軍が全軍を持って落としに来るという偽りの情報を流し、手薄になる拠点を一気に潰すのだ。

向こうはさすがに全軍で攻めてくるという情報に偽りがなければ確かめるだろう。

そこをゴーレムを使った陽動などで数をごまかし、敵に全軍で攻めてくるというような錯覚を起こさせる。

手薄になつていいるとは言え、他の拠点が攻められているという情報が入ればまた混乱が生じる。

あとは、バリエーションを増やせば攻め方はいくつも出来るはずだ。

ちなみに、情報戦はいかに偽情報を信じさせるかが勝負になる。

「アレス、お前は何という考えを。私はそのような戦法を教えた覚えはないぞ」

「いえ、どうしたらレコン・キスタを落とせるかと考えてみた結果です」

「しかし、そうとは言え、なかなか有効な手段だ」

あとは細かい戦力分析が必要になる。

こちらの残存戦力で、どれだけ戦えるか。

武器も改良する必要があるな、そうそう。

「私が開発した手投げ弾ですが、あれを改良して使えないでしょうか？」

「改良？」

「はい、今は約五秒後に爆発するよう調整してますが、それを一秒足らずで爆発するように改良します」

「危険ではないか」

そのまま使えば危険すぎる。

だが、別の用途に使えばそうでもない。

「点火用の穴は、人間があけるのではなく自動で行いましょう。棒つきの蓋を用意して……」

そうして、俺は話した。

手投げ弾を改良した、爆弾の発想を。

この世界でも熱気球の考えは使えるのだ。

手投げ弾を数個つなげた小さい熱気球を用意し、時間にして一時間くらいで油が切れて落ちるようにする。

当然、括りつけた手投げ弾は落下して、地面や建物に落ちるだろう。

微量な風石でも使って、進む方向を決めてあげればいい。

これで無人での空からの奇襲が可能になる。

空戦は向こうの方が有利だが、こんな方法での攻撃は考え付かないはず。

そうすれば虚を突いての大規模攻撃が出来る。

もしかすると、攻め入る必要も無いかも知れない。

成功すればの話だが。

「恐ろしい考えだ。だが、その方法ならレコン・キスタを一掃することも出来る」

「うむ、確かにだ。マザリーニ枢機卿いかがですか？」

「私もその方法で賛成ですな。さすがに、卑怯と言われそうですがまあ何とかなるでしょう」

それからは細かい話が、マザリーニ枢機卿、ヴァリエール公爵、父さんの三人で行われることになった。

一応、マリアンヌ皇后は口出しはしないものの状況を知っておく必要があるといい、話に参加する。

俺とアンリエッタはもう良いという事で退室になった。

俺はアンリエッタと共に、王族と王族が招待した客人だけが通されるバルコニーに来ていた。

時間はだいぶ過ぎており、夜だ。

バルコニーからはいくつかの明かりが灯った建物が見える。

「あなたって軍師に向いているのかも知れないわ」

「軍師、ね」

言われて見ればそうかもしれない。

何だかんだ言いながらも、軍事に首を突っ込んで、意見を言う。武器の開発、改良をしてるし。

好きなのかも知れない。こういったことが。

「あの子は、あなたに戦いは似合わないって言ってたけど。わたくしは違うと思うわ」

ルイズか。

俺はどうしたいんだろうな。

ルイズに、言い聞かせるように死を語り、強く成れという。

俺はルイズを愛している。それは相手の幸せを願うからこそ。だが、俺はルイズを果たして幸せに出来るのだろうか。

「アレス？ どうしたのかしら？ 暗い顔なんかして」

「いや、なんでもないよ。ちょっと、考え事を、ね」

「そうなの？ そう言えば、ルイズは学院ではどうしてるのかしら？」

「ルイズは……」

魔法学院での話をアンリエッタは羨ましそうに聞いていた。

そして、今更ながら気が付く。

俺がこの子を戦地に送るようなものだ。

そして、ルイズを悲しませることになるかも知れないことをぼんやりと考えていた。

アンリエッタと別れて、俺は用意されている部屋に戻る。

学院には明日、戻ることにしていた。

朝から出て、着くのは二日後だ。

「アレス、起きているか」

部屋のドアが叩かれた。父さんが来たようだ。

「起きてます。どうぞ」

そついうと父さんは、部屋に入ってきた。

俺は椅子を用意して、向かい合う形で座る。

「父上、どうされたのですか？」

「アレス、お前を姫様の部隊に推薦したいのだが、いいか？」

「私をですか？ 姫様の部隊に？」

「ああ。姫様が率いる部隊はアンリエッタ連隊と名づけられる。

その第一大隊の隊長をお前に任したい。

部隊はお前が手塩を掛けて育てたものを連れて行け」

願ったり叶ったりというところか。

俺がアンリエッタを戦場に送るようなものだ。断る理由はない。

「わかりました。私の力を存分に発揮いたしましょう」

「いい返事だ。

そして、ヴァエリール殿の娘のルイズ嬢だが、ヴァリエール殿の推薦でお前専属の衛生兵として付けたいらしい」

「ルイズをですか！」

これには驚いた。

俺が戦場に出ることはあっても、ルイズを連れて行くことになるとは思わなかったのだ。

いや、待て。

それだけじゃない。ルイズが来るとなればサイトもじゃないか。

彼はこの世界の人間じゃない。

ましては、あのルーンの力もある。

戦場に出すのは、その力をアピールすることになり、とても危険じゃないか？

「何でも、ルイズ嬢からヴァリエール殿に手紙が来たらしくてな。

アレスが戦場に出るなら自分も行くと、言っているらしい。

しかも並々ならぬ気迫が手紙から感じるらしく、下手にそれを退けるわけにも行かないと判断したと聞いた。

アレス、お前はなかなか愛されているじゃないか」

そついうと父さんは俺の肩に手を置いた。

「父としても、お前を誇りに思うぞ。

この戦場で手柄を上げて、お前の力も示してやれ」

「はい」

俺は返事をするのが精一杯だった。

だが、その返事でも十分なのか、父さんは立ち上がりドアに手を掛けた。

「出発は七日後。一度学院に戻って仕度をし、家に戻ってきなさい」
「わかりました」

そういうと父さんは部屋から出て行くのだった。

俺は、この事態に戸惑っていた。

ルイズを戦場に、連れて行っていいものか。

だが、あのヴァリエール公爵をも説得してしまう手紙の内容が気になる。

内容如何によつては俺の説得でも無理だろう。

そうなると、一度、ルイズと話してみないとわからない。

どんな覚悟を持って、言ったのだろうか。

俺はベッドに寝ると、思考をめぐらせながら眠りへと付くのだった。

学院に戻ったのは二日後の朝だった。

俺は、自室へと戻る。

「マスター、お帰り。会議はどうだったの？」

ノルンが明るく、出迎えてくれた。

何かほっとする。

「ああ、俺も戦場に出向くことになった」

「ルイズもでしょ？」

悪戯っぽく笑うノルン。

それに、俺は違和感を覚えた。

「何か知ってるのか？」

「だって、落ち込むルイズを励ましてたのあたしと、サイトだもん。

全く、マスターは女心がわかってないのね。

女はね、どんな時でも好きな人と一緒に居たいの。そこが戦場で
もね？

本当はマスターが行かないのが一番いいんだけど、そうは行かない
もの。

まあ、それを後押ししたのはあたしとサイトだけど」

「何で、そんなことを」

「サイトがね、そんなに好きならアレスがどこに行っても付いてい
くしかないって言うんだもの。あたしも驚いたわ。

でも、それ聞いて、あたしもその通りだと思ったのよ。

だから、二人して押したって訳」

なんてこった。

俺がアンリエッタに進言した事と、ほぼ同じ事をサイトが言っ
ていたのか。

しかし、これを責める権利は俺には無いな。

だが、待てよ？

「サイトは自分が戦場に出ることになるってことは考えてないのか
？」

「その辺だけど、これからアレスに世話になるから貸しくらい作っ
ておこうってことになってね」

サイト、君はなかなか図太いな。

現代日本人の考え方なら、本来は戦場に行こうとは思わないはず
だが。

「アンリエッタといい、ルイズといい。どうもトリスティンの女の
恋の力は凄いな」

「マスター、女の心を舐めたらダメよ？

きっかけがあれば、女はこの人って決めた人にとことん付いてい
くんだから」

決められたのか、俺は。

「それに、もしアレスが死ぬような事があっても、ルイズが自分で

看取れる方がいいって」

「そうか」

そこまで覚悟があるのか。

ルイズはやっぱり強い。

俺なんかには勿体無いと、本当に思う。

そんな子に想われているなんてな。

「ルイズに会ってきたら？」

「そうだな」

「じゃあ、いつてらしやい」

「ノルンは来ないのか？」

「邪魔したくないから、ね？」

そう言ってウィンクをするノルン。

俺は苦笑しながら、ノルンの気遣いに感謝して部屋を出るのだった。

ルイズの部屋に行く途中、サイトにあった。

「よう、アレス。戻ってきたんだな」

「やあ、サイト君。話は聞いたよ」

「そうか。ルイズのところに行くのか？」

「そうだよ」

「その前にちょっと付き合ってくれよ」

「いいよ」

そついうと俺達は、広場に来た。

まだ朝早いためか人はいない、その一角にあるベンチに並んで座った。

「お前、ルイズをどう思ってるんだ？」

「僕は、彼女を愛しているよ」

「そうか。じゃあ、何で側にいてやろうとしない？ どうして、支えてやろうとしないんだ？」

サイトはそついうと俺を睨むように見ていた。

「ヴァルガード家の長男として責任だよ」

「だから、何だってんだよ！ ルイズ、あいつ泣いてたんだぞ？

ケジメはつけなきゃって、わがママを聞いてもらったから困らせられない。

でも、本当は居て欲しいって！」

サイトは俺の胸倉を掴んで言う。

そうか、ルイズと同じ部屋にいるサイトは、ルイズから話を聞いたのか。

まだ出会って十日も経っていないのに、いい関係をお互い築いているのかもしれない。

「強くなきゃならないんだよ。ルイズは」

「それと、一緒にいないのは関係ないだろう！

だいたい、ずっと一緒だったらいいじゃないか。

それなのに、どうして突き放すようなやり方をするんだ！」

「一緒に居ても、僕がいつ死ぬかは分からない。

ルイズにはそれを超えられる強さを身につけて欲しいんだ」

「どうして、死ぬことばかり考えているんだよ！」

「話したよね？ 僕が前世の記憶を持っているって。

詳しくは話してないけど、飛行機事故だったんだよ。

大きいプロジェクトを抱えたまま、僕は飛行機事故で死んだ。

平和な暮らしをしていたって、何がきっかけで突然死ぬのかわからないんだ」

「そ、そうだけだよ」

俺が前世で事故死していることは話している。

だが、それが飛行機事故だとすると、もう自分の力じゃどうにもならない。

「サイト君、君はルイズを想ってくれているんだね」

「親切にしてくれるからな。

寝床だって、初日こそ床で毛布だけだったけど、翌日から平民が使う布団を用意してくれた。

分からないことは何でも聞いてと言ってくれた。

俺からしても優しい、いい子だ。

だから、そんな子に悲しい思いをさせたくないんだよ」

「そうか、ありがとう」

ルイズ、君は人から愛される子かもしれないな。

俺が導いて来たが、もう俺の手は必要ないように思える。

「お礼はいいから、ルイズをちゃんと見てやれよ」

「そうだね。それじゃ、ちゃんとルイズに会って話さないんだ」

そう言っただけは立ち上がる。

「そうだ。一つ聞いておきたいんだけど、サイト君。戦場に君も出ることになるかも知れないことにはどう考えているんだい？」

ノルンからは聞いている。

しかし、本人の口からちゃんと覚悟を聞いておきたい。

「正直に言えば、怖い。だけど、ルイズを奮い立たせちまったのは他でもない俺だ。

あんまり後先考えずにものを言っちゃまうのがいけないんだけどさ、それでもあの時ルイズを励ますには、ああ言うしかなかった。

言っただけには、ルイズがアレスに着いて行くと言うなら、俺も行かないとな。

じゃないと、無責任だし。何より、ルイズだけ行かせて俺だけ安全な場所ってのは情けないじゃないか。

そんなのだけは嫌なんだ。言うだけ言っただけ、後知りませんってのはさ。

まあ、ルイズに凄く親切にしてもらってるから、その恩もあるかな？

アレスにも貸しを作っておきたいし」

サイトは、十七歳の普通の高校生だと聞いた。

けど、サイトのような若者を見ると、まだまだ向こうも捨てたものじゃないと感じる。

「そうか、君の思いを聞けてよかったよ。借りは、君を元の世界に

戻す形で返すよ」

ここでの体験が、きつといい意味で彼を大きくするだろう。

俺は元の世界に戻れないが、サイト君は戻る権利がある。

彼を返すその時まで、絶対に死ねないな。

サイトが命の危険を押してまで、ルイズに付き合ってくれるんだ。

俺も命がけで返さないとな。

「臭いことだつて笑わないのか？」

サイトが真顔で聞いてくる。

それは向こうの世界の人間なら笑うようなことだったからだろう。

「向こうの世界だったら笑う人もいるだろうね。ここはハルケギニアだよ？」

君のその思いはトリステインの心ある貴族にも通じる。

サイト君が友人で、僕も誇りに思えるよ」

「何だよ、何かくすぐつたいじゃないか」

「それだけの決意があつたつてことさ。それじゃ、僕はルイズに会いに行くよ」

「ああ」

その時、ちょうど洗濯物を持ったシエスタが通りかかった。

結構な量の洗濯物である。

俺とサイトを見つけると、挨拶をしてきた。

「アレス様、それにサイトさん。おはようございます」

「おはよう。相変わらず精が出るね」

「あ、はい！ あ、サイトさん、また洗濯を手伝ってもらえます？」

「ああ、いいよ。それじゃ、アレス。ルイズを泣かしちゃダメだぞ」

そう言いながら、サイトはシエスタと共に洗い場へと向かっていく。

何だ、いつの間にか仲良くなっているんだな。

こうしてみると、なかなか似合いの二人じゃないか。

「さて、行くか」

二人を背に、俺はルイズの部屋へ向かった。

ルイズの部屋の前に着いて、俺はドアをノックする。

「僕だよ、アレスだ」

「アレス？ 入って」

ドアを開けて中に入る。

ルイズはベッドの上に座っていて、やや赤い顔をしていた。入ってきた俺に、隣に座るようにと自分の横を勧めてきた。

「あ、あの、ごめんなさい。あの日に、ケジメをつけるって言ったのに」

「いいよ。驚いたけどね。」

でも、良く公爵様を説得したと思うよ。しかも手紙で」

「ふふふ、まさか本当に許可が出るなんて思わなかったのよ？」
嬉しそうなルイズ。

本当に一体、どうやって説得したのやら。

聞きたい反面、その内容が怖い。

「何でも、姫様の部隊なんですってね？ アレスと一緒にのも嬉しいけど、姫様とも一緒になんて嬉しいわ」

「遊びに行くわけじゃないのはわかってるよね？」

「ええ。でもわたしだって、癒し手の二つ名を持っているのよ。」

水の魔法は使えないけど、秘薬を使った治療や看護くらい出来るわ」

確かに、秘薬の知識があるのは頼もしい。

しかも、俺の事があるせいで重傷患者の傷を癒す秘薬の研究が進んでいるのだ。

「見るに耐えないかも知れないんだけど、覚悟はあるんだね？」

どんなに秘薬の知識があっても現場はやはり戦場だ。

俺の時以上の、重傷患者や死人だって見るかも知れない。

「アレスと一緒にならどんな場所だって大丈夫。」

どんな重傷な人だって治して見せるわ！

それに、ただ待ってるだけなんて嫌なもの」

そういうルイズは吹っ切れた顔をしている。

迷いが一切無かった。

「いい使い魔を召還したね」

「サイトね？ ホントよ。もしアレスが居なかったら、彼に惚れてたかもね」

からかう口調でルイズが言う。

まあ、それもいいかな？と俺は想ったりもするが、それじゃ俺も無責任だ。

ルイズの幸せを願う以上、今のルイズの幸せは俺が対象なのだから。

「そこまでかい？」

「サイトが真剣に、わたしに言ってくれたのよ。そんなに好きなら放しちゃダメだろ！って。付いて行っても側にいないとダメだ！って。」

ノルンも後押ししてくれたし。

もう、わたしは迷わないわ。ずっとあなたの側にいるから」

そういうと、ルイズは俺に寄りかかってくる。

俺はルイズの右隣に座ったため、肩を抱くには至らない。

「わたしが、あなたの左手になる。あなたを支えるの。」

だから、わたしをいつも側に置いてほしいわ」

ルイズが俺の左手を取って言う。

なんて、健気な子だ。

こんな子を手放したら、罰が当たるかも知れないな。

「そう言えば、もし僕が死ぬことがあっても、看取ってくれるんだって？」

「そうやって意地悪なことを言うのね。でも、その覚悟もあるわ。前みたいに、わたしの知らないところで死ぬような目に合わせたくないし、何よりもわたしの手の届かないところで、そんな事が起きるのは嫌なもの」

「そうか」

「あの二人のおかげで、その覚悟が出来ただけだね。

ホント、あの二人には感謝しても足りないわ」

ルイズの覚悟は、二人がくれた勇気だな。

自分を貫く強さ。

ある意味、ルイズは強さを貰ったのかも知れない。

「そこまで覚悟が決まっているなら、しっかり頼むよ?」

「任して、あなたとあなたの部下はわたしが癒すから」

こうして、俺はルイズとサイトと共に戦場へ行くことになった。

二人に負担を掛けてしまうが、二人の意志は尊重しようと思った。

その後、俺は父さんとヴァリエール公爵から手紙を貰った。

正式に学院を休学する届出である。

それを提出したとき、オールド・オスマン氏は苦い顔をしていた。子供たちを戦場になど、送りたくないという感じである。

俺達が決めたことに、反対も出来ない。

だから、オールド・オスマン氏は一言、俺達にこういった。

「月並みじゃが、絶対に生きて帰きなさい」

それが、学院長としての精一杯の真心だった。

ロングビルには、帰ってきたから新魔法について教えると伝えたが、あまり気にしなくていいと言われてしまった。

どうということだろうか?

休学の届出を出し終わると、俺達は荷物を必要最低限まとめるのだった。

第十三話（後書き）

いろいろな意味でごめんなさい。

とりあえず、戦場に行くことになります。

ただ、アルビオンを舞台に移すのは二話くらい後になるかと。戦場に行くので、サイトを帰還させる方法の研究が出来ないと、ルイズが虚無と言う報告がヴァリエール家になされていないのでそのイベントを起こします。

戦争は早期に休戦へ持ち込む作戦を考えています。いろいろな意味で歴史が変わりますので、申し訳ありません。

それではまた次回に。

第十四話（前書き）

この小説は「ゼロの使い魔」の二次創作になります。

また、独自解釈、独自設定などあり、表現も作者の都合で書いています。

そのため、真に「ゼロの使い魔」のファンと言う方には不快な思いをさせる可能性があるのをご了承ください。

また、読んでいる途中、感情的になったり、気分が悪くなった場合はすぐに閲覧するのを止めて気分を落ち着かせることをお勧めします。

第十四話

ヴァルガード家、応接間。

俺はエレオノールとここにいた。

どうしてか？

実は、戦場に行くのが決まって慌しかったためにアカデミーに顔を出すことが出来なかったからだ。

ヴァリエール公爵がいたから話しても良かったのだが、これから戦場に赴くのに余計なことを言わない方がいい。

そのため、王宮を出る前にエレオノール充ての手紙を送っていたのだ。

ルイズの件で緊急の用があると伝えたのだ。そして、戦場に行くためこちらから出向けない旨をいい、四日後にはヴァルガード家に居ると。

なお、ノルンは話が長つたらしいから寝ててと言っており。

「全く、急な話だったからアカデミーを出るのに手間が掛かったわよ」

「すみません。姉さん」

結婚するに当たって、エレオノールからは姉と呼ぶように言われていた。

何でも義弟にそう呼ばれてみたいらしい。

「いいわ。可愛い義弟が呼んでくれたのだから、ね？」

そういつて笑うエレオノールが、俺はやや怖かった。

俺はやや冷や汗を垂らしつつ、彼女の意識を別の方に向けることにした。

「姉さんに来てもらったのは他でもありません。

ルイズの使い魔が伝説のガンダールヴでした」

「なんですって！」

虚無関係の話になれば、急に呼び出した怒りも吹き飛ぶ。

ヴァリエール家の中でも、カトレアとは別の角度からルイズを心配しているエレオノールだからこそだが。

「つまり、ルイズは虚無ってことになるのね？」

「はい。未だ何がきっかけに覚醒するか分からないのですが、使い魔がガンダールヴとなれば虚無の担い手であるのは確実です」

「参ったわね。結局、十歳だった頃のあなたの予想が的中したわけね」

「まあ、どの系統の魔法も爆発してしまつては、考えられる選択岐はほとんどありませんでしたから。

考えられるのは未知の系統、もしくは虚無しかないんです。

始祖ブリミルと同じ系統だと言うのが恐れ多いと考える大人でないからこそその考えでしたよ」

もつとも始祖ブリミルも人間だろうに。

ある意味、同じ人間を恐れることがあるが、神のように崇めるのは間違っている。

第一、なぜブリミル教なる教えが出来るのか、不思議でならない。至らぬ弟子が始祖を神格化したのがそもその間違いだろう。

そうでなければ、爆発が虚無の担い手と言う立証も、ちゃんと出来ただろうに。

「全く、恐れ多いこと。あなたはすでに爵位を持って家を頂いてもおかしくない歳でしょう？」

いつまでも子供のようにしてはいては臣下に示しが付かなくてよ？」

「いいえ。常に論理的思考と言うのは必要なことです。

そうで無ければ、ブリミルのために犠牲になりなさいと言われて平氣に自分の命を粗末にしています。

信じることは必要ですが、妄信的になるのは単なる愚か者でしょう」

信じるものは救われる。

そんな子供だまし、信じるわけにも行かないしな。

学問としての考え方で信仰の有用性は説かれてはいる。

事実、信仰物を通し、祈ると言う行為が信じる力を一点に収束して自分本来の力を発揮出来る。これはアメリカの深層心理学者が、すでに立証済みだ。

自分自身を信じられない人間が、自分の力を発揮することなど不可能としか言いようが無い。

その自分を信じるのに使うフィルターのようなものだ。

本来の宗教とはそういう自分自身の力を最大限に発揮するものと言つ説を唱える学者もいるくらいだ。

神のためにと言つて自分の命を粗末にするのは単なる馬鹿のお手本ではない。

それをこの世界で説明しても誰も聞きはしないだろうが。

「始祖ブリミルが聞いたら、なんて言うのでしょうか？」

まあ、それはいいわ。

ルイズが虚無と分かった以上、次にすることは決まっているわね」

「はい。虚無の覚醒の手段を見つけて、その封印。もしくは覚醒自体を防ぐことです」

その言葉に、エレオノールも頷いた。

なぜ、覚醒の手段を封印、もしくは覚醒を防ぐ必要があるのか？

それは力の悪用を防ぐためである。

ルイズは今現在、コモンスペルは不自由なく扱える。

また、日常生活においてはコモンスペルがあれば問題ない。

何より、秘薬の研究の道を進んでいるのだ。今更、虚無の力なんて要らないし、本人も望んじやないない。

「これに関してはわたしの方で調べておいたわ。

かなり古い文献の上に、古代語で書かれていたから少し解読に時間が掛かったけどね。

一応、二千年前の文献だから多分、信憑性はあるわね」
「なるほど、さすがは姉さんです。」

やはり最初に姉さんに相談して正解でした」

「ふふふ、嬉しいこと言ってくれるわね。」

そうよ、わたしに掛ければ相手が始祖ブリミルの文献だろうと調べ上げて見せるわ!」

余程、骨が折れたんだろうな。

凄い、誇りを感じる。

「それで、その内容はどうでした?」

「虚無の力が目覚めるには三つの条件があったわ。」

最初は使い魔の召還。これはもうすでに終わっているわね。

次に各王家が管理する始祖の秘法と王家のルビー。これらがそろって初めて虚無の覚醒が行われることになるわ」

封印を解くような感じだな。

ロールプレイングゲームでは在り来たりだ。

どちらにせよ覚醒させるわけには行かない。

「トリステインは水のルビーと始祖の祈祷書がありますね?」

つまりこれらがルイズの手元に行かなければいいわけですか」

「そうよ。そして、始祖の祈祷書だけなら王家の人間の結婚式で手にする可能性があるわ。」

トリステインでの結婚式はどのように行われるかは知ってるわね?」

「はい。巫女が始祖の祈祷書を持って詞を詠うだったと思います。なるほど、ルイズがその巫女に選ばれるとなると祈祷書を手にしてしまうと?」

まあ、周りに知らなければ手元には揃う確率は低いですね」

「油断は大敵よ? わたし達は公爵家ですから王族との関わりも多いわ。」

まあ、この事を知る人物は限られるでしょうから大丈夫でしょうけど、警戒は怠らないことね」

「わかりました。」

虚無の件はこれで終わりです。実は相談があと二つばかりありまして」

「何？ この際だから聞いておくわ」

「ありがとうございます。」

一つはルイズの使い魔のことです。

ガンダールヴであるのはもう言いましたが、実は少々問題がありました」

「何があるの？」

「彼は異世界の人間です。しかもハルケギニアでは到底及ばない高度な技術を持った世界の人間です」

「それは本当なの？」

意外にエレオノールは、冷静だった。

ここでそんな馬鹿なと思うたのだが。

「はい。事実、彼の所持品の中にはこちらの世界で後、数百年は製造不可能な道具を持っていました」

言っておくが、まだ俺はサイトのノートパソコンを弄っていない。暇があつたらゲームでもやらせてもらおうかと思っていたんだが、そんな余裕はこの一週間無かった。

「そう……」

「驚かないんですか？」

「場違いな工芸品って知ってるかしら？」

「ええ。何でも使用用途が全く分からない代物だとか？」

「大まかは合ってるわ。でも、それだけじゃないのよ。」

場違いな工芸品は、その技術、精度、どれを取ってもハルケギニアでの製造は不可能なものばかりなの。

これがどういふことかお分かり？」

「伝説の使い魔どころか、その道具すら異世界からやってくると？」

「そういうことね」

「それなら、話は早いですね。」

実は、その彼を出来れば元の世界に送り届けたいんです」

「は？ 何を言っているの？ 使い魔は死ぬまで主人と一緒にでしょうが」

今度は意味が分からないと、言った風に言われてしまった。

やはりサモン・サーヴァントの特性がそう思わせるんだろう。

「姉さん、もし姉さんが勝手に召還されて、今日から使い魔だって言われて納得できますか？」

「出来ないわね」

「そうですね？ それと同じです。」

彼は異世界から来たとは言え、向こうに家族を残してきています。何でも、彼は向こうの世界で平民だったとは言え、僕達と同じく学院に通い、その後家族のため働く未来があったといっていました。そんなこと、言ってはいない。

口から出任せである。同情を引くことで、何とか協力を取り付ける必要があるのだ。

エレオノールも何かを考えている。

無理やりに連れてこられたようなものだから、少しは罪悪感が沸くだろう。

「送り返すにしても、サモン・サーヴァントで呼び出しても送り返すことは出来ないわよ？」

とりあえず、送り返すことには賛成らしい。

ここからが本番だ。

「姉さん、サモン・サーヴァントは系統魔法じゃないですよね？」

「コモンスペルね」

「そうです。メイジなら誰でも使えるコモンスペルなんです。」

そのコモンスペルが世界の壁さえ、越える。この事に興味はわきませんか？」

エレオノールは良くも悪くも研究者だ。

研究課題は難題な方がいい。

事実、俺の言葉にエレオノールは押し黙った。

「始祖ブリミルが開発したとは言え、たかがコモンスペルが系統魔法でも成し得ない異次元の扉を開くことが出来るんです。」

研究次第では、その逆を、もしくは異次元の扉を開け放つことが

出来る魔法が作れると思いませんか？」

「ふふふ。アレス、わたしにそれをやれって言うわけね？」

研究魂に火を付けようって言うのね？」

乗ってきた。

エレオノールくらい優秀なメイジなら、この話に飛びつかないわけがないと思っていたのだ。

「はい。実は、僕は既にその研究を始めています。

これが僕が考えている。異世界への扉の開き方の仮説をまとめたレポートです」

そう言っただけで僕は懐から紙を数枚綴ったレポートを取り出した。

寝る時間を割いて、ワームホールの理論を分かりやすくまとめたものだ。

もつとも数式は分からない。あくまで考え方だけだが。

「このわたしより先に研究を始めるなんて、いい度胸ね」

「この方が姉さんも燃えませんか？ 義弟に負けたとなれば、姉の威厳にも関わります」

「ホント、ルイズなんかに渡すのが惜しいわね。

このわたしに研究で勝負を挑むなんてトリステイン広しと言え、あなたくらいよ」

そうは言っただけで嬉しそうなエレオノール。

最近、張り合いがなくて詰まらなかつたのだろう

「姉さんは、僕の憧れですからね。常に追いつくのを意識していますよ」

これは嘘じゃない。

開発の仕事をしてた俺にしてみれば、エレオノールの实力には憧れる。

この世界においての實力なら折り紙付だ。

「言うじゃない？ ヴァリエール家に来たときは特別に夜の相手を許すわよ？」

「ね、姉さん、それは公爵様に知られたら僕はただじゃすみません

よ？」

「わたしが守ってあげてもよろしくてよ？」

俺は、ある意味踏んではいけない地雷を踏んだのかも知れない。あまり思わせぶりの発言はこれから控えないと。

「あ、あとですね。その異次元の扉を開く前に、実験的にある二点を結ぶ魔法を開発が必要になります。」

例えば、自分の部屋から直接玄関への扉を開くとか。

そういう魔法が作れると、異次元の扉を開く鍵になると思うんです」

「転移魔法ってどこかしらね？」

その魔法ならこっちでも研究中よ。ただ二点を結ぶという考え方はなかったわね」

「さっきのレポートにその考えもあります。」

僕の方でも研究を進めますが、姉さんに協力してもらった方が早いと思ひまして」

「いい心がけね。わかったわ。」

可愛い義弟のためですもの、力になってあげるわ」

「すみません。よろしく願ひします」

「ええ。いつでもわたしのところにいらっしやい。相手を勤めさせてあげるわ」

男としては非常にそそられることだが、遠慮しておきたいところかも知れない。

浮気などしたら、ルイズはともかくカリィヌ夫人が黙って居なさそうだ。

俺はエレオノールの言葉に、ただ苦笑するしかなかった。

その後、エレオノールは戦場に行くというルイズに言いたい事がある、と言ってルイズに会いに行った。

夜も更けてきたのだが、叩き起こすつもりだろうか？

トリスティン北部のタルブ領。

ワインが名産地のここに、現在一万の兵力が常時待機している。他に、ゲルマニアに接するヴァリエール領に一万。

ガリアに接する貴族の領に一万。それぞれ常時部隊が展開していた。

そして、今回、アルビオンに派兵する数は二千だった。

あくまで、今回の戦いは残存兵力を有効活用することだ。

アンリエッタ連隊は、その先頭に立つことになっている。

俺の部隊は、ヴァルガード家の私軍の一大隊だ。

メイジの数は二百と少ないが、全員、俺仕込の新魔法の有効利用が出来るだけの技量がある。

残り四百は平民からの徴兵だが、彼らはヴァルガード家の正規兵だ。

こちらも俺仕込で育て上げている。

前衛部隊が百五十。後衛部隊は二百五十だ。

前衛には分離式ハルバード、手投げ弾を二つ装備させている。腕にはショートソードを仕込んだ防具があり、万一ハルバードを失っても戦う術はある。

分離式ハルバードは分解すればブロードソードになる。近接戦になつたら簡単に分離できるように作つた。

手投げ弾は後退用だ。逃げる際に使って追っ手が追いつけないように使う。

あとは俺が作った興奮剤で身体能力の向上と、気力の上昇で突っ込ませる。ちなみに興奮剤の副作用は軽い倦怠感くらいだ。二、三時間休めば治る程度にしてある。

後衛部隊は携帯出来る連式弓とショートソードを装備、矢が二十本入ったカートリッジが五個持ち歩ける。

あとは大型の移動式連式弓もあり、射程はだいたい五百メートル。こちらは汎用性を持たせて、連式弓のカートリッジをそのままセツトして使えるのだ。

タルブ第三駐屯地。

アルビオンへの派兵を行うための駐屯地だ。

トリステイン空軍の三分の一がここにある。

ここに、アンリエッタ連隊は集結していた。

第一大隊から第五大隊がそれぞれ戦艦に荷を積めている。

俺はノルン、ルイズ、サイトと共に、司令部に来ていた。

ノルンは例によって俺の肩の上である。

司令部と言ってもアンリエッタと、ヴァリエール公爵、父さんがいるだけだ。

簡易的なテント張りの司令部なのだ。すぐにアルビオンへ行くので問題はない。

「姫様、お久しぶりです」

ルイズは司令部に入ると、アンリエッタの前でひざまついた。

そんなルイズに、アンリエッタが近づくとやんわりと立たせる。

「ルイズ、久しぶりね。本当に久しぶり。元気にしていたかしら？」
嬉しそうな表情でルイズの手を取るアンリエッタ。

ルイズも、その手を握り返して言う。

「はい、姫様。わたくしは学院で元気にしております」

「ああ、貴女に会えるなんて思いませんでしたわ。貴女のお父上から戦いに参加させると聞いたときは心臓が飛び出るかと思いましたもの」

俺は父さんに聞いたとき、思わず叫んでしまった。

アンリエッタも似たようだったんだろう。

「ヴァリエール公爵、ヴァルガード侯爵。久しぶりにルイズと話したいので、下がつて頂けますか？」

「わかりました。ルイズ、くれぐれも姫殿下に失礼が無いように」

「はい、お父様」

ヴァリエール公爵と父さんがそれぞれ出て行った。

「僕達も出ようか？」

「いいえ。アレスと、ルイズの使い魔さんは残ってください」

「わかったよ」

俺とサイトは二人から一步下がったところに居る。

ちなみにすでにサイトがルイズの使い魔だと言つのはアンリエッタには報告済みだ。

「お二人もお座りになつて？ ルイズも」

俺達は椅子に勧められて座る。

即席の司令部のため、あまりいい椅子ではないが立ちっぱなしよりはいい。

「なあなあ、アレス」

小声で俺に話しかけてくるサイト。

「なに？」

「なんで、お前、姫さんにタメ語使つてんだ？」

「アンリエッタはルイズと幼馴染で、昔は良く遊びに行っていたんだ。

最初は僕も敬語だったんだけど、お友達だから固い言葉は使わないで欲しいって言われて、それ以来はこうしてルイズと同じように扱ってるんだよ」

もっとも、この前まで思いっきり敬語で話していたんだが。

あれは王宮だったし、俺自身アンリエッタに目の敵にされていると思っていたからな。

誤解と分かれれば昔のように接しないと返って反感を買ってしまう。

「ふーん。お前って何でもありって感じだよな」

「そうでもないよ」

生まれがたまたま公爵家と親睦があつたからだ。

これが遠い他の貴族として生まれていたら、ルイズと知り合つてもほぼ他人だっただろう。

そうなればアンリエッタとこうして話すことはまずあり得なかった。

「使い魔さん」

「はい！ お、俺ですか？」

急に呼ばれて緊張するサイト。

相手は一国の王女だ。緊張するなと言う方が無茶だろう。

「ええ。何でもルイズが馬鹿にされた時に怒ったとか。しかも五人のメイジ相手に引けを取らないどころか圧倒したと言うじゃないですか？」

「あ、あれはルーンの力で俺の力じゃないんです」

「それでも姫様、彼はとても頼りになるんですよ」

ルイズは何か嬉しそうに言う。

いい使い魔としてサイトも活躍しているのだろう。

「アレスがいない間、落ち込むわたしを励ましてくれたりして」

「それ、あたしも励ましたわ」

ノルンが俺の肩から乗り出して言う。

自分の活躍もアピールしたいらしい。

「あら、そのフェアリーさんは？ アレスの使い魔さん？」

「そうよ。ノルンって言うの。マスターが付けてくれたのよ」

そう言えば、前はノルンを置いてきていたな。

紹介してなかったんだ。

「可愛らしいわ。アレスはどう？ 意地悪されたりしないかしら？」

「アンリエッタ。それはどういう意味だい？」

「あら、忘れたのかしら？ 幼い頃、ルイズともどもわたしの事を

からかったりして」

いつの話だ。

だいたいあの頃はまだ、子供だろうに。俺はすでに中身が三十超えたおじさんだったが。

「子供の戯言でしょ？ いつまで気にしてるのさ」

「忘れるものですか。アンリエッタはお姫様って感じより、おてんば娘って感じだったからかったじゃない。

わたしだって女の子だもの。あれは傷ついたわ」

そう言って、むくれた様にそっぽを向くアンリエッタ。

あんたは子供か？

「マスターは優しいわよ。ちょっと二面性を持つてるけど、物事を

良く考えるしカッコいいわ」

「ノルンには優しいのね？ わたしはちょっと意地悪されるわ」
そう言つてルイズが俺を少し睨んでくる。

いや、意地悪つて意地悪はしていないはずなのだが？

「やっぱりそうだね。わたし達に何かうらみでもあるの？」

おいおい、アンリエッタにルイズ。

俺はいつも言い聞かせているだけじゃないか。

からかったのは小さい頃だし。

「アレスつて、結構女泣かしだよな？」

「サイト君まで、何を言うんだい」

「マスター、女泣かせつていうのは確かにあつてるかも知れないわ」
ノ、ノルンまで。

俺は四対一で責められた。

途中から、アンリエッタとルイズに一方的な鬱憤晴らしと言つベ
き仕打ちを受ける。

「僕が、悪かったよ。だから、もう勘弁してくれないか？」

俺はなぜか椅子の上で正座をして謝っていた。

ルイズに、やれ女の子に期待を持たせる、やれ誰にも優しいから
勘違いされてるだの、やれ自分が婚約者だと学院内で公言して置か
ないと女の子が近寄つて大変だと言われた。

アンリエッタには、やれルイズを奪つてわたしに寂しい思いをさ
せた、やれわたしが嫌味を言うからつて馬鹿丁寧な敬語で卑屈にな
るわ、やれ誤解が解けたと思つたら今度は遠慮がないだの言いたい
放題だった。

「そうね、粗方アレスへの不満は言えたし、もういいかしら？ ル
イズはどう？」

「わたしも同じです。普段、アレスに言えない鬱憤が言えたのです
つきりしましたわ」

そついう二人はとてもすつきりとしたいい笑顔だった。

俺の生気をほとんど奪つたんじゃないかくらいに感じる。

「さ、さすがにちょっと可哀想だったな」

「ど、同感」

サイトとノルンはかなり退き気味でこそそと話をしていた。もちろん俺に聞こえていたが。

「そう言えば、このタルブには竜の羽衣と言うものがあるのはご存知？」

何でも纏ったものは空を飛ぶといわれているそうだわ」

「竜の羽衣？」

そんなものがあるのか？

空を飛べるとなると、かなりの脅威だが、実際に飛んでいる人間がいなから嘘だろう。

「噂だと言う事だけど、ルイズ、一緒に見てみないかしら？」

「いいですわ、姫様。アレスとサイトも行きましょう」

「ちよつと、遊びに来ているわけじゃないんだよ？」

これから戦列を整えるというのに何を言っているんだ。

「少しだけよ、アレス。わたしはいつも王宮にいるばかり、あまり外に出られないのよ？」

「姫様の願いを聞いてあげて、アレス」

そこまで大げさなものか？

まあ、今は戦艦に荷を積んでいる最中だ。

戦列を整えるにも、その作業が済んでからとなっているし。仕方ない。

「分かったよ。場所は分かるのかい？」

「ええ。一応聞いているわ」

そういうアンリエッタはこうワクワクしている感じだった。だから、俺は昔言っただ。

おてんば娘だって。

「やれやれ、か。サイト君、ノルンも行こう」

「お、おう」

「うん」

俺達は司令部を後にすると、その竜の羽衣とやらが祭つてある場所へと行くのだった。

そこで、俺とサイトは、驚愕的なものを見ることになる。

第十四話（後書き）

ちょっと詰めすぎました。

なんとか、戦争中にサイトが帰るための研究の協力をエレオノールに取り付けました。

そして、司令部の様子ですが、随分と碎けた感じに。

実際にはヴァリエール公爵、ヴァルガード侯爵がアンリエッタに今後の指揮についての説明等が行われているのですが、ふっ飛ばしました。つまらないので。

最後、順番はばらばらですが、ゼロ戦イベントを起こします。もつとも、今回はゼロ戦は活躍しません。

時間がないので持つて行きませんので。

アルビオンイベントが一度終了してから飛ばそうかと思っています。むしろ、このゼロ戦を見て、またアレスがこのハルケギニアにおいて型破りな案が出てきます。

デルフリンガーも街にまだ買い物に行っていないせいで武器屋で大人しくしています。

こちらに戻ってきてから、街に買い物に行かせます。

ともかく、アレスが絡むことでいろいろ歴史がおかしくなります。

それではまた次回に。

今回は少し時間が空きますので、予めご了承下さい。

第十五話（前書き）

この小説は「ゼロの使い魔」の二次創作になります。

また、独自解釈、独自設定などあり、表現も作者の都合で書いています。

そのため、真に「ゼロの使い魔」のファンと言う方には不快な思いをさせる可能性があるのをご了承ください。

また、読んでいる途中、感情的になったり、気分が悪くなった場合はすぐに閲覧するのを止めて気分を落ち着かせることをお勧めします。

第十五話

竜の羽衣は、タルブの村の寺院に祀られていた。

纏った者は空を飛ぶといわれる、その羽衣はあまりにあり得ないものだった。

「こ、これが……竜の羽衣？」

サイトは俺の隣で啞然としている。

それは俺とて同じだった。

「こんなものじゃ飛ぶはずないですわね」

「ええ。羽ばたくのではなく、これは固定されてます。どう見ても飛べるものじゃないです」

アンリエッタとルイズはやっぱり噂は噂だとがっかりしていた。

サイトが一步前に入る。

まるで目の前の物に引き付けられるように。

「サイト？ どうしたの？」

ルイズが不思議そうにサイトに尋ねるが、何も言わない。

いや、聞こえてないのかも知れない。

「マスター？」

ノルンが俺の様子がおかしいのに気がついたのか声を掛けてくる。

だが、俺は答えない。いや、答えられないのか。

「ゼロ戦……」

サイトはそう言つて、目の前の飛行機を見て呟く。

「ゼロ戦？」

ルイズとアンリエッタは顔を見合わせて首を傾げている。

「おい、アレス！ これ、ゼロ戦だよな！」

サイトは興奮したように俺を見た。

俺は、その言葉に頷く。

「ああ、確かに、これはゼロ戦だ。俺も詳しくは知らんが、零式艦上戦闘機と呼ばれてたと記憶している」

「アレス……」

「ど、どうしたの？」

ルイズが、また知らない俺を見て暗くなっている。
アンリエッタは急に俺のしゃべり方が変わったことに驚いていた。
どうやら俺は、あまりに非常識なことがあると、口調が元に戻るらしい。

「どうして、これがこんなところにあるんだよ！」

「すまん。俺にも分からん。だが、これらの総称はハルケギニアでこう呼ばれている。」

場違いな工芸品と」

「え？　これが！」

「場違いな工芸品？」

アンリエッタもルイズも、場違いな工芸品は知っているらしい。
だが、自分の目で見るのは確かなのだろう。

「マスター、これもマスターの世界の？」

「ああ。俺とサイトの世界の戦闘機だ」

「なあ、アレス。場違いな工芸品ってなんだよ？」

サイトが怪訝な顔で俺を見ていた。

とりあえず、冷静にならないと。

「少し待て」

そう言っ、俺は一度深呼吸をした。

この前はわざとあのしゃべりにしたが、今回は無意識だ。

アレスのしゃべり方に戻さないと、ルイズに心配を掛ける。

もっとも、こっちも俺なんだがな。

「ちよつと、気が動転してたみたいだね」

そういつてアンリエッタとルイズを見る。

ルイズは安心したように、アンリエッタは訳が分からないと言う様に俺を見た。

サイトの方に向き直ると俺はサイトの疑問に答える。

「サイト君、これがここにあるのはおかしいと思わないかい？」

「ああ。これは俺たちの世界のものだ。どうして、ここにあるんだ？」

「僕もどうしてかは知らない。だけど、この世界に本来存在しないものを、この世界では場違いな工芸品というんだ。

「僕も初めて見るんだけどね。これは明らかにハルケギニアにとってはあり得ない代物だよ」

俺はそう言つてゼロ戦に近づいた。

そして、デテクトマジックを使った。

「固定化の魔法が掛かっている。だからか、こんなに完璧な状態で残っているんだね。

サイト君、これは武器だ。これに触れてみて」

そう言つてサイトは武器としてのゼロ戦に触れてみる。

すると、左手のルーンが光った。

「わかる。このゼロ戦のことがわかるぞ」

「どうだい。状態は」

「燃料がないだけだな。それ以外は完璧で、問題ない」

そう言つて、サイトはゼロ戦に触れるのを止めた。

「アレス、これはどういうことなの？　これがなんだか知っているみたいだけど」

アンリエッタが、怪訝な顔で俺を見る。

明らかに俺の行動が、ゼロ戦を知っていると思う発言や行動だからだ。

「アンリエッタに、話さないとならないかな？　僕の生い立ちを」

「アレス、いいの？　話しちゃって」

「ルイズ？」

ただならぬ雰囲気、アンリエッタがルイズに尋ねるように呼ぶルイズは自分から言えないと言う様に首を振って、俺を見た。

「アンリエッタ。これから話すことは例え、君が王女であっても他言しないほしいんだ。

その約束が守れるなら、僕のことを、そしてこのゼロ戦のことを

話す。

守れないなら……。いつかは分からないけど、僕達が死ぬことになる。

それくらい重要なことなんだ」

「な！」

俺の言葉に驚愕するアンリエッタ。

それもそうだ。昔の友人が、秘密を聞くな黙っていてくれと、守れなければ俺らが死ぬと言っているんだ。

驚愕しない方がおかしい。

「誰にも言わなければ、聞いてもいいのね？」

「そうだね。僕の秘密を知っているのはルイズ、ノルン、サイトの三人しかいないんだ。

信用できる人間以外は話せない」

そういうとアンリエッタは、一瞬何かを考えるように目を閉じて、開く。

「いいわ。絶対に話さないと誓う。だから、アレスのことを聞かせて貰えないかしら？」

「わかった。それじゃ、話すよ。あ、サイト君、君のこと話すことになるけどいいかな？」

「ああ。そうしないと話が繋がらないだろ？」

サイトの言葉に俺は頷いた。

そして、俺はアンリエッタに語る。

サイトが異世界から召還された人間であること。

俺が彼と同じ世界の住民だったこと。

俺が前世の記憶を持って、この世界に生れ落ちたこと。

アンリエッタは信じられないという表情で、俺の話を聞いていた。だが、ゼロ戦の話になり、俺とサイトしか話が通じないところを見て信じざるを得なくなった。

「ほ、本当なのね？」

アンリエッタは驚きっぱなしで疲れたように言う。

「そういうこと。まあ、さっきのあのしゃべり方も、昔のしゃべり方が、ああだったからたまに戻るんだ」

ノルンの前じゃ、いつもだが。

「マスター、そう言えばこの飛行機って言うのは飛べるってことだけど、このままにしておくの？」

「そうだよ。アレス、これって武器だし燃料積んでやれば使えるぜ？」

「それなんだけど、これは使わないよ」

「どうしてだよ」

サイトがやや残念そうに言う。

これで戦闘と言うのはともかくとして、飛びたいんだろう。

だが、これはタルブの村の物だ。第一、今からこれを戦場にもっていくには時間が無い。

そのことを話すと、唸るしかなかった。

「アレス、これを戦争に使わないってことよね？」

ルイズが、ゼロ戦を見ながら言う。

「そうだね。こんな物、本来使っちゃダメだから。もっとも僕の知識もある意味反則なんだよ」

この世界からしたら数百年も先の技術。

分野は違うが、俺自身だってある程度知識はあるんだ。そんなもの使った武器の開発、魔法の研究・開発は反則に近いだろう。

「もっともゼロ戦を見たおかげで、また反則的な考えが浮んだけど」

「何？ それは？」

アンリエッタが尋ねてくる。

どうも俺と話す時は、アンリエッタはかなり碎ける。ルイズとも一定の形を崩さないのにな。

たまにルイズとアンリエッタが混在する。

それより、ちょっとだけと言っていたには時間が経ちすぎた。

「それより姫殿下、そろそろお戻りにならないと。姫殿下はこれから戦列を整える仕事があります」

俺わざと形式ぶつたしゃべり方をすると、口を膨らませて言う。
「わかっています。アレス隊長殿、そんな意地悪をせずともそろそろ戻ろうと思っていたところですよ」

アンリエッタが、王女の態度でみんなに戻ることを言う。

ややふて腐れたアンリエッタを少し微笑ましく思いながら、後を付いて行った。

さて、アンリエッタに話さなかったが、反則的な考え。

それは戦闘機だ。

こちらの世界でも風石を使用して戦艦の造船が出来る。

戦艦では火力はあっても機動力が無い。

なら小型の戦闘用の船を作ればいいのだ。大きさは十メートル程度。

推進力も、風石を使つて前進できるようにすればいい。

戦艦だと大きすぎるから風の力を使うが、戦闘用の船、戦闘船なら戦艦の使用する風石の十分の一から三十分の一程度で済むだろう。残りを推進用の風石にまわしてもまだ余る。

そこに俺が開発した連式弓を戦闘船用に改良すれば、竜騎士隊だつてお役ごめんだ。

手投げ弾、これはそのまま火薬の量を増やせば爆弾になる。

船体を黒く塗りつぶせば夜の襲撃も容易になるだろう。ある意味、ステルス爆撃機の出来上がりだ。何せ、風石を使うなら騒音なんかほとんど無いだろうから。

メイジの立場が弱くはなるが、軍事力は向上するに違いない。

今回の戦いに間に合わなくとも、この世界も人の世界だ。

いつだって戦争が起こる。

少しでも強力な武器、兵器はあつて越した事はないのだ。

その日の夜。

戦艦はアルビオンへと飛び立った。

戦艦の会議室では、ヴァリエール公爵から今回の作戦の説明がな

されている。

現在のレコン・キスタは、王都ロンディニウムを奪いアルビオン領土の三分の二を向こうが抱えている。

連合軍は、ニーカッスルまで後退。

前線は、ニューカッスルから三十キロ先。ロサイスより百キロ南に位置する、レティバーミンの街だ。人口三万。アルビオンでも大きい街である。ここを拠点に北にある砦を守っていた。

今回の作戦は、そのレティバーミンより四十五キロ北に位置するロサイスへの入口になる街、ドルバータを落とすのが今回の作戦だった。

そのために、まずはレティバーミンの街の最大の砦、レティバーミン第一要塞を奪還する必要がある。

レコン・キスタはその第一要塞を拠点に、衛星要塞を落としていた。

連合軍は、レティバーミンが要する七つの要塞のうち四つまで奪われている。残りは三つ。

現在は第一要塞の次に重要な、第五要塞へ戦力を集中させることでレコン・キスタからの攻撃を凌いでいた。

作戦は次の流れになる。

アンリエッタ連隊は、そこを死守する連合軍第二師団と合流。

それからは、第一要塞へ全軍突撃する偽情報をレコン・キスタに流す。

敵の戦力を、第一要塞に集中させて手薄になった砦を再び奪還。

この時、逆にこちらが手薄になると踏んで攻め入る要塞の部隊がいることも想定して進軍しておく。

鉢合わせになるが、こっちはそのつもりであるため混乱はしない。むしろ向こうが混乱を起こすため、迎撃はそんなに難しくは無い。周辺の要塞を奪還後、すぐにアンリエッタ連隊が囫になって第一要塞を襲撃。

奪還のための戦いは楽ではないだろうが、余力は十分にあるはず

だ。

そのため、負傷兵は皆に残して、すぐに進軍する。間もない状態での襲撃に向こうも混乱が生じるだろう。想定もされているかも知れないが、大半が迎撃に来るはずだ。

迎撃に来る敵をひきつけておいて、今度は本当に側面から全軍を突撃。

そのまま要塞への攻撃も行うのが流れである。

戦力は第一要塞に集中する戦力をだいたい二万五千と推定。

こちらは戦力差はおおよそ一万五千。だが、偽情報の混乱、周辺の要塞を落とされたこと、そして間を置かない反撃にひっくり返すだけの要素はあると踏んでいた。

会議が終わる。

会議室を出るとき、俺はある人物に呼び止められた。

「アレス君」

振り向くと、そこには髭をたくわえた男だ。

彼の名は。

「ワルド子爵殿」

ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド。ルイズの元、婚約者だ。

「久しぶりだね」

「お久しぶりです」

彼が右手を差し出し、俺は彼と握手を交わす。

白い手袋越しからも、その力強さを感じた。

「子爵は確か、グリフォン隊の隊長をなされていたと思いますが、そちらはどうされたのです？」

しかも今は第三大隊の隊長ではありませんか」

彼は家族に不幸があつて若くして領主となっている。

そしてヴァリエール公爵の勧めで魔法衛士隊のグリフォン隊に入隊。現在は隊長を務めている。

グリフォン隊は魔法衛士隊の中では最優秀。つまり彼はトリステ

イン魔法衛士隊最強なのだ。

また風のスクウェアクラス。偏在の使い手としても名が高い。何よりも、その動きはトリステイン随一で閃光の二つ名を持つほどだった。

「ああ。グリフォン隊は副隊長に任せているのでな。僕はトリステインの為に戦いたいのだ。

姫殿下に無理行って参加させてもらったのだよ」

「ご立派です。しかしながら、貴方ほど使い手ならば国におられた方が良かったのでは？」

グリフォン隊は、王都防衛の要でもある。

侵略されたのなら前衛に出ることもあるだろう。

攻め入るならば王都に留まっていた方が万が一の場合は戦力を温存出来る。

「いやいや、姫殿下が出陣なされるなればこそ、僕は姫殿下のお役に立つために来るべきだと考えていたのだよ。

それに僕の率いる第三大隊は、魔法衛士隊ではないものの全員がメイジで構成されている。

戦場の魔法衛士隊のようなものだ。ならば、僕が出るのが一番じゃないか」

そういうものだろうか。

俺としては非常に怖い。ワルド子爵は俺が知るメイジの中ではかなり優秀だ。

トリステイン最強と思っていいくらいである。

詠唱の早さ、各魔法の使いどころ、偏在をも使いこなす。

たった一人でラインメイジならば百は相手に出来るだろう。

万が一があつたら貴重な人材をトリステインは失うのだ。

「子爵殿、無理はしないで下さい。あなたはトリステインで必要な人材です」

「分かっておるよ。それよりルイズはどうしているのかね？」

衛生兵で、しかも君の専属として参加していると聞いているが？」

「今は、部屋で休んでます」

「そうか。久しぶりにあいさつをしたいのだが、構わないかい？」
婚約を俺に譲ってから、彼はルイズを気にし続けていた。

俺を通じて、ルイズは元気になっているか？

君はルイズを守ってくれているか？

たまに会うときも、ルイズにとても優しく。俺は彼からルイズを奪ったことをたまに後ろめたく感じる。

「ええ。ルイズもきつと喜ぶでしょう。案内します」

だから、俺は彼がルイズと会うことを阻むことなど無かった。
ルイズが控える部屋を案内する。

「ルイズ、いいかい？」

「アレス？ いいわよ」

ドアを開けて、俺とワルド子爵が部屋に入った。

「ワ、ワルド様！」

ワルド子爵を見たルイズが、驚いたように立ち上がりすぐにスカートの裾を摘んで挨拶をする。

隣にいるサイトが何事かと、呆然と見ていた。

「お久しぶりですわ。ワルド様」

「久しぶりだね、ルイズ。ところで、隣にいる少年は誰だい？ 平民の少年にも見えるのだが」

「彼は、わたしの使い魔で、サイトと言いますわ」

そう紹介されると、サイトもとりあえず挨拶をする。

「サイトって言います」

「平民を使い魔かい？ 君は昔から変わっていたが、使い魔も変わっているんだね？」

しかし、君が召還した使い魔だ。さぞかし、優秀な使い魔なのだろうな」

「はい。腕のいい剣士で、五人のラインメイズを正面から相手にして勝ってしまうほどですわ」

「なんと！ それは凄い。まさに君の使い魔には相応しいな」

褒められたサイトは、ちょっと恥ずかしそうに鼻の頭をかきながらいう。

「偶然ですよ」

「謙遜することはない。運も実力のうちだ。それが、君の実力なのだよ」

ワルド子爵はそう言って、サイトの肩に手を乗せる。

サイトもワルド子爵の言葉に素直に頷くのだった。

「さて、久しぶりにルイズとゆっくり話したいのだが、いいかね？ アレス君」

俺に振り向いて尋ねてきた。

まあ、久しぶりにあったのだそれくらい、いいだろうと思う。

「私がいいと思いますが、ルイズはどうだい？」

ルイズを見ると、ルイズも頷いて言った。

「わたしは大丈夫ですわ。ワルド様。カフェにでも行きましょうか？」

「いや、上に上がろう。少し寒いが、星が綺麗に見える」

「ええ、それでは行きましょう。アレス、また明日ね」

「また明日」

そういうと、ルイズとワルド子爵が部屋から出て行った。

それを見ていたサイトが、俺を見ていう。

「いいのかよ？」

「何がだい？」

「ルイズは、お前の婚約者だろ？ 他の男と一緒に何かあったらどうするんだ？」

サイトの心配はもつともだ。

自分を褒めてくれた人間でも、初対面だ。まだ信用できるどうか分からない。

「大丈夫だよ。彼は、元婚約者だし、いつもルイズを心配していたしね。」

それに彼ならルイズを任しても大丈夫なくらい信用における人だ

よ

「そうなのか？」

「そうだよ。ルイズを心配してくれてありがとう」

「俺の大切なご主人様だから、な」

「そうか。さて、僕は部屋に戻るよ」

「ああ。またな」

サイトに手を上げて答えると、俺は部屋を後にした。

この時は、まだ知らなかった。

これから始まる大反撃に、爆弾を抱えていたことに。
この夜は嵐の前の、静かな夜だった。

第十五話（後書き）

お待たせしました。

第十五話です。

今回はゼロ戦が登場です。前回、言った通りゼロ戦1の活躍はありません。

そしてアンリエッタがアレスとサイトの秘密を知ります。ただし虚無抜きで。

これから何かとアンリエッタを味方につけていくつもりです。

アンリエッタは、ウエールズ皇太子の事でアレスに対する好感度はあがっています。

そして、ワルドが登場。

これから色々引っ掛け回して貰います。

あとアルビオン王国の詳しい地理が分からなかったので適当に街を設定してみました。

勝手なことで、すみません。

第十六話（前書き）

この小説は「ゼロの使い魔」の二次創作になります。

また、独自解釈、独自設定などあり、表現も作者の都合で書いています。

そのため、真に「ゼロの使い魔」のファンと言う方には不快な思いをさせる可能性があるのをご了承ください。

また、読んでいる途中、感情的になったり、気分が悪くなった場合はすぐに閲覧するのを止めて気分を落ち着かせることをお勧めします。

第十六話

アルビオン王国、ニューカッスル城。

レコン・キスタに追い詰められたアルビオン王国最後の砦でもある。

アンリエッタ連隊が降り立った時、出迎えてくれていたのはアルビオン王国、国王ジェームズ一世とウェールズ皇太子だった。

ウェールズ皇太子は、アルビオン、トリステイン連合の連合軍総司令官でもあった。

アンリエッタを先頭に、第一大隊から第五大隊までが整列する。アンリエッタが戦闘で、自身の杖を翳して到着の報告をすると、ジェームズ一世、ウェールズ皇太子にひざまつく。

ウェールズ皇太子が、歓迎の辞を述べ、ジェームズ一世がアルビオンとトリステインの同盟による戦の勝利に向けたスピーチがされた。

報告が終わって、解散になる。

解散になった俺たちは、各大隊はニューカッスル城の周辺にキャンプを張った。

出陣は明日。

目指すはレティバーミンの街だ。

俺は第一大隊を集めると、簡単に明日の予定を告げて解散させるのだった。

第一大隊、第一キャンプ。

ここに、一個中隊がいくつかテントを張っていた。

第一キャンプは、メイジ部隊がいる。

その一つのテントに俺とサイトはいた。

ちなみにルイズとノルンは隣のテントである。

テントを分けたのは、ルイズは女の子だからだ。

間違いはないと思うが、ここは学院じゃない。変な目で見られても面白くないから分けておいた。

「戦争なんだな」

サイトが、寝袋の上に胡坐をかき剣を見ながら俺に言う。

今のサイトの格好はいつもの服装に、上から動物の皮で作った胴着をきている。

サイトはルイズ専属の剣士として俺と共に居るのだ。

「まあね。緊張すると思うけど、気をしっかり持っておかないとダメだよ。」

「わかつているんだけど、今更ながら震えてくるんだ。

戦うことはいいんだ。実際、訓練を受けたときは問題なかったからさ。」

でもよ、今度のは本物の戦争だ。誰かを殺すのを躊躇ったら俺がやられるか、ルイズがやられるんだ。

そう考えるとめっちゃくちゃ怖えんだ」

サイトにもルイズ専属の剣士である以上、訓練を受けてもらった平民の剣士の中には、メイジ殺しになれそうな腕前のものもいる。だから、サイトに稽古をつけてもらったのだが、サイトはガンダールヴの力もありいい勝負だった。

しかし、今度は本物の殺し合いである。

怖がるなと言う方が無理だった。

「サイト君、その剣を抜いてみたかい？」

「ああ。抜いたよ。正直、身震いしたぜ」

「実はそれ、人を切るように作ってないんだ」

「は？」

俺の言葉にサイトの顔が疑問で呆ける。

まあ、普通剣は人を切るものだからな。

「ルーンで情報を見てないのかい？」

「あ、そっぴやまだちゃんと発動させてないな」

どうもガンダールヴのルーンは武器ではないものを武器と認識す

るとルーンが反応して、また逆もある。

武器だと思わないと反応しない場合があるらしい。

試しに、フォークや食事用のナイフを武器として使おうとさせた
らルーンが反応していた。

「あ、ホントだ。これは斬れないない剣だ」

サイトのルーンが光っていた。

これによって俺が渡した剣がどういうものを理解しただろう。

「どう戦えばいいかはわかったよね？」

「ああ。これは殺さない剣だ。あくまで守るための剣で、攻める剣
じゃないだな。」

戦闘になったら鈍器扱いだ」

「そういうこと。君のルーンなら使いこなせるよ。殺さずに意識を
奪うだけ」

「少しだけホツとするな。人殺しなんてしたくないからさ」

「戦争は人殺しが英雄だよ。何人殺したかで、胸につく勲章の数が
決まるんだ」

「馬鹿げてるよな。学校でも習ったけど、一人殺すと殺人でも戦場
なら殺し多分だけ英雄だ」

そう。

戦争は人を殺すのが正当化される。

敵だから、殺さなければ殺されるから、殺していいのだ。

本来はどんな理由であれ殺していい事はない。

だけど、戦争はそうじゃなかった。

だから、戦争では兵士は兵士として訓練しないとならないし、人
の心を持ったまま人を殺すのは辛い。

戦うときは、自分自身が戦いの道具と認識するしかない。

「アレスは、人を殺したことがあるのか？」

「僕もまだ無いね。傷つけたことならいくらでもあるけど、命まで
は奪えなかった」

ただし、俺の発案は人の命を奪うものばかりだが。

「まあ、僕も今回は戦争だから、ある意味覚悟は決まってるよ。

僕は人を殺す。だけど、殺した人の分まで生きるって決めてる。罪は罪として背負って生きて、語るしかないからね」

戦争であつても殺したら、その人の人生を、これからの可能性を奪うことになる。

その辛さから逃げるのは簡単だけど、消えはしないんだ。

真正面から受け入れて、その人たちの分まで生きる。

あとは、戦争の愚かさを俺が生きて、語るしかない。戦争に正義はないと。

もつとも戦争を仕掛けるよう進言したのは俺だから、俺が一番罪が重いんだろうな。

「お前はホント、達観してるよな。って、見た目はともかく先輩だったか」

「まあね。伊達に五十年近く生きてないよ。一回死んだけど」

前世じゃ、人は愚か動物さえ殺すことなど無かった。

虫は、まあ仕方ない。

奪っていいものじゃないが、すまないといしか言えないのだ。

「アレス、サイトいる？」

ルイズがテントの中に入ってきた。

肩にはノルンが居る。

「マスター」

ノルンがルイズの肩から離れると、俺の肩に座った。

「やつぱり、マスターの肩も座り心地がいいわ。ルイズの肩はふわつとした感じだけど、マスターのはこうどっしりしてるわよね」

「そうなのかい？」

俺がルイズを見て言うと、そう言っていたと答えが返ってくる。

「それより、アレス。サイトもだけど、わたし達って基本は後衛なのよね？」

「そうだね。衛生兵だから、後ろで待機していてもらわないと」

そう。ルイズとサイトは後衛も後衛だ。

サイトはそれでも多少は前に出ることになるだろうが。

「ワルド様に言われたんだけど、本当は戦場に来るべきじゃないって言われたわ」

やや俯き加減で、ルイズは言う。

彼はルイズを第一に思っているからこそ、戦争に参加はさせたくないだろう。

それは俺も同じだが、ルイズの意志が意志なら反対しても逆効果だった。

「ワルド子爵の言うことはもっともだよ。それでも、僕はルイズの意見を尊重するけどね」

「ま、それで俺もここに来る事になったわけだけど」

「サイトには悪いって思うわ。でも、サイトが背中を押してくれたからなのよ？」

「それは分かってるって。ルイズの泣き顔なんて見たらああ言うしかなかったから」

「サイトは使い魔としては、アレだけど人としてはいい事言うわ。まあ、戦争じゃなければなおいいアドバイスだったけど」

ノルンがそういうと、サイトが言葉を詰まらせた。

「まあ、その話は止めにしよう。サイト君もここに来る覚悟はしてたんだし」

「自分のご主人様だけ、危険な目に合わすなんて出来ねえからな。それ、男として退けないときもあるし」

サイトは真剣な顔で言う。

サイトの言ったことは、確かに一理あった。

だが、俺としては出来れば二人とも待っていて欲しかった。失礼します。第一大隊長のアレス様はこちらでしょうか？」

その時、一人の兵士がテントの中に入ってきた。

伝令兵らしい。

「僕が、アレスです。何か伝令ですか？」

「ウェールズ総司令官からアレス様を呼んでくるようにといい使わ

されております」

「総司令官が？　わかりました。すぐに伺います。案内を頼めますか？」

「はっ。畏まりました！」

伝令兵はそう言つて敬礼すると、テントの外に出て待機をする。

俺は、みんなにちよつと言つてくると言つてテントを後にするのだった。

ニューカッスル城の応接室。

俺はそこに通された。

伝令兵はそこで、下がり俺はドアをノックする。

部屋から入室するように言われて俺は中に入った。

中にはアンリエッタとウェールズ皇太子が備え付けの椅子に座っていた。

「アンリエッタ連隊。第一大隊、隊長。アレス・ジルアス・ド・ヴァルガードです」

俺はそう言つて敬礼をする。

一応、今は軍人だ。上官になる二人に無礼なことは出来ない。

「アレス、そんなに畏まらなくともいいですわ」

「アレス殿、君を軍人として呼んだわけじゃないから、もう少し楽にしてもらいたい」

「そうですか。わかりました」

いつもの口調に戻す。

それから、椅子を勧められてそこに座る。

俺は目の前のテーブルを挟み、アンリエッタとウェールズ皇太子と向き合うようになる。

「まずはお礼を言わせてもらえないか？」

ウェールズ皇太子はアンリエッタを見てそういう。

アンリエッタは少し頬が上気しているのが分かった。

「お礼？　ですか？」

「そうとも。君がアンリエッタに自ら赴くことを提案してくれたと聞いたのでね」

「ああ、それでしたか。確かに、姫殿下にはそう進言しました。それを決めたのは他でもない姫殿下であって僕ではありません」

「謙遜しないで、アレス。あなたのおかげで、わたしはこうしてウェールズ様とお会いすることが出来たのよ」

そう言つて、二人は嬉しそうに見つめあう。

しかし、俺は本当のことしか言っていない。むしろあの場でアンリエッタが指揮を執るというのは想定外のことだったんだ。

「しかし、姫」

「アンリエッタと呼んでいるのだろう？ 僕に遠慮しないでいい。それに敬語も止めたまえ、今ここに居るのただのアンリエッタとウェールズだ」

ウェールズ皇太子が、そう言つて笑う。

俺はそれを聞いて、向こうの意志を汲み取った。

「それじゃ、普通に話させてもらうことにするよ。ウェールズ皇太子は何と呼べば？」

「そのまま呼び捨てにしてくれて構わないよ。アレス君」

「それじゃ、ウェールズで。けど、どうしてなのかい？ 僕の父はトリステインで侯爵家で位は高くても、公爵家には劣るしウェールズと比べると身分の差は結構あるんだけど？」

そうは言いつつもそのまま呼び捨てにする。

「僕はね、アレス君。僕とアンを引き合わせてくれた君と友人になりたいんだ。」

それに、君は頭が切れるというじゃないか」

頭が切れるわけじゃなくて、単に経験によるものなんだが。

否定しても仕方ない。

「僕が友人なんて、いいのかい？ ウェールズは一応、皇太子なんだけど？」

「気の許せる友なんていないからね。臣下の皆はあくまで臣下とし

ての立場でしかないんだ。

僕の求めるのは友なんだよ。アンリエッタと君との関係のように」
「ウェールズがそういうなら。プライベートの時は友人としてあわせてもらおうよ」

「ありがとう」

ウェールズはそういうと笑顔で礼を言うのだった。

その後は、三人で軽く談笑すると、翌日の事もあり解散する。

城から外に出ようとした時、俺はウェールズに引き止められた。

「どうかした？ ウェールズ」

「実は、君に折り入って頼みがあるんだ」

その顔は真剣で、俺の目を見ていた。

俺は周りを見て。

「どこか聞かれない場所は？」

そう尋ねるのだった。

翌日、アンリエッタ連隊と、ウェールズ率いる中隊がともにレティバーミンの街へ出発。

その日の夕方にレティバーミンの街について、街に隣接した臨時駐屯地で野営する。

部隊を整えて、さらに翌日に第五要塞へ。

そこで、集結した第二師団と合流したのだった。

レティバーミン第五要塞、作戦会議室。

収容人数は百人程の部屋に、各連隊長、大隊長、中隊長が集まっていた。

作戦を指揮するウェールズ皇太子が、ヴァリエール公爵から作戦の内容を聞いて全員に伝えていた。

作戦開始は、明日の日没。

夜間の戦闘は向こうも得意とするところだが、連合軍が日没に作戦行動をすることは今までなかった。

すでに、敵が確保する要塞への諜報活動は終えていた。

「現在、レコン・キスタの部隊は二個大隊を各要塞に留めて、全てレティバーミン第一要塞へ集結している最中だ。

向こうが守る二つの要塞を明日一気に奪い返す。

その後、すぐにアンリエッタ連隊が先頭に立ちレティバーミン第一要塞への攻撃を開始する。

この作戦はスピードが要するため作戦は三日以内で終了。

もし、レティバーミン第一要塞を落とせない場合を含めて、いかなる作戦が失敗した場合でも速やかにレティバーミン第五要塞へ帰還し、ここを守りとする」

ウェールズがそう言うつと会議室を見回した。

誰も質問で手を上げるものはいない。

俺も含めてアンリエッタ連隊は事前に話を聞いているし、他のものも特に無いようだ。

「質問が無いなら、各連隊にて打ち合わせをするように。以上」

会議が終わり、各連隊が受け持つ内容を打ち合わせる。

俺達が行う作戦は、各連隊がそれぞれ四つの要塞を落としている間に第一要塞を攻め入る準備を整えることになっていた。

伝令が来ると同時に、第一要塞への奇襲を開始。

敵前衛部隊を惹き付けて側面から他の第二師団が二手に別れて襲撃する手はずになっていたのだ。

アンリエッタから、その旨を再度確認を受けて解散する。

翌日、アンリエッタ連隊は第二師団が進軍するのと併せて出発をした。

出発は第五大隊を先頭に、降順に出発。

アンリエッタは第五大隊と共に出発をしていた。

そして第二大隊が出発する時、俺は第二大隊の隊長にあるものを托した。

「しかし、それではアレス殿！」

「ウェールズ総司令官からの命令です。この手紙を姫殿下に合流した時にお渡し下さい」

「そうですか……。それでは御武運を」

そう言つと第二大隊は第一大隊を置いて、出発するのだつた。

「マスター……。危険よね？ この作戦」

「そうだな。みんな了承してくれたとは言え、無茶な戦いになる」

「ルイズ、ごめんな。サイト、ルイズの事は任した」

ルイズとサイトはアンリエッタと共に行かせた。

俺専属の衛生兵とは言え、何があるか分からないから一緒に行かせた。

ちなみに、第五大隊のうち一個中隊が衛生兵の部隊である。

サイトにはこれから俺がすることは話してある。

かなり反対されたが、何とか抑えた。

これを行わないと、こつちが不利になる恐れがあるのだ。

「マスター、無茶しないでよ。あたしも力になるから」

「ある意味、ノルンが居れば怖いものはないってとこだな」

「精霊魔法だつて、万能じゃないんだよ？ 守りに適しているから良いけど」

「だから、俺が残つただけだな」

俺がアンリエッタ連隊から一部隊だけ残つた理由。

それは、ウェールズ皇太子とのニューカッスル城での話しにまで遡る。

折り入つて頼みたいことがある。

その言葉を聞いて、俺はウェールズ皇太子の部屋に行つた。

彼の部屋は質素だつた。

恐らく、この戦争で必要最低限のもののみ残したのだろう。

同盟を組んでいるとは言え、トリステインも金持ちではないのだ。アルビオンがお金を出せないと戦列を整えるのは難しかったのだろつ。

俺とウェールズ皇太子は、窓の近くにある椅子に向かい合つ形で座つた。

「それで、頼みごとって何なのかな？」

俺が切り出すと、ウェールズ皇太子は言わずらそうにしながら重い口を開いた。

「実は、レコン・キスタは現在のアルビオン、トリステイン連合軍とも接触をしているという話を聞いたんだ」

「それは……」

内通者がいる。

そうなのだろう。

そして、ウェールズ皇太子も頷いて続けた。

「裏切り者がいるようなんだ。事実、ここ二、三ヶ月の戦いはほとんどが先回りをされるような戦いだった。

全部では無いが情報が確実に漏れていると考えられるんだ

そこで、アレス君にあぶり出しが出来ないかと思ってね」

「アンリエッタから何を聞いているのか知らないけど、買いかぶりすぎてない？」

「いや、君は自分を過小評価しているんだ。話を聞く限り、今回の作戦の大本はアレス君だと聞いているよ。

それに、創造の二つ名を持っているじゃないか。

平民の兵に少しでも強力な武器をと連式弓を作った。君は頭がいい」

「参ったな。そこまで評価して貰えているなんてね。

でも、やっぱり過大評価だよ。あんなのは。

とは言え、あぶり出しの件は引き受けるよ。誰の手も掛かっていないと思われる僕だから頼みたいんでしょ？」

「そういうことだね。アレス君、無茶を言うようで悪いと思うが」

「いいよ。それに僕も多少は考えていたんだよ。内通者に関しては」

「そうなのかい？」

「確証は無かったんだけど、レコン・キスタを支持する考えが徐々に広がっているなんて噂を聞いていたからね」

「そうだったのか」

内通者、裏切り者はいつの時代もある。

俺自身も学院に居たからあまり聞かなかったが、部隊を編成した際に部下からそんな言葉を聞いたのだ。

「ちなみに、そうなるはこの作戦も失敗に終わりそうだね」

「やはりそうか？」

「だったら、裏を搔くしかないか。ついであぶり出しも」

そう言って語ったのは、向こうが情報を掴んでいた場合の行動だ。恐らく、四つの要塞のうちいくつはくれてやろうと向こうは考える。

これは、第五要塞を落とすのに兵を回すためと、第一要塞の守りを固くするため完全には押さえ切れないと考えるからだ。

事実、レコン・キスタは二個大隊を残して引き上げている。

場合によってはその二個大隊も直前で引き上げるなどして、四つの要塞が全て丸裸で渡すこともありえる。

こちらの第五要塞も全くの丸裸と言うわけには行かないため、一個大隊くらいは残す。

そこを攻めることを考えて一個連隊から師団レベルで兵を使ってくる。

こっちは襲って来るとは考えていないために、油断していると思うのだ。

だからこそ、俺の部隊を残す。

第五要塞を襲撃する部隊を左右から襲撃して敵を混乱させて、撃退だ。

混乱したところを第五要塞を守る部隊が正面から攻撃する。

多少の戦力差はそれで何とかなるだろう。

その作戦をウェールズに聞かせると、渋い顔をして俺を見る。

「だが、それだと君が危険なだけであぶり出しにならないのじゃないのか？」

そう、あぶり出しにはならないのだ。

これはあくまで情報が漏れていることを知っているというアピー

ルでしかない。

だが、そこに俺には考えがあった。

「この事は僕らしか知らないから、ある程度あぶり出せるんだ」

「どうということだい？」

「僕の部隊は残るけど、あとで連隊全部に戻ってきてもらうんだ。手紙と伝令でね」

「手紙と伝令で？」

「そう。アンリエッタの性格は知っているよね？」

「知っているつもりだけど、それは君の方が詳しいんじゃないのか？」

「まあね。で、手紙はウェールズに書いてもらいたいんだ。

内容は、僕が敵をひきつけるのに残っていること。

助けに戻ると皆に宣言すること。

伝令で第五要塞が襲われていることを言えば、助けに行こうとするからね。

そして、そこに反対してチャンスと言って進軍をさせるものが内通者の可能性がある。

何せ、作戦失敗時は第五要塞に戻ることになっているんだから、さ。

チャンスじゃないし、作戦通りなら戻るのが筋でしょ？」

「そうすると、あとは、その反対するものを監視すればいいと言うわけかな？」

「そんなところだね」

「だが、それでは他の部隊はどうなるんだ？ アンリエッタ連隊に裏切り者がいるとは限らないぞ？」

「ウェールズ、作戦失敗時は引き上げだよ？ そっちの部隊にもそれを止める人間がいてもおかしくないじゃないか」

「似たようなことをいう奴がいると言うのか？」

「そうだよ。伝令は何もアンリエッタにだけ送るわけじゃないからね。

各連隊長に、誰からか反対をするものが居なかったか聞けばいいんだよ。

何せ、情報が漏れるにしても下っ端じゃ厳しいよ。
ある程度、そう中隊長くらいなら出来るでしょ？」

作戦を兵に伝える役割の人間が知らない、事前に作戦を知りえない。

だとすると、会議に参加できる中隊長以上が裏切りの候補だ。

「ふむ。そうすると今回の作戦は始めから成功しないってわけだ」

「内通者がいるって聞いちゃうと、ね。成功しないよ。むしろあぶり出しは出来るから」

とは言え、参ったものだ。

最初から作戦が駄々漏れじゃ、負け戦だ。

この話を聞かなかつたら第五要塞が落とされていた可能性があるし、そっちへ軍を戻すにも挟み撃ちになる可能性があった。

「うまく行くか？」

「行かさないやダメだね。挙動不審な人間をあぶり出すためにさ」
ウェールズ皇太子はそれに対して頷くのだった。

第二師団が、二個大隊残して全軍が進軍した。

俺は、残った二個大隊に敵が襲撃してくる可能性があることを伝えて、迎撃準備をさせる。

第一大隊は二手に別れ、ここに第五要塞へ通じる街道の左右にある林に部隊を展開した。

右翼を俺率いる兵三百が、左翼は副官が率いる三百の兵で待ち構えた。

「アレス隊長」

そこに、中隊長が一人俺のところへやって来た。

「どうしました？」

「街道の先より、二個連隊が進軍しているとの情報がありました。隊長の言つとおり、手薄になる第五要塞は標的だったようです」

中隊長がそう言うと、やるせない顔をした。

俺は裏切り者がいる可能性を、中隊長には話しておいたのだ。

「わかりました。左翼の部隊と第五要塞の部隊に伝令を。攻撃準備をするようにと」

「了解しました」

中隊長はそういうと、部下に伝令の事を伝えるのだった。

しばらくして、二個連隊が街道を通る。

楽勝だと思っているのだろう。

笑いながら敵は街道を歩いていく。

後方の一個連隊の後尾が通り過ぎようとした時、俺は合図として部隊に矢を射るように命じた。

「撃て！」

百を超える矢が一秒の間に二回放たれる。

戦いが始まったのだ。

第十七話（前書き）

この小説は「ゼロの使い魔」の二次創作になります。

また、独自解釈、独自設定などあり、表現も作者の都合で書いています。

そのため、真に「ゼロの使い魔」のファンと言う方には不快な思いをさせる可能性があるのをご了承ください。

また、読んでいる途中、感情的になったり、気分が悪くなった場合はすぐに閲覧するのを止めて気分を落ち着かせることをお勧めします。

第十七話

戦闘は、序盤はこちらが有利だった。

側面からの矢での攻撃、連射が利く連式弓のため相手の体制を一気に崩すことが出来たのだ。

次に、前衛部隊の突撃。

魔法衛士隊のように接近戦が得意なメイジは別として、普通のメイジは後方からの攻撃が基本。そのため、前衛が斬り掛かったときに対処しきれずに倒れていくメイジが多数。

戦闘開始から、五分で一個大隊は倒せた。

しかし、有利だったのはそこまで。

襲撃の混乱が収まり始めて来て、向こうの攻撃が激しくなる。

前衛部隊は全員平民だ。

メイジが攻撃したらひとたまりも無い。

「前衛部隊下がれ、後衛部隊は援護しろ！ メイジ部隊、第五から第七小隊防御魔法に集中！ 残りは各自判断の元迎撃！」

俺の指示で、前衛部隊が後退する。

戦場では丁寧な言葉など使ってられない。戦場でのアレスは、むしろ俺そのものだ。

メイジ部隊の防御魔法が、俺達の部隊を丸ごと、ガード・フィールドで防御している。

前衛部隊は、後方からの援護を受けながら、ガード・フィールド内に入った。

だが、攻撃は激しい。ガード・フィールドは魔力・物理の両面を防げるがそれだけに範囲が広いと消費魔力は大きく徐々に押されていく。

「ノルン、風の精霊に頼んで防御結界だ。頼めるか？」
「任して」

そついうと、ノルンが精霊に祈りを捧げ始める。

「この地に住みし、風の精霊よ。我、風に守護せし者。私の願いに耳を傾けよ。」

守りの風、命を運びしその力、我らを守る風の結界となりて、我らの命を奪う力を退け」

ノルンがそう祈り終わると、風の壁が俺達を包み始める。

敵の方から動揺の声が聞こえてきた。

それもそのはず、精霊魔法を使うものは先住の民エルフを始めとしたものたちだ。

ハルケギニアに住む、人間には扱えない。

「これが、精霊魔法。凄いな」

「当たり前よ。マスター達の魔法は世界を無理やり変えているようなものだけど、あたし達の魔法は精霊達の力そのもの。そこにある力を最大限に発揮するんだからね！」

もつとも、契約をしたら守るところかこの地ではあたしに敵はいなくなるけど」

ノルンは得意そうに言う。

俺はそんなノルンに尋ねる。

「この場にいる、みんなは風の守護を受けれてるのか？」

「そうね、この風の結界に自由に出入りできるわ」

「そうか、ありがとう」

ノルンの頭を軽く撫でると、彼女は嬉しそうにしていた。

この風の守護があるうちに、ある程度崩しておきたい。俺は指示を出した。

「メイジ部隊第七小隊以外、後衛部隊は結界内からの遠距離攻撃！」

メイジ部隊第七小隊は前衛部隊の負傷者の手当てを行え！」

そう指示を出すと、前衛部隊に出た負傷者を第七小隊が水の魔法で手当てをし始める。

秘薬もルイズが研究を重ねた傷薬が用意されている。

これは外傷に関して、生成コストが従来の秘薬の十分の一でなおかつ水の魔法の効果を倍増させる。ルイズが、怪我人を効率よく治

療させるために開発したものだ。

「ギルス副隊長」

俺は第一大隊の副官を呼ぶ。

ギルス・ウェーダ・セシド・ド・エルモンティス。

ヴァルガード家の近くに領地を持つ、伯爵家の息子で、俺より年上である。

特徴的なのは銀髪の髪に、右頬の切り傷だ。

土のトライアングル。錬金の使い手でもある。

「はっ」

「このまま風の結界にいたるだけでは、大した損害を与えず敵が逃げ出す。結界からの攻撃をメイジ部隊は三個小隊、後衛部隊は五個小隊で継続。残りを側面からの攻撃。」

側面からの攻撃部隊は君に一任する。

攻撃の合図は、攻撃合図は私の炎の魔法だ。合図の後、側面からの攻撃部隊の指揮を取ってくれ」

「は！ 各員に継ぐ！」

俺の指示を復唱して、伝令を行う。

メイジ部隊は第四から第六小隊が、後方部隊は四個小隊が側面からの攻撃として移動を開始した。

「さて、俺も合図になる援護攻撃をするか」

俺はそう言って、詠唱を唱える。

これは土、風、火のトライアングル魔法だ。

空気中の酸素を水素に練成。酸素と水素を二対三の割合で成人の頭くらいの大きさに圧縮、それを逃がさないように風でコーティングし、周りを火で包んだ魔法だ。

水素爆発が強力なのは、化学で習った知識だ。基礎的な知識であるが、そんな基礎的な知識でも魔法が使えればとてつもないものになる。

「バースト・ブリッド！」

バースト・ブリッドを高速で撃ち放つ。

風の結界を抜けて、そのまま敵部隊の前衛部隊を飛び越える。

そして、後衛部隊と前衛部隊の間くらいに着弾した。

その瞬間、小さい太陽な輝きが起こると、とてつもない熱と爆風が吹き荒れた。

周りの木々も燃えている。敵部隊はそれで混乱した。

そこにすかさず、側面からの攻撃部隊がなだれ込んだ。

数の差は以前、五倍以上はあるものの俺は手ごたえを感じていた。しかし、有利な攻撃もやはり数が少ないと厳しいものだ。

再度与えた混乱も十分と経たず、敵は陣列を再度整えて攻撃してくる。

ノルンも風の結界を維持するのが、厳しくなり今は解除された。

結界を失い、なおかつ敵の攻撃が激化すると、さすがにこちらが不利になる。

側面攻撃部隊を引き上げさせて、合流した

「各員、後退せよ！　メイジ部隊はシールドで敵攻撃を凌げ！　前衛には私が出る！」

「マスター！」

「隊長、それは危険です！」

ノルンと近くに居た兵士が止めようとする。

しかし、敵前逃亡など出来るわけがない。ましては自分だけ安全な場所にて指揮をしているだけでは尚更だ。

「後退するための時間稼ぎだ。あと少しすれば、アンリエッタ連隊が来るはず」

そう、時間にしてそろそろアンリエッタ連隊が戻ってくる頃だ。時間稼ぎはした。敵も何とか二千、一個連隊並みの損害を与えている。

アンリエッタ連隊と合流すれば、敵を敗走させることも全滅させることも出来るはずだ。

俺は前線に出る。

矢が、魔法が飛び交い、剣と剣の交わる音が響き渡っていた。

俺の部隊にも被害が大きくなっている。

「ここは私が引き受ける！ 全員後退しろ！」

俺の言葉に、戸惑う隊員たち。

小隊長らしき人間が、それ代表して口にする。

「しかし、危険では！」

「問題はない！ 早くしろ！」

俺が叱責すると、敬礼をして伝令していく。

多くのものが後退し始めた。

「ノルン、俺だけなら結界も維持できるな？」

「もちろん！ 使い魔の本分はマスターを守るからだからね！」

そう言つと、ノルンは再び風の結界を俺のみに張った。

これで俺は気兼ねなく魔法が撃てる。

俺の周りに十個の光の弾が現れる。

それを敵に向けて撃ち放った。

「ライト・ブラスト！」

光が敵に向かって、地面に突き刺さる。

それと同時に爆発。土が吹き飛び、石が爆風で敵に襲い掛かった。

すぐさま、敵も反撃してくるが全て風の結界に阻まれる。

続けざまに、俺はライト・ブラストを二回、撃ち放つ。

しかし、敵の勢いは衰えない。

「多勢に無勢だったか」

「マスター、諦めるのはまだ早いでしょう？」

「まあな」

ノルンの顔が青い。

精霊魔法の維持で、明らかに精神力を消耗していた。

契約しているならまだしも、非契約状態の精霊魔法は精神力を大

幅に要するらしい。

そんな状態になりながらも、俺を守ってくれているのだ、ノルンは。

「まだまだ、ここは通せないな」

俺はそういうと、杖を再度構えなおした。

その時、俺の後方から光が敵に向かって放たれた。それと共に爆発。

すかさず、矢が俺の頭上を越えて敵を貫いていく。

俺が振り向くと、そこには体勢を立て直した第一大隊がいた。アンリエッタ連隊が駆けつけて来たのだ。

その先頭にはユニコーン。

そうアンリエッタが杖を構えていたのだ。

「全員、アレス第一大隊長を援護！」

その声と共に、光が、風が、炎が一斉に敵に降り注ぐのだった。その援護攻撃に俺は一気に後退する。

後退するのと入れ替わり、アンリエッタ連隊が突撃していく。すれ違いざまに、俺はアンリエッタに睨まれた。

どうやら、俺の部隊だけ敵を足止めしていたことに怒っているのだろう。

まあ、俺にとっては勝利の女神がやって来たに等しい。後で存分に怒られることにした。

「アレス隊長、ご無事で」

「ギルス副隊長。損害の報告を」

「は！ 前衛部隊、負傷者四十八名。うち重傷者十三名。後衛部隊、負傷者十名。メイジ部隊負傷者六十四名。いずれも軽症です。現在、衛生部隊が治療に当たっています」

「被害は中規模つてところだな。動けるものは後方支援だ」

「アンリエッタ殿下から待機の指示が出ています。第一大隊は休めとのことです」

「姫殿下がか？」

「そうよ」

その言葉に俺は振り向いた。

そこにいたのはサイトと俯いているルイズだった。

「ギルス副隊長、皆に十分な休息。メイジ部隊から十名ほど交代で

見張りを付ける。戦況が悪くなるなら援護する。以上だ」

「わかりました」

ギルス副隊長はそう言って敬礼して、足早に去っていった。気を利かせてくれたのだろう。

いや、これから見る修羅場を見たくなかったのだろう。

「マスター、あたしも少し休むね。終わったら起こして」

「寝られるか？」

「寝る」

そういうとノルンは俺の肩から離れてサイトの肩に乗った。

サイトは、知らねえぞって顔をしてる。

「アレス」

ルイズにしては低い声だ。

俯いたままのため表情は見えないが、どう考えても怒っていた。

「ルイズ、僕が悪かったよ。でもわかってくれっ、！」

目の前に火花が散ると、辺りに俺が叩かれた音が響き渡った。

正直に言って痛い。

たぶん、敵から攻撃を受けていた方が楽なんじゃないか？　と言うほどだ。

「アレス、わたし言ったはずよ。あなたの側を離れないって。それが、無理やり第五大隊と合流させられたと思ったら第一大隊は、敵をひきつけて残った、ですって？」

そんなに、わたしは頼りない？」

睨み付けられていた。

ルイズは涙を溜めた、悔しそうな表情で俺を睨みつけていた。

「いや、僕はそんなつもりじゃ」

「しゃべり方、戻さなくていいわ。普通にしゃべったら？」

口調が荒い。

本気で怒っているらしい。

「ふう……。上手く行かないもんだな」

「あの時、言った、わたしの意志を尊重するって嘘だったのね？」

「あれは嘘じゃない。だから部隊に参加しても何も言わなかったんじゃないか」

「でも、自分から遠ざけたわ。危なくなるからって」

「戦略的な部分もあるんだ。万一、俺の読みが外れれば合流は遅くなる。アンリエッタ連隊には少しでも優秀な衛生兵が必要だ。

それを考えると、ルイズにはアンリエッタに付いていて貰った方がいい」

「だからって……。心配したんだからね！ アレスの部隊が残って敵を引き付けているって聞いて！ 怖かったんだから、もし前みたいなことになったらどうしようって！」

「それは悪いと思っている」

「だったら、もうわたしを離さないで！ わたしだって役に立ちたいし、アレスの支えになりたいんだから！」

そこまで言うとは、ルイズは俺に抱きついてきた。

「馬鹿！ アレスの馬鹿！」

そう言っで、俺の胸を叩く。

結構、力が籠っていて若干痛みを感じる。

だが、俺はそれを甘んじて受けた。

「すまない」

「次はどんなこと言われても側にいるから！」

「わかったよ」

俺はそう言っでルイズの頭を撫でるのだった。

第五要塞防衛戦は勝利で飾った。

二個連隊率いた、レコン・キスタの部隊も奇襲と、合流した連隊の攻撃で後退しざるを得なかったのだ。

とは言え、連合軍の当初の作戦は失敗。第五要塞に、再び全軍が集った。

第五要塞を襲撃されたことに、若干の動揺が見られたがウェールズ皇太子がそれを見抜いていたことを言うと逆に士気が高まった。

敵を欺くならまず味方から。

ごく少数の味方のみで敵を掃討したのだと。

「これらの事実は、我々に勝利があることを確信することだと思うが、皆はどうだ！」

ウェールズ皇太子がそう叫びと再び歓声があがる。

「我々は勝つために戦う。これはその第一歩なのだ！」

ウェールズ皇太子の演説に、ムードは最高潮に高まる。

演説の最後に、この勢いで明日進撃することを告げるのだった。

演説が終わり、俺はウェールズ皇太子に呼ばれて、彼の部屋に行く。

ルイズも来ると言って、離れないため仕方なく連れて行くことにした。

ウェールズ皇太子が待つ部屋に着くと、ノックして入った。

「アレスです。入ります」

「ああ、そこに座ってくれ」

そう言って部屋の中央にある椅子を勧めてくる。

俺とルイズが座ると、向かい側にはウェールズ皇太子が、座った。

ウェールズは俺の隣に居るルイズを見ると、あいさつをする。

「ちゃんと挨拶するのは始めてだね？　僕はウェーズ・テューダだ。

ミス・ヴァリエール」

ルイズは自分の名前を呼ばれると、やや驚いたように言う。

「知っていらっしゃるのですか？」

「アンから聞いているよ。彼女の友達なのだろう？」

「はい」

ウェールズ皇太子は俺の方を見て頭を下げる。

「アレス君、すまなかった」

「ウェールズ、気にしないでよ。あれは僕の提案じゃないか」

ちなみに口調はアレスに戻した。

さすがに、ルイズはともかく他の人間の前では俺はアレスであるからな。

「確かにそうなんだが、僕と君しか知らなかったと言うのは少々まずかった」

「アンリエッタかい？」

「まあ、ね。そんな大事な話をどうして自分に話さないんだって怒られてしまったよ。」

君も、可愛いフィアンセに怒られたって話だしね」

そう言つて、ウェールズ皇太子はルイズを見る。

ルイズはやや恥ずかしそうに俯いた。

「そう言えば、アンリエッタはどうしたんだい？」

「アンなら、ヴァリエール公爵と君の父君と一緒にだと聞いているが？」

細かい打ち合わせをしているのだろうか？

まあ、アンリエッタまで居たら俺はかなり怒られただろう。

彼女も結構、気性が激しいからな。

「僕がここに呼ばれたわけは、例の？」

「ああ。君のおかげで少しは絞れたよ」

「ウェールズ様、それは裏切り者がいると言う事ですか？」

ルイズには事のいきさつを話す関係上、全て伝えてある。

裏切りものだなんて、なんて恥知らず！と怒っていた。

ルイズは、貴族については俺の影響のせいかな、それ程拘りはしない。

しかし、それとプライドはまた違った。

「彼女に話したんだね？」

「話の都合上、ね」

「そうか。まあその通りなんだ。アレス君のおかげで何人か尻尾を出してきたよ。この師団に少なくとも数百人はレコン・キスタに関わりがあるものがある。」

君達の連隊にも、第三大隊に怪しい人物がいると聞いた」

「やっぱり。でも目立ったことは出来ないから少しは大人しくするんだろうね？ 何せ完璧に第五要塞を落とすはずが、逆に返り討ち

にあつたんだから」

こつちとしてはこんなに上手く行くとは思わなかった。

被害は出たが、結果オーライだ。

「ああ、そうだろう。アレス君のおかげだ。ありがとう」

「いや、構わないよ。怪しいと思われる人物への尋問等はどうするんだい？ 必要なら僕がやっておくよ？」

「少しの間、泳がせておくよ。それより、明日の勝利に乾杯と行こうじゃないか」

「ウェールズ様、お言葉ですが明日は進軍されるのですが？」

「ミス・ヴァリエール。堅いことは無しにしよう。何、軽く飲むだけだ」

そう言つて、ウェールズは手を叩き使用人を呼ぶのだった。

翌日、第二師団とアンリエッタ連隊はレティバーミン第一要塞へ向けて進軍。

多少の疲れがあるが、ウェールズ皇太子の演説に士気を上げている今の連合軍に怖いものは無かった。

レコン・キスタの方は、すぐに進撃してくるとは思つておらず準備がままならないままの戦闘に取り乱し、結果は敗走。

しかし、戦闘自体は激しく決して互いに楽な戦いではなかった。

それでも、連合軍の方が被害は少ない。

飛翔弾の活躍もあつたからだ。

戦闘開始前に、千を超える飛翔弾を放ち、第一要塞を守る前衛部隊に大打撃を与えたのである。

この戦いで、飛翔弾を用いた戦法の有効性が認められて、正式に採用されることになった。

最終的な被害は、連合軍が約二千の損害。

レコン・キスタは約四千五百程の損害を受けるのだった。

第十七話（後書き）

いろいろとすみません。

戦闘シーンは結構難しいものです。

もっと上手く表現できれば良かったのですが…。

また急ピッチで話を進ませている関係上、サイトのセリフが少なかったり本来アンリエッタからもお灸を据えるはずが、省きました。

ちなみに、ルイズ専属の剣士として存在するサイトは今回戦いに参加しませんでした。

サイトは衛生部隊が襲撃された場合の護衛なので。

ジュネーヴ条約では衛生兵は保護される対象らしいですが、ハルケギニアでは関係ないですね。

第二部はあと三話くらいで終了して、学院に戻れたらなと思っています。

そのため若干、描写を省くことがありますがおご了承下さい。

第十八話（前書き）

この小説は「ゼロの使い魔」の二次創作になります。

また、独自解釈、独自設定などあり、表現も作者の都合で書いています。

そのため、真に「ゼロの使い魔」のファンと言う方には不快な思いをさせる可能性があるのをご了承ください。

また、読んでいる途中、感情的になったり、気分が悪くなった場合はすぐに閲覧するのを止めて気分を落ち着かせることをお勧めします。

第十八話

レティバーミン第一要塞を奪還した翌日。

俺は作戦会議に赴いていた。

ウェールズ皇太子、アンリエッタを始め各連隊長がそろっている。そこに、ヴァリエール公爵はアンリエッタのサポートとして近くに控えていて、俺と父さんはヴァリエール公爵の隣に座っていた。会議は隊を休ませるべきと言う意見と、追撃の手を緩めるべきではないという意見で割れている。

レティバーミン第一要塞奪還自体は、被害が少なかったとは言え、それでも一個連隊分の被害は受けていた。

本来なら火薬の方も消費が多く、補給して十分に整えてから攻めたいところなのも確かだ。

だが、今、向こうは撤退をしている。

つまり向こうも整っていない状態だ。

そして、ドルバータの部隊と合流したらそれはそれで厄介でもある。

レティバーミンに侵攻していたレコン・キスタの部隊は二個師団で二万五千。

第五要塞襲撃時に撃退した数は二千。レティバーミン第一要塞奪還で四千五百。三個連隊くらいの損害は与えたが、それでもまだ二万近い戦力だ。

ドルバータの部隊が一万五千。合流されれば連合軍より、おおよそ三倍の戦力になるのだ。

一気に攻めたいところでもあるのだ。

その攻め際で、口論は続く。

時間が経てば経つほど、敵も態勢は整えられる。代わりにこちらの疲労も回復出来るわけだが。

戦力で三倍もの差を準備を整えた相手に勝てるか？と言うものが

ある。

奇襲は必要だが、そうそう何度も成功するとも思えない。

「アレス、お前は思う？」

そう尋ねてきたのは父さんだ。

父さんは慎重派で、どちらかと言えば部隊を整えてから攻めたいはず。

「私は、疲れがあるとは言え、勝利の余韻がある今が攻め時だと思います」

「そうか……。私は難しいところだな。だが、お前が言いたいこともわかる。ヴァリエール公爵はいかがですか？」

「私は、アレスの意見に賛成だが、敵の追撃したあとはさすがにレティバーミンで部隊を整える必要があると思ってるが」

「確かにそうですね。アレスの意見に同調してみるのも良い結果を出すかもしれません」

父さんがそういうとヴァリエール公爵も頷く。

そして、アンリエッタに進言して、アンリエッタはウェールズ皇太子に話を持ちかけた。

ウェールズ皇太子はやや考えるようにすると、いきなり立ち上がつて宣言をする。

「今回の戦は勝ち戦だ。レティバーミンの奪還も成功して、勝利にみな沸いている。

この勢いを殺さずに、追撃を行おうと思う。

目的は、敵戦力をそぎ落とすこと。全滅できればいいが、出来なくても被害を大きく出来ればいい。

後は、レティバーミンで部隊を整えて、ドルバータへ侵攻しようと思う。

この意見に反対するものはいるか？」

ウェールズ皇太子がそう言って全員の顔を見渡す。

反対意見を言うものは居なかった。

あれだけ、口論が続いていたというのに、だ。

「では、撤退中の部隊を追撃する！ 全部隊、夜までに準備を整える！ 追撃するなら明日の朝がリミットだ！」

敵への追撃が決った。

だが、その決断は一つ波乱を呼び起こすことになる。

俺は第一大隊の控えるキャンプ戻ってきていた。

レティバーミン第一要塞は大きいが、敵が去った後だけにまだ整理がついていない。

そのため、第一要塞の外で俺達はキャンプを張っていた。

「マスター」

サイトの肩に座っていたノルンが、俺を見つけると飛んで俺の肩に座る。

「やっぱり、マスターの肩が一番落ち着くわ」

「悪かったな。俺の肩はあまり心地よくなくて」

「別にサイトの肩が悪いって言うてるんじゃないの？」

俺が最近会議とかが多いせいで、ノルンをサイトに預けることが多くなった。

結構、この二人は中が良いので俺も嬉しい。

「アレス」

ルイズが俺の側に来る。

話もしたいが、やることはやってしまおう。

「あ、ごめん。ちょっと待っててくれるかな？ ギルス副隊長」

俺はギルス副隊長を呼ぶ。

会議で決まった追撃を伝えるためだ。

「はっ。何でしょうか」

「今夜、撤退中のレコン・キスタを追撃することになったから、各中隊長に伝令をして下さい。」

追撃に必要な装備等はギルス副隊長に一任します」

「了解しました」

ギルス副隊長は敬礼をすると、すぐさま中隊長達を集め始める。

ルイズの方を振り返る。

「ごめん、それで何かな？」

「ちよつと散歩しない？」

散歩か。

この頃、会議等で忙しくあまり構って上げられなかった。

「そうだね、行こうか」

「あたしは一緒にいいの？」

ノルンがルイズに尋ねる。

「構わないわ。それに、あなたはアレスのパートナーじゃない」

「ルイズでしょ」

女の子二人はそういつて微笑み合う。

俺が居ない間に何かあったのか？

そう考えても俺には検討も付かないな。

「あ、俺もいいのか？」

「サイトは……。待っててもらえるかしら？」

「あ、そうですか」

ルイズの言葉にやや肩を落とすサイト。

別に邪険にしているわけじゃないようだから、そこまで落ち込まなくても、な。

俺はサイトを置いて、ルイズ達とテントの外に出た。

外は、追撃の準備に追われている。

アンリエッタ連隊が先頭に立つため、俺達の部隊が一番準備が忙しかった。

俺は、ギルスに一任したからそこまで忙しくは無い。

最終確認だけすればいい。

「戦争なのよね」

「そうだね」

そんな慌しい状況を見ながら、ルイズはそう呟いた。

「血と、火薬の匂い。敵味方関係なく、倒れていくのは学園にいたら知らないままだったわ」

「後悔してないかい？」

「後悔はしてないわ。何も知らない女のままだったら、あなたの苦
労は知れなかったもの」

ルイズは空を見上げた。

「空はいつもどおりの星空。月も綺麗よね。それが、戦争はその全
部が見えなくなる」

戦争は殺し合いだ。

殺すか、殺されるか。生きるか、死ぬかだ。

周りがどんなに綺麗な花畑だと、空がどんなに綺麗だろうと、
どんな美しい情景があろうと、ひとたび戦いになればそれを見る余
裕はない。

「わたし、今回のことであんなに戦争を無くしたいって」

「それは誰しも考えることだね」

「人間くらいよ。同じ種族同士で殺しあうなんて」

そうノルンが呟いた。

ノルンはフェアリーだ。より、自然界に近い立場の種族。

戦争なんて、自然界には存在しない。

「ノルン。あなた達は争いはないの？」

「フェアリーは数も少ないし、争うことはないわね。ちょっとした
小競り合いくらいはあるけど、基本的に争いはないわ」

フェアリーは人間とも友好的な種族で、滅多なことでは人間と敵
対はしない。

敵対するときは、大抵は人間の身勝手な行動で、フェアリーたち
を怒らせるときだ。

それだけに、フェアリー同士でもかなり種族間の交流は友好的な
のである。

「人間も同じ様に出来ないものかしら、ね。マスター自体は争いごと
と好きみたいだけど」

「戦争自体は、好きじゃないんだよ。本来はね？ でも、前世が平
和過ぎたのかも知れない。」

男はどうも争うこと自体が好きだからさ。

フェアリーの男はどうなんだい？」

「うーん。フェアリーの男はせいぜい外敵から身を守るから、確かに争いごとは好きなのかも？ でも、人間の男みたいにわたし達に暴力振ったりしないし、男同士でも喧嘩はほとんどないわ」

その辺は、人間の男より精神的な部分で成熟しているのだろう。

俺達は、ちょっとしたことですぐ喧嘩をする場面もある。

「そう言えば、アレスの前世では戦争なんて無かったのよね？ どうして無かったの？」

「いや、無かったわけじゃないんだよ？ 僕が生まれる以前。あ、前世でだよ？」

その頃には全世界を巻き込んだ戦争はあったけど、負けてね。それから戦争はやらない国として国の決まりで侵略しないと決めたんだ」

決めさせられたと言った方が正しいだろう。

もっとも、あの頃の民衆は絶対に戦争なんて起こさせないと心にあったのは間違いない。

俺は直接知らないが、資料館等に行けばその悲惨さの何分の一かは目の当たりに出来る。

あれを見ると俺も、戦争なんて起こさせたくないと思うのだ。思っていたのだが、今の俺はそれに逆行している。

「レコン・キスタも、今回の戦争に負けたらそう考えるかしら？」

「……。難しいものだね」

民衆が辛い思いをする戦争は、誰しもがやりたがらない。

ましては負ければ尚更だ。

だが、レコン・キスタも連合軍も戦っているのは貴族が多い。

日本のように逆らえば牢獄、さらには非国民扱いで周りからも非難されるような洗脳された状態なら敗戦後はやらないだろう。

だが、レコン・キスタはあくまで貴族だ。たとえ、平民の傭兵を雇おうと。

「人は本当の意味で、反省しないと変わらないと思うよ」

特にここハルケギニアは中世ヨーロッパと文化が似ている。

平民が貴族に仕えるのは当然だとか、そういう考えが根強い。

そして、魔法があるからその権威も絶大だ。

いかに民衆が反乱を起こそうとも、魔法の前には敵わない。

そういった意味でも、平和を本当に考えるのは難しいだろう。

「人間って複雑よね」

「わたしも、そう思うわ」

二人の意見は俺も同感だった。

散歩もそろそろ終わりにして、テントに帰ろうとしたときだった。

爆音が、夜の空に響き渡った。

空気が震える音と、わずかに遅れて火薬が燃える匂いが漂っていた。

「何だ！」

俺はそう叫んで辺りを見る。

アンリエッタ連隊の第三大隊のキャンプ辺りから、火の手が上がっているのが見えた。

「あつちは第三大隊のキャンプよ！」

ルイズが叫ぶ。

俺はその言葉を聞くと、第三大隊のキャンプへと走った。

「わたしも行くわ！」

「ノルン、ルイズと一緒にいてくれ！ 万一何かあったらルイズを頼むよ！」

「分かった！」

ノルンが、俺の肩から離れてルイズの肩に乗った。

第三大隊のキャンプは、襲撃にあったように燃えていた。

火薬置き場が側にあったのが災いしたようだ。

血だらけの人が多い、何人かはすでに駆けつけた衛生兵が治療に当たっている。

辺りを見回すが、ある人が見当たらない。

「ワルド子爵がいない？」

そうなのだ。

ワルド子爵が見当たらない。

今は追撃の準備をしている時間帯だ。いてもおかしくない。

「ノルン、ワルド子爵を探せるかい？」

「ワルド……。ああ、あのお髭のお兄さんね？ わかったわ」

そういうと、ノルンは風の精霊に耳を傾け始めた。

「ワルド様がどうしたの？」

「見当たらないんだ」

俺の言葉に、ルイズが言葉を失う。

見当たらない。それはつまり、爆発に巻き込まれた可能性があるのだ。

彼はスクウェアクラス。風が真骨頂だが、水の治療魔法だって侮れない。

「マスター、向こう木の下辺りにいるみたい」

木の下？

やはり爆発に巻き込まれたか？

「行くよ」

俺はそう言つて、ノルンが指差す方へ行く。

その木はかなり大きい木だった。

木の根元に、ワルド子爵が倒れている。

それ程酷い怪我ではないが、ところどころ血が流れていた。

「ワルド様！」

ルイズがすぐさま駆け寄り、ルイズ特性のポーションをワルド子爵の口元に持つていく。

ワルド子爵に流し込むと、ワルド子爵の傷が癒えていった。

「子爵殿、しっかりして下さい！」

俺が呼びかけると、唸りながら目を開けた。

「子爵殿！」

「アレスに、ルイズか……。気をつけるんだ。

黒い仮面の男がいきなり襲ってきた」

「黒い仮面……」

黒い仮面。五年前、アルビオンへ行った時に襲われたのも黒い仮面だった。

「ルイズ、ノルン。子爵殿を頼むよ？」

「ええ」

「わかった」

俺は辺りを警戒する。

周りでは必死に火を消すために水のメイジが魔法を使っている。

そして、衛生兵も休む暇なく救助に当たっている。

そんな中、俺は見つけた。

空に浮ぶ黒い影。

その数は四つだ。

俺と戦った奴なら、あれは全て偏在だろう。どうやら本体はいないらしい。

そして、その偏在たちは何やら魔法を唱えているらしい。

「つく！ 全員退避！ 上空に敵が居るぞ！」

俺の叫びに一齐に、空が注目される。

それとやつの魔法の完成は、ほぼ同時だった。

「ライトニング・クラウド！」

上空にいる黒い仮面たちはそう叫ぶ。

白い光、稲妻が救助や消火活動に当たっているメイジたちを襲った。

「ガード・フィールド！」

俺はルイズ、ワルド子爵、自分を覆うように防御魔法を張る。

その結果、稲妻は俺の魔法によって防がれた。

周りは稲妻によって地面が抉れ、木々は黒くこげていた。

「アレス……。あいつは気をつける」

ワルド子爵の言葉に俺は頷くと、懐から杖を出し、魔法を放つ。

「ライト・ブリッド！」

光の玉が八つ、俺の周りに現れると高速で敵に向かっていく。

黒い仮面の男達も、それに気が付いたように俺に向かってきた。

「何だつて！」

黒い仮面の男達は、俺の放ったライト・ブリッドを潜り抜けてくる。

いくら何でもそう簡単に避けられるとは思わなかった。

「ノルン、風の結界を！」

「うん！」

俺の指示に、素早く風の結界を張った。

俺はその結界の外に出ると、地面を蹴る。

「ブレイド！」

杖から青白い光の刃が現れる。

これは、魔力刃を作り出す魔法だ。

属性によって色が変わるらしい。

俺はそのブレイドで、黒い仮面の男の一人に切りかかる。

当然、側面から妨害が来るがそんなのは分かりきったこと。

そして、こういう時に失った左手が役に立つのだ。

俺は側面から攻撃してこようとする黒い仮面の男に向かって左手を向ける。

手首に巻きつけているのは形こそ違えど杖と同じものだ。

「ライト・ブラスト！」

最小限の魔力で、ライト・ブラストを放つ。

側面から攻撃しようとしていた黒い仮面の男の一人が、この不意打ちに足を止めた。

光が、男の胸を貫く。

さすがの黒い仮面の男も、これは防げなかったらしい。

偏在だった黒い仮面の男は、それで霧のように消えていった。

「なに！」

俺が、切りかかろうとしていた黒い仮面の男が驚愕の声を上げる。

当然だ。

失ったはずの左手から、しかもブレイドを保持したままだ。

「はああああ！」

俺が、黒い仮面の男にブレイドを振りぬく。

黒い仮面の男は、ブレイドの刃から逃れることが出来ず、肩から胸にかけて切断した。

そのまま黒い霧となって消える。

「これで、二人だね」

そう言っただけ俺は、黒い仮面の男を見た。

黒い仮面の男は俺を見据えたまま動かない。

「腕を上げたようだね。しかし、左手から魔法とは……。恐ろしい奴だ」

「奪われた左手。有効に活用しないとね？ さすがに、左手に杖を仕込んでいるとは思わなかったでしょ？」

「ふふふ。確かにね。だが、今度は油断せん！」

そう言っただけ、黒い仮面の男の一人が突っ込んでくる。

五年前より早い！

俺はブレイドを保ちつつ、黒い仮面の男の攻撃を受ける。

岩をも切り裂くブレイドの刃が黒い仮面の男のレイピアと互角だった。

「固定化の魔法か……。厄介だね」

「ブレイドもな」

その声は後ろからだった。

「しまっ……」

声を上げるまもなく、俺の腹が貫かれる。

「アレス！」

「マスター！」

ルイズとノルンの叫びが聞こえてきた。

「ぐっ……」

「油断しては行けないな」

そう言ってくるが、二人目はまだ俺の目の前にいる。

明らかに、どこかに潜んでいたのだ。本体含めて五人だ。どうして、本体がいないと俺は決め付けていたのだろう。

「死ね！」

その言葉とともに、俺は三方向から貫かれた。

左胸、右の腹、そして、肩だ。

何とかとっさに急所を外すようにしたため、心臓は貫かれなかった。

だが、そこまでだ。

俺は、その場に崩れ落ちる。自分の体を制御できなかった。

「アレスー……！」

ルイズが叫びながら結界から出た。

まずい、ルイズが標的になったら俺じゃ守れない。

「ル……ズ。くっ、来るな」

左胸が烧けるようだ。

しゃべろうとするだけで激痛が走った。

そのためにルイズへ声が届かない。

「アレスから離れて！ バースト！」

ルイズが、杖を振りぬいた。

その瞬間、俺を貫いていた黒い仮面の男のうち、一人の体が爆発する。

そう。爆発だ。

ルイズが、初めて自分でコントロールすることが出来た魔法。

バースト。

その魔法を、今、ここでルイズは使った。

「バースト！」

再び、魔法が放たれる。

爆発は最小限。

黒い仮面の男がまた一人、吹き飛んだ。

「小娘が……！」

黒い仮面の男が、一気にルイズへ詰め寄る。

ルイズも、足が止まっていた。

自分に殺気を向けられて、急に動けなくなったのだ。

「ルイズ！」

ノルンが、風の結界を解除して助けに行こうとするが間に合わない！

俺も、ただ見ているしか出来ない。

俺が動けないのをあざ笑うように黒い影は、ルイズの前に現れた。ルイズも最後の時を覚悟するように目を瞑る。

その時、何かがルイズと、黒い仮面の男の間に割って入るのを見た。

それと同時に、硬い金属音が、辺りに鳴り響いた。

ルイズを助ける者の剣と黒い仮面の男のレイピアがぶつかった音。

「ルイズはやらせねえ！」

ルイズと黒い仮面の男の間に割って入った人物。

それは、虚無の担い手の使い魔、ガンダールヴ。

青いパーカーにジーンズの少年。サイトだった。

第十八話（後書き）

大変、お待たせしました。

8月の中頃から仕事が急に忙しくなり、更新できませんでした。

今回は、勝利に油断しているところレコン・キスタの襲撃です。
アレスはいいところあまりない状態で、サイトにバトンタッチ。
これで、進軍は出来なくなります。

第十九話（前書き）

この小説は「ゼロの使い魔」の二次創作になります。

また、独自解釈、独自設定などあり、表現も作者の都合で書いています。

そのため、真に「ゼロの使い魔」のファンと言う方には不快な思いをさせる可能性があるのをご了承ください。

また、読んでいる途中、感情的になったり、気分が悪くなった場合はすぐに閲覧するのを止めて気分を落ち着かせることをお勧めします。

第十九話

炎の海の中、金属と金属がぶつかり合い、摩れ、弾く。

サイトと黒い仮面の男が何合も打ち合いをしていた。

サイトの左手のルーンがかつて無いほど光、輝きを放っている。

ルーンの力が最大限に引き出されているのだろ。その動きは俺も目で追うのがやっとである。

黒い仮面の男が放つ魔法も、当たることがない。

「アレス！ 大丈夫！」

「マスター！」

黒い仮面の男がサイトに意識が向いているうちにルイズとノルンが俺の側に来た。

ルイズは俺の傷を見ると、苦しい表情を浮かべた。

ノルンも俺の肩で心配そうに俺の顔を見ている。

正直、このままだったら二度目の死を迎えられそう。

「アレス、これを」

そう言っ取り出したポーションを俺の口元に寄せる。

口元に寄せられたポーションを飲もうにも、力が入らない。

今となってはしゃべることすらままならないくらいだ。

「アレス……」

飲むことも出来ない俺に、ルイズはそのポーションを自分の口の中に入れると、そのまま俺の口へと運ぶ。

唇が重ねられると、俺の口が開けられて口移しでポーションが流し込まれていく。

その瞬間、俺は頭に星が浮かぶが如くの、形容するに値しない衝撃を受ける。

例えが出来ないが、文字通り俺は飛び上がった。

「なんだ！ これは！」

そう、体の中を無理やり回復させるような強制回復と言うのだろ

うか？

体も滅茶苦茶熱い。だが、体の傷口は見る見るうちにふさがっていく。

「マ、マスター！ 大丈夫なの！」

急速に回復する俺を見て、驚きながらノルンが尋ねて来た。

「あ、ああ。ルイズ、これは一体……」

「まだ開発中の秘薬、命のポーションよ。人で試すのはアレスが初めてだったけど…… 大丈夫みたい。

人の自然治癒力そのものを限界まで高めて、その限界まで高められた治癒力を保持するために体力を維持させる。そういうポーションなの」

人で試すのは初めてと言うのがとてつもなく怖いが、ともかく筋は通った凄いポーションだ。

自然治癒力を限界まで高めて、それに体が付いていくようにする。発想もだが、実現してしまうルイズの才能に驚かされるばかりだ。

「これなら、大丈夫だ」

俺はそういうと、サイトの方を見る。

ルイズかノルンが何とかするのを分かったのか、もしくはそう出来る環境にするためかずっと敵をひきつけていてくれた。

サイトが俺を見つけると、安心したように笑う。

それと正反対に、黒い仮面の男が舌打ちするのが微かに聞こえた。そのわずかな動揺の隙を、サイトが鋭く中段の突きを繰り出す。

黒い仮面の男は動揺していたため、堪らず後ろに下がった。

「……」

「アレスにルイズ。二人とも俺の大切な友人だ。それを傷つけるのは許せねえ」

「平民がほざくな……。だが、その力は厄介だな。

神の左手ガンダールヴ。だとすれば、その娘は虚無の担い手」

黒い仮面の男が、ルイズを見て言う。

仮面の奥から見える瞳が、危険を感じさせるものだった。

「惜しいが、今日は引くでしょう。だが、次は命が無いと思え」
「行かせるか！」

サイトが地を蹴った。

一瞬にして黒い仮面の男との間を詰める。

驚くべきことに、黒い仮面の男は避けるそぶりすら見せない。

剣が黒い仮面の男の胸を貫いた。

だが、次の瞬間、黒い仮面の男は霧となって消えたのだ。

「な、なんだ？」

「偏在だよ。サイト君。平たく言えば、コピーだ」

驚くサイトに、俺は簡単に偏在のことを教えてやる。

しかし……。俺が本体だと思っていた奴すら偏在だった。

なら、本当の本体はどこにいたというのだろう。

俺はサイトの下に歩み寄る。

「アレス、傷は大丈夫なんだな？」

「ルイズのおかげでね」

そういうとルイズが嬉しそうに頷く。

「なんか、わたしってあまり役に立ってないよ」

「ノルンだって、結界を張ってくれたじゃないか」

活躍の場が少ないノルンが少しむくれるが、あの結界が無ければ

魔法の余波を受けていたところだ。

俺はノルンの頭を撫でながらそう言っていると、少しだけ機嫌を

戻してくれる。

「アレス君」

後ろからワルド子爵が歩いてきた。

ポーションを使っているとは言え、ワルド子爵もあまり無茶は出

来ない体だ。

俺の場合は、完全回復の秘薬らしく問題無いが。

「子爵、大丈夫ですか？」

「ルイズのおかげだよ。僕も、もう少し遅かったら危なかった。

それより、この炎を何とかしないと」

そう言つてワルド子爵が燃え盛る炎を見て言う。

戦つていたから忘れていたが、第三大隊がいたキャンプは炎を上げて燃えているのだ。

ワルド子爵は風の魔法の詠唱を唱えると、どうやら酸素の量を操つて炎を収める。

酸素が無ければ炎は燃えない。

「さすが、子爵殿。風の魔法で酸素を操つて炎を消すとは」

「メイジはただ強力な魔法を使えばいいと言うものじゃない。それはアレス君も知っているだろう?」

「ええ」

常に魔法をどう有効的に使えばいいのか?

どうすれば一番効果的か?

そついうのを考えなければならぬ。

「さて、僕は仲間の治療に当たるとするよ。アレス君、君はこの事をアンリエッタ王女に」

そついうとワルド子爵は、傷つき倒れている仲間の下へといくのだった。

「サイト君」

「ん? なんだ?」

サイトはすでに剣を納めていた。

今はルイズが、怪我が無いか調べているようだ。

両手を挙げて、その周りをルイズが目視で怪我を確認しているらしい。

「良く、ここが分かつたね?」

「ああ、それは急に右目がおかしくなつて、アレスが刺されるシーンが見えてさ。」

二人を探しにテントから出たら、こっちが燃えてるし何かあるつて思つて」

「なるほど。主の危機が見えたつてわけだね」

ガンダールヴの力なら、そついうこともあるのかもしれない。

もしかしたら使い魔全体がそういう能力を持っているのかもしれないが、本当に助かった。

「さて、僕たちは戻ろう。ここは他の人たちに任せるとして」
そう言つて、俺たちはその場を去ることにした。

俺たちのキャンプに戻ると、ルイズとサイトを置いて俺は司令部に報告へと砦の中へと入った。

司令部に行く途中、俺は考えていた。

今日の黒い仮面の男、五年前と同じ奴だったのは確かだった。

そして、五人以上の偏在を作り出せるスクウェアクラスのメイジ。虚無の担い手の存在と、ガンダールヴを知る人間だ。

そしてたった一人のレコン・キスタに侵攻を阻止させられた。これは大きい。

油断していたとは言え、あつさりと襲撃されて侵攻阻止。

まるでこつちの行動が筒抜けのようだ。

あの本体だつてどこにいたのかさえ、結局分らないのだ。

「マスター？ どうしたの？ 何かずつと黙ってるけど」

肩から俺の顔をノルンが覗いて尋ねてくる。

「あ、ああ。さっきの仮面の男のことが気になつてな……」。

五人の偏在を作り出して、なおかつ本体はどこにいるか悟らせなかった。

もしかしたら最初から偏在だけなのかも知れないけどさ」

「敵メイジとしてはかなり脅威つてことは確かね。それで悩んだの？」

「それだけじゃない。虚無の存在とガンダールヴの存在を知っていた。あのルーンはそうそう知っているものじゃないんだ。

そして、ルイズに向けたあいつの目。

あれは物欲しそうな、いやな目だったんだ。

変な意味じゃなくて、ルイズの力を欲していたと言った方がいいかな？」

「虚無の力ってこと？」

「そう。レコン・キスタの目的は聖地奪還。そうならば虚無の力は絶対に必要になる」

「聖地にいるのがエルフ。そして、その先住の魔法に対抗できるのは虚無だから、ね？」

「その通り」

だからだ。

だから、あの男の存在が怖い。

せめて仮面に隠れた顔さえ別れば警戒のしようもあるんだが、それも適わない。

「考えすぎはマスターの悪いくせね」

再び思考の輪に捕らわれそうなところを、呆れた声のノルンに引き戻される。

「ははは、確かに。どうも、こういうことは考えすぎてダメだ。昔からの癖だな」

「昔って、前世のこと？」

「そう。あの頃から考えすぎで、良く上から注意を受けたもんだよ。お前は考えすぎだと。もう少し大胆なくらいでいいんだってさ。

馬鹿は死ななきゃ直らないって言うけど、こういう悪い癖は本質だけに克服しない限りは繰り返しそうだ」

「まあ、徐々に直せばいいんじゃない？」

「それもそうだな」

そう話していると、司令部の前に着く。

俺は軽くノックをすると、ドアを開けた。

「失礼します」

「あ、ああ。アレスカ。丁度よかった」

そういつと椅子に座っていたウェールズ皇太子が立ち上がる。

俺は部屋の戸を閉めると、そのまま部屋の中央へと歩いていった。
「アンリエッタは？」

「彼女なら今、治療のために出ているよ。君が来たのはさっきの襲

撃のことかい？」

「そうだね。彼女へ伝えに来ただけど……、ウェールズも聞いていた方がいいから代わりに伝えてもらえるかな？」

「ああ、構わないよ。それで、さっきの襲撃はやはり？」

「レコン・キスタで間違いないよ。ただし、たった一人のメイジにやられたことになる」

「そうか……」

俺の言葉にやや予想できることがあったのか、何か考えるようにしぐさをする。

「実は、アンリエッタ連隊第三大隊。彼らの中に裏切り者がいるという話があるんだ。」

このこと自体は僕も承知していることなんだけどね」

そういいながら、ウェールズは中央のソファを指す。

お互い腰を下ろして話そうと言うのだ。

俺は、頷いてソファに腰を下ろす。

「第三大隊はメイジだけで構成されているからね。裏切り者が出てもおかしくないよ。」

それに泳がせておくと言う方針だったわけだし」

泳がせた結果が、これじゃとても痛い結果としか言えない。

尻尾を掴むならともかくこれじゃ、単なる馬鹿だ。

「その裏切り者が手引きをしたと考えていいのかな？」

「それは分からないね。ところで、ウェールズ。その話の出所は？」

「第三大隊のワルド子爵だよ。君も知っているね？」

「知ってるも何も、さっき襲撃の被害にあっていたよ」

ワルド子爵が、その裏切り者を見つけて始末しようとしてやられたのかも知れない。

彼はそういう曲がったことが嫌いだからな。

しかし、それにしても止めを刺さなかったのはなぜだ？

「どうした？」

「いやね、ワルド子爵は襲撃で怪我を負っていたんだ。もし、ワル

ド子爵がこの襲撃の黒幕を知っていたら殺されていたはずだと思つてね。もしかしたらワルド子爵も誰かからの又聞きと言つのも考えられるけど」

「それはない。彼が自分の口から、裏切り者がいると思われると報告していたんだ。そして、少し泳がせて尻尾を掴んだら捕まえると言っていた」

そうなると、泳がせていたが尻尾を掴む前にことが起きたと言うことになるのか？

だとしたら子爵らしくない。

彼がそんな失敗をするわけがないのだが……。

「わたしはそのワルド子爵って人がどんな人か見ただけだから分らないけど、その人も裏切り者ってことはないの？」

肩に乗っていたノルンが、あごに人差し指を当てながら言う。

確かにノルンが言いたい事はわかった。

ワルド子爵が動き回っているのに、尻尾を掴んで捕まえるどころか怪我をしている。

彼がそんなへまをするようには思えないのだろう。

なら、泳がせると言いつつ動きやすい環境をわざわざ作ったことになる。

だが、それで怪我したと言うとまたおかしな話だ。

一歩間違えれば、自分が死ぬことになるはずなのだから。

「ノルン、それは無いと思うよ。彼はトリステインのために命を懸けてるんだ。

そんな人が裏切りだ何て思えないよ」

俺はそう言つて否定した。

彼は国のために忠誠を誓つて魔法衛士隊の隊長まで上り詰めた人だ。

忠誠心のない人間がそこまでいける訳が無い。

「いや、待て。その考えは危険だ、アレス君」

「どうしてだい？」

「国のために命を懸けていた。そう思っていた臣下さえ今はレコン・キスタに寝返ったものがあるんだ。何がきっかけで裏切るか分からないぞ」

その発言に俺は、はっとさせられた。

確かにここアルビオンでは信用していた臣下がレコン・キスタに寝返ったと言うのを聞いた。

現に戦力がひっくり返っている今では尚更だ。

アルビオンに忠誠を誓っていたはずの貴族が皆、レコン・キスタに寝返っているのだから。

「だからと言って、疑っても仕方ない。多少の警戒をしながら様子を見たらどうだい？」

「確かに、それがいいのかも知れないね」

ワルド子爵が裏切り者だと言う確証はないんだ。

全面的に信用するのはまずいかも知れないが、全く信用しないのはまた極端だ。

俺はワルド子爵を信じたいしな。

「あ、それで肝心なことを言い忘れるところだったよ」

「ん？ 何かな？」

「レコン・キスタは虚無についての知識があるってことだよ。ウェールズ、君だけには言うけどルイズ、僕の婚約者は虚無の担い手なんだ」

「な！ それは本当なのか！」

「本当だよ。虚無の力は強大で危険だから、目覚めないようにしてるけど」

「何か、勿体無い話だね」

「それは、置いておいて。レコン・キスタの目指すものは聖地奪還。聖地を奪還するにはエルフと戦う必要があるから、虚無の力は欲しいところなんだ。」

そして、向こうにルイズの存在が知られてしまったんだ。さっきの襲撃で」

「君のルイズが狙われると言うのかい？」

「それも多少はあるんだけど。僕としては、レコン・キスタの中に虚無に詳しい人間がいると言う事の方が重要なんだよ」

虚無に詳しいとなればその力の制御も知っている可能性がある。

また、本来なら虚無の担い手でしか知りえない情報を掴んでいる場合も。

「彼らの手に虚無が渡ったなら何をするか分からない。そういうことかい？」

「まあ、一応ね。とにかく彼らは昔こそ烏合の衆だったかも知れないけど、今は本当に侮れないかも知れない」

「そうだね。ところで、君と入れ違いで伝令をしたんだけど、だいたい一時間後に緊急の会議を開くことになったんだ」

「そうか。分かったよ」

「君ならどういう意見がある？ 侵攻は出来なくなった。あとは攻められるのを待つのか、打って出るのか？」

確かに侵攻が出来ないとなれば、迎え撃つか、玉砕覚悟で突っ込むか、だ。

後者はナンセンスな判断だ。

だからと言っても迎え撃つにも向こうがいつ攻め込んでくるか分からない状態で、緊張が続くのもよくは無いんだけど。

すぐに来るにしても、来ないにしても迎え撃つなら一つ方法が無いわけでもない。

前世の世界でも、最低最悪にして、戦ではとても有効だった防御方法。

それは人として、やってはいけないことでもあるんだが。

「一つ方法がないわけでもないよ。もっともウェールズが賛成するかは別だけど」

そう言って、俺はその方法とやらをウェールズ話すのだった。

第十九話（後書き）

大変、お待たせしました。
ようやく十九話です。

第二部もクライマックス。
あともう少しで、終わりです。

第二十話（前書き）

この小説は「ゼロの使い魔」の二次創作になります。

また、独自解釈、独自設定などあり、表現も作者の都合で書いています。

そのため、真に「ゼロの使い魔」のファンと言う方には不快な思いをさせる可能性があるのをご了承ください。

また、読んでいる途中、感情的になったり、気分が悪くなった場合はすぐに閲覧するのを止めて気分を落ち着かせることをお勧めします。

第二十話

ウェールズが、俺に対して信じられないものを見るような表情で見ていた。

それもそうだろう。

俺の提案した方法が、あまりに非人道的なのだ。
こっちの世界で言うなら卑怯極まりない。

貴族の恥さらしと言われるような案だった。

「アレス君、君は本当に恐ろしい発想の持ち主だ。君が敵だったら
と思ったら鳥肌が立つ思いだよ」

「効率良く戦いに勝つなら、僕のような発想は必要だからね。
ただし、貴族として、人として僕の案はどうかだけど」

「確かに」

そういうとウェールズはソファアの背もたれに体重を掛ける。

俺の話を聞いていて疲れたのだろう。

俺が提案したのは簡単だった。

手投げ弾の改良で、飛翔弾を考案した。

飛翔弾の場合、点火用の棒が押されてから一秒足らずで爆発する。
なら、これを地面に埋めたら？

人間が踏んで、点火用の棒が押され、その約一秒後に爆発する。
つまり、地雷が出来るのだ。

ありったけの飛翔弾を地中に埋めて置けば、向こうが進攻して来
た際の防御になる。

メイジは空を飛べるから後方の部隊は逃げられそうだが、前衛の
傭兵部隊には有効だろう。

まあ戦争である以上、綺麗だの汚いだの発想自体ありえない。
俺がやることは所詮は人を殺すことなのだから。

「ウェールズ、どうする？ 何なら他の案を考えるよ？」

ソファアに身を任して目を瞑るウェールズに言った。

ウェールズのような誇り高い王族が俺の案を使うのはいささか躊躇われるだろうから。

「いや、僕としては君の案は採用したい」

だが、返って来た答えは意外だった。

「ウェールズ、本気かい？　僕の意見は正直褒められた案じゃないよ？」

「それは確かにそうだ。しかし、僕としても君が提案してくれた最初の案が実行出来ない以上、他に手がないんだ」

「そうか。そうだね、場合によっては手段は選んでられないから」

「ああ、さて会議まで少し時間があるな。お互い少し休んでいた方がいいだろう」

「そうだね。じゃあ、僕はこれで」

そついうと俺は司令部から出て行くことにした。

俺が向かった先は、第一大隊のキャンプじゃない。

要塞のバルコニーだった。

簡易的なバルコニーで、ほとんどが監視の用途に使うことが多い。

俺はそのバルコニーから外を見た。

火はすでに鎮火されていて、即席の治療所では多くのメイジが治療を受けている。

「なあ、ノルン」

「何、マスター？」

「君の目から見て、俺はどうだ？　異世界から持ち込んだ知識、それを用いての戦法。」

この世界では未来で得るはずの戦法や、武器、技術を伝えてしまっている。

良いことじゃないのは分かっているんだが、俺のしていることはこの世界のパワーバランスまで壊そうとしているんじゃないかと思うんだ」

「マスター……。あたしはフェアリーだし、人間同士の戦争にはあ

まり興味ないんだけど、マスターはマスターの考えで行動していいんじゃない？

さっきの話はあたしも驚いたけど、もうすでにマスターは色んな知識を広めてる。

それにこの世界にはマスターって言う存在がいる以上、誰にもどうすることも出来ないんじゃないかしら？

言ってみれば世界が、マスターを受け入れたってことじゃない？」
世界が俺を受け入れた。

その考えは今まで無かった。

いや、そもそも世界に意志があるのか？と言うことだが、宇宙が偶然に出来たというわけじゃないだろう。

意志があるないはともかく、この世界そのものに俺が必要だったと言うのだろうか？

こんなことを言うのは今更なのだが。

「俺を怖いとは思わないか？」

「いいんじゃない？ マスターみたいな人間が居たっていいと思うよ。」

それに、マスターはこのハルケギニアでは規格外だしね」

「規格外か、確かに。異世界からの生まれ変わりなんてまずありえないだろうし」

「あたしだって聞いたこと無いもの」

「それもそうか。だが、いずれ俺は内外ともに異端扱いになってもおかしくない人物だ」

武器の改良、技術、戦法。

どれをとってもこの世界には過ぎたものばかりだ。

俺自身、今まであまり気にしなかったことだが、今更になって俺がどれ程のイレギュラーな存在かを思い知らされる。

冷静になればなる程に、俺の知識が危険すぎることに気が付く。

合計して、五十歳近いがまだまだ精神的には未熟なのかも知れない。

「マスター、あたしはマスターの味方だから」

暗くなる俺に、ノルンは俺の頬をその小さい唇でキスをする。

俺は、そんなノルンに微笑み掛けると優しく頭を撫でた。

「ありがとう。俺には勿体無いくらい、いいパートナーだよ。ノルンは」

「何言ってるの。あたしだって、勿体無いくらい、いいマスターだと思ってるから」

俺とノルンはお互い笑みを浮かべた。

会議は、そんなに時間が掛からなかった。

襲撃による損害が大きいことから進攻を断念し、防御に徹することになったが具体的な案がなかったのだ。

そこにウェールズが、俺の案をそのまま提案。

当然、貴族としてそんな戦い方を認められないという発言が飛び交った。

だが、ウェールズが敵戦力の多さ。

このまま負ければトリステインとの同盟も無駄になってしまうこと、そしてアルビオンがレコン・キスタに奪われれば次の標的が、トリステインに移り同盟国へ迷惑が掛かること、それにより多くの血が流れることを語る。

アルビオン一国が勝手に玉碎する分には、名誉ある死と共に果てるのもいい。

だが、友好国とは言え他国までそれに付き合えというのはあまりに勝手すぎると言った。

この言葉に反論できる人間は誰もいなかった。

ウェールズはあくまでここを守り通すとしたのだ。

向こうの残り戦力はおおよそ三万五千。

その兵力でここを落とせないとすれば、レコン・キスタとて撤退しかないのだ。

双方の兵力の消耗が激しい以上、レティバーミン第一要塞を抑え

ることが今一番重要になる。

当初の目的は果たせないが、アルビオンとしてもレティバーミン奪還が出来たとなれば小さくない戦果なのだ。

反対出来る材料は、貴族の誇り以外ない。

だからこそ、誰も反対意見が言えなかったのだ。

こうして会議はあっさりと終わった。

その後、俺とウェールズで地雷の埋める箇所の打ち合わせに入る。特に、埋める箇所の記録に関してはしっかり取っておく必要があるのだ。

そうでなければ、今回の戦いが終わった後に事故が起きてもおかしくない。

俺達でその地雷原の地図を作成することになった。

「アレス、もしレティバーミン第一要塞を落とすなら君ならどう出る？」

レティバーミン第一要塞周辺の地図を見ながら、地雷を埋める箇所を考えている時にそう尋ねてきた。

「どうしてだい？」

「いや、君の考えはいつも突拍子も無い。だから、君の考えでレティバーミン第一要塞を攻めるなら、どこから攻めるかを聞いてそこをその地雷とやらを埋めればいいんじゃないかと思つてね」

「なるほど。でも、それか買いかぶり過ぎだよ、ウェールズ。事実、最初の作戦はすでにダメになつてるんだ」

俺は十九と言う年にしては切れる方だと思つ。

だが、それは実際ではありえないこととは言え、ずるをしているのと同じだ。

俺の経験から考えられる方法を取っているに過ぎない以上、俺を当てにされても限界がある。

「そうか……」

「逆に君ならどう攻める？」

「僕なら真正面から、堂々と攻めるかな？」

だが、レコン・キスタなら多少の奇襲くらいならしてくると思う。
初期の戦いはそうして負けた戦もあると聞いている」

「なら、こんな感じで攻めてくるかな？」

そう言つて、俺は地図に適当な駒代わりのものを使って敵の進攻
ルートを考えてみた。

ここから北は、森が多い。

つまり、森に身を潜ませて焦らすような攻撃を取ることも可能な
のだ。

大きい街道は一本。

わざわざ馬鹿正直に、その街道を全軍で通つて来るとも考えづら
い。

「僕も同じ様な考えだよ。これで攻めてくるんじゃないかと考える
ね」

「逆に意表をついて街道を使つてくる方は？」

「それはないと僕は思ふけど、アレスはどうだい？」

これは俺もないと踏んでいる。

全く使わないことは無いだろうが、ここを使つて進攻してくるこ
とは敵に進軍を知らせるも同じだ。

「僕もないと思う」

「それなら、この辺りとこの辺りに地雷を埋めるのはどうだい？」

そついうとウェールズが、街道を挟むようにしてある森を示した。
俺も似たようなことを考えていただけに、頷いて答える。

「あと、街道にもいくつか埋めておこう。ここを通つてきたとき多
少は減らしたいしね」

「そつだな」

そついうと、だいたいの埋める箇所を決めるのだつた。

あとは、細かい配置場所や、埋める順序、回収手順など詰める。
それらが終わると、外は明るくなり始めていた。

その日の昼から、ウェールズから各將軍へ伝達がされて地雷の埋

め込み作業が始まった。

俺は特にすることが無く、キャンプで待機することになる。

「なあ、アレス。地雷ってどうなんだよ？」

「それはどういう意味で聞いているのかな？」

サイトに、これからの対応で地雷を埋めることにしたと話したら嫌な顔をされたのだ。

それもそうだろう。

サイトは高校二年生らしいが、世界史で撤去されない地雷についての被害などを学校で学んでいたからだ。

また、そもそも地雷の使用自体、サイトは快く思っていないのだ。分かってて聞いているんだろ？俺は、地雷ってのが嫌いなんだ。

アレスだって前世で知ってるだろ？

地雷がどれ程ひどいものかってさ」

「まあね。だからどうしようかとは思ってたんだけど、一番効率のいい戦い方はこれだったんだよ

提案自体するものじゃなかったのかも知れないけどね」

「元日本人なら、そういう発想をしないで貰いたかったな」

「わたしも、サイトと同じ意見なんだけど、その地雷って方法しかなかったの？」

俺とサイトの話を聞いていたルイズが、尋ねて来る。

言いたい事は分かる。

非人道的だということが。

「攻める側に必要な条件が、向こうには揃ってたし、すぐに進軍してくるにも今からの対応じゃろくなものが無い、時間が空けばこちらに油断が生じるからね。

地雷なら、敵の発見と防御が両方出来るから、これが効率的には一番良かったと思うよ」

「アレスには悪いけど、わたしは今回のあなたの考えに軽蔑するわ。まだ空からの攻撃なら避けようがあるし、脅しにも使えるけど地中の中について言うのは嫌な考え方だわ」

「そうか……。そうだね。二人の言うとおりだよ。」

それでも、僕はこの選択に責任は持つて遂行するから」
俺は、そういうとすつとその場から立ち上がった。

「ちよつと外の空気に当たつてくるよ」

正直、ここに居づらい。

この作戦を撤回すれば、いくら違うのだろうが俺も撤回する気はない。

ウェールズが、苦渋の決断をしてくれたのだ。
今更覆したくない。

汚れた仕事だが、汚れならいくらでも俺が被る。
そうする必要があるなら尚更だ。

感情が表に出ていたのだろう。

ルイズが俺を心配そうに見て来た。

「わたしも行くわ」

ルイズは立ち上がると、俺の隣に立った。

「ごめん。ちよつと一人にさせてもらえるかな？」

「え……？」

「一人で頭を冷やしたいんだ。心配してくれてるみたいだけど、ごめん」

「わかったわ」

やや納得行かない表情だが、俺の言いたいことも分かるのだろう。
すぐに引き下がってくれた。

「アレス」

テントを出ようとしたとき、サイトが俺を呼び止めた。

「何かな？」

「俺も少し言いすぎた。悪い」

「いいよ。二人が言つた事は事実なんだからさ」

俺はそういうと今度こそ、キャンプを離れた。

地雷を埋める場所からだいぶ離れた森の中を俺は歩いていた。

木の葉が重なり合って、太陽の光をさえぎっている。

わずかな光が森を照らしていなければ、かなり暗い場所だろう。代わりに、空気がひんやりとしていてとても気持ちがいい。

「マスター」

肩に乗るノルンが、心配そうに話しかけてくる。

さつきはずっと黙っていてくれた。

ノルンは基本的に俺を支持してくれるが、あの場で反論するような野暮なことをこの子はしない。

「すまん。ノルンに心配かけさせた見たいだ」

「あたしはいんだけど、マスターさすがに参ってるでしょ？」

「全く、笑っちゃうよ。俺自身で考え付いたことだと言うのにさ、二人から言われると間違いだたんじゃないかって思う」

「合理的な考え方は、必ずしもみんなに受け入れてもらえるわけじゃないものね」

「ああ、そうだな。戦争である以上、俺の考えはある程度支持される。

とは言え、サイトやルイズのように純粹だと、気に食わないだろう」

特にルイズは俺の影響で、そういう人としてのことはかなり敏感だ。

俺が影響を与えておきながら言うのもなんだが、俺自身随分と偽善だったなと思う。

「俺は、この世界に生れ落ちて本当に良かったのか」

「あたしは昨日言ったとおり、世界が受け入れたと思ってるわ」

「ありがとうな」

ノルンにそういわれると、本当に救われる気分だ。

自分で撒いた種ではあるんだが、こうして誰かに肯定されるのは救われる。

とは言え、考えは負のスパイラルだ。

イレギュラーとしての自覚が今更ながら大きく感じるのだ。

ウェールズは大義名分で押し通したが、俺はウェールズの人柄さえ疑わせることをした。

決していい決断ではないのは確かだ。

「もう少し、慎重に動かないとダメだな」

「マスター……」

特に軍事に関わっているんだ。

世界のパワーバランスを変えて保たれていた秩序が壊れたら大変だ。

世界に受け入れられたとは言っても、所詮は個人の考えだ。

それが世界に良い考えとは限らない。

「変わらないものなんて、ないと思う。」

マスターは変えないといけないんじゃないの？

あたしが、人の世界に口出しするのは変だけど、変えなきゃならないことだってあるわ。

今回は違ったにしても、マスターはこの世界で考え付かない発想を持つてるんだし、変えた方がいいところは変えるべきじゃないの？」

ノルンは俺の考えを真っ向から否定した。

悪い意味じゃなくいい意味で。

「ノルン……」

確かにノルンの意見は正しいのだ。

変えるべきところは変えないといけない。

俺の意見で、おそらくハルケギニアの戦争のあり方は変わるだろう。

それが良いか悪いかは別にしてだ。

その行動が間違いだから、もう何も行動を起こさないのは、ただの臆病かも知れない。

俺自身、サイトとルイズに反対されて臆病になりかけていたわけだし。

「間違いだったら、直せばいいじゃない。」

変えるのが怖いからって、何もしないのはマスターらしくないよ」

「ノルン、ありがとう」

そうだな。

今回のことを反省して次に生かせばいい。

昔の俺はそうやって来たんだ。

その通りにすればいいのかもしれない。

「少しは元氣出る？」

「ああ、助かるよ。ノルンには世話になりっ放しだ。全くどっちが主だかわかりやしない」

「いいじゃないの。あたしはマスターを守るためにいるんだもの。」

何もマスターの身だけを守るのが、守るってわけじゃないわ」

「それもそっか」

「そういうこと」

そう言われて、俺は少し気が楽になった。

提案自体は、この世界の闇の部分に貢献してしまったが、これから氣をつければいい。

そんなに軽いことじゃないんだが、そう思っでもしなないと何も出来なくなってしまう。

「さて、戻るか」

「大丈夫なの？」

「ああ。ノルンのおかげでな」

そういうと、この涼しい森から出ることにする。

いつまでも現実逃避なんて出来ない。

これから、俺自身が言い出したことの行く末をしっかりと見なければならぬのだから。

第二十話（後書き）

今回は少し話題が暗かったです。

しかもあまり山場が無いという始末です。

実際、この世界にあの戦法は伝えなくてもいいのですが、頭の中のアレス君は止まってくれません。

第二十一話（前書き）

この小説は「ゼロの使い魔」の二次創作になります。

また、独自解釈、独自設定などあり、表現も作者の都合で書いています。

そのため、真に「ゼロの使い魔」のファンと言う方には不快な思いをさせる可能性があるのをご了承ください。

また、読んでいる途中、感情的になったり、気分が悪くなった場合はすぐに閲覧するのを止めて気分を落ち着かせることをお勧めします。

第二十一話

結果から言おう。

今回の戦いは、俺達の圧勝で終わった。

レコン・キスタの軍勢は進軍途中で引き上げる羽目になったのだ。メイジだけなら空を飛んで来れただろう。

だが、メイジだけで構成された部隊だけで、アルビオン・トリステイン連合軍を討つには心もとなない数になるのだ。

それだけに、彼らは賢明にも被害が甚大になる前に引き上げたのだ。

正直、レコン・キスタの報復行動は素早かった。

レティバーミン第一要塞での戦いからおおよそ、二週間。

ほとんど撤退してからすぐに来た形になる。

しかし、その間こちらでも地雷原をいくつか作っておいたのだ。

地雷と言う卑怯な考え方のおかげとは言え、その戦いにおいて三倍の戦力差は皆無と言ってよかった。

第一地雷原はレティバーミン第一要塞から十キロ離れた森の中、第二地雷原はそれを避けて街道を通るのを見越して街道に、第三地雷原はレティバーミン第一要塞から一キロ手間の森と街道に少し。

埋めた飛翔弾の数は、残っていた予備の飛翔弾三千個を第一地雷原に、残りは四千個を通常の手投げ弾を改造して急仕上げて四千個作って埋めたのだ。

使った地雷原は第二地雷原まで。

第一地雷原のある森を予想通りに進軍してきたレコン・キスタだが、地雷原に嵌り、なおかつ混乱が生じて一個連隊が犠牲になった。状況を把握した残りの部隊が、街道に出て進軍するが、先に作られた地雷原にやはり嵌った。

レコン・キスタはこれにより深入りするのは危険と判断し、撤退

したのである。

レコン・キスタにとってはあまりに予想外な戦法だったのだ。ちなみに、軍艦を使って進軍すれば良かったのだろうが、彼らの本隊はこちらの戦力が低下していることが攻め入る好機と捉えたようだった。

俺とウェールズは要塞の監視塔から、アルビオンが撤退する様を見ていた。

「これ程まで、有効だとは……。」

向こうが船を使つてこなかったのが良かった」

「実は、船を使つてくることを念頭に無かつただけだね」

そう、実は船を使う戦法をすっかり忘れていたのだ。

向こうは船を使えば簡単に落とせただろうと思うのだが、どうもお互い地上戦を好んでしまったようだ。

「何、気にしないでくれ。僕とてその戦法を完全に見落としてたよ。どうも最近、向こうも船を温存していたみたいだったからね」

「そうかい？ さて、これからウェールズはどうするんだい？」

「レコン・キスタに停戦条約を結ばせようと思つてるよ」

現在、双方の戦力は大幅にダウンをしている。

このまま戦えば完全に泥沼だろう。

まあ、俺はそれでも勝つことは出来ると思つている。

ただし、やはり被害は甚大になるのは避けられないが。

だから、ウェールズの考えは賛成だ。

「しかし、どうやって停戦を？ 向こうはまだ国じゃないし、何か案であるのかい？」

「これは父上と相談しないとならないんだけどね。

彼らを一つの国として認めようと思う。

レコン・キスタ、元を正せばパブリック・ユニオンだ。

つまり共和制の国の承認をすることにすれば、少なくとも元パブリック・ユニオンの連中は納得が行くんじゃないか？

アルビオンと友好条約も一緒に結ぶ形にして、ある程度向こうの用件を聞こうと思っている」

ウェールズの言葉に俺は驚いた。

王族が彼らを認めるというのだ。

彼の父親がどう対応するかはわからない。

それでも、ウェールズの考え方はこのまま戦争を続けるよりかは現実的だ。

「随分と寛大じゃないか」

「このまま戦争を続けても、死ぬ人間が多いだけだよ。

僕達としてもこれはとても不本意な形だ。

もっとも、アンにもここが停戦をするいい機会になると言われてね」

そういうウェールズはやや照れた感じだった。

アンリエッタは、ウェールズに前線に立つてもらいたくない。

それだけに泣き落とされたのかもしれない。

停戦条約を結んでもらって戦争を止めさせた方が、余程いいのだから。

それに今はトリステインとアルビオンは同盟を組んでいる。

立場的にはトリステインに助けてもらったのだ。わがままを言える立場でもない。

「ウェールズ。首筋に接吻の後があるんだけど？」

「な！ ど、どこだ！」

俺の言葉に慌てるウェールズ。

予想はしていたんだがこの慌てっぷりは本物だ。

恋する乙女の勢いは凄いからな。

「冗談だよ。やっぱり、だいぶアンリエッタに迫られたんだね」

俺はやや苦笑しながら言う。

ウェールズはほっと胸を撫で下ろしつつ、若干責める様のように言った。

「アレス君、頼むからそういうのは止めてくれ。」

部下がいらないからいいが、聞かれでもしたら大変だ。

はあ、君の言うとおりだよ。

アンリエッタに泣き付かれてね……。

とてもじゃないが、戦争を続ける気にはなれなかったよ」

「いいじゃないか。アンリエッタの行動力からすれば、ウェールズが落ちない方が不思議だからね」

「参ったな」

「男は、女の涙に弱いからね」

「君でもか？」

「僕の場合は余計にだよ」

俺はルイズに甘いからな。

ルイズが独立できるようにと思いながら、結局依存させてしまった。

何回か泣かせてしまったし。

そういったものが顔に出ていたのだろう。

ウェールズが苦笑しながら言った。

「君も、苦労しているみたいだね」

「いや、まあね……」

そう言った時だった。

人の気配を感じて、俺は後ろを振り向く。

そこにはルイズとアンリエッタが、笑顔で立っていた。

その笑顔が、少し怖いのはたぶん気のせいだと思いたい。

「お互い、苦労は尽き無さそうだ」

「そうだね」

俺とウェールズは、理由は分からないがお互いのパートナーに責められそうな雰囲気苦笑するのだった。

その後、すぐにレコン・キスタへ停戦の提案が行われた。

期間は一年。だが、ウェールズが言っていた方針で行くなら、すぐにでも無期限になるはずだ。

レコン・キスタもこの停戦に異論を唱えることも無く、受け入れた。

停戦をレコンキスタが受け入れたのに伴い、アンリエッタ連隊とウェールズ率いる部隊は、ニューカッスル城に引き上げた。

俺達は、一応の目的を果たし帰国するため、ウェールズはこれからの方針の検討のためだ。

帰還したアンリエッタ連隊と、ウェールズの部隊はニューカッスルの街の人に歓声を持って迎え入れてもらった。

ニューカッスルの街の人たちが城に続く道に集まっている。

今まで、敗戦が続いていたのだ。

勝利して帰ってくれば、騒ぎになるのも仕方が無い。

「凄いな」

サイトが周りの状況を見て言う。

それもそうだろう。

これはもう戦勝パレードとも言いたくなるような規模なのだ。

商人達も、ここぞとばかりに露店を開いている。

「確かに凄いな。こういうパレードって僕も体験したこと無くてさ」

厳密にはパレードじゃないんだが、これはもうパレードと言っても過言じゃない。

「アレスもなのか？ 何か、アレスって何でも知ってるみたいだから」

「前世はただの民間人だよ？ スポーツ選手辺りだったら体験してるだろうけど」

「それも、そうか。にしても、こっちに来てからありえない体験ばかりしてるな」

「貴重な体験だね」

「戦争はもう勘弁だけだな。」

アレスにもらった剣、人が斬れないとは言っても鈍器で殴った感覚ってやつがまだ残ってたんだよ」

サイトはそう言って自分の右手を見る。

ガンダールヴの力があるとは言え基本的には平民と同じだ。

メイジなら魔法を使つたため人を傷つける、もしくは殺しても感覚と言つのは残らない。

残つてせいぜい罪悪感だ。

だけど、サイトは違う。

斬れない剣でも、人間を殴っているんだ。

どうしても、手に感覚は残ってしまう。

「サイト君、郷に入らば郷に従えだよ。これからこういう事があつておかしくないんだ。

ただ、もしそれで戦いたくないなら、無理に来る必要は無いから。最終的には、使い魔の契約を解除して、送り返す予定なんだしね」

「あ、ああ。でも、それって悪くないか？」

そう言つてサイトは俺の隣を歩くルイズの方を見る。

「ルイズも僕の意見で、いいよね？」

「ええ。この世界の平民だったら違うけど、サイトは他所の世界の住民でしょ？」

それなのに付き合え、なんてわたしは言えないわ」

「つてこと」

「そうは言つてもなー」

ルイズが軽く言うが、サイトは生真面目なのか空を仰いで言う。

「ちよつと、マスターとルイズがいつて言ってるのよ？ それで、どうして悩むのよ？」

大人しく聞いていたノルンが、俺の肩からサイトの肩に移つて抗議する。

そこは抗議するところじゃないんだけどな。

「だってさ、俺を元の世界に戻そうとしてくれる人が危険な目に遭うのに、俺だけ怖いから行きませんって言えないぜ？」

「だったら、悩まないで行けばいいじゃない。付き合いだつて思つて」

「ノルン。付き合いで戦争に行くつて言つのは、ちよつと……」

「マスター、マスターがはつきり言ってもサイトが悩むから言つの！」

ノルンの言いたいことも分かる。
義理と人情の話なのだ。

自分を良くしてくれる人が戦争に行くのだから、恩を返すためにも付いていく。

今回がそんな感じだったのだ。

だが、実際に戦争へ赴けばそこは戦場。生きるか、死ぬか。

それだけに付き合いで戦争に行くって言うのは、いささか軽すぎる気がするのだ。

「ノルンの言うとおりの部分もあるな。まあ、しばらくはそんな自体はないと思いたいしそれまでに考えておくわ」

サイトはそういうと、あとは何でもないように振舞う。

こういうところはサイトの強みだ。

きっかけがあれば、切り替えが早いのだ。

「そう言えば、これでわたし達って帰れるのよね？」

「ああ。これで帰れるよ。」

まだ後処理とかがあるだろうから、数日後くらいになるだろうけどね」

まあ、船に荷物を載せる作業も丸一日以上は掛かる。

あとは形式的な部隊解散もやるだろう。

最後に、共に戦ったもの同士の実も多少はあるはずだ。

「久しぶりの学院になるのね。みんなどうしてるかしら？」

「きつと元気にやってるさ」

ギーシュが他の女の子に声を掛けてモンモランシーを怒らせたり、モンモランシーも内職で精を出したりしているのだろう。

「サイトは、シエスタに早く会いたところなんじゃないかい？」

「な、なんでそこでシエスタが出て来るだよ！」

シエスタの名前を出すとサイトが慌てだす。

顔を赤くしながら言っても説得力はないと思うんだが。

「いいじゃない。サイトも素敵なガールフレンドが出来て」

「だ、だからまだ俺達はそんな関係じゃ……」

ノルンにからかわれてタジタジのサイト。

案外、この二人も気が合いそうだ。

「アレス」

ルイズに呼ばれて俺は振り向く。

隣を歩くルイズは、なぜか笑顔で俺を見ていた。

「なんだい？」

「うっん。呼んでみたかっただけ」

俺の腕に自分の腕を絡ませて言う。

「早く本当に平和な日が来るといいわね」

「そうだね」

ルイズの言葉に頷きながら、俺は空を見上げた。

空は決して平和表すような青空ではなかった。

その空模様は、まるでこれからの道がまだまだ険しいことを暗示するような、そんな空だった。

ニューカッスル城に戻って二日が経った。

その日、極秘で伝えたいことがあるから、来てほしい。

そう、俺はアンリエッタからお呼びが掛かっていた。

ノルンも同席は許されず、俺だけだ。

まあ、ノルンには後で話せばいいことだが。

俺が行った先は、ニューカッスル城の談話室の一つである。

軽くノックをすると、俺は断りを入れながら入った。

「アレスです。失礼します」

中に入ると、中央にテーブルがあり、そのテーブルに四つの椅子がある。

奥が大窓に、赤いシルクのカーテン。壁には若干の装飾が施されていた。

その椅子に、アンリエッタとヴァリエール公爵、父さんがいた。

「良く来てくれたわ。そこに座って」

アンリエッタが笑顔で、空いている椅子を指し示した。

俺は勧められるまま、椅子を引くと座る。

「アレス、お前に来てもらったのはある機関をお前に立ち上げて欲しいためだ」

俺が座るのを確認して、そう切り出したのはヴァリエール公爵だった。

「ある機関？」

「ええ。概要はまだ詰めている最中なのだけど、あなたにやってもらいたい」

「ちなみにどんな機関ですか？」

「それは私が言おう」

そう言ったのは父さんだ。

父さんが言うには、俺に非魔法研究開発機関を作って欲しいと言う事だった。

概要は詰めている最中だが、要は今回俺が披露したように魔法以外での兵器の開発、またそれを用いた戦術の考案が主らしい。

また工業、農業においても魔法を頼らないもので生産性を上げたとも言っているのだ。

俺の場合違いな知識とも言える知識が皮肉にも戦争を通して、非魔法化を考えるきっかけになったらしい。

「一応尋ねたいのですが、何故非魔法化する必要があるのでしょうか？」

「一番の理由は戦力の向上です。」

今回、アレスの案はほとんど魔法を用いない戦法が多かったのは事実の通り。

数の上で上回るレコン・キスタを奇抜なアイデアで、撃退しました。

これらから言える事は、魔法に頼り切った戦法ではなく、より知的な戦法が単純戦力を覆すということです。

またあなたは工業においても製鉄の技術を披露しています。これらの技術が高まれば、農業も活性化し、国内は潤います。魔法に頼らない社会作りの意味もふくめてあなたに頼みたいのです」

魔法に頼ることは、メイジに頼ること。

そこからの脱却と言う案自体は評価出来る。

しかし、そこにはやはり戦争と言う暗部のためというのもあるのだ。それは少々心苦しいものがあつた。

また兵器開発を行うこと自体、国内であつてもリスクがあるのだし。

俺が作ったものはまだメイジを脅かすまでには至っていない。

それが研究を続ければ、いずれマシンガンのようなものだって開発は出来てしまうだろう。

「開発が進めば、平民の反乱も予想できますが」

「今回のレコン・キスタのことで学んだことがあります。

それは力での支配では近いうちに国は滅びることです。

分かり合い、共に生きる道を貴族、平民に拘らず作るのがこれらの国家に必要なことだと思つのです」

「それは貴族の地位が脅かされますが？」

俺は父さんとヴァリエール公爵を見て言つた。

アンリエッタの考えはとても魅力的なものだ。

だが、同時に権威にすぎる貴族は当然反対するだろう。

また、平民もここぞとばかりに貴族を貶めることもあるかもしれない。

その危険性を考えての判断なのか？

俺はそれを父さんとヴァリエール公爵に投げかけた。

答えは予想通り。

そして、意外すぎる言葉だつた。

「それで地位が落ちるなら、その貴族に価値は無い」

「そうだ。これからトリステインは民のための政をしなければなら

ないのだ。今回のアルビオンで我々が学ぶべきところはそこだ」

「父さん、ヴァリエール公爵……」

アンリエッタ、ヴァリエール公爵、父さん。

この三人は国でもかなり地位の高い三人だ。

その三人がこういう考えに至っているなら、俺は反対する必要はない。

「そういう事ならわかりました。引き受けます」

「ありがとう。アレス。」

知があり、またそれを正しい方向で導くことが出来るのはわたしが知る限り、アレスにしかないわ。

詳しいことはヴァリエール公爵とあなたの父君から行くと思うから」

「わかりました」

話が終わると、ヴァリエール公爵、父さんが退席する。

俺も部屋を出ようとすると、アンリエッタに呼び止められた。

「アレスはちょっと待って」

俺はその言葉に、足を止める。

父さん達は、気にせずそのまま部屋を出て行く。

もしかしたら、ここから先の話も二人は知っているのかも知れない。

「なんだい？ アン」

「まずは、今回のことお礼を言わせて欲しいの」

「？ 僕は何かしたかな？」

「あなたのおかげで、アルビオン・トリステインの連合軍は勝利できたわ。それに、ウェールズ様も無事に帰還できた。これはアレスのおかげじゃない」

俺の手を握ってやや熱く語るアンリエッタ。

確かに、俺のおかげといえはおかげかも知れないが、まあそういう風の流れだったと思えば何も俺のおかげとは限らない。

「僕はアドバイスをしたただだって、アンはそれに決断をして進軍

をしたし、ウェールズだって僕のアドバイスを受け入れてくれたに過ぎない。

僕のおかげと言うには少々大げさすぎると思うんだけど？」

「謙遜は美德じゃないわよ？ そのアドバイスがあったおかげで、こうしてわたしも無事にいるのよ」

「それは否定しないよ。それで、話はお礼っただけじゃないみたいだね？」

「分かっている聞くのは野暮ってものよ。

アレス、あなたをわたし直属の文官付参謀に任命します。

行政、軍事の両方において、わたしと同じ指揮権を発動できるわ」
行政、軍事の両方。

つまり、相談役と言ってもいい立場になるのだろう。

でも、相談役ならこんな権限はいらない。何故こんな権限を俺につけるのだ？

「この権限、危険すぎる気がするんだけど？」

「レコン・キスタはトリステインにも入り込んでるわ。

それはアレスも知ってるでしょ？ わたしはトリスタニアから簡単には動けないわ。

だから、アレスが代わりに動いて欲しいの」

レコン・キスタと繋がっている人間は少なからず国内にいると見て間違いない。

俺は信じたくないが、ワルド子爵も候補に上がっていた。

アルビオンとレコンキスタが停戦状態のうちに、トリステインでの勢力拡大とあってはいざ再戦時にはこちらが不利になる。

「国内の状況を探れていいいのかな？」

「そういうことよ。そうするにはあなたにそれくらいの権限がないと動けないわ」

「僕は一応、学生なんだけどね？」

これは一応の牽制だが、多分意味はなさない。

俺の予想通り、アンリエッタは笑顔でこう俺に言った。

「必要な時に動いて貰えればいいわ。単位とかはわたしで何とか出来るもの」

「やっぱり、おてんば娘だね。君は」

俺が額に手を当てながら言っと、おかしそうにアンリエッタは言う。

「あなたのおかげよ」

俺がいろいろとアドバイスを言ったのがまずかったらしい。今回のことであらう大胆になっている。

そんなアンリエッタを俺は止める術を知らなかった。

そして時が経ち、俺達はトリスティンへ帰国の時を迎えた。

第二十一話（後書き）

お待たせしました。

しかも、かなりの早足での展開で申し訳ありません。

次回で第二部を終了しようと思って、展開を早く進めてしまいました。

派手な戦闘シーンなどを楽しみにされていた方には申し訳ありません。

それではこれにて、失礼します。

第二十二話（前書き）

この小説は「ゼロの使い魔」の二次創作になります。

また、独自解釈、独自設定などあり、表現も作者の都合で書いています。

そのため、真に「ゼロの使い魔」のファンと言う方には不快な思いをさせる可能性があるのをご了承ください。

また、読んでいる途中、感情的になったり、気分が悪くなった場合はすぐに閲覧するのを止めて気分を落ち着かせることをお勧めします。

第二十二話

凱旋帰国には相応しい晴天の下、いくつかの部隊が戦艦に乗り込んでいく。

第三大隊が襲撃を受けて被害を受けたこともあり、負傷兵も見られるが何とか死者は出なかった。

俺とノルン、アンリエッタはニューカッスル城の前いる。

ウェールズに最後の挨拶をするためだ。

「それじゃ、ウェールズ。僕たちは」

「ウェールズ様……。情勢が落ち着いたらまたお会いしましょう」

「ああ。二人とも本当に世話になったよ。」

特にアレス君。君には感謝してもし足りない」

「君の決断力があればこそさ。僕はきつかけを作っただけだから俺はあくまで提案をしたただけだ。」

それを実行したのは、ウェールズ。そしてアンリエッタだ。

「マスター。ちょっと謙遜しすぎ」

ノルンはそんな俺に呆れるように言った。

「全くよ。アレスがいなかったらこの戦いだってどうなってたか分からないわ」

「そうだね。奇抜なアイディアに助けられたよ」

「評価してくれるのは嬉しいことだね。それは素直に受け止めておくよ」

俺が言うと、全員が満足したように頷いた。

俺ってそんなに謙遜していたか？

大したことはほとんどしていないと思うんだが。

「今回の件で、レコンキスタも少しは大人しくなると思う」

「そうだね。でも、少なくともアルビオン、トリステインの両国に入り込んでいるのは確かだから油断は出来ないよ？」

「分かっている。アンもいいね？」

「はい、ウェールズ様。すでに手は打ってますわ」

アンリエッタは俺の方を見てそういう。

ウェールズもその意味が分かるのか、頷くところだった。

「君の国には優秀な臣下がいて羨ましい」

「わたしに取っては兄のような人です」

「ほう。なるほど、確かにそう言えなくもない」

アンリエッタとウェールズが俺を見ながらそう言う。

勘弁してほしい。

俺は優秀でも何でもない。

中身は五十近い中年だから多少は知識があるだけだと言うのに。アンリエッタはその事を一応知っているはずなんだが……。

ちなみ兄という部分には多少は俺も同感な部分はある。

「ウェールズ、元気で。たぶんまた会うことにはなると思うけど」

「その時は、良い意味で会いたいものだね」

俺とウェールズはそういうと互いに苦笑した。

そう遠くない。

再び戦乱の世が来るだろうと言う予感を互いに感じていたのだ。

アルビオンが徐々に小さくなっていく。

二度目のアルビオンは、わずかな間に多くのことがあった。

ハルケギニアに混乱を招く種がすでに撒かれていることも分かった。

多くの人間の思惑が絡み合う、このアルビオン。

そんな事を考えながら、甲板からアルビオンを眺めていると手すりを掴む手を誰かが握った。

振り返るとそこにはルイズがいる。

寂しそうな、それでいてどこかほっとしたような表情だ。

「やっとトリステインに戻るわね」

「そうだね」

数日後には再び学院に戻るわけだ。

血なまぐさい戦場から、また学園。
少し、現実感がない気もする。

「ねえ、さっき何を考えていたの？」

俺を見上げるルイズが尋ねる。

さつき、俺がアルビオンを眺めているときのことだろう。

「いろいろだよ。アルビオンの事、レコンキスタの事、ハルケギニアに訪れるだろう混乱の事。ホントいろいろ」

考えたらキリが無い。

俺が抱えるべきことじゃないんだが、こつも関わってしまうと無視するには問題が大きすぎた。

もつとも、非魔法研究開発機関の長、アンリエッタ直属の文官付参謀を引き受けてしまっている。

状況がすでに無視させない方向に向かっているようにも思えた。

「無理はしないで」

ルイズがそつと俺を包むように両手を俺の体に回す。

暖かいルイズの体温が、風に当たって冷えていた体を温めてくれる。

「無理はしないよ。何せ、ルイズの事が一番だからね」

ルイズが俺をはつとした顔で見ると、恥ずかしそうに顔を俺の体に押しつけた。

俺はルイズの頭をそつと撫でながら思う。

ルイズの事が一番。

虚無のことも、俺とのことも、とても大切だ。

特に、今後俺と一緒に生きていく上で俺の責任が大きくなりつつある。

ルイズの父親、ヴァリエール公爵がとても立派な人間だ。それだけに彼女もついてこれると思う。

責任と言う重荷を背負って、果たしてルイズを幸せにしてやれるのだろうか？

前世でもここまで重い責任は無かった。

それがここではどうだろうか？

重すぎはしないか？

正直、見えない不安が何度となく襲ってくる。

俺の気持ち伝わったのか、俺の不安を打ち消すようにルイズが言う。

「わたしは、あなたじゃないと駄目だから……」。

だから、わたしで支えられることがあるなら言ってほしいの。

隠し事なんてしないで。まして一人だけ犠牲になろうとしないで」
なんて健気な。

何度、俺には勿体無いと思ったか分からない。

ここまで思ってくれる人がいる。

打ち明けてしまおうか？

だけど、そうすると今度こそルイズが引くことが出来なくなる。

昔から優しい子だったから。

そんなルイズに今の俺の事を打ち明けたら、絶対について来てしまっただろう。

「ありがとう。ルイズ。」

君の気持ちは本当に嬉しいよ。だから、ちゃんと言える時が来たら聞いてくれるかい？」

だから、俺はそう言った。

まだ引き返せる。

ルイズが俺じゃなきゃ駄目だと言うが、もし俺の代わりが現れたら……。

卒業までに現れなければ、俺はルイズと共に居よう。

俺とてルイズを手放したくは無いからな。

矛盾する二つの思いは、卒業までに決着をつけるさ。

「ちゃんと言える時が来たら、言ってね？」

絶対よ？ 一人で全部抱えないでね？」

「わかってるさ」

そう言っ、俺はルイズを強く抱きしめた。

俺とルイズが抱き合っていると、俺の肩から咳払いが聞こえてきた。

「あたし、忘れられているような気がするんだけど？」

その声に、俺とルイズは慌てて離れる。

別に離れる必要はないんだが、こう第三者に言われると気恥ずかしい。

「ノ、ノルンのこと忘れてたわけじゃないよ？」

「ふーん。会話に全然参加できなかったわ」

無視されたのが余程、腹に据えたのが珍しく頬を膨らませて俺に抗議をする。

その視線が少し痛く、俺は目線を外した。

「マスター」

「う、ごめん」

「もう……。でも、ルイズのあの真剣な態度じゃ忘れられちゃうわよね？」

今度はルイズの方に向いた。

ルイズが少し引きつりながら言う。

「わ、わたしもノルンを忘れてたわけじゃないの」

「その割には、一度も話しかけられなかったわ？」

「え、えーと。ア、アレスー」

ルイズは困った顔をしながら俺に助けを求めてきた。

「え？ 僕に振るの？」

そうだよ。俺に振ってどうすんのさ？

そう思ったとき、ノルンの小さい笑いが聞こえてきた。

「ふふふ。冗談。二人があれだけ真剣じゃ、あたしだって口を挟めないわ。」

ルイズの愛の籠った手でマスターの手を包んで、あんな熱い目をマスターに向けたんじゃ、ね？」

「も、もうー ノルンったら！」

ルイズが顔を赤くしながら抗議するが、ノルンの笑いを誘うことしかなかった。

そんなルイズが可愛らしくて、大切にしたいと再度思っただった。

トリスティンに戻った。

しかし、すぐには学院に戻ることは俺には出来なかったのだ。

俺には仕事があるためだ。

ルイズには、アンリエッタ、父さん、ヴァリエール公爵とマザリ―二枢機卿を交えた会議に参加するためにすぐには戻れないと伝えである。

ルイズも残ると言っていたが、ヴァリエール公爵が気を遣ってくれて、ルイズを説得してくれた。

ちなみに会議に関しては本当に、戦果の報告や今後の対策、国内のレコン・キスタのあぶり出しなどいろいろと話すことがあったのだ。

当然、その会議の場で俺が非魔法研究開発機関を立ち上げるための長になることも話された。

アンリエッタ直属の話に関してはノータッチ。

これはあくまで俺とアンリエッタしか知りえないことになる。

まあ、ノルンには話したが。

会議が終わると、今度は非魔法研究開発機関の概要の話になる。

一応、俺が実家でやらせている製鉄技術の国内普及が第一に挙げた。

そのためのマニュアル作り等も行っ

あとは、俺の知識で手工業から機械工業への転換の構想も概要のみだが、話をした。

今出来るのはこの二点くらいだろう。

数年のうちにゼロ戦から得たアイディア、兵器としての飛行機も作りたいところだ。

簡単な概要が話し終わると、研究機関の場所や必要予算、人員の

話などにもなった。

これらの話になると、一日じゃ終わらない。

そのため、俺が学園に戻るのにはさらに一週間の時間が掛かることになった。

帰った時、早速ルイズに怒られたのは……言うまでもない。

非魔法研究開発機関の会議、四日目の夜。

さすがに俺も疲れを感じ、その夜は用意された部屋のバルコニーから久しぶりに月を眺めながらワインを飲んでいた。

タルブ産のワインで、甘口である。

甘口が好きな俺にはとても飲みやすいのだ。

「マスターってワインも飲むのね」

「まあな。昔は良く飲んでたからな。安物だったけど」

こうして何の気兼ねなく話せるのは、ある意味ノルンの特権だろうな。

「ルイズ、きつと怒ってるわよ？」

「言わないでくれないか？ 俺も分かってるんだ」

ルイズは可愛いし、優しい。

俺に依存なんてしてはいるが、その問題が無くなればとても強い存在だ。

現に、俺は何度ルイズを怒らせて殴られたことが……。

「尻に敷かれるタイプね」

「お、おい。変なこと言うなよ」

「たぶん、本当のことよ？ マスターも優しいしね。何だかんだ言ってもルイズ一筋っばいし」

「それは、な。ルイズだし。俺が育てたようなものだからな。

どちらかと言うと父親って感じなんだが、この前みたいな感じになると愛おしく思うよ」

ノルンは俺の肩から離れると、俺の顔の前に来る。月明かりで妙にノルンが光っているように見えた。

ノルンは人差し指を立てて言う。

「ねえ、女垂らしって言葉知ってる？」

「はあ？ 何だよ、急に」

知らないわけではない。

女垂らし、まあ言ってみればプレイボーイのようなものだ。

「アンリエッタ王女もマスターを見てるわよ」

「それはないだろう」

まあ、好意は持たれているのは知っているが、まさか。

「これは女の感ね。アンリエッタはウェールズ王子が好きなのはマスターからの知識で知ってるけど、マスターも満更じゃないわ」

「おいおい」

そうだとしても困る。

俺には、ルイズがいるんだ。

それにアンリエッタはウェールズが好きなんだ。

アンリエッタがウェールズを裏切るわけが無い。

「それに」

ノルンはそう言いながらバルコニーの手すりに立つ。

飛ぶのに疲れたのだろう。

「それに？」

「アンリエッタ王女とウェールズ王子は基本的に結婚できないはずよ」

「ま、そりゃね」

王子と王女だ。

結婚となれば、国はどうなるのだ？

まさか二人の恋愛事情で合併と言うわけにも行かないだろうし。

「だからよ。現実的に手を出しても問題ないマスターが候補にあらうと思わない？」

アンリエッタは裏切らないと想うんだけどな。

「まさか、そんな事は……」

その時、部屋のカーテンがゆれた。

振り向くと、そこにはいるのはアンリエッタ。

「面白い推理ね」

ゆっくりとこちらの方に歩いてくる。

丁度、月が隠れたために姿が良く見えない。

「アンリエッタ……。鍵は掛けてあつたはずだよ?」

「アレス、口調変えないで良いから。」

鍵はアンロックで開けたわ」

おい、王女様がそんなはしたない真似していいのか?

「ふう、王女様がどうしてそんなことしてまで俺のところ?」

「ノルンの言ったことが近いわね」

再び月が現れると、何ということか、アンリエッタはよりもよつてをネグリジェ姿だ。

「ア、アンリエッタ?」

さすがの俺も声が裏返る。

ルイズならまだしも、アンリエッタがこんな姿で俺のところに来るなんて。

「アレス」

そういうと、アンリエッタは俺に抱き付いてきた。

それを受け止めると、俺は気が付く。

アンリエッタは震えていたのだ。

「アンリエッタ? 泣いてるのか?」

「ア、レス。少しだけ、少しだけこうさせて」

そう言つとアンリエッタは俺に抱きつきながら声を殺して泣き始めた。

どういう事なのか?

俺は混乱しながら、ノルンに耳元で言われたのだ。

「ほら、女垂らしじゃない」

返す言葉が今回ばかりは無かった。

アンリエッタが泣き止むと、俺はどうしたのか聞いてみた。すると、一つの封筒を俺に見せてくれた。

宛名はアンリエッタ。宛先はウェールズだった。

極秘事項である旨が書かれていて、封も王家のものしか開けられないようになっていた。

すでに開封されている封筒から手紙を抜き取る。

枚数は三枚。

一枚は、この間の協力に関しての礼である。

これは政治的なことだから問題は無い。これで泣く要素はないのだ。

問題は二枚目と三枚目。

二枚目に書かれていた内容を読んで、俺は正直頭が痛い思いをした。

「アレス……。わたしこれからどうしたらいいの？」

ウェールズ様は僕を忘れろとおっしゃるわ。でも、わたしは忘れられない」

「気持ちには分かる」

だからと言ってどうしろと言うのだ？

手紙の内容を簡単に言おう。今回のことで互いを想うことの大切さを知ったと言う事、ただ自分達みたいに身分があると身勝手になりがちだということ、何より自分達の想いで民を危険に晒せない。だからお互いの想いは忘れようと書かれていた。

最後に、君からの手紙は返すと。

三枚目がどうやらその手紙らしい。

「ウェールズはあくまでウェールズ王子の立場を貫くと言うのか……」

……

それにしても、妙な話だ。

この時期に、このタイミングで？

アルビオンにいる間は、ウェールズがこういう行動に出るようには思えなかった。

それだけに、妙な気がする。

「アンリエッタ、この筆跡ってウェールズのもで間違いないか？」

「？ ええ。そのはずだわ」

「そうか……」

「マスター？」

俺の態度が二人ともおかしいと顔を見合わせる。

「アンリエッタ、ちよつと恥ずかしいことを聞くぞ？」

「え？ な、なに？」

「ウェールズと寝たよな？」

「な！」

真っ赤な取れたてりんごと例えるのが正しいくらい、アンリエッタが真っ赤になった。

ノルンもさすがに、この話は顔を赤くしている。

「な、なにを言うの！」

大声を出すと周りに気が付かれるためか、小声でなおかつ語を強めて言う。

俺は軽く手で制して、言った。

「ウェールズをカマに掛けて聞いたんだ。

ま、それはいいんだよ。

その時の照れた様子からはこういう話になりえないような気がするんだ」

そうだ。

お互い苦勞すると言い合ったくらいだ。

ウェールズはアンリエッタが好きだ。むしろ愛している。

それが、いきなりこういう行動に出るのには何かあるんじゃないか？

「じゃあ、アレス。これはどう説明するの？」

「……。政治的な何かがあるのかも知れない。

手紙では伝えられない何か、その可能性があるね。

俺も断言は出来ないけど、こうしなければならぬ事情があるんじゃないか？」

とは言え、ノルンの指摘もある。

二人は結婚なんて出来ない。

同盟国ではあるが、一国の王族が自分達の事情で国を統合なんて
そうそう出来ないものだ。

一概にそうとも言い切れないが、本人に真相を聞かなければなら
ないのも確かだろう。

「ウェールズに聞くまで、この事は忘れた方がいいな」

「そうなの？」

「ああ。俺の感が合っていれば、まだアンリエッタのことをウェー
ルズは愛しているはずだ。

この手紙はたぶんフェイクだよ」

「フェイク？」

「敵を騙すなら、まず味方からってこと」

もしくは何かの保険と言うことも考えられる。

「まあ、それは気にすることじゃないから」

「安心していいのね？」

「ああ。俺が言うのも変だけどな」

「アレスに言われると安心するわ。お兄さん」

最後に意味ありげなことをいうと、礼を言っアリエッタは去
っていった。

「しかし……、焦ったな」

「満更じゃないのはホントみたいね」

そんなツツコミをノルンから受ける。

悩みが増えるな。

まだこっちでは十九だと言うのに、白髪が出来そうだ。

それはともかく、まだアルビオンでの火種は消えていないような
気がした。

そして、その予感が案外早い段階で起きてしまうことになるのだ
った。

会議が完全に終わった。

いよいよ、俺も学院に戻る。

単位に関しては心配はしてない。

オールド・オスマン氏が手を打ってくれているからだ。

送迎の馬車に揺られながら、俺は久しぶりになる学院付近の森を眺めていた。

「マスターは久しぶりね」

「ノルンは数日しかいなかったからな。あまり覚えてないんじゃないかないか？」

二年になってすぐに出兵だった。

だから、ノルンはあの学院に戻ると言うのは実感がわかないと思う。

「そうね。でも、マスターの部屋は覚えてるから」

「そうか」

会話をしながら森を抜ける。

まぶしい光で一瞬何も見えなくなるが、次の瞬間、聳え立つ学院を見た。

トリステイン魔法学院。

ようやく俺は、帰って来れたのだ。

第二部・完。

第二十二話（後書き）

お待たせしました。

約二週間ぶりの更新です。

最近、本業の方が忙しくてなかなか掛けませんでした。

年度末までやる事に尽きないので、書き始めの頃より更新が遅れ気味になると思います。

書ける時は一気に書きますが。

さて、ようやく第二部が完了しました。

無理やり感が結構強いので納得の行かない方もいるとは思いますが、ご了承ください。

ウェールズの意味ありげな手紙など、伏線を残しつつ第三部です。

第三部の初めは平和な学院生活や明るめな要素が含まれたらと思います。

また、この場をお借りして「死の先に待っていた新たな世界」を読んでくれている方にお礼をしたいと思います。

いつも「死の先に待っていた新たな世界」を応援してくださって本当にありがとうございます。

これからも執筆を頑張っていきますので、応援の程よろしく願います。

新型／季節性インフルエンザ、風邪等、皆様健康には気をつけてください。

それで、また第三部のあとがきでm () m

第二十三話（第三部）（前書き）

この小説は「ゼロの使い魔」の二次創作になります。

また、独自解釈、独自設定などあり、表現も作者の都合で書いています。

そのため、真に「ゼロの使い魔」のファンと言う方には不快な思いをさせる可能性があるのをご了承ください。

また、読んでいる途中、感情的になったり、気分が悪くなった場合はすぐに閲覧するのを止めて気分を落ち着かせることをお勧めします。

第二十三話（第三部）

今の状況と言うのは、決して望んでいたわけではない。
どうしてこうなったのか？

悲しいことに俺にはその記憶と言うものが途中から欠片にも無かった。

覚えているのは、俺が学院に戻ってきたお祝いにとギーシュがパーティーを開いてくれたこと。久しぶりにみんなと、楽しく会話を
して、ワインを飲んで、料理を食べてとしていたことだ。

だが、どうしてこうなったのか？

「う、ん……」

俺の横にいる女性が寝返りをうった。

上掛けがずれて、服を着ていない女性の体が見える。

下着は付けているとは言え、煩惱が爆発したっておかしくない状態だ。

俺は頭を抱えて言う。

「どうして、俺の部屋にキュルケがいるんだよ……」

魅惑を漂わせた赤毛の女性、キュルケは何故か俺の横で寝ていた。
頭痛がする思いだ。

「ノルン、いるか？」

すると、ノルンはベッドから起きて来た。

「ふわー、おはようマスター。昨日はマスター達が激しくて、あ
たし久しぶりに興奮して寝れなかった」

あくびをしながらそんなことを言うから、俺もいよいよ落ち込み
始める。

酒の勢いで、俺とんでもないことを……。

「な、なあ、ノルン。ルイズは……」

「知らないわよ。だって、マスターはキュルケを連れて帰って来た
のよ？」

「ルイズになんて言えばいいんだ……。いや、それよりここは男子寮だ。そっちも問題じゃないか」

俺がそこまで言つと、ノルンが肩を震わせていた。

「ノルン？」

「ご、ごめん、マスター。激しいなんて嘘。連れてきたのは本当だけど、ほとんどキュルケがマスターに絡んでたみたいだから大丈夫……っぶ、もうダメ！」

そういうとノルンは思いつきり声を上げて笑い出した。

お腹を抱えて転げまわっているじゃないか。

ああ、どうやら俺はからかわれたらしい。

ノルン、俺はお前をそんな使い魔にした覚えは無い！

使い魔は主を守るはずなのに、陥れるようなことを。

「とりあえず、間違いはないんだよな？」

「あたしが知る限りはね」

まあ安心は出来ないが、間違いはないだろう。

俺も酔ったからと言って手を出すつもりはないし、ないはずだ。

……少し自信が無いのは何故だろう？

「う、ん？　ここは？」

振り向くとキュルケが目を擦りながら起き上がっていた。

寝起きの彼女を見るのは初めてだが、こう滅多に見れないものを見てしまった感じた。

見覚えがないのかキョロキョロと部屋を見回している。

一言で言うなら幼い。そういう感じなのだ。

「あれす？」

呆けた感じで俺を見るキュルケ。

状況がいまいち掴めないのか首をかしげている。

「あ、あれ？　どうしてあたしがここに？」

徐々に状況を把握して来て。

「服着てない？　え？」

何かに気が付いたように、自分の体を隠すと俺の顔を見て叫ぼう

とした。

「きゃ…む！ むー！」

俺はとつさに彼女の口を押さえるが、キュルケはパニックを起こしてるのか暴れだす。

意外に力が強い。俺は必死に口を押さえながら言った。

「お願いだから、落ち着いて。僕もどうしてこうなったのか分からないんだ」

「む！ むう！ むー！」

しかし、あまり効果が無い。

女性を乱暴にしたくないのに、これじゃ俺が襲ってるみたいじゃないか。

「キュルケ、昨日パーティーがあつたのは覚えてる？」

暴れるキュルケにもう一度問いかける。

すると、何か思い出したのか暴れるのはやめた。

状況はとりあえず分かってきたらしい。

「手、話すけど、大声出さないでよ？ 問題になったらお互いまずいんだから」

キュルケが頷くのを確認すると、俺はゆっくり手を離れた。

それから、俺は服を着てと言って後ろを向く。

後ろ向きでも布が擦れる音が聞こえてしまい、ややばつが悪い。

「何もしてない？」

「してないよ」

「ふーん。あ、こっち向いていいわ」

俺はそう言われて振り返る。

キュルケは服を着終えて、ベッドの上に足を組んで座っていた。

「状況は何となく、わかったわ」

「聡明で助かるよ。でも、出来れば暴れる前に分かってもらいたかった」

「仕方ないじゃない……。あたしだっていきなりこんな状況じゃ慌てちゃうわよ」

まあそれもそうだろう。

自分から誘ったならまだしも、向こうもたぶん酔ってたんだ。何があつたのか覚えて無くて仕方がない。

「それにしても、君もお酒で記憶を飛ばすんだね」

「あたしだって完璧じゃないわ。まあ、お酒程度でこうなつたのは初めてだけど」

そんなにお酒を飲んでいたか？

でも、誰でも飲みすぎればこういう事があるのだろう。

現に俺は記憶を飛ばしたわけだし。

「そうか。で、出来たら何事も無かつたように自分の部屋に戻ってもらえるかな？」

こんなところルイズに見られてもしたらまずい。

ただですらルイズより一週間遅れて戻って来たのにご立腹だったんだ。

「あら、お邪魔？」

いつもの調子を取り戻したのか、挑戦的な目で俺を見る。

ベッドから立ち上がると、俺に寄って来る。

いつもの魅惑な雰囲気を漂わしてだ。

「キュルケ。僕はルイズ一筋なんだ。何度も言わせないで」

「つまらない男ね。はあー、いいわ。大人しく帰ってあげる」

キュルケは右手をつまらなそうに上げながら、部屋のドアへと向かった。

だが、そのドアを彼女が開けることは無かつたのだ。

「アレス、おはよ………う？」

桃色の髪の小柄な少女、ルイズがドアを開けてしまったから。

今のこの光景をルイズが誤解をしなければいいんだが……。

そんな都合が良いことは無かつた。

「キュルケと、どうして……？」

ルイズは目に涙を溜めながら俺を見ると、ドアを思いつきり閉めて駆け出してしまった。

泣かせてしまった。

故意じゃなくても、これは状況が悪すぎる。

「最悪だ」

「マスター、同情するわ」

「あたしも」

哀れな俺にキュルケと、ノルンは同情の眼差しを俺に送っていた。

校舎裏で男が二人。

しかも話題は女のこと。

もう俺は青春ドラマの真っ只中にいるんじゃないかと、ツッコミを入れたかった。

「ルイズを泣かせてんじゃねえ」

サイトに胸倉をつかまれ睨みつけられているのだ。

前世でだってこんな状況になった事なんてない。

しかし、真剣な目だけにルイズを大切にしているんだと思わず感心してしまう。

「誤解だつて言っただじゃないか」

俺は一応、説明済みの事を言ってみた。

しかし、サイトの手の力は緩まない。

「だったら、どうしてルイズが泣いてるんだよ！」

「サイト君、昨日のあれじゃどうしようもないと思わないか？」

「思わない」

毅然と言うサイトに、俺は少し卑怯と思いながらこういった。

「昨日キュルケに少し迫られてたよね？ サイト君は、その時どうしてた？」

「……」

言葉が詰まるサイト。

昨日はお酒が入ったからと言うのもあるのか、みんな開放的だった。

キュルケは何も俺にだけ絡んだわけじゃない。

俺の覚えている範囲なら、サイトにも絡んでいたはずだ。

「まさか酔ってたから覚えてないとか？ その後、シエスタを押し倒したの覚えてる？ サイト君」

シエスタもシエスタで久しぶりにサイトに会えたのが嬉しかったのか抵抗しなかったな。

その後、二人でどこかにいなくなっていたが……。

俺の言葉に、ずっと目をそらしてサイトが降参だと言うよう言った。

「わ、分かったよ」

「お酒の酔うと怖いでしょ？」

「あ、ああ」

「ルイズに悪いと思うんだけど、僕もどうしてああなったのか……」正直、自分が恨めしい。

なんで連れ帰ったのがルイズじゃないんだよ。

ルイズが隣に寝ている分には俺としては問題ないんだ。

それなのに他の女性だなんてな。

絡まれていたらしいが、それでも情けない。

「で、でもよ。誤解にしても、ルイズの泣きっぷりは尋常じゃなかったぜ？」

「一週間遅れての帰還に、キュルケと寝ていたとなると……ね」

ああ。とても憂鬱な気分だ。

誤解だと言うのは聡明なルイズなら気が付くだろうけど、溜まったフラストレーションがある。

何せ、アンリエッタとも何かあったんじゃないかと勘ぐられたくらいだ。

たぶん今は感情が爆発しているんだよな。

「マスター、ちゃんと話せばわかるんじゃないの？」

「そうだよ。ルイズにちゃんと言えばいいじゃ……って無理だよな」
「今は、ね」

実はあの後すぐに追いかけたのだが、部屋に入るなり出てこない

のだ。

会いたくない！の一点張り。

で、出てきたサイトに校舎裏に連れて行かれて、今に至るのだ。

「どうするんだよ？」

「……。仕方ないからどうもしない」

「は？」

「マスター、それってどういう事？」

「ジタバタしても仕方ないってことだよ。

今の僕が何を言ってもダメなら、時間を置くしかないさ。

行動はその後」

そう。

今、ジタバタしてもたぶん状況は悪化する。

ルイズは優しく、思いやりもあるが、頑固だ。

相当腹を据えている今、下手に会いに行っても逆効果。

しかも、頑固なくせに落ち込みやすいから俺を追い返したことに後悔とかしてまた落ち込むと言う負のスパイラルに落ちかねない。

「帰ってきて早々、問題が尽きないな……」

俺はそう言って空を仰いだ。

空も重く沈むような雲が浮んでいる。

全く、俺の心のようなだよ。

ぶらりとしながらヴェストリの広場へとやって来た。

ちよつと気晴らしをしようと来た、この場所にギーシュが空を見上げていた。

俺と目が会うと、こちらにやって来る。

「やあ、アレス。こんなところにいて良いのかい？」

「ルイズの事を言ってるのかな？」

「そうさ。レディを泣かしてしまったそうじゃないか。ここは僕のバラを一輪上げるから謝って来たらどうだい？」

そう言ってバラを一輪俺に渡してくれる。

気持ち嬉しいのだが。

「今は無理だよ」

「どうしてだ？」

「モンモランシーを怒らせたときどうなる？」

「……。ああ、確かに今はやめて置くのが賢明だね」

俺とギーシュは二人してため息を付いた。

と言うか、何故、ギーシュもため息を付くんだ？

俺はルイズの事があるから分かるが……。

「モンモランシーと何かあったね？」

「うっ……」

「アレス、君ならモンモランシーの機嫌を直せるはずだ！ 僕に代わって何とかしてくれないか！」

「昨日、何があったのさ？」

「じ、実は……」

語り出すギーシュの話に、俺とノルンは五分と立たず突っ込みを入れることになる。

「自業自得だよ？」

「全くね」

「わかってるんだ。だけど、どうにも……」

話を聞くと、昨日のパーティーで他の女の子に声を掛けてしまったらしい。

運悪く、その現場をモンモランシーに見つかって。と言うか、見つかるのが当然な気もするのだが。

俺は前に、浮気くせを直せといったことがあるんだが、まだ直っていないらしい。

前よりかは良くなっているんだけどな。

「モンモランシーも呼んでるパーティーで、君はどうしてそんなことをするかな？」

明らかに自殺行為としか思えないよ？」

「反省はしてるよ。」

モンモランシーの事を何とか出来たら、僕がルイズの機嫌を直すからさ」

どんな交換条件だ。

モンモランシーとはギーシュの事でいろいろとお世話をしてるからいいが、ギーシュはルイズとそういう関係じゃないはずだ。

それで機嫌が取れると言うのも難しいものだ。

とは言え、友人が悩んでいるなら仕方ない。

「まあ、ギーシュの方は僕が何とかするよ」

「いいのかい！」

「引き受けるよ。ギーシュ、ルイズの事は頼んだよ？」

「任したまえ！」

ギーシュは胸に手を当てて自信満々に言うと、一目散にルイズのところへ走っていく。

「マスター、大丈夫なの？」

「きつとすぐに戻ってくるさ」

この後、青い顔をしたギーシュを発見するのだが、少し先の話だ。ギーシュと別れて、俺はモンモランシーの部屋へ行く。

何で、自分もルイズのことで問題が起きてるのに、人のことに顔を突っ込んでしまっただろう。

お人よしの自分に苦笑しながら、モンモランシーの部屋の前に立つと軽くノックする。

「ギーシュ？ 今は会いたくないって言ってるでしょ！」

「アレスだよ。ちよつと話をしないか？」

「アレス？ …… まあ、いいわ。鍵は開いてるから」

俺は失礼するよと言いながらドアを開けた。

部屋に入ると、本が散乱している。

大事な商売道具は無傷だが、いたるところに本が落ちていた。

「喧嘩、したんだって？」

「アレスこそ、ルイズを泣かせたそうじゃない？」

「まあね」

俺は肩を落として見せると、モンモランシーが薬の調合をする時に使う机の椅子に座った。

「こんなところに来ていいの？ また誤解されるんじゃない？」

「誤解だって言うのは、ルイズは気が付いているよ。今、僕が言っても逆効果だね。」

ルイズの事はギーシュに任せたよ」

そう言うともンモランシーが怪訝な顔をして、こういった。

「ギーシュ、ルイズを口説かないかしら？」

その言葉に俺も思わず顔が引きつる。

「ま、まあ、大丈夫なんじゃないかな？」

大丈夫だと信じたい。

ルイズは泣いていても絵になるから、思わず優しい言葉を掛けたくなるかもしれないからな。

「それより、モンモランシー。話は聞いたよ」

「ならわかるわよね？ 酷いと思わない？ わたしを誘っておきながら、他の女の子と……」

握りこぶしを作りながらなかなか迫力ある顔をするモンモランシー。

気持ちは十分すぎるほど分かった。

「ギーシュの事、嫌いじゃないんでしょ？」

「そ、それはね。でも、あれは許せないわ！」

ギーシュ、君はもう少し女性を大切にすべきだ。

甘い言葉ばかり言って、女性を惑わさないように強く言わないとな。

「それに、今日だけじゃないのよ！ アレスは戦争に言ってたから知らないと思うけど、この前なんか！」

モンモランシーは語を強めると語りだした。

出て来る、出て来る、ギーシュの不満オンパレードだ。

話を聞く限り、特に一年の女子に対して、手を伸ばしすぎる部分があった。

しかも可愛い子ばかりらしい。

モンモランシーも可愛さで言うなら学年でも上位に入る。

他にも男子がいるのに、ギーシュだけが恋人候補に上げてもらっているのだ。

ギーシュもそれで抑えていればいいのに。

俺は聞き役に徹していたが、ノルンがついに口を挟みだした。

「あたしもその話、同感！ フェアリーにだって男女の関係はあるけど、そんな男最低よ！」

「分かってくれるのね！ そう、思うでしょ？ ギーシュったら」
ギーシュ、俺は前に自重するように言っただけなんだが、守ってくれていないのか。

ノルンとモンモランシーは息が合ったように今度は理想の男性論を展開している。

これはこれでいいコンビかも知れない。

「気が合うわね、ノルン」

「モンモランシーこそ」

お互いにそう言うと、微笑み合う。

ここに二人の友情が芽生えるのだった。

モンモランシーは大方、落ち着いた。

もう一生分のギーシュの不満をぶちまけたのではないかと言うくらいである。

しかも、理想の男性論を語り終わると、ギーシュの良いところ講座を展開。

すっかり当てられてしまった。

「ふー、すっきりしたわ」

「それはそうだろうね……」

「ありがとう、アレス。一人でいたら悶々とするところだったわ」
「礼には及ばないよ」

何せ文句と惚気をひたすら聞いたただけだし。

「ノルンも、ありがとう」

「ううん。なかなか楽しかったし。今度遊びに来てもいい？」

「歓迎するわ」

すっかり仲良くなったな。この二人。

「それじゃ、僕は戻るよ」

「あ、ルイズ、大丈夫かしら？」

「だから、お暇しようかと思ってね」

そうなのだ。すっかりモンモランシーの話を聞いていたんだが、俺の問題は何一つ解決していない。

ギーシュも戻ってこないのも心配である。

「すっかりさせてもらった、お礼にルイズとの仲介してあげましようか？」

「気持ち嬉しいけど、これは僕の問題だから」

「そう。ギーシュもアレスクらい考えてくれればいいのに」

「あははは……。きっと彼も成長してそうなるさ」

俺はそう言うのと今度こそモンモランシーの部屋から出て行くことにした。

部屋を出ると、そこにはギーシュが膝を抱えて座っていた。

夕日が彼を照らして、黄昏がより強調された感じのオーラを漂わせている。

「ギーシュ、そんなところでどうしたんだい？」

俺の言葉に浮かない顔をすつと上げてきた。

若干、泣きそうな顔のような気もする。

「アレス、すまない。僕では何の力にもなれなかったよ。

君はモンモランシーの機嫌を取り戻してくれたというのに……」

「い、いや、気にしないでよ。」

ああなつたルイズはそつとやちよつとじゃ機嫌直らないんだからさ」

あまり期待してなかったしな。口説くばかり目立つし。

俺は慰めと共に、ギーシュの肩に手を置くと、彼はいきなり抱き

ついできた。

「アレス！ 君はなんていい奴なんだ！

僕は君のような友人がいて本当に嬉しいよ！」

お、男に抱きつかれてもあまり嬉しくないんだが……。

それにしても、大げさだ。

「ギ、ギーシュ、苦しいから離れてくれないかな？」

「それはすまない。感激のあまり、つい」

「ほら、君は早くモンモランシーに謝るといいよ。

今の彼女なら許してくれるさ」

「ああ、ありがとう」

そういうとギーシュは、モンモランシーの部屋に飛び込んでいった。

……。ノックくらいして行かないと、またどやされるんだが。

まあ、ギーシュは反省すると勢いも凄いからな。

その勢いできつとモンモランシーも許すだろう。

むしろ許すしか道が無くなるんだよな。

「マスターのお人よしね」

「おかしいな。俺はこんなにお人よしな人間じゃないんだ」

「ふふふ。年取ってるから何かと世話をしたくなるんじゃないの？」

「……。俺も老けたか」

そんな冗談をいいながら、俺はルイズの部屋へと向かった。

時間は十分すぎるくらいに経っている。

今なら、少しは話を聞いてくれるに違いない。

そうで無ければ、強引に進めるだけだ。

ルイズの部屋に向かっていると、向かい側からキュルケがやって来た。

「キュルケ？」

少し疲れた表情をしているが、嫌な雰囲気は全く無い。

それどころか少し気分が晴れているようだ。

「アレス。方は付けてあげたわ」
俺の前で立ち止まる。

「え？」

「誤解は解いておいたってこと」

「よく、説得できたね？」

「頑固でも聡明なあの子だもの。話して分からない相手じゃないわ。それはあなたも知ってるでしょ？」

これは参った。

俺より先にキュルケが行動しているなんて。

それにルイズのこともやっぱり俺と同じくらい良く知ってる。

「そうだね。それにしても君に先を越されてしまうなんて」

「お詫びよ。あたしだって、あの子と問題を起こしたいわけじゃないもの」

おどけて見せるが、本心だろう。

色恋沙汰では確かに問題も多いが、それは自分がターゲットを決めたときだけ。

俺もターゲットになってはいるらしいが、本気かは定かではないし、何より今ではルイズとも仲がいいのだ。

そんなルイズと問題を起こしたくないのは本当だろう。

「そうか。ありがとう、キュルケ」

「そう思うなら、今度一日付き合ってもらおうかしら？」

「ルイズが良いって言うなら一日くらい」

そのくらいの礼ならしてもいいだろう。

俺としても貸しを作ったままにしたくない。

「珍しいわね。アレスがそういうなんて」

「お礼だよ」

「そうね。さ、早く行ってあげて。」

あの子も意地を張りすぎたことを気にしてたから」

「ああ。わかったよ」

キュルケと別れ、俺はルイズの部屋へと行く。

ドアの前に立つと、ノックを二回した。

「アレス？」

「そうだよ。入っていいかい？」

「うん」

ドアを開けると、いきなり体が揺れた。

ルイズが抱きついてきたのだ。

「ルイズ」

「ごめんなさい。アレスはそんな事する人じゃないって分かったのに、ついカツとなって」

「マスター、あたしは席を外すわね」

ノルンは気を利かせて、部屋の外へと出て行ってしまった。別に気を遣わなくてもいいのだが、今は素直に受けておく。

俺はドアを閉めると、ルイズの頭を撫でながら言った。

「わかってくれれば、いいんだ。僕はルイズを咎めるつもりは一切ないから」

むしろ俺の方が咎められておかしくない。

「うん。ごめんなさい」

「わかったよ。それより、危ないから離れない？」

「泣いてたから、顔酷いの。アレスに見せたくない」

首を嫌々させながら、離れることを拒否するルイズ。

化粧直しくらいさせてあげれば良かったか？

「僕は気にしないんだけど……」

「わたしが気にするの」

「そうか、仕方ないね」

俺はそう言うと、ルイズの顔を自分に押し付けたまま抱き上げた。

「ア、アレス？」

「ここにずっと立ってても仕方ないよ」

ルイズを抱き上げたまま、俺はベッドに行くと言った。

俺に顔を押し付けたままのルイズの頭を撫でながら、俺も謝る。

ルイズばかりに謝らせても、フェアじゃない。

いくら誤解でも、その誤解を作ったのは俺なんだから。

「ルイズを悲しませて、ごめん」

俺が謝ると、首を振る。

「ううん。わたしが悪いの」

「じゃあ、お相手だ」

「うん」

しばらくの間、俺たちは抱き合ったままベッドに腰掛けていた。

雨降って地固まる。

その言葉通り、より俺とルイズは絆を深く出来たんじゃないかと思っただ。

第二十三話（第三部）（後書き）

更新が遅れるといいながら久しぶりの連続更新です。

さて、第三部が始まりました。

今回は、悩めるカップル編みたいな感じで提供させていただきました。

私的にはモンモランシーが好きなので登場してもらいました。

ただキャラの味が上手く出来てるか不安なところですが。

しばらくはこんな感じで一話完結的な話を提供できたらと考えています。

今まで戦争関係で殺伐とした話題が多かったので。

それでは、また次回で。

第二十四話（前書き）

この小説は「ゼロの使い魔」の二次創作になります。

また、独自解釈、独自設定などあり、表現も作者の都合で書いています。

そのため、真に「ゼロの使い魔」のファンと言う方には不快な思いをさせる可能性があるのをご了承ください。

また、読んでいる途中、感情的になったり、気分が悪くなった場合はすぐに閲覧するのを止めて気分を落ち着かせることをお勧めします。

第二十四話

家計が苦しいと、子供は苦勞する。

俺も前世で小さい頃、父親の会社が倒産したときに一時的に大変だった事があった。

それは貴族も同じで、必死に営業活動をする貴族の子供もいるのである。

ド・モンモランシ家は水のメイジとして、水の精霊との盟約に一役買っていた大貴族だった。

しかし、近年は精霊を怒らせて、領地の干拓に失敗。

とても経営が苦しいらしい。

そんな貴族の家に生まれたモンモランシーはやはり苦勞を重ねる学生だった。

モンモランシーは今、俺の部屋に来ている。

別に俺に会いたかったわけではない。

「アレスになら安くしておくから！　ねえ、買わない？」

「モンモランシーは遅しいよね」

営業活動のため訪問してきていたのだ。

売ろうとしているのは、香水である。

二つ名が「香水」と付くほど、香水生産の名手だ。

「で、どうなのかしら？」

俺の机に置いた数種の香水。

何でも、男性の用の香水で女性にさわやかな印象を与えられるらしい。

清潔感を漂わせるミントの香りと、女性を惹き付けるホルモンが少々。

これであなただも想いの彼女を虜にします！

そんなキャッチフレーズが出てきそうな香水なのだ。

「まあ、いつも協力はしてるからね。一つもらうよ。いくらかな？」

「材料費や研究費を考えると、五エキューくらいね。でも、アレスは得意様だから、三エキューにまけとくわ！」

「うん、それじゃ一つ。はい、三エキュー」

俺は自分の財布から金貨三枚出すと、モンモランシーに渡してあげた。

三エキュー受け取ったモンモランシーは嬉しそうに自分の財布に入れる。

「ホント、助かるわ。今月もピンチだったから」

「あはは……。苦労するよね、モンモランシーは」

「まあ、仕方ないわ……。実家は頼りにならないし、自分の生活費は自分でしつかり稼がなきゃ！」

遅いことこの上ないな。

事情が事情だけに尚更、遅しく思える。

「それじゃ、またお願いね」

モンモランシーはそう言う上機嫌で、俺の部屋を出て行く。

「マスター」

「ん？」

「その香水、どうするの？」

「ああ、これね」

そういうと俺は香水を手にとると、早速使ってみる。

自分の首辺りに少しと、手首辺りか。

「使った？」

「使わなきゃ勿体無いって。それに、まけてもらう代わりにいつも使用感をレポートすることになってるんだ」

いつからこうなったのか、俺も忘れたのだが、俺はモンモランシーから買う香水の使用感と効果をレポートしていた。

確か、初めてまけてもらった時の条件だったような……。

「お得様も大変なのね」

「……。俺、実は損してるのか？」

「人助けならいいんじゃないかしら？」

「少しだけ、自分がお人よしなような……。」

「いや、この世界に産み落とされてからずっとお人よしになっていくのかも知れない。」

「まあ、それはいいか。」

「さて、ルイズのところにも行くかな」

「あたしも行くわね。……！」

「ノルンが俺の肩に乗ると、なぜか慌てて離れた。少し赤い顔をしている。」

「どうした？」

「あ、あたし、やっぱりいい」

「？ どうしたんだよ？」

「そ、その香水なんだけど、あたしには強すぎるから……」

「そういうと、ノルンは赤い顔をしたまま、自分の寢床に入ってしまった。」

「そんなにこの香水の効き目があるのだろうか？」

「マ、マスター。一応、言っておくけど、あ、あまりルイズ以外の女の子に近づかない方がいいから。……っ」

「寢床に入ったままノルンはそう言ってきた。」

「しかし、どうも様子がおかしい。」

「ノルンは大丈夫なのか？ 何か苦しそうだぞ」

「だ、大丈夫だから。早く、ルイズのところに行つて」

「……。わかつたよ」

「俺はそういうと部屋から出る。」

「ノルンのあの様子……。まさかとは思うが香水に入っている女の子を惹き付ける成分と言うのは媚薬じゃないだろうか？」

「俺は一抹の不安を抱えながら、廊下を歩くのだった。」

「女子寮の方に来ると、すれ違う女の子がだいたい一回は立ち止ま

って俺を見る。

中には後ろから付いてくる女の子もいるじゃないか。

俺が声を掛けると、なんでもないと行って逃げては行くが。

モンモランシー、注意事項があるならちゃんと行っておいでくれないと困るぞ。

何とか無事にルイズの部屋まで来ると、軽くノックをする。

「誰？」

「アレスだよ」

「鍵は掛かってないから入って」

「それじゃ、お邪魔するよ」

そう言って、俺はドアを開けて中に入った。

中にはルイズしかない。

「サイト君は？」

「厨房の手伝いに行ってるわ」

「ああ、そうか」

以前、シエスタの身代わりに学生と決闘した時に気に入られたらしい。

こっちに帰ってきてからもシエスタに厨房に来て欲しいといわれて行っていると前に聞いた。

ほとんど、マルトーさんの話し相手がほとんどだが、サイトも結構厨房を気に入っているらしい。

最近だと、サイト自身がマルトーさんの手伝いで皿洗いをしてるそうだ。

「ルイズは、薬の研究中だった？」

「ええ。でも、丁度詰まってたから良かったわ。

アレスにも意見を聞きたいの」

「どんな薬だい？」

そう言って俺は備え付けの椅子を持って、ルイズの隣に座る。

俺が隣に来ると、ルイズが息を吞んで、急に顔を赤くした。

「ア、アレス。何の香水をつけてるの？」

「え？ モンモランシーから買った香水だけど？」

「モンモランシーからって……。まさか、あれをアレスに買わせたの？」

「ど、どうしたのさ。それにあれって？」

ルイズの反応を見ると、いよいよ俺が使った香水が普通じゃないことに確信をする。

しかもルイズの顔は赤いまま、上気した感じなのだ。

「そ、その香水、モンモランシーが遊び半分で作った香水よ。

わたしの記憶が間違ってたかったら……魅惑の香水」

ルイズは顔を赤くしたまま説明を始める。

何でも、この香水は本来女性が男性を惹き付けるために作るうとした香水だったらしい。

まあ、それでギーシュを完全に落としかかったらしいが。

それはともかく製造過程の手違いで失敗。

でも、捨てるのも勿体無いため、調合を変えて媚薬もどきを作ったつもりらしい。

しかし、これまた不幸にも製造過程でモンモランシーの目の前に虫が現れて……分量が狂ったという。

そこでまたもや捨てるのも勿体無いため、まあいいやと言う感じに完成させたのが、俺に売った香水だそうだ。

ちなみに、面白半分で媚薬を作ろうと言い出したのはルイズらしくて、こういうタイミングで持ち込まれるとは思わなかったという。「モンモランシー、今月ピンチだからってなんてものを……。ん？ それじゃこれって禁制……むぐっ」

突然、ルイズによって口が塞がれてしまった。

「聞かれたらまずいから、アレス、黙っててくれない？ ねえ、いいでしょ？」

媚薬の効果なのか、妙に色っぽい雰囲気俺を説得してくるルイズ。

しかし、ルイズもなんてものを提案するんだ。

俺がとりあえず頷くと、手を離してくれる。

「好奇心が旺盛なのはいいけど、こういうのは駄目だよ?」

「わ、わかったわ」

「それより、効き目っていつ切れるんだい?」

「ごめんなさい。わたしは分からないわ」

「は?」

「分量が狂ったって言ったでしょ? 最初の計算だとせいぜい二、三時間程度だったんだけど……。あれだと……」

何か俺はとんでもないことを聞いたような気がした。

下手に女の子に近づくとよろしくないことになるってことじゃないか。

参った……。

まあ、自分の部屋にいればとりあえずは、問題ないか。

「じゃあ、今日は大人しく部屋にいることにするよ」

そう言って立ち上がると、マントを引っ張られる。

振り向くと上気した顔のルイズが、俺を潤んだ目で見ていた。

「こ、このままの状態で行かれると、わたし切なくて辛いわ……」

「……え?」

「ねえ、お願い……」

ルイズは立ち上がって俺に抱きついてきた。

それから魔法でカーテンを閉めて、ドアにロックを掛ける。

「ル、ルイズ?」

「このままじゃ辛い」

俺はそのままベッドに押し倒されてしまった。

ルイズの部屋を出た俺は、正直、精も根も種も尽きていた。

冗談じゃない。

ルイズがあそこまで乱れるなんて、俺だっと思わなかった。

ノルンがわたしには強すぎるって言っていたけど、ノルンだけじゃない。

これは女性全般に対して危険すぎる。

「あら？ アレスじゃない」

「キュ、キュルケ……。頼むから、今は僕に近づかないで」

「なによー つれないわねー」

しまった。キュルケにこの言い方は逆効果だった。

キュルケは面白そうと言わんばかりに俺に近づいてきて、ピタリと止まった。

やはり顔が真っ赤になる。

「ア、レス？ あなた何をつけてるの？」

「ご、ごめん。答えられないんだ。とにかく僕から少しでも離れて、危険だから」

「……。ねえ、この前は何もしてくれなかったけど、今日くらい、いいんじゃないかしら？ 事故ってことで」

「キュ、キュルケ！」

いつも以上の色気でキュルケは俺に迫ってくる。

やば過ぎるんじゃないか、これは。

俺は悪いと思いつつ、超最小限で魔法を放った。

「エアーハンマー」

衝撃波でキュルケの鳩尾に衝撃を与える。

超最小限で制御したからせいぜい、鳩尾を殴られたのと同じくらいだ。

キュルケはその衝撃に膝を突いてその場に倒れこむ。

こんな手荒なマネを、こんな下らない事態で使うとは……。

安易に貰った香水を使わなければ良かったよ。

倒れたキュルケをレビテーションで浮かべると、彼女の部屋に連れて行く。

キュルケの部屋が隣じゃなかったら、大変だった。

部屋の中に入って、彼女をベッドに寝かせると俺は部屋を出た。

「ここにいとマズいな……」

一先ず、俺は自分の部屋に戻ることにした。

戻る最中、すれ違う女の子達の反応が、さつきより酷くなっていた。

上気して、俺に飛び掛ってきそうな雰囲気を漂わせているのである。

さすがにこの状態は危険を感じ、俺はフライを使って急いで部屋へ向かった。

どういう効果かは知らないが、時間が経つにつれて効果が増しているらしい。

空気との化学反応か？

酸素、窒素、それ以外にもあるが、それらが薬に作用しているんじゃない。

部屋に戻ると、ドアを開けた。

ノルンの方はもう落ち着いているだろう。

「ただいま」

「おかえ……、マスター近づかないで」

そういうとさつき以上に赤い顔で俺を見てきた。

「やっぱりか？　なあ、これで歩き回りたくないんだ」

「うん。マズイよ、それは」

最悪じゃないか。

この分だと寮にいるのさえ危険に感じる。

「部屋でじっとしようと思って帰って来たんだが……。俺が居るとノルンどうなる？　我慢出来ないか？」

「マスター。使い魔とは言え、わたし女の子よ？　それを言わせようとするの？　神経を疑うわ。察してよ」

確かに、無神経すぎたかも知れない。

見た目ですでに上気してるのが分かるのだ。

我慢なんて出来ないよな。

「すまん、わかった」

俺はそういうと自分の部屋にさえいられず、外に出ることになった。外に出ると、陽は徐々に傾きつつある。

そう言えば、今日は昼食を食べてないな。通りで体力の消耗が激しいわけだ。

モンモランシーが来たのが午前だった。

その後すぐに、ルイズの部屋に行って……後は思い出したくない。少しだけトラウマになりそうだ。

「どうするかな……」

「あ、アレス様」

その声に振り返ると、そこにはシエスタがいた。

「こんなところでどうしたんですか？」

「あ、ごめんよ。それ以上は近づかないでくれないかな？」

「え？」

俺が近づくなと言うと、やや青い顔をする。

まあ、そうだろう。

俺やルイズは比較的と言うか、かなり給士の子達や厨房の人たちと親しくしている。

そんな俺が近づくなと言えば、何かしたのかと勘違いしてもおかしくない。

「あ、ちなみ僕に問題があってシエスタが何かしたかとかじゃないから」

「そうなんですか？　びつくりしちゃいましたよ」

「ごめん。今、ちょっと実験であるものを使っているんだけど、近くに人がいると危険なんだ」

「そ、そうなんですか？」

危険と言うと、さすがに怖いのか近づくのをやめる。

具体的には俺が危険な目に遭うのだが。

「サイト君は？」

「たぶん、そろそろルイズ様の部屋に戻られたと思いますが」

「そうか……」

しまったな。

先にサイトに会うべきだった。

今部屋に行くと、ちょっと宜しくない空気が漂っているからな。

「じゃあ、僕はちよつとその辺歩いてるから」

「あ、はい」

シエスタはそう言うのと、そのまま建物の中に戻っていく。

さて、どうしたものか……。

その後、俺は夜を外で明かすことになる。

結局、香水の効果は丸一日。

その間、女の子が寄って来ないようにシールドを張る羽目になり、尚且つ授業も一日サボることになってしまった。

モンモランシーには、俺が厳重注意をした。

もう二度と面白がっているいろと調合しないこと、と釘を指したのだ。

もちろん、躊躇ったが、俺の残りの香水をギーシュにあげてもいいんだけど？　しかも使いどころも説明してというのと、とても素直に従ってくれるのだった。

第二十四話（後書き）

一話完結にすると、一発ネタで続かなくていいですね。

本当は本業が忙しくて更新ペースが落ちる予定だったんですが。

いかがでしたでしょうか？

一応、本編の惚れ薬イベントっぽいイベントをご提供させていただきました。

正直、空気に触れているだけで乱れるものだとすると、惚れ薬とはまた違った意味で危険な代物です。

そんな香水が本編で作れるのかは知りませんが、
ともかく、いろいろすみません的な作品でした。

それでは、また次回に。

第二十五話（前書き）

この小説は「ゼロの使い魔」の二次創作になります。

また、独自解釈、独自設定などあり、表現も作者の都合で書いています。

そのため、真に「ゼロの使い魔」のファンと言う方には不快な思いをさせる可能性があるのをご了承ください。

また、読んでいる途中、感情的になったり、気分が悪くなった場合はすぐに閲覧するのを止めて気分を落ち着かせることをお勧めします。

第二十五話

見上げる空は、気持ちのいいくらいの青。

雲ひとつない、こんな日に出かけるものいいものだ。

馬に乗りながら、上下する視界もまたいい。

ただし、乗りなれていればいいが、そうでないと辛いもので。

「アレス、ケツが痛いんだけど」

「サイト君、まだ三十分は乗ってないとならないから我慢しないと」

「わかってるんだけどさ、俺、馬に乗りなれてないし」

俺の後ろに乗るサイトが、そう言いながら少し腰を浮かしていた。腰を浮かすのはいいが、俺の肩にしがみ付かれると体勢が崩れる。何とかバランスを取りながら俺は馬を歩かせていた。

「サイト、この前、馬に乗ったじゃない？」

隣で馬に乗るルイズが、サイトに尋ねる。

「この前、戦争に行くのがはじめてだったんだよ」

「ふーん。前に話しは聞いたけど、サイトの世界って余程便利なのね」

「まあな。馬の代わりになる乗り物が多いんだ。

自転車、バイク、自動車、電車、飛行機とな。

自転車はともかく、あとは全部馬より早く移動できるんだ」

「いまいち、イメージが湧かないわ」

疑問だらけだと言う表情のルイズ。

まあ、説明されても見たことなければ分からないだろう。

「マスターも、前世はそう言うのに乗ってたのよね？」

「まあね。自転車は社会人になってから乗ってなくて、えっと社会人って言うのは大人ってことで。その大人になってからは自動車って言う乗り物ばかりだったよ。

最高速度は馬の三倍。時速百八十リグくらいだね」

「うそ！ それって結構早いわよ！」

ルイズが数値を聞いて驚く。

それもそうだろう。

こちらの世界での竜でも、恐らく時速二百キロから三百キロくらいだ。

火竜だと確か二百キロも速度が出ない。

「まあ、あくまで最高速度。通常は規制が掛かっているから、平均すると五十リーグくらいかな？」

「それでも、馬と同じくらいなのね。

しかも人の力で創られた機械なのが凄いわ」

ルイズは感心したように言う。

前にも少しは話したが、具体的に数値で言った事はない。

「なあなあ、アレス。さっきからリーグとか言うけど、なんだそれ？」

「こっちの距離の単位だよ」

サント、マイル、リーグ。

ほとんどが、俺達の世界と呼び方が違うだけで、だいたいが同じである。

それを説明してあげると、サイトも納得したようだ。

「結構、俺らの世界と共通点があるんだな」

「ゼロ戦の件もあるし、案外向こうから事故でこっちに來ている人間が何人かいるのかもね。貴族の考え方も、中世ヨーロッパとかなり似てるし、地図もヨーロッパそっくりだから」

浮遊大陸とは言え、アルビオンの名も昔のイギリスの国名だ。

白い国の意味もほとんど通じる。

帝政ゲルマニアも、古代ヨーロッパの地名と位置もだいたい同じか。

「貴族の考え方は確かに、ヨーロッパっぽいかな。

でも、俺あまり世界史が得意じゃないんだ」

「サイト君、こっちの世界では知らなくても問題ないよ。

帰れたらしっかりと勉強するといいさ」

「そついや向こうでは結構、大変なことになってるんだろうな……」
サイトはそう言つと暗い表情をする。

高校生が突然消えたんだ。すでにサイトもこっちに来て一月以上が経つ。

向こうでもそろそろ事件になつていてもおかしくない。

「ごめんなさい」

ルイズがそんなサイトを見て言う。

責任感が強いルイズにはこの話はきつかったか。

「いや、謝られてもな。そのサモンなんとかって魔法、どんなのが呼び出されるのかわかんないんだろ？」

「そうだけど……」

「じゃあ、ルイズを責めても仕方ないって」
明るく言うサイト。

こう能天気と言うか、楽天家というか、こういう性格だと適応性も高くていい。

事実、こっちの生活にもだいぶ慣れて来たようだし。

「ノルンの家族とかは？」

ふと気になって、ノルンに尋ねてみた。

「いるけど、サイトに比べればまだいい方よ。あたしはその気になれば帰れるもの。」

今は、マスターのところが居心地いいし、死ぬまでマスターと一緒だから。

それに、ちゃんとあたしの場合はい魔になつてくるって言つてるし」

「それは興味深いわね。わたし達はただ呼び出すただけけど、呼び出される方って知らないから」

ルイズとしても呼び出す側だ。俺も同じだが。

ノルンのように呼び出される側の事は俺たちじゃあまり知らないのだ。

「家族でも使い魔になつた人はいたから。」

あたしのお兄ちゃんも使い魔として随分前に出て行っただわ。

これで俺も自由だとか言いながら……。部族の長候補だったから担い手がなくなっただってみんな嘆いていたけど、面倒が嫌いだっただお兄ちゃんも喜んで使い魔になったわけ」

つい、喜んで使い魔になったと言うことに突っ込みを入れようかと思っただ。

場合によつては使い魔になる方がいいのかもしれない。

平和な時なら、守る必要はほとんど無い上に、衣食住は確保できるんだ。

「そ、そうなんだ……」。

まあ、でも、サモン・サーヴァント、やっぱり勝手な魔法だね。

少なくとも契約解除くらい出来ないで、サイト君みたいに呼び出されたものが困る場合もあるよ」

「わたしは今まで、そんなことを考えた事なかったわ。

サイトの事がなければ未だに、呼び出すのが当たり前だったかも知れない」

まあ、大抵が呼び出すのがこの世界では当たり前だろう。

始祖ブリミルがどういふつもりで創った魔法だか分からないが……。

本当に呼び出すだけだったのだろうか？

「あ、でも、拒否も出来るのよ？」

あたし達の場合は、拒否すると、他のフェアリーの前に鏡が行くし」

「そうなんだ？」

意外な事実だった。

まあ、でも光の鏡自体はやはり消えないようだな。

「まあ、今はそれは置いておこう」。

ほら、話してたからもうすぐ王都だ」

俺がそう言っただ先を指す。

トリステイン城が、青空にバックに堂々と聳え立っていた。

トリスティン城下町は、上流の平民や貴族が多数住んでいる場所でもある。

また、商業もここがトリスティンでは最も栄えている。もちろん品揃えは豊富だ。

「なんか、下町って雰囲気だな」

「確かにね」

王都のメインストリート、ブルドンネ街を歩きながら話す。

「どう？ トリスティンの王都は」

ルイズがやや得意気に言う。

自分の国の首都なのだ。

少し得意気にいいたくなるものだ。

「賑やかでいいな。けど、ここが一番大きい街なのか？」

辺りを見回すサイトがそう尋ねる。

悪気はないんだろうけど、その言い方は住んでいる人間からすると少し気になる言い方だ。

「そうよ。何か不満でもあるの？」

「あ、いや、俺の世界だとうちの駅前くらい？ まあ地元の街と同じくらいに感じるからさ」

「ねえ、アレス。サイトが言っていることは本当なの？」

「ん？ そうだね。僕が前世で住んでた街と同じくらいだから、サイト君の言うことは間違っていないよ。」

何せ、僕達が住んでいた首都の人口は千万人と言われてるんだ」

「千万人！」

ルイズが大声を上げて驚いた。

この世界の王都はせいぜい三十万から五十万くらいだ。

それが一千万となれば、かなりの規模の街になる。

「わたしってとんでもない世界の人間を召還しちゃったのね」

「とんでもないんだけどさ。まあ、いろんな世界があるんだってことだ」

「ホント、世界は広いつてことね」

ルイズにとつては世界が広がるため、いいのかもしれない。
この世界の常識に縛られなければ、可能性はまた無限大だ。

他を知ることが己を知ることにつながるし、また己を知れば知らないことも取り入れられるものだ。

「で、今はどこに向かつてるんだ？」

「まあ歩いてるだけだね？」

「そうね……。まあ、わたしは服とかアクセサリーにも興味あるし」

「じゃあ、まずはそこに言ってみようか」

俺たちはとりあえず、ルイズの服を見に行くのだった。

貴族向けの服と言うのは、まあ派手なものが多い。

女性向けとなると、その装飾の数が半端ではなかった。

しかし、普段の服装から考えると、派手すぎるのが多いもので……。

…。

「あそこまで派手にする必要ないわよね」

と言いながらルイズは結局何も買わなかった。

「まあ、あそこにあったのはどうやらパーティーとかのが多かったみたいだし」

「ねえ、マスター。あたしの服とかはやっぱ売ってないのよね？」

ノルンが周りを見ながら聞いてくる。

フェアリーと言えど、女の子。

ファッションには気になるのだろう。

「さすがに、売ってないね。何なら仕立ててもらおう？ そのくらい出来るけど」

「うーん、じゃあお願い。あたしずっとこの服だし」

そう言いながらノルンは自分の服を摘んだ。

「そう言えば、ノルンって洗濯どうしてるの？」

ルイズがノルンを見ながら言う。

確かに、俺もノルンが着替えてたりした姿は見たことない。と言

うか着替えを見たらそれはそれで問題か。

ともかく確かに代えの服はないのだ。

「魔法で綺麗にしてるわ」

「魔法で？」

ルイズの疑問に、ノルンは頷いて答える。

「あたしは風の妖精よ？ 風の力で綺麗にしてるわ」

「オゾン洗浄ってやつか？」

「それなら空気で洗えるね。まあ、精霊魔法だから空気で隅々まで綺麗にしてるってことかな？」

「その通りね」

風の精霊なら、空気そのもの。

生地を傷めずに、汚れだけ落とせそうだ。

意外に便利かもしれない。

今度、ノルンに俺の服も洗ってもらうかな。

「じゃあ、ノルンどんな服がいいのか見に行きましょう」

ルイズはそういうとノルンを連れて行ってしまふ。

やはり服となればたとえ他人の服でも気になるのが女の子なのだろう。

「サイト君、僕らも行くのか」

「ああ」

そう言っつて、二人の後についていくのだった。

その後、ノルンは三着の服を仕立てた。

緑のワンピースと、魔法学院の制服と同じデザインの服、あとは薄い青のドレスだ。

ワンピースは今着ているのとは似たデザインのもの。まさに代えの服である。

魔法学院の制服に関しては、着てみたかったとの事。ちっちゃな学生の誕生だ。

ドレスに関してはルイズの提案。

せつかくだから可愛いのを仕立ててもらおうというのだ。

「しかし、これらで二十エキュールか。良い値になったな」

「マスター、大丈夫なの？」

「大丈夫。こう見ても無駄遣いはしないから結構、お金はあるんだよ」

毎月、実家から生活費が送られてくるが、その半分以上は手をつけずに持ち越しなのだ。

「帰りに寄って、仕立ててもらった服を持って帰らないとね」

「うん！」

ノルンは嬉しそうだ。

やはり、女の子には笑顔でいてもらえると嬉しい。

「ねえ、アレス。わたし、服はいいからアクセサリー欲しいな」

「あ、俺も服が……」

「えっと、ルイズは分かるんだけど、どうしてサイト君が便乗するのさ？」

「俺だって、この服のままじゃ嫌だぞ」

「気持ち分かるんだけど、たぶん今着てるのが一番いいよ？」

ルイズ、サイト君の服の生地触ってみて

「ええ」

俺に言われるがままに、サイトのパーカーを触るルイズ。

そして驚くように言った。

「何、この生地！ とても気持ちいいわよ！」

「へ？ そうなのか？」

その反応に驚いたように、サイトは言う。

「そりゃそうだよ。大量生産で作れるパーカーでさえ、こっちの服以上に着易いはずさ」

俺は子供の頃から着てるから慣れているが、サイトがこっちの服を着るとなると若干違和感があるはずだ。

「でもよー、俺だってずっと同じ服って汚いって思うわけさ」

「それなら、わたしが買ってあげるわ。サイトには出来るだけ快適

に過ごしてもらわないとならないし」

「お、サンキュー。助かるわ」

という事で、ついでにサイトの服も仕立てることになった。

先に、ルイズのアクセサリーを見る。

ルイズに買ってあげたのはシルバーのチェーンだ。

細かく絵が彫られていてなかなかいいデザインである。

ちなみに、選ぶのは俺ということだったので、それを選んだ。

「アレス、ありがとう！ 大切にするわ」

そういうとルイズは、手首にチェーンを巻きつける。

この手のアクセサリーは首に掛けても手首に巻いても様になるのだ。

手首につけたチェーンを嬉しそうに眺めるルイズ。

買って良かったと思う瞬間だな。

次にサイトの服を仕立てに行く。仕立てる服は、今来ているものとほぼ同じものだ。

さすがに同じ生地はないため近い生地となるが、仕立てて金額がなかなか高かったが。

あとは予備としてシャツとスラックスを購入。

こちらは学院と似た感じになっているが、スラックスはジーンズの色に近いものにしてある。

それらを買うと、俺たちは昼食を取ることにしたのだった。

昼食が終わり、適当に街を歩くと、武器屋を見つけた。

「そう言えば、サイトってナイフしか持ってないわね」

「ん？ ああ、まあ特別困ってないしな」

「でも、せつかなんだから剣くらい持ったら？ あまり高いのは買ってあげられないけど」

「うーん」

サイトは剣と聞いて少し悩んでいた。

正直、サイトのルーンならどんな武器でも使いこなすだろう。

悩んでいる理由は、武器を持つことじゃないか？と感じてる。

「サイト君、別に武器を買うつて言っても護身用だと思えばいいさ。この前みたいにルイズに何かあつて助けるときにナイフだけじゃ心もとないよ？」

「そうか……。どうも、この前の戦争がまだ抜けて無くてさ。

まあ、護身用なら確かにあつてもいいと思うよ」

「じゃあ、決まりだね」

武器屋に入ると、主人が若干馬鹿にした面持ちで俺たちに声を掛けてきた。

「貴族様が、剣をお買い求めで？」

「彼の剣が欲しいんだ。出来るだけ丈夫な奴」

「へえ、ならこれは如何でしょう」

そう言つて出したのは立派な大剣だった。

「あら、とても立派じゃない」

「ああ、何かすげーつて感じがする」

そういうサイトとルイズを見て、店の主人がニヤリと笑いながらうんちくを言い始める。

何度も、ゲルマニアの高名なメイジが鍛えた剣らしい。

ルイズもメイジが鍛えたと言つのが気に入ったのか、その剣をマジマジと見る。

「その剣はやめた方がいいよ」

二人が興味深々で見ているところを、俺が水を差した。

「え？　なんで？」

「まず、メイジがどんな事をするか想像してごらんよ。

たまにこつちにもいるけど、平民相手にメイジが作ったただけで高く買わせる傾向があるでしょ？」

第一、ギーシュだつて剣くらいは鍊金出来るしさ。

主人、それつてゲルマニアの商人から買ったもの？」

「へ、へえー。これはゲルマニアの商人から、高名なメイジがと」

「そのメイジの名は聞いた？」

「い、いえ……」

俺が突っ込みを入れると、徐々に自信が無くなっていくのが分かる。

そもそも剣を扱っているのに、剣の目利きが出来ていないのではないだろうか？

俺も軍人の端くれだから分かるが、平民の部下に持たせる武器としてはこれはない。

まず装飾が多すぎるのだ。

家にも装飾品があるが、それらと大して変わらないのだ。

「ルイズ、こんな感じの剣って家に飾られてない？」

「え？　そう言えば、似たような綺麗な剣が飾ってあったりするわ」腕を組んで、人差し指をあごに当てながら答える。

「主人、それ、装飾用の剣だよ」

「……。そうですか」

主人はそういうと肩を落として、その剣を店の奥に持っていくのである。

「おう、若えのになかなかいい目をしてるじゃねえか」

どこからともかく、そういう声が聞こえてきた。

辺りを見回すが、それらしい人がいない。

「誰だい？」

「俺か？　俺はデルフリンガー様よ！」

セールの品の剣が一本金属音がかみ合う独特の音を立てながらしゃべっている。

「剣がしゃべってる！」

サイトは驚いたように言う。

まあ、剣がしゃべるのは確かに驚くだろう。

俺たちの世界でも珍しいには代わりが無い。

「デルフリンガー？」

ノルンが、そういうと何やらうーんと、腕を組んで考え出す。

「なんだったかなー」

「まあ、後で思い出しなよ」

俺はそう言うが、実は知っていた。

ガンダールヴを調べれば出てくるのだ。デルフリンガー、初代ガンダールヴが使用した剣である。

正直、こんな武器屋で売っているとは思ひもしなかったから驚いたが、これはラッキーだと思った。

売れることは無いだろうが、この剣をここで手に入れられるとは俺も伝説だから存在が怪しかったが、しゃべる剣がわざわざ虚偽を言うこともあるまい。

「デルフリンガーはインテリジェンスソードなんだね？」

「おうよ！俺はインテリジェンスソードさ。まあ、見たとおりの姿だけだな」

デルフリンガーは自分の錆びた姿を自虐するようにいう。

もし伝説の剣なら錆びているのは不自然だが、磨きなおせばいいだろう。

「おい、デル！お客様だぞ、もう少し言葉遣いを考えろ！」

「なんでえ！そのお客様に武器の利き目で負けたの誰だよ！」

「つく！この剣の癖に生意気な！」

「その剣に言い負かされるようじゃ、まだまだだな！」

剣と主人が言い争いを、サイトは呆然と見ていた。

そんなサイトに俺は進言する。

「サイト君、この剣ならどうだい？叩くにはいいんじゃないか？」

「おい！兄ちゃん！俺は剣だぞ！それを叩くたあどういうことだ！」

「まあまあ。サイト君、握ってみたらどうだい？」

「あ、ああ」

サイトは俺に勧められるままに剣を握る。

すると、デルフリンガーが声を上げて驚いた。

「何だ、お前使い手か！」

「使い手？使い手ってまさか……？」

サイトも何か分かったのか、自分のルーンを見てから、俺の方を
確認するように見た。

俺もそれに頷いて答える。

「お前、俺を買え！」

「よし、買った！ ルイズ、俺、この剣にするよ」

サイトがルイズにデルフリンガーを見せると表情が怪訝だった。

「これにするの？」

「ああ、これでいい。だろ？ アレス？」

「そうだね」

俺がそういうと、何かを考えてルイズは財布を出す。

「主人、あの剣はおいくら？」

「あれでしたら、百エキュードいいでさ」

「それじゃ、頂くわ」

そういうとルイズは、百エキュードを渡すのだった。

剣を買った後は、ノルンの服を受け取って学院へと戻る。

その帰り道、俺はデルフリンガーに尋ねたのだ。

「デルフリンガー、君はサイト君を使い手と呼んだね？」

「おう！ 使い手は使い手だからな」

「それって、ガンダールヴの事なんでしょ？」

「何だ、兄ちゃん？ 随分と詳しいな……。そうよ、俺様は……」

「そうよ！ 初代ガンダールヴが使ったといわれてる剣がデルフリ
ンガーじゃない！」

デルフリンガーが自分のことを話そうとした時に、ノルンがそれ
を遮るのだった。

第二十五話（後書き）

日常編、第二段をお送りしました。

そして、ようやくデルフリンガー登場です。

正直、迷いました。

いっそのことデルフリンガーなしで話を進めようかと。

もう話しは原作に沿っていませんし、このままデルフが無くてもいいのかなと……。

まあ、いろいろ考えましたが、結局デルフリンガーを登場させました。

魔法が効かない特性を生かして、アレスの実験に付き合ってもらったりとか考えています。

ちなみに、アレスがやたらと知識があるのはルイズの事で虚無関係を調べてたからという事で。

ノルンに関しては、人間以外だと案外、そういう伝承とかは正確に伝わっているんじゃないかと。

ただノルンは真面目にその辺は聞いていなかったということにしています。だから思い出すのに時間が掛かりました。

あと二、三話くらいは穏やかな話が続くと思います。

第二十六話（前書き）

この小説は「ゼロの使い魔」の二次創作になります。

また、独自解釈、独自設定などあり、表現も作者の都合で書いています。

そのため、真に「ゼロの使い魔」のファンと言う方には不快な思いをさせる可能性があるのをご了承ください。

また、読んでいる途中、感情的になったり、気分が悪くなった場合はすぐに閲覧するのを止めて気分を落ち着かせることをお勧めします。

第二十六話

早朝、学院の中庭で金属が鳴り響く音が聞こえていた。鉄と鉄がぶつかり合う特有の音である。

片方は俺が錬成した鉄の剣、もう一つは。

「いいぞ、相棒！ その踏み込みから斬り込め！」

先日購入したデルFRINGガーだ。

サイトはデルFRINGガーの指示を受けて一気に俺の斬り込んでくる。

「てりゃあああ！」

サイドステップからの突進。

ガンダールヴの能力を引き出したサイトの動きは素早い。

訓練していなければその動きについて行くのは難しかったと思う。

再び鳴り響く金属音。

「ふう、いい感じになったんじゃないかな。サイト君」

「一撃も入れてないのに褒められてもな」

俺が剣を払うと、サイトは後ろに飛んで構えた。

額には汗が浮かび上がっている。

「次が最後だね」

「ああ」

そういうと互いに剣を向ける。

そろそろ朝食の時間だ。

これ以上の戦いは食事に響いてしまう。

俺は中段に剣を構えて、サイトを注視する。

向こうはガンダールヴのルーンが一際輝きを強めると、地を思い

切り蹴って俺に迫る。

その速度は俺が戦ってきた中では最上級の早さだ。

サイトが突きの体勢で飛んでくる。

鋭い突きだ。剣先が俺の喉下に向いているのが分かる。

サイトに殺すつもりでと言っている以上、手加減は無しだ。

サイトの剣先に意識を集中させて、俺は右に回転しながら避ける。風が切る音がかすかに俺の耳に届いた。

俺は回転しながら剣を振る。

「そこまで！」

審判代わりをしていたノルンの声が中庭に響く。

俺の剣はサイトの喉下にサイトの剣、デルフリンガーは俺の首筋に当てられていた。

「引き分けだね」

「何か、悔しいな」

お互い剣を下ろすと、それまでの緊張感が消えた。

中庭で寝っ転がるサイトと俺。

ガンダールヴの全力で戦わせてもらったのだ。

デルフリンガーと言う、伝説の剣が手に入ったわけでもあるし、サイトの力を俺自身が知ってもいいと思って手合わせをしたのだ。

最初、俺が勝ってしまったのもあり、サイトが俺から一本取るまで続けることになって今、引き分けで終了した。

「お前さん、結構強えな。相棒がまだルーンを使いこなしてねえが、どこでそんな腕を磨いたんだ？」

デルフリンガーがしゃべりながら鰐が合わさる特有の金属音を響かせている。

「自己流かな？ まあ一応剣道って言うのが基になってるけど」

「剣道か？ 全然そんな感じがしねえぞ？」

「だから自己流だってば」

剣道って言っても高校の授業で習ったつきりだ。

魔法の使えないメイジがとても無力なのが分かってからは記憶の限りたどりながら必死に自分なりに剣の扱いを覚えた。

実際には、王都に赴くことが多く、父さんの勧めもあって魔法衛士隊に稽古を付けてもらった時期もある。

「そう言えば、この前、黒い仮面の男とやった時と少し似てたんだ

けどさ」

「黒い仮面の男……。そう言えば」

あの男こそ、動きが魔法衛士隊に似ていた。

まあ、国内にもレコンキスタが入り込んでいるようだし、もしかしたら元魔法衛士隊つてこともあるのかも知れない。

「サイト、アレス！ そろそろ朝食の時間よ！」

ルイズが、中庭にやって来て俺らを呼ぶ。

確かに時間的には朝食の時間だ。

「マスター、もう行かないと！」

ノルンに急かされながら、まだ疲れの抜けない体を押して食事へと行くことになった。

食事を終えて、俺達が教室へ向かっていると、ロングビルが声を掛けてきた。

「丁度、良かったですわ。

今、ヴァルガードさん呼びに行こうと思っていたところですよ」

「僕をですか？」

「はい、後、ミス・ヴァリエールの使い魔さんも。オールド・オスマンが呼びびです」

「うえ？ 俺も？」

そう言っただけで俺の顔を伺う。

俺は大丈夫だというのを、彼にジェスチャーで伝えた。

恐らく、俺が戦争に行く前に話していた件だろう。

破壊の杖を見てもらう。

見たところで、どうって事はないのだが異世界から来たと言う証拠にはなるはずだ。

「わたしは？」

「ミス・ヴァリエールはそのまま授業に参加してください」

ルイズはやや不満そうだったが、その言葉に頷いた。

俺とサイトがオールド・オスマンの部屋に入ると、ロングビルは

そのまま下げられた。

話す内容が内容だけに知られていいものじゃない。

オールド・オスマンがサイレントの魔法を掛ける。

「来て貰ったのは他でもない。あるものを見てもらいたくての」

「あるもの？」

サイトが首をかしげながら言う。

心当たりがないのだから当然だ。

「サイト君、学院長には話をしてあるんだ。味方になってくれる人だから。」

で、見て欲しいのはこの前のゼロ戦のようなものだと思う」

「思う？」

「そう。場違いな工芸品に値するものだと思うから、そうですね？」

俺が確認も含めてオールド・オスマンに尋ねると、返事と共に頷いた。

「破壊の杖と言うものじゃ。アレス君から話を聞いていての、もしかしたら君の世界のものかも知れぬから見てもらいたいのじゃ」

「そうなのか？」

尋ねるサイトに俺は頷いて見せた。

まあ、恐らく破壊の杖と言うのは異世界のものだろう。

ゼロ戦の事もある。俺たちの世界の物の可能性がある。

「で、その破壊の杖ってどこにあるですか？」

サイトがオールド・オスマンに尋ねると、宝物庫に保管してあると言って鍵を取り出した。

俺達はオールド・オスマンに連れられて宝物庫へと案内される。

この学院に来て一年と少し経つが俺も宝物庫は初めてだった。

オールド・オスマンが鍵を使い扉を開ける。

どうやら鍵と魔法の二重で管理されているらしい。

扉が開くと、埃っぽい匂いと湿った空気が宝物庫から流れてきた。

「さて、ここから先じゃが、余計なものに手を触れなくてくれ。」

使用用途が不明なものが多いために何が起るのかは分からのじゃ」

オールド・オスマンの言葉に俺とサイトは頷くと中へと入る。
ライトの魔法をオールド・オスマンが使つと、中が一望できた。
確かに、様々なものがある。

俺も良く分からないものが多い。

オールド・オスマンに付いて行き、その破壊の杖と呼ばれる代物を手にとって見せる。

「これって……」

サイトが俺の方を見て、破壊の杖を指差す。

俺もそれに頷いて答えた。

「サイト君が思ったとおりのものだよ」

「ロケットランチャーってやつか？」

「やはり、お主はこれが分かるのじゃな？」

「分かるって言うか、知つてると言うのが正しいですかね？」

サイトが、そう言うとおールド・オスマンは破壊の杖をサイトに渡した。

破壊の杖を受け取ったサイトの左手が、不意に輝きだす。

そう言えば武器なら何でも反応するんだったか。

「M72ロケットランチャー……。とんでもない破壊力を持ったものだ。」

この世界にこれがいくつもあつたら戦争なんて簡単だぜ？」

サイトにロケットランチャーの情報が伝わっているのか、やや興奮しながら言っていた。

一通り見ると、それをオールド・オスマンに返した。

「君はやはりこの世界の人間ではないのじゃな？」

「俺は違う世界からこっちに呼ばれたんです。もつとも俺も知らないうちにこっちに来てしまったんで何がなんだか分かりませんでしたけど。アレスがいなかったら結構苦労しそうでした」

「なるほど……。この破壊の杖は、わしの命の恩人の形見での。」

これを使ってわしを助けてくれたのじゃ」

「そ、それで、その人は？」

元の世界に帰る手がかりになると思ったのか、サイトが尋ねる。
オールド・オスマンは昔を思い出しているのか、俯きながら答えた。

「元の世界に戻りたいと言いながら看護も空しく……」

「そうですか……」

その答えにサイトも、また落胆をするのだった。

結局、分かったのはサイトが異世界から来たこと、そして破壊の杖が俺たちの世界の武器だと言うことだけである。

破壊の杖が何なのか、そしてサイトがそれを知っているのか？
それだけ分かればここには用が無い。

破壊の杖を元の場所に戻すと、俺たちは宝物庫を出ることにする。
宝物庫を出ると、そこにロングビルがいた。

「どうしたのじゃ？」

「いえ、学院長が宝物庫に來ていると伺ったので、ついでに帳簿を付けようと」

「おお、そうじゃったか。」

せっかくじゃから、アレス君、ロングビルの仕事を手伝ってあげてくれんかの？」

驚いたことに、俺にロングビルの手伝いを言い付けて来た。

俺は別に構わないとして、どうして学生に言うのだろう。

「構いませんが、授業は？」

「特別に出席扱いじゃ。それに君は頭も切れる。

ミス・ロングビルのいい助手になるじゃろう」

「しかし、わたしは一人でも……」

手伝いに関して何か不満でもあるのだろうか？

少しだけ困ったような顔をしながら俺を見る。

一人で仕事をしたいということだろうか？ まあ、一人の方がしやすい場合もあるからな。

「まあ、学生もこういう仕事を体験させた方がいいじゃろうと思うのでな。」

さて、サイト君はミス・ヴァリエールの元に戻りなさい」

「え？ あ、はい。それじゃ、アレス。」

俺は先に戻ってるよ」

「分かったよ。ルイズにちよつと遅くなるって言っておいてくれるかな？」

「ああ」

そう返事をする、サイトはオールド・オスマンと共に宝物庫を後にした。

残された俺と、ロングビルは宝物庫の帳簿を付ける仕事を始める。

引き受けたのはいいのだが、こつも面倒な仕事とは……。

いちいち物を確認して、リストをチェック。

あるもののチェックだけだから、これほど面倒な仕事はない。

まあ、手伝いを申し付けられるだけの仕事ではあるとは思ったが。

俺が帳簿のチェックをしていると、ロングビルが破壊の杖を持って何やら見ていた。

「どうしたんですか？」

「あ、いえ、破壊の杖と言う割には杖の形をしていないなと思いついて。」

こんなものどう使うのでしょうか？」

ロングビルはそう言いながら破壊の杖を元の場所に戻す。

「まあ、場違いな工芸品です。僕達では使用不可能らしいですよ？」

学院長が言うには、これを使えるものはもういないそうですし」

「と言うことは、これは使えるのですか？」

「そう言うことになりましたが、使わないに越したことありませんよ。場違いな工芸品が、どういう経緯でこちらに来るか知りませんが、本来なら不要なものばかりですから」

使える人間がいたらいたで、また大変だろう。

もつとも量産はここでは不可能だが。

エレオノールに聞いた話だが、ほとんどが何のために使うかわからないと言っていたし、それならあってもどうしようもないものばかりだと思う。

第一、俺もこんなものがあっても困る。

そもそも一般人だった俺だって、こんなものの使用方法は分からない。

サイトのようにガンダールヴの力があれば別だが……。

ガンダールヴ？

武器を使いこなす能力。

ゼロ戦さえ、サイトになら使用方法が分かった。

それはガンダールヴだからだ。

場違いの工芸品とは。

「まさか……」

「どうしたのですか？」

「あ、いえ、何でもありません」

まさかとは思う。

場違いの工芸品とは、もしかしたらガンダールヴのための武器なのでは？

だから、こんな危険極まりないものばかり、場違いの工芸品なのではないか？

使用用途が不明。

それが全て武器なら、サイトのようなガンダールヴになるものにとつてまさに鬼に金棒だ。

ゼロ戦だって、サイトが乗ればエースパイロット顔負けの操縦をするに違いない。

そんな考えが頭に浮ぶが、今は仕事の方をするのが先決だった。

「ヴァルガードさんは、アルビオンでレコン・キスタと戦われたそうですね」

仕事も終盤に差し掛かったとき、ロングビルのそう訪ねられた。

「はい。そうですね」

「ヴァルガードさんは、貴族をどう思いますか？」

「ミス・ロングビル？」

「私は、貴族がとても身勝手なものに感じてなりません。自分の思い通りにならないければ、すぐに杖を振るう。」

「そんなのおかしいと思いませんか？」

「とても、真剣な目で俺を見てきた。」

「驚いたものだ。まさか、こんな話を持ちかけられるとは思わなかった。」

「僕も、そう思います」

「そうですね。ならレコン・キスタが目指すものをどう思いますか？」

「ミス・ロングビル。一体、どういうことでしょうか？」

「そうだ。」

「なんで、こんな話をするんだ？」

「そもそもレコン・キスタをどう思うなんて聞いてどうするのだろうか？」

「私は、同じ貴族に家族を奪われました。それが憎いのです！」

「レコン・キスタは共和制を敷こうと言っていました。それなら貴族同士が助け合って争いごとなんて不要になると思うんです。」

「それをあなたは阻止しました。なぜです？」

「落ち貴族か。貴族によって、たぶん王族に滅ぼされただろう。」

「でも、貴族を嫌うなら俺にこんな話をして何になるのだろうか？」

「とは言え、答えないわけにも行かない。」

「しかも、向こうは真剣だ。」

「共和制自体は、僕も賛成です。」

「しかし、聖地奪還となれば話は別ですよ？」

「これはハルケギニア全体のことになりますし、場合によっては奪還後の覇権にさえ関わります。それこそハルケギニアを統一でもない限りは。」

また、聖地奪還になればエルフとの衝突も避けられません。

エルフと戦うメリットは聖地奪還を掲げてもあるとは到底思えないんです」

「どうしてですか？」

「エルフにはエルフの生活があります。

過去、何度も聖地奪還を掲げて戦争をしていますが、彼らを退けた記録は皆無に近いです。

また、彼らの生活を奪ってまで聖地を奪還する価値があるとは思えません。

それなら、彼らと交流をして双方が理解しあう方がより建設的だと僕は考えます。

エルフが僕達を嫌う理由、エルフを僕らが恐れる理由。

話を通じないなら分かりますが、ともに言葉は通じると聞きます。ならば、共に話し合いを持って人とエルフの壁を取り払い、交流が出来る様になる方が、奪還するよりも確実に聖地に近づけると思いませんか？」

そこまで話すと、ロングビルは驚いた顔をしていた。

「エルフを恐れないんですか？」

普通はエルフを恐れるだろう。

それはエルフに対する教育がそうさせているからだ。

俺はそんなもの信じないし、種族なんて関係ないと思う。

「言葉の通じる相手を何故、恐れるんですか？」

彼らとは長年戦争をしてきています。僕も歴史をかじっているから知っていますが、彼らから一方的な侵略の記録はありません。

それに戦争や争いごとで、一番問題になるのは分かり合おうとしないことです。

双方が分かり合えばそれが一番平和的な解決だと思いますよ」

第一、俺の世界でも神話などで出てくるが、彼らは高度な知能を持っているんだ。

俺らを下に見ることがあっても、悪戯に俺たちに対して危害を加

えるとは思えない。

話を聞くに値すると思えば、話が出来ると考える方が妥当だ。

「面白い人ですね」

「僕が、ですか？」

「ええ。まさか、エルフと交流を持てばいいなんて……。」

あなたのような人が多ければどれ程の不幸が防げたものか」

どういうわけか、とても悲しそうな顔をしていた。

以前、守りたいものが守れなかったと彼女は言っていた。

それと関係があるのだろうか。

「ミス・ロングビル？」

「すみません。とりあえず仕事を済ましてしましましょう」

そついうとロングビルは、何事も無かったように仕事をするのだつた。

仕事が終り、二人で宝物庫の中から出る。

「手伝ってくれてありがとうございました」

「あ、いえ、学院長の命ですし」

おかげでいろいろと深い話も出来た。

「そうですね。あ、以前話していた魔法の件ですが」

「あ、そうですね。どうします？」

何なら今夜からでも構いませんが？」

「お願いできますか？」

「僕で良ければ。夜にでも尋ねてきてください。」

守るための力でしたら、僕も喜んでお教えしますから」

「わかりました。よろしくお願いします」

そついうと、ロングビルは学院長室へと戻っていった。

俺は、もう時間が遅いためにそのまま寮に戻ることにする。

いや、その前にルイズのところに行かないと心配しているだろうな。

そう思い、俺はルイズの部屋へと向かうのだった。

第二十六話（後書き）

今回は、サイトとの手合わせと、ロングビルとの語りでした。

特に重要なのがロングビルとの語り。

エルフを恐れるものではないと言うことは、彼女にとってテファ（ティファニア）の味方になりうる存在になります。

それだけに警戒感も薄れますね。

アレスはそれを知らないんですが。

ともかく、いろいろとオリジナルとは違う展開になっています。

第二十七話（前書き）

この小説は「ゼロの使い魔」の二次創作になります。

また、独自解釈、独自設定などあり、表現も作者の都合で書いています。

そのため、真に「ゼロの使い魔」のファンと言う方には不快な思いをさせる可能性があるのをご了承ください。

また、読んでいる途中、感情的になったり、気分が悪くなった場合はすぐに閲覧するのを止めて気分を落ち着かせることをお勧めします。

第二十七話

夜、俺は最近出来ていなかったサイトの帰還方法を研究していた。以前、ワームホール的な発想で出来るのではないかと思考をしてそれっきりである。

エレオノールにも依頼はしているが、そんなに早く進展が有るはずは無い。

この研究は時間が掛かるのは必至だ。数年のうちに出来ればいいんだが。

そうやって机の上で、自分でまとめた資料を見ながら思考を巡らせていると、ノルンが声をかけて来た。

「マスター、お客さんみたいよ」

「ロングビルか？」

資料を机の中に仕舞う。

見られても特別、問題はないだろうが、念のためだ。

ロングビルはあれから俺の部屋に来てはライト・ブラスターについて学んでいる。

コモンスペルだから比較的簡単に使えるのだが、特性も知りたいそうだ。

「アレスさん、ロングビルです」

部屋がノックされ、外からロングビルが名乗る。

「どうぞ、入って下さい」

部屋の戸が開けられて、ロングビルは入って来た。

いつもは髪の毛をまとめているのだが、今日は下ろしている。

「髪の毛を下ろすと、雰囲気違いますね？」

「そうですね？ 仕事するのには邪魔になるので結わいていたのですけどね」

「その髪型も似合いますよ」

ロングビルは少し驚いた表情をすると、微笑んだ。

俺は備え付けの椅子を用意して、そこに座るように勧めた。

「失礼しますわ」

備え付けの椅子に座る、ロングビル。

それから、いつものように講義を始めるのだった。

一通り、講義も終わり俺は紅茶を淹れる。

実家から送られてくる紅茶で、香りがいいのだ。

ロングビルにカップを渡すと、お礼を言われる。

「今回の講義で教えられることは終わりです。」

ミス・ロングビルなら、もう十分理解していますし、コモンスペルなので応用も簡単ですから」

「もう終わりですか？ 結構、楽しみに来てたんですよ？」

少し、寂しそうな表情で言うロングビル。

まあ、そう思ってもらえるだけでこちらとしては嬉しい。

基本的に、教えるのは好きなほうだからな。

「まあ、お茶くらいなら今後もお誘いしましょうか？」

こんな誘いをしたらルイズに怒られるかもな。

まあ、お茶くらい多めに見てもらおう。

「それは嬉しいお誘いですわね」

嬉しそうに言い、ロングビルは紅茶を一口飲む。

カップをテーブルに置くと、こんなことを聞いてきた。

「ヴァルガードさんは、大切な人が豊かに暮らすために一人働くのと、貧しくても一緒に住むのはどちらを選びます？」

真剣な目である。

何か事情があるのだろう。

「そうですね。僕なら、貧しくても一緒に暮らしたいと思います」

「どうしてですか？」

「お金を送る側はいいでしょう。」

大切な人のために頑張っていると言う自負がありますから。でも、送られる側はそうじゃない。

今はどこで仕事をしているのか？ 危険な目に遭ってないか？

体は健康なのか？

心配で仕方ないと思います」

残される者達は、心配するものだ。

現代日本では、単身赴任が多いから慣れもあるだろうが、基本は居て欲しいもの。

居て欲しいと思わないのは、大切にされていない場合だ。

そして、ロングビルがこんな事を言うのはきっと、そういったことがあるに違いない。

「そうですか……」

一言、ロングビルが言うと紅茶を再度手にとって飲む。

気分を落ち着かせようとするように感じた。

「僕の経験ですが」

「え？」

「これは僕の経験なんですが、離れているところで何かあると家族と言うのは心配します」

俺は自分の左手を見た。

アルビオンでの調査で失った左手。

俺はあの時、明らかに死に掛けた。

事実、数ヶ月意識はあるのに目を開けることさえ出来ないほど体が疲弊していたのだ。

今ここに居るのさえ、不思議なのである。

「その左手なのですか？ 心配を掛けさせたのは？」

俺が左手を見ているからか、ロングビルが尋ねてくる。

その顔はやや神妙な面持ちだ。

「これもそうですね。」

旅先の事故で左手を失って、意識も数ヶ月戻らなかったことがあるんです。

それはもう皆に心配かけさせました。

実家に運ばれたのも運が良かったくらいですからね」

「そうだったんですか……」。

ありがとうございます。参考になりましたわ」

「僕の話なんかで良ければ」

「謙遜ですわよ」

微笑むロングビル。

その笑顔の奥で何かを迷っているように俺は見えたのだった。

その後、たわいも無い会話をする、時間も遅くなりロングビルは部屋を後にした。

紅茶のカップを片付けていると、窓のガラスが叩かれる音が部屋に響く。

ノルンが俺の肩から離れて、窓へ行く。

「マスター、あの鷺さんよ」

窓の鍵を開けながら、ノルンはその鷺を中に入れた。

以前、俺のところにマザリー二枢機卿からの伝言を届けてくれた鷺である。

「王宮からの遣いか。また何かあったのか？」

俺はその鷺に近づくと、足から手紙を抜き取る。

その手紙を広げると、内容を読んだ。

さりとて長くないのだが、何度か読み返してしまう。

その内容を理解すると、思わず呟いてしまった。

「本気か？」

「なんて書いてあるの？」

鷺を撫でながら聞いてくる。

鷺は鷺でなかなか気持ちよさそうだ。

「アンリエッタ女王の誕生になるかも知れない」

「え？」

「アンリエッタが王位を継ぐそうだ」

「へー 凄いじゃない！」

確かに凄い。

アンリエッタはルイズの一つ上でまだ十七歳。

それで王位を継ぐのは相当な覚悟が必要だ。
手紙に書かれているのは、それだけじゃない。

「で、俺に相談したいそうだ。それで明後日、王宮に出向くことになった」

「そうなの？ マスターってすっかりトリステインの重鎮じゃない」
「少し出しやばりすぎたのかもな」

マザリー二枢機卿からも信頼を得てしまったし、ヴァリエール公爵にも贔屓されてるとなると、いよいよ重鎮扱いだな。

少し国のことに首を突っ込みすぎたかもしれない。

俺の人生も余程波乱が好きなようだ。

「とりえず、返信をしないと」

洋紙を一枚取り出すと、俺はそれに返信を書き始める。

こういう時、電子メールとかあるととても便利なんだが……。

魔法で何とか出来ないものか。

俺はそんなことを考えながら、書く。

何てこと無い、お祝いのメッセージと出向くことへの了承のことを書いてただけだ。

大人しくしている鷲の足に括りつける。

それから自分の腕に鷲を乗せると、窓の外へと送り出した。

「頼んだぞ」

大きい翼を広げる鷲は、一度旋回するとトリスタニアへと飛んでいくのだった。

翌日、授業が終わった後、俺はルイズを連れて中庭に来ていた。

王都へ行くことになっていることを伝えるためである。

アンリエッタが女王になるらしいこと、それで俺が相談になることを伝えた。

ずっと黙って俺の話を聞いていたルイズは、小さいため息を付いて言う。

「アレス……。わたしに隠し事はしないで」

どうして、姫様がアレスをそこまで頼りにするの？
わたしだって、アレスが頼りになるのは知ってるわ。とても頼も
しいもの……。

この前の戦争だって、アレスの功績でしょ？
でも、どうして内政にまでアレスが必要とされるの？
ねえ、アレスはわたしに何を隠してるの？」

不安そうな眼差しで問いて来た。
俺の手も強く握っている。まるでどこにも行かないでと言われて
いるようだ。

日が暖かく、またとても気持ちのいい風が吹き抜けるが、俺の心
は揺れていた。

言うべきか、言わぬべきか？

正直に言えば、卒業するまで言いたくない。

とは言え、俺がいろんな事に首を突っ込んだのがいけないのだ。
もう、隠せ通せるとは思わなかった。

「言えるまでって言ってたけど、もう待てない。

これ以上、わたしの知らないところにアレスが行くのは嫌！

だから、せめてわたしに教えて……。

わたし、アレスの支えにはなりたいの」

真剣な訴えに、俺は一度目を閉じる。

卒業までと思っていた。

それまでは言わずに通して、俺の代わりが現れれば託せるとも勝
手に思っていた。

だけど、それ以上ルイズが俺を思う気持ちが強い。

「分かったよ、ルイズ。

僕が隠していることを全て話すよ」

これ以上、ルイズに何も言わないのはルイズに対する裏切りに等
しい。

決意を固めるしかない。

「ここだと話せないから、僕の部屋へ」

「うん」

俺は立ち上がると、ルイズに手を差し伸べる。

ルイズがその手を取ると、俺は軽く引き上げた。

これからはルイズとちゃんと道を歩まなければならぬ。

俺達は、途中でサイトにも声を掛けた。

これから話す内容は、俺自身は当然のことルイズにも関わる。

知れば、ルイズにも危険が及ぶ以上、サイトにも聞いておいて貰いたいのだ。

サイト、ルイズに備え付けの椅子を勧める。

自分は机の椅子に座った。

「さて、二人に話さないとならない事だけど」

「あ、アレス。話し方なんだけど、ノルンに話しているようにしてもらえない？

知ってるんだからね？

アレスはノルンにだけ自分を曝け出してるって。

だからお願い。今のままだと、アレスに他人扱いされてるみたいで……」

話し方すら、ルイズに疎遠な感じを受けさせていたようだ。

ダメだな。

こんなんじゃ、守ろうと思っていても返って守れてない。

「分かった。これからは素の俺を出させてもらう。サイトもいいか？」

「俺は全然構わないぜ」

「俺もだ」

サイトと背中中に担いでいるデルFRINGガーが答えた。

ポーカーフェイスを決めているが、デルFRINGガーが突然声を上げると少々驚いてしまう。人数に入れていなかっただけに余計だ。

「それじゃ、これから俺はこの話し方だ。」

少し戸惑うかも知れんが、まあ気にしないでくれ」

二人とも頷く。

「で、だ。俺のことなんだが」

俺は話し始めた。

俺がトリステイン王国で非魔法研究開発機関の長になること、またアンリエッタの文官付き参謀になっていることを。

どちらの話も、二人とも驚いていた。

特にルイズの方は、俺が国に深く関わってきていることへ不安を隠しきれないと言う表情だ。

話の途中で何度も、「どうして、アレスがそこまでの！」「としきりに言っていたのだから。

サイトも少なからず衝撃を覚えていたらしい。

見た目は同じ年くらいだから、尚更のことだろう。

そこは俺が前世の記憶を持っていることで納得したようだったが、一通り、話し終わると俺がどうしてここまで関わってしまったのかを話すことにする。

「それじゃあ、俺が何故こうまで首を突っ込んでいるかを話そう」

俺の言葉にルイズの視線が厳しくなる。

睨み付けるとまでは行かないが、やはり納得の行く答えを出さないと承知しないと言う雰囲気だ。

「まず非魔法研究開発機関の長を引き受けた理由だが、これは俺にしか恐らく出来ないことだからだ」

「どうして？」

間髪いれずにルイズが尋ねる。

俺は苦笑しつつ、話し終えるまで待つて欲しいと言う。

「俺にしか出来ない理由は、俺が元々異世界の人間だからと言うのがある。

異世界の人間だから、この世界の価値観と違う価値観を持っているんだ。

そして、それが全てでないにしても、ある程度この世界にも必要な価値観が俺たちの世界にはある。

その価値観を非魔法と言う形で広めるとするなら俺になるんだ。
まあ、これはヴァリエール公爵や父さん、アンリエッタがそうしたいと言う申し出があったからこそなんだけどな」

「そうなの……」

でも、魔法に頼らないとなると貴族から目の敵にされるわ。

そこまで危険じゃないと思うけど……それでもアレスがしなくても」

「誰かがやらないとならないからさ。

それが出来るのが俺だったと言うだけ」

「じゃあ、姫様の文官付き参謀は？」

「あれについては、少々難問だな。

今は大人しいとは言えレコン・キスタは必ず聖地奪還に再び動き出すと思う。

そうなるとこれはアルビオンとトリステインだけの問題じゃない。
ハルケギニア全土の問題になる。それはエルフも含めて」

「エルフと人間の戦争？」

ルイズが嫌そうな顔をしながら尋ねた。

エルフは人にとって忌み嫌われる存在。

エルフ一人に対してメイジが何人も必要となる強大な存在だ。

だからこそ、この両者の戦争は被害が甚大になる。

「その通り。そして仮に聖地を奪還すれば今度はその覇権争いだ。

結局戦争が尽きない上、多くの人の命が失われる。

それだけは避けなければならないと俺は考えているんだ。

だから、レコン・キスタの抑えるためにも俺が文官付き参謀になった。

トリステイン全土で、俺の権限はアンリエッタと同等。

また戦争になったら俺の意見が通りやすくなる。

国内のレコン・キスタを探し出し、尚且つ戦争になるなら抑えられるだけの戦略を立てて臨む必要があるんだ。

これは結局、ハルケギニアのバランスを保つのに必要になる」

そこまで言うとは、俺は言葉を切った。

ルイズは納得行っていないと言う様子だが、理は適っているため反対仕切れないと言う感じた。

サイトはちよつと難しかったのか、首を捻っていた。

疑問も大いにありそうだな。

「なあ、アレス。」

ちよつと、分からないんだけどさ。

そのエルフってのと仲良くは出来ないのか？」

普通、エルフと人間の事情を知らなければ疑問に思うことだ。

その答えには俺ではなく、ルイズが答えた。

「サイト、エルフはわたし達の聖地を奪ったの。」

エルフはわたし達が聖地を奪い返そうとするのを良しとしないわ。もう何度も人間とエルフはにらみ合っているんだから」

「いや、それは分かるんだけどさ。」

殺し合うしか道はないのか？ 分かり合えば何とかなるんじゃないのか？」

サイトの疑問ももつともだが、今この話をするべき時じゃない。

「サイト。エルフに関しては今度俺が話す。ルイズも話を進めていか？」

「分かった」

「ええ」

二人を一先ず抑えると、俺は話すの続きをする。

「今、サイトが言ったエルフの事もあるんだが、それは置いておこう。」

結局、世界のバランスを保つことは必要だから今まで通りに、アルビオンがあつてトリステイン、ゲルマニア、ガリア、その他周辺諸国が保つたままがいい。

友好の上からの国の統廃合、その逆の戦争までは止めるつもりはないけどな。

聖地となると色々と厄介だ。

実際に聖地を目指すなら、エルフとの友好もあつた方がいい」

「アレス！ 聖地は！」

「ルイズ、歴史って言うのは都合よく改ざんされるものなんだ。

これは俺たちの世界でも行われたんだよ。

真実を覆い隠して、権力者にとって都合の良い様に歴史を作りかえる。

だから、エルフと何があつたのか？ それを正しく知る必要はあるんだ。

エルフとの友好はそうした双方の歴史的事実の確認、また誤解を解くことから始めないとならない。

向こうは進んで俺たちを滅ぼそうとはしないくらいだしな」

そこまで言うと、ルイズは黙ってしまった。

納得はしていないだろうが、反論は出来ないようだ。

「ともかく、結局は俺たちが平和に暮らすためなんだ。

引き受けたのそのためだ。

誰だって自分達の平和、幸せを願うのは当たり前で、それを少し広範囲でやるに過ぎない」

ここまで言つて俺は改めて思った。

何気に俺自身が、とんでも無いことに首を突っ込んでいるという事を。

俺の振る舞い一つで下手すれば世界も変えかねない。

もしかしたら俺が生れ落ちた時点で世界が変わって行っているのかも知れないが。

「わたし達のためなの？」

「そうさ。俺達のためなんだ。

で、ここからはルイズに頼みたいことがある」

「何？」

「君は俺を支えたいと言ってくれた。

こんな大事を背負つた俺だが、改めて支えてくれるか？」

「もちろんよ。どうしてアレスが？ って思いは消えないけど、アレ

スを支えたい気持ちは変わらないもの」

ルイズは真っ直ぐな目で俺を見ていた。

その目には明らかに覚悟があった。

俺を支えて行きたいと言う覚悟が。

「あー、俺ってもしかしてお邪魔？」

「ちげえねー」

「ホント、あたし達蚊帳の外ね」

俺とルイズが見詰め合っていると、横から野次を入れられてしまった。

「あ、すまん。そんなつもりは無かったんだ」

「そ、そうよ。それにこれってみんなにも関係が……」

ルイズの発言をさえぎるようにサイトが言う。

「あるにはあるけど、最後のは、な？」

「なあ」

「ええ」

サイト、デルフリンガー、ノルンはそう言ってニヤけた顔（デルフリンガーは除くが）を俺達に向けるのだった。

説明を終えて、ルイズ、サイトが自室の方へと戻った。

俺はベッドに横たわると大きく息を吐く。

「どうしたの？」

ノルンが、俺の胸の上に乗って来た。

大して重くはない。

俺が呼吸をするたびに、ノルンも一緒に上下している。

「ああ。ルイズの事がね。」

支えてもらうとは言え、良かったのだろうかと思ってな」

「今更じゃない。」

マスターはルイズが嫌いなの？」

「好きさ」

大切にしたいと思う。

その反面、俺以外の奴なら危険が少なくて良いと思うのもあった。

「その割には、支えてもらえるのに嬉しくないわね」

「俺は我がままなんだ。」

俺は俺のすべき事をする。

だけど、ルイズには安全で安心した暮らしをしてもらいたいってね」

「我がまま、ね。」

もしかしたら、あたしのせい？

あたしって言う存在がマスターの支えになってるから、だからルイズには安全な場所にいて欲しいとか？

これがさ、あたしがいなかったら、このポジションはやっぱルイズだったんじゃないかしら？」

ノルンのポジションか。

気兼ねなく話せて、パートナーとしても安心できる。

甘えられる姉のような、そんな雰囲気がある。

ルイズにそれを求められるか？

年下の女の子。

俺がずっと見てきた女の子。

そのルイズが、ノルンと同じポジションに。

「そうなのかも知れないな……。」

ノルンはパートナーとしては申し分ない。

もし、ノルンが人間の女の子なら、好きになっているかも知れない。

ルイズはどちらかと言うと妹や、娘と言った感情が近いが、ノルンは対等に思える」

「そうなの？」

「ああ。知ってるだろ？ 俺はこれでも五十近い。

二十四で子供がいれば、ルイズくらいの娘がいてもおかしくないんだ。」

まあ、俺自身子供を十年ちょっとやり直したわけだがな」

「あ、そうじゃなくて……」

その、あたしを好きになったかもってとこ」

「え？」

ノルンの質問に、俺は驚いた。

ルイズの話のはずが、俺がノルンを好きになっていたかとも言っていることにシフトしている。

「マスター、あたしみたいなのがいいの？」

「そうだな、ノルンは活発だし、何かと意見を言ってくれる。

それでいていい相談相手だしな。

ノルンのようなパートナーだったら申し分ない。

というか、どうしてその話に？」

「あたしね、フェアリーの中だと結構おてんばで、貰い手っていないの。」

だから、その……、マスターが好きになっていたかもって言うてくれて嬉しいんだ」

ノルンが顔を赤らめながら言う。

その表情を見て、俺は思わずドキリとした。

恥らい、萎れた姿がとても可愛い。

いつも活発なだけに、こういう態度が余計に可愛く思えてしまう。ルイズとはまた違った感じだ。

「マスター？」

「あ、すまん。いや、ノルンも可愛いなと思ってな」

「マスター……。やっぱりマスターは女っ垂らし。

ルイズに、アンリエッタ。

それにあたしまで、その気にさせるの？」

「あははは……」

反論出来ない。

無意識にこうも多数の女性を向かせてしまうと、少々まずいよな。

「マスター、あたしなら浮気は許してあげるけど、大切にしてくれ？」

恥じらいがちな態度で、言うノルン。

俺は何かいけないスイッチを入れてしまった。

「ちょ、ちよつと話が飛躍しすぎだぞ？」

「ダーメ！ マスターが好きになっていたかもなんて言うからいけないんだからね！」

どもった声での反論はどうやら意味をなさないらしい。

ノルンは何故か、俺の顔まで来ると、俺の大きすぎる唇に小さい唇を合わせるのであった。

「マスター、死ぬまで一緒だからね？」

幸せそうに言うノルンに、俺は頷くことしか出来なかった。

使い魔だから、死ぬまでになるんだが……。

マスターとして、これはいいのだろうか？

いや、それ以前に明日からアンリエッタと会うと言つのにこついう展開は……。

「マスター」

嬉しそうな、それでいて恥らうままのノルン。

愛おしそうに俺の胸に体を預けてくる。

この態度に、俺はたじたじだった。

「あ、あははは……」

俺が出来たのは笑うことだけである。

この時、俺の人生を大きく変える、いや俺だけじゃないトリスティン、アルビオンの運命を大きく変える出来事が待ち受けていることを俺は知る由もなかった。

第二十七話（後書き）

お待たせしました。

いろいろと心労が溜まり、とても物語を進められる状況ではなかったため遅くなりました。

今回はいろいろと話が動いています。

ロングビル（マルチダ）に関してはフリーイベントが出せない＆フリーケが捕まえられません。

その関係でアルビオンに関わらないので大人しくしてもらおう方向にしています。

かなり無理やり感がありますが。

ルイズへは全てを話して、今後アレスのサポートをするようになります。

ちよつとサイトの活躍がないですが、これからという事で。

で、一番はノルンとアレスの関係。

以前、ノルンとアレスの関係は今の関係から変えるつもりは無かったのですが。思いついてしまったので。

すみません、気まぐれです。

ただラストなどにはそれ程影響はないので。

次回はアンリエッタに会いに行きます。

女王になる理由、またアレスが呼ばれた理由など書いていこうと思います。

これで、第三部も動きが出てきます。

第二十八話（前書き）

この小説は「ゼロの使い魔」の二次創作になります。

また、独自解釈、独自設定などあり、表現も作者の都合で書いています。

そのため、真に「ゼロの使い魔」のファンと言う方には不快な思いをさせる可能性があるのをご了承ください。

また、読んでいる途中、感情的になったり、気分が悪くなった場合はすぐに閲覧するのを止めて気分を落ち着かせることをお勧めします。

第二十八話

翌日、俺はオールドオスマン氏に公務で休むことを伝えて、王都へと向かった。

学園を出る時、ルイズに見送られたが、その時の表情が何とも切ない。

支えになると言ったものの、王都へは俺しかいけないのだから側にいて俺の力になれないことに悔しい思いをしていたようだった。

サイトは、留守の間は任せると頼もしい返事をくれた。

サイトを見ていると、ルイズを支えるのは本当は俺よりサイトの方が良かったんじゃないかとたまに思う。

そもそも使い魔だし、サイトとルイズが結ばれるならサイトも無理に戻らなくても良くなる。

まあ、”もし”なんて事はいくらでも想像出来てしまいが結局現実と言うのは変わらないのだ。

王都には昼過ぎくらいについた。

前に呼び出された時は夜になってしまったが、今回は昼間のうちである。

昼間だと、賑やかでいいものだ。

城まで来ると門番の兵に名前を継げた。

「アレス・ジルアス・ド・ヴァルガードです」

「お話は聞いております。どうぞ、お入り下さい」

すんなりと通されると、俺は案内の者に応接室の一室に通される。中は中央にテーブルがあり、両サイドにソファがあった。

テーブルはメイジが作ったのか職人がつくったのかは分からないが、細かい装飾が彫られていた。

壁には絵画、窓からは街が一望出来る。

棚には置物が数点置かれていて、あとは時計が飾られていた。

俺はソファ―に座って待つことにした。

「豪華な部屋ね」

ノルンが部屋を見回しながら言う。

壁に飾られる絵画もいいだし、棚においてある置物も下手をすれば平民が二、三年は楽に暮らせるだけの価値がありそうだった。

「王宮だからな。質素じゃ話しにならないだろう」

俺もノルンと同じく部屋を見回しながら言う。

さすがは王族、俺の実家とは比べ物にならない。

俺の実家もそこらの貴族よりは十分いいが、ここには負ける。

「そう言えばフェアリーの暮らしてどんなんだ？」

「フェアリーは、木の上に家を建てたりしてそこで暮らすの。

家って言っても人間からしたら箱に見えるかも知れないけど。

基本的な生活は人に近いわね」

「そうか。フェアリーの生活は自然の中だからどんなだろうと思っただけ」

「自然の中だから、家だって木よ。金属はほとんど使わないもの。それはそうかも知れないな。

精霊も使えるし、金属を使わないとならない場面は少なそうだ。

「マスターが、フェアリーなら迷わず家族に紹介できるのに」

「おいおい……。好かれるのは嬉しいんだが、俺なんかでいいのか？」

「マスターみたいなタイプってなかなかいないのよ？」

ホントならあたしの心を虜にした責任とって貰わないといけないんだから、ね？」

「あははは……」

俺はノルンの言葉に乾いた笑いしか出来なかった。

丁度、そのタイミングで部屋のドアが開いた。

入ってきたのは当然、アンリエッタである。

だが、入ってきたのはアンリエッタだけだ。

俺はソファ―から立ち上がると、一礼をする。

「殿下、一人だけかな？」

「ええ。二人だけだから普通にしてもらっていいから」

「分かった。まずはおめでとうなのかな？」

女王になったわけではないが、彼女自身がそうすると言っている。だから、お祝いの言葉を言ったのだが、アンリエッタの表情は硬かった。

「嬉しく無さそうだな？」

「嬉しくないわよ。王位なんて継ぎたくないもの、仕事は増えるし、遊べなくなるし」

「おいおい、愚痴はなつてから言ってくれって。」

で、俺が呼ばれた理由は？」

「そうね、それを話さない」と

アンリエッタがまずは座りましょといいソファアに座る。

俺も彼女の向う形で座った。

「これを見てもらいたいのに」

そういうとアンリエッタは一通の手紙を俺に見せる。

どうやらウエルズからの手紙らしい。

内容を読んで行くと、ある文面に俺は思わず声を上げてしまった。

「馬鹿な！ この時期にだと！」

「それがアレスを呼んだ理由。そして、わたしが王位を継がないとならなくなる理由よ」

アンリエッタを見ると、その表情はとても硬かった。

気が付いていなかったが、目の下に薄っすらと隈が出来ているじゃないか。

だが、それも頷けた。

向こうから送られてきた手紙の内容は同盟の破棄であつたからだ。

「向こうはレコン・キスタと協議中のはず。」

その上でこの通知が来るとなると、裏にレコン・キスタが関わっているとは思えない。

そして、これがウエルズからの手紙となると……」

「ええ……。ウェールズ様が向こうの手の内に落ちたと考えるべきでしょうね」

明らかな疲れがあった。

マザリー二枢機卿がいるとは言え、十七歳の少女が抱えるには重過ぎる内容だ。

だが、それなら王位を継ぐのは尚更、重荷になると思う。

「王位を継ぐ理由も、これによると言っただね？」

「ええ」

「それはつまり、アルビオンとの戦争を意識して対等な交渉をするためと考えていいか？」

「それで間違つてないわ」

あくまで淡々とした返答である。

余程、参っていると言うのが分かった。

手紙をテーブルに置くと、ある事を思い出す。

俺たちがトリステインに戻って来てすぐの出来事だ。

「しかし、そうなる以前アンリエッタの手紙が返されたわけが合点行くな」

「どういうこと？」

「ウェールズは向こうと協議を始めるに当たって、トリステインとの外交問題になるものを出来るだけ消しておこうと思ったんだろっな」

アルビオンはレコン・キスタとの停戦協定を結ぶことが出来ている。

かなり向こうに配慮した形で、だ。

レコン・キスタ、とりわけ旧パブリック・ユニオン派の人間はアルビオンの出した条件で納得行っているはず。

だが、あくまで聖地奪還を掲げる旧レコン・キスタ派は面白い。

内部の力関係までは知らないが、もし旧パブリック・ユニオン派の立場が弱いなら旧レコン・キスタ派に取り込まれていてもおかし

くはないだろう。

表向きは旧パブリック・ユニオン派としての立場で話を進めておく。

だが、生地奪還を掲げる以上、アルビオンは取り込むつもりのはずだ。

戦力差はレコン・キスタの方が上である。

だが、アルビオンとトリステインが同盟を続けている状態では、レコン・キスタにとっては脅威だ。

二国間での同盟を破棄させ、停戦協定を無視した攻撃でアルビオンを落とせば、アルビオン王国を丸ごと手に入れられる。

と考えたらどうだろうか？

アルビオンを手に入れば、トリステインを落とすのもそう難しくは無い。

ここで、もし例の手紙があればアンリエッタの立場が悪くなる。

トリステインが他の国へ援護を要請する場合、手紙のことが公になれば外交問題に成りかねない。

だからこそ、ウェールズは手紙を返したのではと俺は考えるのだ。手紙の内容はアンリエッタからの恋文なのだ。

本来なら手放したくない代物だからこそ返さざるを得なかった、と。

「そこまでウェールズ様が考えていると？」

「同盟の破棄がいい例だな。」

レコン・キスタの戦力は四万はある。アルビオンはおおよそ一万弱だ。

まともにやり合えば、アルビオンに勝ち目は無い。

たぶん、ウェールズは瀬戸際外交を迫られたに違いない」

向こうの強硬な態度に、引かざるを得なかったんだろう。

苦渋の決断だったと思われる。

「考えが甘かったな……」

「どうということ？」

「こういう言い方はしたくないんだが、全軍を持ってレコン・キスタを落とすべきだったのかも知れないと言うことさ。

今のままじゃ、アルビオンがレコン・キスタに落とされるのも時間の問題だ」

「ウェールズ様は、どうなるの？」

「ウェールズは、良くて幽閉。悪くて……」

死刑とまでは言えなかった。

「そんな……」

言いたい事が分かったのか、アンリエッタは口元を押さえて愕然としたように言う。

「まだ、そうと決まったわけじゃない」

とは言え、状況は悪い。

国内のレコン・キスタのあぶり出しも出来ていないんだ。

国内のレコン・キスタがどんな行動に出るか、戦争中に裏切られでもしたら相当にきつい。

のんびりと学生生活なんてやっている場合じゃないぞ。

どうして、全軍をあげて徹底的に叩きつぶす方を考えなかったんだ。

自分の甘さに腹が立つ。

「マザリーニ枢機卿、ヴァリエール公爵、後父さんと呼んで対策を立てたいとこだな」

「何とかなるの？」

「分からない。後手に回ればトリステイン存亡の危機にもなりかねないのは確かだ」

まだレコン・キスタもアルビオンに手を掛けはしないだろう。

だが、今の状況じゃいつ戦争になるか分からない。

数ヶ月先か、一年先か……。上手く行けば数年先かも知れない。

あまり楽観は出来ない以上、今のうちに国内の戦力を整えておく必要がある。

四年前からトリステインの軍事を強化を進言したとは言え、現在

の総兵力はせいぜい五万がいいとこだ。

空軍も昔に比べればはるかにいいが、アルビオンは優秀な空軍を抱えているんだ。

まともにやり合えばこちらが負ける。

出来る事といえば、あまり訓練されていないものでも扱える兵器の開発。

戦争は数だ。

多少の訓練時間で、戦える兵を増やしておく必要がある。

精銳は今の五万の兵だが、この兵は出来るだけ温存だ。

戦力はあともう五万を急造で兵を教育する。

訓練した兵だけで戦える戦術の構築と、戦略を打ち出す必要はある。

メイジをいかに非メイジ兵力だけで倒すかだ。

あとは国内のレコン・キスタをあぶり出して情報を引き出すなどだな。

……。

くそが……。

全く、戦争が関わると碌な考えが浮ばない。

「ねえ、マスター。」

戦わない方法ってないの？」

今まで黙っていたノルンが尋ねて来る。

「戦わない方法か……」

あるだろうか？

レコン・キスタは聖地奪還を掲げている。

となればハルケギニア全土の統一は絶対だ。

本当に聖地を奪還したら、それこそ権威は大きくなる。

そんなやつらと戦争を回避する方法。

無いことはないな。

こうなればレコン・キスタに敗れて取り込まれてみるか。

アルビオン、トリステインが全面的にレコン・キスタを支持する。

あとはレコン・キスタ内部に入り込んで本家、レコン・キスタの連中を内部からたたき出す。

聖地を奪還失敗した場合のリスクを考えれば、聖地奪還よりハルケギニア統一だけに絞った方が建設的に思えるはずだ。

あとはレコン・キスタの実権をウェールズ、アンリエッタで握ってしまう。

ここに新国家が誕生させてしまえばいい。

それが出来れば、ウェールズとアンリエッタが共に王と王妃になり、さらに二人の恋愛も成就出来るんじゃないか？

ついで、共和制も引いてしまおう。

共和制を引くことで、旧パブリック・ユニオン派の人間は引き抜けるはずだ。

「マスター？」

「アレス、何か思いついたの？」

俺が黙っていると二人が、俺の顔を覗き込むように訪ねてきた。

そこで、俺は二人に今考えたことを話してみた。

当然、アンリエッタはあまりの話に開いた口が塞がらないと言う感じである。

何せ、トリステイン、アルビオン両家を潰すにも等しいからだ。血は続くからいいが、国としては二人の代で終わることになる。さすがに、これは抵抗があると思うのだが、アンリエッタの口元に笑顔が浮かぶ。

「その案、いいわね。面白いわ。」

一国の女王になるものにとってはあるまじき考えだけど、ウェールズ様とも結ばれてレコン・キスタも一掃できるならいい考えたと思っわ」

「まさか、俺の考えに乗る気か？」

「あら？ 何も考えなしに言っただけではないのでしょうか？」

あなたはもう頭の中でそれが実現可能な方法を考え付いている。違つかしら？」

「マスターだと、頭の中ですでに出来てそうね」

「参ったな……」

確かに、そういうことは考えているんだ。

上手く行くかは正直、神のみぞ知ると言ったところだぞ？」

アンリエッタは、俺の言葉を聞いても引かないらしい。

表情に不安が少ない。

それを証拠に、彼女からの口から出た言葉はある意味で予想通り、ある意味で予想外なことだった。

「あなたがやると言うなら、わたしは付き合うわ」

「あたしも、マスターの手伝い頑張るから」

こうして、俺のとんでもない案がアンリエッタによって採用されることになってしまった。

言うまでも無いが、その後、この提案はトリステイン国内に波紋を呼ぶことになる。

アンリエッタとの会談が終わって、俺は用意された部屋に来ていた。

明日以降、マザリー二枢機卿を含めて大きく議論を交わされることになる。

「俺の存在ってこの世界にプラスなのか、はたまたマイナスなのやら」

「どうしたの？ マスター」

頭の上に乗っているノルンが、肩まで降りてくる。

ノルンはたまに俺の頭に乗るのだが、眺めがいいらしい。

今は、その話は置いておこう。

「俺の存在が、アンリエッタをウェールズをとんでもない方へと導いてはいなかったね。」

特に、アンリエッタは俺の考えにすっかり毒された気がするんだ」「マスター、自分で自分の考えに毒されるって……」

「事実なんだから仕方ない」

そうさ。

アンリエッタは俺の考えに乗るような子じゃなかったはずだ。少なくともあんな大胆な案に乗ることは無かったはず。

それなのに、俺が今までしたことに慣れてしまったのか、アンリエッタもすっかり俺側の考えになりつつある気がする。

悪いとは言わないが、俺はあくまで提案をするだけだ。

実行もするにはするがな。

「マスター、何が一番いい考えなのかなんて誰にも分からないじゃない」

「確かに、そうなんだが……。まあ提案してしまった以上、俺はやるしかないしな」

「そうよ。今更グジグジ言っても仕方ないじゃない」

「そうだな」

いつものことだが、どうも考えすぎてしまう。

もう動き出しているんだ。

後はその流れをコントロールするだけ。

「あれ？ マスター誰か来るわよ？」

空気の流れの変化なのか、ノルンが俺に告げる。

時間は、夕方だ。

アンリエッタでも来るのか？

そう思っていると、ドアがやや強い調子で叩かれた。

アンリエッタでは無い様である。

「どうぞ、鍵は開いてますよ」

俺の声に、ドアが開けられた。

外から入ってきたのは、金髪の長身な一人の女性。

気品ある身なりに、高圧的な雰囲気的女性だ。

「アレス、久しぶりね」

「姉さん？」

ヴァリエール公爵家、長女エレオノール。

彼女が俺の目の前で腕を組みながら見下ろしていた。

第二十八話（後書き）

まずは色々とし訳ありません。

話の流れ上、多くのキャラクター達の登場がなくなる予定です。

また、このまま作品を書き続けると泥沼に嵌る可能性があるため（実際嵌りかけています）、第三部で一度締めようと思います。
どこかで区切りをつけないとならないので。

改めて、この作品が完全独自路線を突っ走っていることを宣言しておきます。

今後の展開も、そのつもりで読んでいただけると幸いです。
それではまた次回に。

第二十九話（前書き）

この小説は「ゼロの使い魔」の二次創作になります。

また、独自解釈、独自設定などあり、表現も作者の都合で書いています。

そのため、真に「ゼロの使い魔」のファンと言う方には不快な思いをさせる可能性があるのをご了承ください。

また、読んでいる途中、感情的になったり、気分が悪くなった場合はすぐに閲覧するのを止めて気分を落ち着かせることをお勧めします。

第二十九話

エレオノールの突然の訪問のやや戸惑いつつも、俺は備え付けの椅子を勧める。

椅子に座ると、エレオノールは口を開いた。

「最後にわたしに会いに来たのはいつだったかしら？」

「アルビオンへ出兵前だったので、一ヶ月半くらいだったかと」

「そう。アルビオンに行っている間ならともかく、帰って来たときくらいあいさつなさい」

ややふて腐れたように言う。

俺も立ち寄るうかとは思いつつも研究の邪魔になる可能性もあるし、少なくともルイズを待たせていた状態では会いには行けなかった。

とは言え、そんな言い訳はエレオノールには通用しないのだ。

「すみません。以後、気をつけます」

そう謝ると、まあいいでしょうと言う具合に頷く。

素直が一番なのだ。

「ところで、あなたの肩に乗っているフェアリーは？」

「ああ、僕の使い魔ですよ」

「ノルンって言うわ。よろしくね」

「このわたしに対して気楽に話すなんて生意気ね。でも、いいわ。アレスの使い魔なら特別に許してあげるわ」

「あ、ありがとうございます」

エレオノールのやや高圧的な態度に引きつるノルン。

「今日はどうしてここに？」

俺はエレオノールが来た理由を尋ねる。

エレオノールは基本的に研究をしているのだ。

その集中力も凄まじく、一度研究に打ち込むと声を掛けるのさえ憚られる。

つまり、用事でもない俺のところに来ることはないのだ。

「お父様が、いらしたの。明日、あなたを交えた会議をなさるってね。」

あなた、非魔法研究開発機構なんて立ち上げるんですって？」

「そうです。魔法は素晴らしいですが、平民がメイジに頼りつきりと言うのは成長がありません。」

また、戦争は数です。

ならば、より強力な武器が今後必要になるはずですよ。

メイジより、平民の方が人口が多いのは既知の通り。

平民の兵士に強力な武器を持たせればそれだけ戦への勝率は高くなりますから」

「相変わらず、生意気ね。でも、わたしが認めただけの事はあるわ。その機関。このわたしもメンバーに入れなさい」

エレオノールは突然の言葉に俺は少し驚いた。

彼女は結構、気位が高い。

プライドが高いのだ。平民への考えも、どちらかと言えば見下した感が今まではあったのだ。

それなのに、俺のやることを手伝うとは。

「姉さんは、どうして参加をしたいと？」

「あなたがやるのが面白いからよ。」

平民云々と言うのは正直なところ、気に食わないわ。

でも、昔から平民と貴族の隔たりに関して、あなたは面白い考えをいつも持っていた。

だから、見てみたいのよ。

あなたがどんな事をしようとしているのかを、ね」

挑戦的な笑みを浮かべて、俺を見る。

これは意外だ。

まあ、俺もエレオノールから多少は認められていることは知っていた。

とは言え、こうまで買ってくれていたとは。

「平民が使つのを前提にしていますから、意見を聞くのに平民の人を何人か入れる予定です。」

そう言ったものを理解していただければ、ぜひともお願いします。特に、土メイジの姉さんの力が借りられるとなれば、研究も進みが早いでしょうから」

「平民ね……。まあ、いいわ。」

あなたのやることだもの、きっと面白いに違いないわね」

「面白いかどうかは、分かりませんが」

研究と言う意味では、エレオノールはいい腕をしている。

その彼女が、楽しめるなら研究は飛躍的に進むんじゃないだろうか？

まあ、場所も決まっていらないが、そんな気がする。

「研究と言えば、ここに来た理由は他にもあるのよ」

「そうですね？」

他の理由と言うと何だろうか？

研究と言うと、依頼していた転移系の魔法だ。

まさか、もう出来たとは言わないだろうとは思うのだが……。

「前に、あなたから挑戦を受けた転移魔法のことよ」

「何か進展ありましたか？ 僕はどうも忙しくてなかなか手が回らなくて」

「挑戦を叩きつけた割には、情けないわね……。」

進展ならあったわ。

二点を結ぶ魔法の開発、出来てよ？」

「え？」

今、何と言った？

二点を結ぶ魔法の開発が？

「出来たと言うのよ」

「本当ですか！」

これは驚いた。

まだ、一ヶ月半かそのくらいしか時間が経ってないのだ。

それなのにもう開発出来たなんて……。

「わたしを舐めないで貰いたいわね。」

それに、転移魔法はすでに研究がされていたのよ？

あとは、あなたの仮説を元にさらに仮説を立てて実証したわ」

エレオノールは杖を取り出す。

まさか、ここで実演をしようと言うのか？

「いい？ 良く見てなさい。」

あなたの家の前に繋げるから」

「本当に？」

俺の疑問に、エレオノールは楽しそうに、そう心の底から楽しんでいる笑顔を浮かべる。

「我が名はエレオノール・アルベルティーンヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエール。」

五つの力を司るペンタゴン。

我が内に眠る粒の力。万物を司る力を持って、二つの時、場所をここに繋げん。

光の門、ここに開け！」

小さい光が現れた。

光の大きさは拳程だが、それが人の頭程に大きくなって維持される。

「覗いて御覧なさいな」

エレオノールの言葉に俺は頷きつつ、中を覗く。

すると確かに、ヴァルガード家の前だった。

門が見えるのだから確かだろう。

「何かなくなってもいいものあるかしら？ それを穴に入れてみなさい。」

「じゃあ、これで」

俺は部屋の中にあつた果物を一つ手に取ると光の門に手を入れる。それから掴んでいた果物を離すと、それは確かに俺の家の前を転がっていく。

「姉さん！ これは凄いですよ！」

「当たり前じゃない」

そうは言うが、嬉しそうだ。

エレオノールは、魔法の維持を辞める。

すると、俺の前にあった穴が一瞬にして消えた。

とんでもないことだ。

サイトを送還したくて依頼したが、これは驚異的な早さで開発されたと思う。

「どうやって、ここまで辿り着きました？ それにさっき粒って」

「あなたの虚無研究の成果の賜物ね。」

あなたは虚無を小さい粒と言ったわ。

その大元となる力の根源が自分達の中にあるのはあなたが提言した通りね。

力の根源がわたし達の中にある。今まで使っていた魔法のイメージもそう変えてみたわ。そのおかげで魔法の使用効率は格段に上がったのよ。

そのことから、コモンスペルはその力を直接引き出しているんじゃないかと踏んだの。

何かしらの制限はかかるのでしょうか、あなたが前に言ったとおり、コモンスペルは誰でも使えるわ。そして時空さえ超えるなら、その力の源は何なの？ と言うことに気が付いたわけね。

あとはその力は万物を構成すると仮定して、世界と世界はそう、粒で構成されているんじゃないのか？と仮説を立てたわ。

なら、二つの場所をつなげる門を作るイメージを生み出して、その力を自分の中から引き出すことを考えたのよ。

最後のヒントになったのが、サモン・サーヴァントとコントラクト・サーヴァント。この二つのコモンスペルだけは他のコモンスペルと違って、ペンタゴンを意識する。

ペンタゴンは全ての系統をも意味するわ。つまり、コモンスペルがどの系統でも使えると言う証拠だと言えるわね。

あとは本来なら失われていると言われている虚無もここに含まれる。

それに気が付いて、ペンタゴンを意識しながら魔法を構築したつてわけね。

そうして開発出来た二つの場所を繋げるコモンスペルが、さっきのコモンスペル。コネクト・ゲートよ」

「コネクト・ゲート……」

俺はエレオノールの話聞いて鳥肌が立っていた。

まさか、虚無の魔法の根源、小さい粒と言うのをヒントにこの魔法を開発してしまうなんて思わなかったからだ。

それだけじゃない。

コモンスペルが全ての系統に使えるのが、ペンタゴンにあるというその考えも凄い。

確かに、サモン・サーヴァントとコントラクト・サーヴァントはペンタゴンの力を最大限に使う魔法だと言える。

そこへの着眼点はさすがとしか言えなかった。

恐らく、俺だったら本当に何年も掛かっていただろう。

でも、エレオノールはやはり研究者。しかも天才の部類だ。

彼女の知識、知恵、探究心が、こんな偉業を成し遂げてしまうとは。

「どうかしら？」

自信たっぷり聞いてくる。

「凄いです！ さすがは姉さん！ 天才としか思えません！」

俺がそういうと、当たり前のことね！と胸を張る。

だが、その顔を見ると分かった。

とても嬉しそうなのだ。こんな笑顔のエレオノールを俺は見たことが無い。

その笑顔がとても誇らしく思えた。

「マスター、これでサイトを故郷に帰して上げられるのね？」

「可能だと思うよ。姉さん、異世界にも繋がられるんだよね？」

俺がそう聞くと、エレオノールは渋い顔をした。

何か問題があるのだろうか？

「さっき、わたしはイメージすると言ったの覚えてるかしら？」

「ええ。二つの場所を結ぶイメージですよね？」

「そうよ。なら分かるんじゃないかしら？」

二つの場所を結ぶイメージ……。

あ、そうか。

つまり、繋げたい場所のイメージが正しく出来ないとならないと言っわけか。

「姉さんは、その異世界が分からないからイメージ出来ないって言うわけですね？」

「そう言うことよ。もっと言うならイメージが出来ないなら不発に終わるのその魔法。」

あと欠点が一つあるわ」

「なんですか？」

「精神力が物凄い勢いで削ぎ取られるのよ」

エレオノールの言葉に、初めて俺は彼女の額に汗が浮んでいるのが分かった。

確かにこれから夏へと向かうのだ。

少しくらい汗ばんでもおかしくない。だが、少なくとも今ここは汗ばむほどの気温じゃないのだ。

「今のわたしでは、あの大きさくらいの門を作るのが精一杯よ。」

これがどこだか知らない異世界となると、わたしじゃどうにもならないわ。

さすがに行った事がない場所をイメージするのは無理よ」

「確かに、その通りですね……」

そこまで言っつて、俺はある決意を固めた。

ルイズ、アンリエッタは知っていること。

ここまで協力してもらって、何も語らないのは卑怯だと思った。「姉さん、もし僕が異世界の住民だと言ったらどうしますか？」

「何を言っているの？」

「僕は、アレスです。それは間違いありません。

ですが、僕は生まれる前の記憶を持っているんです。

そう、アレスとして生まれる以前、ルイズの使い魔であるサイト君と同じ世界に生きていた記憶が」

「そんなことある訳……」

エレオノールは真意を確かめようと俺の目を見てきた。

この風に見られるのは久しぶりだった。

初めて見られたのは十歳の時。

虚無についての考察を話した際に、向けられたのだ。

嘘や狂言なら目を反らす。自身があるなら見続けると言う、無言の問いかけに最初は戸惑ったものだが、乗り越えた。

そして、今回も。

「嘘はついていないのね？ ルイズには話してあるの？」

「ええ。ルイズが使い魔を召還したときに話しました。

正直、驚きましたよ。

まさか、俺と同じ出身の人間が召還されるとは思いもしなかったんですから。

で、サイト君とルイズの双方にお互いの状況を理解してもらっために話しました」

「そう……。でも、これでようやく合点いったわ。

通りで、あなたが十歳の時にあれだけの仮説を語れたわけね。

あなたのその発想は、異世界の発想。違つかしら？」

「その通りです」

「全く……。ますます勿体無いわね」

そういうと、エレオノールは俺を物欲しそうに見る。

自分のものにしたいと言う感じだ。

だからだろうか？

ノルンが、俺の目の前を飛んでいた。

手を広げて、まるで渡さない！と言うように。

「ノルンと言ったわね？ 何のつもり？」

「マスターは渡さないわ。ルイズは婚約者だから仕方ないけど……、でもそれ以外の人には渡さない」

「ふーん。そう言うこと。」

まさか使い魔が主に恋愛感情を持つなんてね……。

アレス、やっぱりあなたは面白いわ」

「いや、その……」

この事態に俺は少々たじたじだ。

むしろ、この二人の間に割っては入れない。

いや、何か余計なことを言うとな自分の身が危険な気がしたのだ。

「ノルン、あなたはフェアリー。アレスと結ばれることはないわ」

「分かってる。でも、いいの。」

あたしはマスターと一緒に生きるんだから」

「ふ、二人とも落ち着いて？」

俺がそう声を掛けると、二人がこちらを向く。

目がとても怖い。

「アレスは黙ってなさい」

「これはあたしとお姉さんとの戦いなんだから」

二人の威圧感に俺は黙っているしかなかった。

その後、エレオノールとノルンが何故か俺の何を知っている合戦
なぞ始めた。

聞いてて俺は終始顔が火照った感じが続いていた。

いや、前世ではこんな合戦されなかっただけに、嬉しいんだがと
ても微妙だった。

俺にはルイズがいるからな……。

ともかく、不毛な戦いは、二人の思いが本物という事でそこに友
情が芽生えたのだ。

そして、何故か俺は二人の愛人のような扱いを受けることになっ
てしまったのだが、内容は省かせてもらう。

エレオノールが帰ると、俺は一つ試して見たかった。
そう、コネクト・ゲートだ。

俺は杖を取り出して、構える。

「マスター？ 何をするの？」

「コネクト・ゲートをちよつとな」

イメージするのは前世の実家前だ。

俺がなくなつてすでに二十年。とつくに持ち主が変わつただろう
と思われる実家をイメージする。

「我が名はアレス・ジルアス・ド・ヴァルガード。

五つの力を司るペンタゴン。

我が内に眠る粒の力。万物を司る力を持って、二つの時、場所を
ここに繋げん。

光の門、ここに開け！」

スペルを唱え終わり、杖を振るう。

その時、俺の体の中心と言うのだろうか？

例えるなら核かも知れない。

そこから、自分の力が吸い上げられる感じを覚えた。

「つく！」

「マ、マスター？」

「話しかけないでくれ！」

凄まじい精神力の吸い上げだ。

下手に気を抜くと、意識ごと持っていかれそうな感覚である。

そうして、俺の目の前に小さい光が現れる。

その光は徐々に大きくなり、手のひらを広げたくらいの大きさに
なつて安定する。

どうやら、これが俺の限界らしい。

その門の先に見えるのは、確かに俺が住んでいた家のあつた場所
だった。

と、言うのも表札が変わっていても俺が居た形跡はない。

「と、とりあえず成功だ」

そう言つと、俺は溜まらずコネクト・ゲートの維持を辞める。
そして、椅子に落ちるように座った。

「マスター、大丈夫！」

「一応な。この魔法はとんでもない代物だぞ」

堪ったものじゃない。

恐ろしい精神力の吸い上げだった。

それと、あのコネクト・ゲートの本質が分かった。

コネクト・ゲートとは、自分を媒介に空間を結びつける魔法だ。
自分が媒介になるから、精神力の吸い上げが凄まじいのだろう。
しかも大きさが絶望的に小さい。

あれじゃ、サイトを送還するには至らないじゃないか。

「ねえ、マスター」

「何だ？」

「あの門じゃ、サイト帰れないわよ？」

「分かつてる。エレオノールも言っていたけど、これは相当精神力
を使うんだ。」

体の中にある力が根こそぎなくなるかと思うくらいだしな」

「そんなに？」

俺は頷いて答える。

これは何か、対策を考えないとならない。

コネクト・ゲートでサイトを地球に送るなら、最低でも直径一メ
ートルの門を作らないと通れない。

あれじゃ、せいぜい手をつ突っ込めるか否かでしかない。

しかも、途中で精神力が切れでもしたら、恐らく体が切断される
ぞ。

「これは俺自身もつと精神力のコントロールになれないと厳しい
な」

「手伝えることがあるなら言つてね？」

「ああ、その時は頼むよ」

このコネクト・ゲートを使いこなせるようになれば、サイトを返

せる。

随分と早いが、サイトに良い知らせが届けるなと思った。

第二十九話（後書き）

おおよそ一週間ぶりの更新です。

まず、恒例ですが申し訳ありません。

ご都合主義で、コネクト・ゲートなんてものを作りました。

私は小説を六巻までしか読んでいないのですが、調べた限りサイトを送り返すには虚無のワールド・ドアでないとダメなんですよね？ それをご都合主義で、作らせて貰いました。

結構、突っ込みどころ満載ですが、すみません。

ここまで来るとゼロの使い魔の世界観も崩れるところがあると思われます。

本当のゼロの使い魔のファンの方には重ねてお詫び申し上げます。

それでは今回はこの辺で。

今後とも、死の先に待っていた新たな世界をよろしくお願い致します。

第三十話（前書き）

この小説は「ゼロの使い魔」の二次創作になります。

また、独自解釈、独自設定などあり、表現も作者の都合で書いています。

そのため、真に「ゼロの使い魔」のファンと言う方には不快な思いをさせる可能性があるのをご了承ください。

また、読んでいる途中、感情的になったり、気分が悪くなった場合はすぐに閲覧するのを止めて気分を落ち着かせることをお勧めします。

第三十話

翌日、王宮の小会議室で俺、父さん、ヴァリエール公爵、マザリ―二枢機卿、マリアンヌ皇后陛下、アンリエッタを交えて今後のことが話し合われた。

ノルンは俺の肩で静観である。

内容は、アルビオンとの関係についてが第一だった。

まずは、アルビオン、レコンキスタが連合を組むとしてこちらはどうか？

この場合、ゲルマニアが一番味方に付けやすい。

ここ近年、俺が兵器開発でゲルマニアから金属、硫黄の輸入をしてたのが上げられる。

マスケット銃の技術もゲルマニアが進んでいるのもあり、数点サンプルで購入してもらった経緯があった。

また、これから非魔法研究開発機関が動き出すため、それらの輸入が多くなっているのだ。

詰まる所、今のゲルマニアにはトリステインはいいお客なのである。

俺は、アルビオン、レコンキスタの連合に相乗りするつもりであるが、まずはこちらの方も知恵を出していた。

国内の戦力増強についても意見を出す。

非魔法研究開発機関の早期立ち上げ、それによる魔法に頼らない兵器の開発。

メイジを数で圧倒するための扱いやすく、かつ強力な兵器の開発の案を出してみた。

「ふむ、アレス。その考えは非常にいいのだが……。この技術が外に漏れた場合はどうするつもりだ？」

ヴァリエール公爵が難しそうな顔で尋ねてくる。
それもそつだ。

兵器の情報が漏れ、相手もそれを量産し出せば力の差はむしろ相手が有利になるのだ。

「そこは開発した兵器の弱点を予めこちらで把握することで対処できると思います。」

私が考える兵器開発は、このトリスティンをはじめハルケギニアではまだ類を見ないものになります。

欠点を把握しておいて、それを突く戦法、戦略の発案。対抗するための兵器の開発も同時に進めることで対処出来ると考えます。

開発は常に先を見なければ成りません。

真似されるのが当然。対抗されるのが当然。そして打ち砕かれるのも当然です。

ならば、常にその先、その先を考えていくのがいいと思います」

「……大した頭の回転だ。」

確かに、アレスお主の言うとおりだと思う」

ヴァリエール公爵はそういうと口を閉ざした。

本当は何か言いたいのだろうが、生き残るためならやむ得ないと言っただけだ。

「アレス君、仮にそれで国力を上げたとして反乱など起きてはどうしようもないのではないかね？」

マザリー二枢機卿が、怪訝な面持ちで言う。

しかし、これは以前父さんやヴァリエール公爵が貴族が変わると言う意志を示していた。

「信用される国家であれば、反乱の危険性は低いと思います。」

税金の見直し、平民の扱いの改善、また平民による代表の選出など行いながら平民、貴族の両方が歩み寄る形を取ったらどうでしょうか？」

「平民の政治参加かね……。私は賛成しかねるが、お二方はいかがですか？」

マザリー二枢機卿が父さんとヴァリエール公爵に尋ねる。

二人はさも当然だと言うように、貴族の変革を由とした。

「二人がいいと言うのであれば大半の貴族は抑えられるでしょうな」
それでもまだ不安が残ると言う感じであった。
当然だ。

これはある意味改革なのだ。
人間、古きを壊して新しいものへ移るのは非常に怖いのである。
マザリー二枢機卿が懸念するのは、貴族の反応なのだ。

ここにいる人間達は、全員が改革をしてもいいと考えている者達だ。

となれば、後は他の貴族達がどう動くか？

場合によつては敵を目の前に内部分裂することさえ考えられるのである。

ただし、一気にやろうとすればの話しだが。

「これは段階を追って行ふべきだと考えますので、いきなり変えようとは思いません。

当分は、国内の戦力強化に専念しましょう。

ただ私にはある計画があります。

万一アルビオン、レコンキスタの同盟が現実となり戦争が起こるなら、トリステインもその同盟に相乗りすると言つ考えです」

「なんだと！」

俺の言葉に、ヴァリエール公爵が立ち上がって驚きの声を上げる。
当たり前だ。

伝統を重んじ、トリステインの大貴族であるヴァリエール公爵なのだ。

これに驚きの声を上げないわけがない。

「アレス、それは本気か！」

父さんも声を荒らげて俺に問う。

俺は二人に対して頷いて答える。

「この話は、昨日アンリエッタ姫には話させて頂いています」

ここで俺はアンリエッタがこの話を知っていることを告げた。

全員がアンリエッタを注目するが、アンリエッタは何事もないか

のように頷いた。

「ここからの話は聞くに堪えない可能性があります、どうか最後まで聞いて下さい」

俺は不審の目を向ける父さんとヴァリエール公爵を牽制するように、語り始める。

「敢えてわざとレコン・キスタに取り込まれること。」

そして、アルビオン、トリステインという二つの伝統ある国が聖地奪還へ名を上げること。

だが、その裏はアルビオンとトリステインの国の統合と一大国家を築き上げるのが目的であること。

アルビオン、トリステインの両家の伝統はウェールズ皇太子とアンリエッタで終わるがそうすることで得体の知れない者達からハルケギニアを守ること。

新国家を誕生させるに当たって共和制を引き、旧パブリック・ユニオンの人間達さえ取り込んでしまうことを上げた。

アンリエッタ以外は憤りと驚愕の表情であった。

「アレス、なんと言ったらいいのか分かんが、無茶にも程があるのと思うのだが」

ヴァリエール公爵が最初に口を開いた。

「第一、そんな事許されるとでも思っているのか？」

「許されようとは思っていません」

「何だと？」

俺の言葉に眉をひそめる。

だが、俺は構わず続けた。

「これはあくまで生き残りを掛けた術です。」

考えても見て下さい。

トリステインは始祖ブリミルが与えた四つの国で唯一小国と呼ばれる国になっています。正直に言えば、他の三つの国が本気になつて潰しに掛かれればどれだ持ちこたえられるか分かりません。

ならば生き残る術を探す方が先決です。

伝統を重んじつつ、新たなものを取り入れられるならそれも由です。ですが、それを今から始めて領土を広げるのは至難の業でしょう。奪われた土地を奪い返すその労力がどれ程困難か、ヴァリエール公爵ならお分かりなるはず。

ならば、新たな国家を築いてしまい新たな歴史を作り上げるのもいいと思うのです」

「だが、それでは我々トリステインの誇りはどうなるのだ？」

ヴァリエール公爵はそういう俺をやや睨み付けるように言う。
もの凄いプレッシャーだ。

幾多の修羅場を潜り抜けた将の睨みはさすがの俺も腹の底から震える感じがする。

だからと言って引くわけにも行かない。

「誇りは継承すれば良いのです。」

平民との新たな国作りに関しては納得して頂いたと思います。

それが少し範囲が広がるだけだとお考え下さい」

「ううむ……。確かに平民と貴族の歩み寄りに関して私も由と思った。

だが、他の国となると……」

「わたしは新たな国家に関しては良いと考えていますわ」

「アンリエッタ姫！」

「この話は昨日、アレスから提案があつたのは承知済みです。

わたしは、アレスの考える新たな国家の構想に乗ろうと思います」

この発言に、その場にいる全員が驚愕をする。

そうだ。

アンリエッタはこれから女王になることが運命づけられている。

国家でもっとも権威のある女王になるアンリエッタがこの案に乗ろうと言うのだ。

驚愕しない方がおかしい。

「アンリエッタ。その考えは本気ですか？」

「はい、お母様。わたしはアレスの考えに乗ろうと考えています。」

アレスには何度となく助けられています。

この案も、アルビオン、レコンキスタとの戦争を避けるために考えてくれたことですね。

そして、このわたしのためをも思っ

て、そうとうとアンリエッタは少し熱の籠もった目で俺を見る。

「この場にいる者達にだけ告げます。

わたしはアルビオンの皇太子ウェールズ様と恋仲にあります」

「な！」

全員が驚きの声を上げる。

俺はすでに既知のこのために静観しているが。

「そして、その相談をアレスは真摯に受け止めて、適切なアドバイスをしてくれました。

わたしが一国の姫であるという立場なのにも関わらず、どうしたらわたしとウェールズ様が自然にお会いすることが出来るか、どうしたら国民に迷惑を掛けずにわたしとウェールズ様を引き合わせる事が出来るか？

それを考えてくれました。

そして、今回の案も国民、トリステイン、わたしのいずれも一番いい方へ行くように考えてくれたのです」

やや誇張されているところもあるが、大筋はアンリエッタが言ったことは事実だった。

しかし、アンリエッタも思い切ったことをする。

これは正直、批判されてもおかしくない。

また、姫という立場を弁えなければならぬのにそれを放棄したと見なされてもおかしくないことだ。

「アンリエッタ姫は確かに王族の身です」

今度は俺がフォローする番だ。

皆がアンリエッタから俺に対して視線が移る。

全員が厳しいまなざしだ。

「だからと言って全てが雁字搦めになっていいものでしょうか？

それに、私は出来るだけトリステインのこともアルビオンのことも考えてこの案を提示しました。

戦争するなら簡単です。

多くの血を流すだけですから。

この案は、血を流さない革命です。

上手く行くかは神のみぞ知るところでしょう。

しかし、トリステインの民を戦乱によって不幸にするよりかはいいのではないかと考えています。

そして、その道を通るならアンリエッタ姫も王族としての責務を果たせると考えました」

「変わらなければならぬのかも知れませんか」

マリアン又皇后陛下がつぶやいた。

「皇后陛下！」

マザリー二枢機卿が驚きの声を上げた。

否、この場にいる全員が驚きを隠せないでいる。

「国とは何のためにあるのか？ 若い頃に考えたことがあります。

アンリエッタもそういう思いを持ってもおかしくありません。そして、国を治めるのに王族だけでは力が足りないのも分かっているのです。

多くの貴族の力を得て、国がようやく治まります。

ですが、その貴族をまとめるのは決して簡単ではありません」

そういうとマリアン又皇后陛下は俺を見る。

「アレス程の若者がこのトリステインにいるのなら未来は決して悪いものではないと思います。

このトリステインをアンリエッタと共に導いてもらいたい私は思いますわ」

女神のほほえみと云えばいいのだろうか？

とても穏やかで包容力のある笑みを俺に向けてきた。

なんと言えがいいのか。

俺も結構勢い任せで言っていたところもある。

まさかこうまで話が発展するとは。

「皇后陛下がそう言われるのであれば私はもう何も言いますまい」
マザリー二枢機卿がこれまた穏やかな笑みを浮かべながら言う。
マリアン又皇后陛下が決して政治に口を挟まなかったが、未来を
託すことへの期待からかマザリー二枢機卿も由とするらしい。

ヴァリエール公爵と父さんは、少し微妙ではあるが二人が言うな
らと乗ってくれた。

だが、次の発言に俺は度肝抜かされることになる。

「こうなると、アレスには一度王になってもらう必要があるかも知
れぬな」

そう言ったのはヴァリエール公爵だった。

「待って下さい。それと私が王になるのは全く関係がないと思いま
す。」

それに、私が王になるならルイズは……」

そこまで言って俺は気がついた。

これから起こることはハルケギニア全土に渡ることになる。

そうなると、俺の立場があやふやのままでは駄目なのだ。

王になると言うことは国の最高権限を得ることに等しい。

俺がやるうとしていることを本当に成し遂げようと言うならアド
バイザー的存在ではなく確固たる権限を持ったものになれると言うの
だろう。

それならアンリエッタ付きの文官と言うのもある。

だが、あれば常にその証を持つていなければならぬ。

それなら王という立場になるのが一番いいのだろう。

「ルイズとの婚約を解くことはない。これはルイズが嫌がるだろう
からな。」

アレス、父親としては妬くがルイズは本当にお前のことを想って
いるぞ。

ただ国には強い象徴がいらないとならない。

アレス、お前は若いが頭がいい。そして、人を導けるだろう。

だからアルビオンとレコン・キスタの同盟に相乗りすると言う案を王という責任ある立場で成し遂げよ」

そういうと、ヴァリエール公爵は父さんを見る。

父さんは難しい顔をしているが、ヴァリエール公爵が言っていることも分かるらしい。頷いてヴァリエール公爵に答える。

「マザリー二枢機卿、マリアンヌ皇后陛下、いかがですか？」

次に二人へ同意を求める。

俺が王になると言うことは二人に大きく関わるのだ。

そして、アンリエッタと一時的には結婚することになる。

「私は構いませんぬぞ。なかなか面白い案ですな」

「私も異議ありません」

二人もあっさりと承諾する。

一体、どうなっているんだ？

そして、ヴァリエール公爵は最後にアンリエッタを見る。

「姫、ルイズの事がある故、真の夫にはさせるわけには行きませんがウェールズ皇太子との一件を实らせるのに乗ってくれはしないでしょうか？」

ヴァリエール公爵の問いにやや驚きを表す。

しかし、すぐに平静を取り戻した。

「わたしも構いません。」

アレスであるならウェールズ様以外で唯一許せる殿方です。

ですが、その……」

そう言いながらアンリエッタは少し赤い顔で俺を見る。

ちよつと展開が俺の予想の斜め上を行っているのだが……。

「アレスは？ アレスはどうなのですか？」

そこで俺の意志を訪ねるか……。

どうしたものか……。

俺はここまで考えていなかった。

だが、もう引くわけにも行かない。

「私は正直、ルイズの事で後ろめたさを感じます。」

ですから、一つ条件を加えさせて頂きます。

ルイズを私とアンリエッタ姫の女官としてルイズの意志で常に行動を共に出来るように権限を与えさせて下さい。

ルイズの秘薬の研究もアカデミーで出来るように配慮すればこちらにしながら研究も出来るでしょう。

その条件で私は引き受けます」

ヴァリエール公爵はやや驚いた表情をしながらも、俺の提案に頷く。

全く、今日は俺がきっかけとは言え皆が驚いてばかりだな。

静観しているノルンも、さすがに驚いている。

「アレス、いいですね？」

「ええ。私めで良ければ」

アンリエッタの問いかけに、俺はそう言ってお辞儀をするのだった。

こうして、突拍子もなく俺はトリステインの国王への道を進むことになる。

全てはトリステイン、アルビオンを始めハルケギニアの国々が共に平和の道を歩むため。

そして何よりも俺とルイズが幸せに暮らせるためである。

だが、ここから先の道は俺の予想を遙かに超える苦難の道となるのだった。

第三十話（後書き）

皆様、明けましておめでとうございます。
本年もどうぞよろしくお願い致します。

約一ヶ月ぶりの更新となりました。

本業、家庭、プライベートと少々多用で小説を書く気力が無く一ヶ月近くお待たせしてしまったこと申し訳ありません。

さて、第三十話ですが作者である私でさえ少々予想の斜め上に行く展開になってしまいました。

アレスを王にする。

全く考えていなかったわけではないのですが、ルイズの事を考えて今までこういう事は無いようにしていました。

なのにも関わらず、私の妄想世界が暴走を期してしまいこのような事に。

アレスはこれからやるべき事がたくさんあるにも関わらず、王にまでなると本当に大変なのですがちよつと私も楽しんで書いてみようと思います。

それでは、この辺で失礼させて頂きます。

第三十一話（前書き）

この小説は「ゼロの使い魔」の二次創作になります。

また、独自解釈、独自設定などあり、表現も作者の都合で書いています。

そのため、真に「ゼロの使い魔」のファンと言う方には不快な思いをさせる可能性があるのをご了承ください。

また、読んでいる途中、感情的になったり、気分が悪くなった場合はすぐに閲覧するのを止めて気分を落ち着かせることをお勧めします。

第三十一話

会議の翌日。

俺は学院に戻ることにした。

これからやるべき事は非常に多くなる。

まずは戴冠式の準備だ。

各貴族への通達、各国首脳への通達もある。

その後は各領土の税金徴収状況の把握、各領土への視察と貴族のヒアリング。

また国内のレコン・キスタのあぶり出しも結局まだ何も進んでいないのだ。

だがその前に、学院に戻ってやるべきことがあるのだ。

ルイズに直接、俺が国王になることを告げることである。

これは言ってみないと分からないがたぶん一悶着あるだろうと予想している。

出来るだけ、今回のことでルイズとの仲が悪くなることだけは避けないとならない。

俺は馬車の窓から外を眺めながらそんなことを考えていた。

「マスター、良かったの？」

その声に振り返る。

肩に座るノルンが、心配そうに俺を見つめていた。

「正直に言って、分からないとしか言えないな……」

「まさか、マスターが国王になるなんてね。」

アンリエッタ王女も満更じゃないみたいだし。

ねえ、もしアンリエッタ王女がマスターを本気で好きになったらどうするの？」

「おいおい、それを今聞くか？」

これからルイズに偽りとは言え、アンリエッタと結婚することになる旨を伝えないとならないんだ。

その状態でアンリエッタが本気で俺を好きになっただらとは考えるのは今は避けたい。

「それもそうね。でも、マスターが国王か……。」

これからどうやって行くつもりなの？」

「どうするもこうするもやるしかないさ。」

国を治めたことはないものの前世では仕事上、人の上に立たないとならないことが多かったからその応用でなんとかなる」

とは言え、プロジェクトのリーダー程度しかやった事はない。

「ふーん。あたしはその辺よく分からないけどね」

「まあ、苦労はするだろうけど全く出来なくは無いだろとは思っ
「無理はしないでね？」

ずっと俺の頬に寄りかかる。

使い魔の前に、パートナーでもあるんだ。

俺を気遣ってくれるノルンの気持ちがとても嬉しい。

「分かってるさ」

小さいノルンの頭を指で撫でるのだった。

学院に戻ると、ルイズに早速会いに女子寮へと行く。

たった数日しか学院から離れていないが、もうここに来ることもないと思うと少々感慨深いものを感じる。

ルイズの部屋へ来ると軽くノックをした。

「はい、どちら様？」

「アレスだよ」

そう答えると、ドアが勢いよく開けられる。

「アレス！」

少し潤んだ瞳でルイズは俺に抱きついてきた。

おかしいな、たった数日しか空けていなかったんだが？

「お、おい、ルイズ」

抱きつくルイズをなだめようとして、俺は周りの視線に気がついた。

周りは何事かと言う視線を俺に向けてきている。

同姓ならともかく、異性に好奇心な目で見られるのは少々居心地が悪い。

「ルイズ、まずは中に入ろう」

「うん」

ルイズは俺から離れると、部屋の中に招き入れてくれた。

「おかえり、アレス」

サイトが何やら本を読みながら俺に視線を向けてきた。

しかしサイトはこっちの文字が読めないんじゃない？

「ああ、これか？ ルイズに今文字を教えてもらってさ」

「そうなのか？」

俺がルイズの方を見ると、頷いて見せる。

「サイトは、いつまでこっちの世界にいられるかは分からないわ。

もしこれから何年も元の世界に戻れないなら大変じゃない？

だから、少し前から教えていたの」

「そうだったのか……。でも、言ってくれば俺も教えられたんだけど？」

「アレスは忙しいじゃんか」

サイトはそう言う。

なるほど、確かに俺は何かと忙しことが多い。

だから気を遣ってくれたわけか。

本当なら同じ世界出身として俺が教えるべきだったとも思ったのだが。

「それより、何か話があるんじゃないのか？」

部屋の奥からカタカタ音を立てながらデルフリンガーが言う。

「デルフリンガーそんなところにいたのか」

「どうせ、俺は剣だから存在感薄いさ」

「悪い、悪い」

「もう、姫様との相談は終わったの？」

ルイズが俺に椅子に座るジェスチャーをしながら聞いてくる。

俺は椅子に座ると、その質問に答えた。

「ああ、終わったよ。いろいろあってとんでもない事になったんだけどな」

「とんでもない事？」

俺の言葉に眉をひそめるルイズ。

ここからは公になるまでは機密事項になる。

どうせ遅かれ早かれ知られるんだが。

「ちよつと、多くの人には聞かれるわけにはいかないからサイレント掛ける」

詠唱を唱えて、サイレントを部屋全体に掛けた。

「聞かれないほど、とんでもないことがあったのか？」

「大事になるから公になるまでは控えたいんだ」

サイトの疑問に答えると、俺は意を決して二人に言う。

「近々、俺は王位を継ぐことになる」

俺の言葉に二人は何を言っているのかと言うように俺の顔を見る。言ったことが理解できないという感じた。

「つまりは国王になるってことか？」

何も言えない二人に代わりデルFRINGERが尋ねる。

「デルFRINGERの言うとおりだ。俺は国王になる。そのためにアンリエッタと結婚することになった」

「ど、どうして……」

ルイズの顔が青ざめる。

まるで自分が捨てられたと言いたげな絶望する表情だ。

「アレス！ てめえ、ルイズはどうするんだよ！」

サイトが俺の胸ぐらを掴んで叫んだ。

「サイト、落ち着いて！ マスターもちゃんとどうしてかを説明してよ！」

「悪い、悪い。俺が国王になって、アンリエッタと結婚するのは事実なんだが、これには訳がある」

ルイズは無表情のまま俺を無言で見ていた。

「アルビオンがトリステインと同盟を一方的に解消する通知を出してきた。」

ウェールズ自身の字で、アンリエッタに。

それは今後、アルビオンとトリステインが再び戦争になるかも知れない」

そして俺は語り始めた。

そのために、国を強化しなければならないこと。

その実行のために、確固たる権力が必要であること。

ゆくゆくはアルビオン、レコンキスタの同盟にトリステインが相乗りする形で同盟に参加すること。

最終的に、その同盟によって新たな国家を作ること。

これらの事がアンリエッタはもちろんのこと、父さん、ヴァリエール公爵、マザリー二枢機卿、皇后陛下が皆承認していることを。

全てを語り終わると、ルイズは目に涙を浮かべながら言う。

「どうして……なの？ わたしはただアレスと一緒に幸せに暮らしたいだけなのに……。どうしてそんな大きな事になるの？」

「そうだぜ、アレス！ 確かにアレスじゃないと出来ないことが多いとは思っけどよ。何もルイズを悲しませるようなことをしなくてもいいじゃんかよ！」

ルイズが肩を落としているところを支えるようにサイトが手を添えて俺をにらんだ。

「俺もこうまでなるとは思わなかったんだ」

「思わなくても、なっちまったじゃねえか！」

「サイト！ マスターだっていろいろと考えた結果なのよ！」

「わかんねえよ！ 俺には！ 大切な人がいるんだろ？ だったらその大切な人を泣かすようなことはするなよ！」

サイトの叫びはもつともだった。

俺はルイズが大切だと思ってる。

それは今だって変わらない。

でも現実はどうだ？

こつも肩を落とさせてしまうとは……。

「アレス……。これもわたし達のためなのよね？」

下を向いたままのルイズが俺に尋ねる。

その声はやや強めの口調だった。

完全に絶望したような口調ではない。

「ああ。全ては俺達のためだよ」

「本当に？」

「ああ。実際には俺とアンリエッタの結婚は仮初めだ。最終的には新国家でアンリエッタはウェールズと結婚するさ」

「……。信じて良いのね？ アレスを」

「もちろんだ」

そついうとすつとルイズは立ち上がった。

その目にはとても強い意志がある。

「それなら、アレスに付いていくわ！」

「ルイズ、いいのか？」

サイトが心配そうにルイズを見る。

ルイズは、サイトを見ると力強く頷いた。

「わたしはアレスが好きだもの。だから付いていく。

でも、サイト。

あなたの気持ちも嬉しかった。ありがとう」

笑みを浮かべてお礼を言うルイズに、サイトは顔を赤くしながらただ「おう」としか返せなかった。

「アレス」

「なんだ、ルイズ」

「わたしはあなたを支えるってこの間言っただわ」

「ああ」

「姫様と結婚するって聞いて驚いたけど、でもわたしはあなたを支えるから」

強い意志で言うルイズに、俺は申し訳ないなと思った。

本当なら学校卒業と同時に結婚。

平穩で幸せな生活が待っているはずだったのだから。

だから、こんな俺に付いてくると言ってくれたルイズに改めて感謝しなければと思う。

「ルイズ、本当にありがとう。」

今、この場で誓うよ。

俺は必ず、ルイズを幸せにするって」

「アレス……。その言葉を忘れないでね。」

わたしずっと信じて付いていくから、どこへでも」

俺に抱きついてくるルイズ。

そのルイズを抱きしめながら、俺は改めてルイズとの幸せを考えなければと思った。

もう国王になるのことは変わらない。

その先を考えよう。

ルイズを安心させられる道を。

「ねえ、マスター。ルイズに肝心なこと言い忘れてるわよ？」

「肝心なこと……。ああ！」

そうだった。

俺は自分の事しか話していないが、ルイズの事も言わなければならなかったんだ。

「な、何なの？」

「驚くじゃなかよー！」

「ごめん、ごめん。実はルイズには俺とアンリエッタの専属の文官になってもらうことになるんだ」

「え？ ……そ、それって！」

「これからは俺とアンリエッタの側にいて俺達を支えてほしいんだ。サイトにも支えてほしいんだが、どうだ？」

「俺は構わないけどよ、ルイズはそれでいいのか？」

「わたしはそれでも良いわ。アレスを支えるって決めてたから」

「そうか。ありがとう。」

俺が国王になったら正式な通達をヴァリエール家にするから」

「それにしても随分と大事なことは忘れてるじゃねえか？」

デルフリンガーがやや呆れたように言う。

確かにうかつだった。

そつちを早めに言えばいいものを俺は何遠回りしているんだ。

「全くね」

ノルンも腕を組んで言う。

全く俺としたことが。

「せつかくだから、サイトにも朗報があるんだ」

「なんだ？」

「元の世界に戻る手立てが進んでるんだよ」

「それは本当か！」

サイトが驚いたように言う。

それもそうだ。

「ああ、まだ元の世界に戻すことは出来ないんだが、近い将来戻るかも知れない可能性が強くなった」

「そっかー 元の世界に戻れるかも知れないんだな」

握り拳を作つて、見えてきた希望に喜びを隠さないサイト。

そんなサイトに、ルイズも声を掛ける。

「良かったじゃない、サイト！ これで元の世界に戻る希望が出てきたじゃない！」

「ああ！ 本当に良かった！」

喜ぶサイトの姿を見て、俺はあのコネクト・ゲートを一日も早く制御しきれるようにならなければならないと思った。

まあ、それにこう伝えることで俺自身もより高度にあの魔法の制御に尽力を注げる。

ある意味、俺に対してプレッシャーを与えたことになるんだ。頑張らないとならない。

「ねえ、アレス。わたし達の住む場所って決まってるの？」

「一応、宮廷に部屋を用意してもらう手はずになってる。アンリエッタもルイズが来るのを楽しみにしてた」

「姫様とアレスの近くなら、わたしも頑張れるわ」

「そうか。詳しいことは君のお父さんに聞いてくれ。たぶん近日中に連絡が来るはずだから」

「わかったわ」

「さて、俺はそろそろ学院長のところに行かないと」

「学院長のところに？ どうして？」

「退学届けを出さないとならないから」

とてもじゃないが、学生として復帰は不可能に近い。

国王になって新国家の建国までとなると俺はもう学生を楽しむことなんて無理だ。

「それならわたしもじゃないの？」

「ルイズはまだ正式に通達が来てからになるから。」

それに俺は明日、実家へ戻るんだ。

今後のことではいろいろと母さんにも話さないとなくなてさ」

母さんは何というだろうか……。

快く送り出してくれると良いんだけど。

「アレス……」

少し寂しそうな表情をするルイズ。

少しの間、会えなくなることへ不安があるんだろう。

「大丈夫さ。またすぐに会える。」

それに今度は昔みたいにアンリエッタも一緒にさ」

「そうね」

そう言っつてルイズは笑うが、やはり不安はぬぐえないようだった。

一悶着はあった。

しかし、これでようやく進める。

この大仕事をこなして、ルイズと幸せになるためへの道へと。

第三十一話（後書き）

まずは、二ヶ月以上も更新せずにすみませんでした。

一月、二月と本業がすさまじく忙しくなりまして、精神的に小説を更新するには至りませんでした。

楽しみにしていてくれた方には本当に申し訳ありません。

それでは、また次回に。

第三十二話（前書き）

この小説は「ゼロの使い魔」の二次創作になります。

また、独自解釈、独自設定などあり、表現も作者の都合で書いています。

そのため、真に「ゼロの使い魔」のファンと言う方には不快な思いをさせる可能性があるのをご了承ください。

また、読んでいる途中、感情的になったり、気分が悪くなった場合はすぐに閲覧するのを止めて気分を落ち着かせることをお勧めします。

第三十二話

学院の退学届けを出し、俺は学院を去った。

オールド・オスマンには何度となく考え直すようにと言われたが、王になると言う話を明かすと諦めてくれた。

ただし、王になるならばそれ相応の覚悟があるのかと尋ねられることになったが。

最終的には俺の意志を尊重してくれた形になった。

本来ならギーシュとモンモランシーくらいには別れを言っても良かったのだが、事がことだけに俺もすっかり口を滑らすとまずいため何も言えずに去ることになった。

今度二人に手紙は送るつもりではある。

学院を去った俺とノルンは実家へと向かっていた。

「マスターのお母様、なんて言うかしら？」

俺の肩で一緒に馬車に揺れるノルンがつぶやいた。

以前、戦場へ行く前に実家に立ち寄った際にノルンは俺の母さんと会っている。

その際いろいろと意気投合していたが。

「さあね。母さんの事だからな……」

静かに怒るだろうな。

最終的には認めてくれるんだろうとは思う。

だけど、そこに至るまでは相当お灸を据えられそうだ。

例え、王になろうとも、母親は母親なのだ……。

どんなに権力が強かろうと、力が強かろうと、母という者には叶わない……。

漂わすオーラが相当暗いのだろう。

苦笑しながらノルンが俺の頬を撫で始めた。

「マスター、仕方ないから。元気出して」

「……。ノルンは母さんに責められたことが無いからな」

「そんなに嫌なの？」

「心に罪悪感というか後悔の念を抱かせると言つか」

「こう精神的にきついんだよな。」

「マスター、諦めるしかないわ」

「同情の労りが、とても染みる。」

「ああ、諦めるわ」

俺はただそう言うしかなかった。

ヴアルガード家、広間。

俺は父さんと共に母さんの前で頭を垂れていた。

青い髪を揺らせながら激しく俺と父さんは責められていた。

「そこまでの話は分かりました。」

しかしです。あなたが付いていながら、こういう事態になるとはどういうことなのでしょう？」

「め、面目ない。だが、エレン」

「言い訳は結構です。アレス」

ばっさりと父さんの反論は叩ききられた。

父さんは口を閉ざしてただ肩を落としていた。

もうかれこれ、数時間にも及ぶ。

「は、はい」

「王になることは民のことを考えることだと言うことは分かっていますか？」

「はい、それは母様から意志は受け継いでおります」

自信を持って答える。

「その事はいいです。でも、だからと言ってまだまだ学ばないと成らないあなたが王になるうとはしっかり出来るとでも思っているのですか？」

「そ、それは……。しかし、父様と母様から今まで学んできましたし」

「わたしとこの人は確かに人の上に立つとしての基本的なことはあ

なたに教えました。

ですが、それはこのヴァルガード家の民をまとめるためのもの。
あなたには経験がまだ必要だと言ったことが分からないのですか？」

「分かつてはありますが、そう言うならアンリエッタ殿下とて」

「姫様はそういう教育を施されています。」

それに王族として自身が国を治めることも十分にあり得ますから。
でも、アレスは違うの分からないの？」

「いえ、母上。しかし今の説明だと矛盾しませんか？」

俺は今の話の中に違和感を感じて反論を試みた。

「どういうことかしら？」

「私もこのヴァルガード家をいつかは治めることを想定して教育されて来ました。」

それを考えると、一国と一領地の違いこそあれ教育としては同じですよ。

アンリエッタと私では二つしか違い有りません。

経験の上では戦場にも赴いていますし、内政に関してもだいたい関わっています。

そこらか考えても」

「アレス。国と領地とでは立場が違います。

領地はまだ国によって守られるもの。

わたし達貴族は、国があつて初めて領主として成り立ちます。

この領地を治めることを認めてもらっているのです。

ですが、国は守る立場にあるのです。

国を認めさせるには、周りの国々に認められなければなりません。
その上で、自分の国の貴族達を始め民を守らないとならないのです。

下から上を見ると、上から下を見るのでは視界が異なるのと同じことよ。

アレス、わかりましたか？」

「はい……」

さすがは母さんだ。

とても説得力がある。

説教をしながら俺に足りないことをさり気なく伝えてくれているんだ。

「いいですか？　そもそもアレスは……」

とは言え、反論の機会と思い口を開いたのが災いした。

まさに口は災いの元と言うことだ。

ここから俺はさらに一時間ほど説教を食らうことになった。

父さんが、俺を恨めしい目で見ていたのが反省の念を抱かせてしまっことに。

「自業自得だよ。マスター」

自室に戻って俺は項垂れていた。

ノルンが馬車の中で揺られていた時以上に苦笑している。

何というか……。

「いや、分かってはいるんだがどうもこう反論したくなることもあったな」

だが、その結果と言うのがこの胸の辺りから下の気の重い気持ちになってしまふのはどうなのだろうか。

まあ、仕方がない。

「でも、何だかんだ言いながら最後はマスターのお母さんも認めてくれたわね」

「反対しても、最後は俺の意志だからってのは分かっているからさ」

「じゃあ、どうしてあそこまで説教するの？」

ノルンは俺の肩の上にはいなかったが、俺が説教されている所は見ている。

ほぼ半日は説教で終わったようなものだ。

父さんも久しぶりにげっそりとしていた。

今頃、ベッドの上で寝ているだろうな。

「母さんが、あそこまで説教するのはやっぱり母親だからだろうな」

「心配しているからって事？」

「そう言うことだ」

とは言え、その心配しているという表現が結構辛いのだが。
だいたい親、とりわけ母親と言うのが子供のことが心配で堪らないものだ。

前世で、親が亡くなる前も良く俺のことを心配していた。

成人して、社会人になったというのに電話をしてきては仕事のことや健康のことを気遣ってくれたものだ。

「あたしの両親も心配してるのかな？」

「してるんじゃないか？ フェアリーとて基本的には人間と社会は変わらなそうだしな」

「そうかもね。あたしの場合、もらい手についての心配しかされなさそうだけど」

苦笑しながら言うが、それでも少しは家族を懐かしんでいるようだ。

もし、機会があるなら実家近くまで遊びに行ってもいいかも知れない。

「ねえ、マスター」

突然、甘えたような声を出すノルン。

俺の頬にすり寄ってきた。

「どうしたんだ？ 急に？」

「なんか急にマスターに甘えなくなつたの。少しこうさせてノルンはそういうと俺の頬に体を預けて目を閉じる。」

頬越しにノルンの体温を感じながら、俺は優しくノルンの頭を撫でた。

「お母さんに話が終わったと言うことはこれから本格的に動くのよね？」

「ああ。母さんに話したのは一つのケジメだからな。」

ここからが大変だ」

これから正式な通達が各貴族にされる。

反対派が構成されてもおかしくない。

まあ、後ろ盾は大きいから大きな問題は起きないだろうが、それでも一悶着有るだろう。

それだけじゃなく王宮に住む準備も進めないと成らない。

実家に戻ったのも俺の私物を王宮に運び出さないと成らないのもある。

それらの事を話とノルンは小さい体で俺の頬を包み込む。

人間だったらきつと俺を包み込むように抱いているのだろう。

「不安になったりしたら、あたしにも話してね？　あまり役には立たないかも知れないけど胸の内を吐き出してくれるだけでもいいから」

「そうだな……。あまり弱音はアンリエッタやルイズの前では言えそうもない。

もし、弱音を吐きたくなったらノルンの方がいいかも知れないな」
本当に、ルイズといいノルンといい俺の事を良く思ってくれる。

「あたしだったら遠慮しないでね。聞いて上げる以外、今は出来ないから」

「ああ。助かるよ」

俺は幸せすぎるな。

こんなにも俺を思ってくれる人たちがいるとは。

贅沢すぎる環境だと思う。

これ以上のものは何もいらない。

だから、きつちりと全てを終わらせよう。

改めて俺はそう思うのだった。

翌日から王宮へ運ぶ荷物の選定が始まった。

何も全てを持って行くわけではない。

王族になるわけだが、計画通りならいずれはこちらに戻ってくることになる。

そのため、本当に必要なものだけを持って行くことにしたのだ。

「で、これが最後かな？」

自室にあったものと、書斎にある本の内、俺が所有しても良い本を選定したものに札を付けていく。

これが後で部下達に運ばせるわけである。

引つ越し屋では無い以上、適当に持つて行くしかないだろうから俺は仕分けをして札に色を付けておいた。

あとは王宮に同じ色の札を用意しておけば迷わずに運んで貰えるはずだ。

選定が終わると、俺は父さんに頼み事をする。

「以前にも、似たようなことを頼まれたが、お前の発想には舌を巻くな」

「まあ、靴の素材も杖と同じものに出来れば両腕と両足で魔法が扱えます。」

しかも上手く行けば四種類の魔法を詠唱完了させて放つだけにしておくことが出来る可能性が高いので」

杖素材の手袋は以前に作ってもらっている。

今度は靴も作ってもらうのだ。

「うむ。出来るだけ早く作らせよう。」

して、アレス。それだけのものを用意する理由を聞きたいんだが」

「はい。理由は一つしかありません。」

私が王位を継ぐからです」

「そうか」

父さんは俺のその一言で全て合致が言ったのか後は深く追求してこなかった。

理由は簡単だ。

俺自身が王位を継ぐと成ると内外問わず命を狙われる危険性が高くなる。

そうなると杖を取り上げられる、また手を封じられるなどすると魔法が使えなくなったりする。

なら、足でも使えるようになれば自衛手段としてはかなりのもの

になると俺は考えたのだ。

もつとも足さえ封じられたらどうしようも無いが。

「マスターってどんどん武装が激しくなっていくわね」

肩に座るノルンが呆れとも付かないため息を付いた。

まあ、実際に武装が激しくなっているのは事実なだけに反論は出来ない。

「あたしは使い魔だから、あたしが守ってあげれるのに」

少し拗ねるノルン。

その仕草が可愛らしい。

「気持ちは嬉しいさ。だけど、俺は守られるより守る方が好きなんだ。」

ノルンさえ、俺が守りたいと思ってるんだよ」

ノルンの金色の髪を指でそつと撫でる。

大きさに人形サイズだが、女性の髪の毛特有のさらさらとした感触だ。

「マ、マスター……」

俺の言葉にノルンの瞳を潤わせた。

頬を少し赤く染めている。

俺ってやっぱり女つ垂らしなんだろうなと思う瞬間だ。

「もう、マスター。あんまり優しくすぎるのダメだからね……」。

今だけマスターに甘えるけど、あたしは使い魔なんだから」

だから守るのはあたしなの。

ノルンの小さい唇が俺の頬に触れた。

「ああ。いざって時は頼むよ」

だが、俺はそのいざって時が来ない事の方がいいと思っていた。

実家に戻って三日。

粗方、家での事を終えると王宮へと向かうことにした。

新たな生活が始まることになる。

王になる実感は正直まだあまり持てていないが、大きいことを成

し遂げないとならない使命感だけはあった。

王宮に付くと、アンリエッタが門まで出迎えに来ていてくれた。

馬車から降りて、アンリエッタの前まで来ると俺は胸に手を当てて跪いた。

「姫様、お迎え頂き恐縮です」

周りに兵もいる以上、あまり砕けた口調も出来ないのだ。

「良いのです。」

客人をお持て成すのも王女としての勤めですわ」

笑顔で言われると俺も異論はない。

確かに持て成す側の心がけまでは口は出せないからな。

頭を上げなさいと言われ、俺は跪くのをやめるとアンリエッタと共に王宮の中へと入る。

まだ俺が国王になるのは極秘である以上、ただの客人扱いだ。

それでもこれから案内される部屋は、俺がここで暮らすのに割り当てられる部屋だ。

アンリエッタに案内されたのは客間だ。

中に入ると、最低限生活できるだけのものは揃っている。

ベッドにクローゼット。鏡や机などだ。

「へー、いい部屋じゃない」

ノルンが俺の肩から離れて部屋を一通り飛び回る。

俺の実家の部屋よりは大きいだろうな。

「ここが今日からアレスが使う部屋よ。」

隣をルイズの部屋にするわ。この部屋はちょっとした仕掛けがあるってね？」

アンリエッタは無邪気な子供のような笑顔で俺を部屋の隅に案内する。

「仕掛けてどんなのがあるんだ？」

「これよ」

壁に掛かっている燭台を下に引く。

すると、壁と壁の間に少し隙間が出来た。

丁度、人が一人通れるくらいの大きさだ。

アンリエッタは隙間の空いた壁をそつと押すと壁が奥へと一度スライドすると今度はそのまま右にスライドする。

「これは……。隠し扉ってことか。」

しかも隣の部屋と繋がっているとはね」

壁が無くなった先に見えるのはこれからルイズが使うと言われた部屋だった。

「夜に部屋から部屋の移動は何かと危険よ。」

下手にアレスカルイズが互いの部屋に行けば逢引していると噂が立つわ。

極力、そう言うことは避けたいからルイズと会いたいときはここを使って」

「アンリエッタ。君には参るな。」

ここまで気遣ってもらって助かる」

「いいえ。わたくのわがままを聞いて貰う様なものだもの。」

それに、アレスが国王になってくれればそんなに面倒な事をしなくてもいいじゃない？」

「アンリエッタ……。」

雑務をやるのが嫌だから俺を国王になるのを喜んでないよな？」

俺がそう言うとなンリエッタは少しだけバツが悪いように、少し舌なんか出して言う。

「ちよつとは雑務をやらないでいいってことに喜んでるわ」

「アンリエッタも、なかなか考えているわね」

ノルンがアンリエッタに対して感心と呆れ半分で言う。

「あら、このくらいは考えておかないかね？ アレスと結婚するんですもの。」

最大に彼の能力を活用したいわ」

「おいおい、とは言え国王になったら実質的な実務は俺の方が多いからな。」

それは最初から想定済みだ」

「頼りになる旦那様なこと」

そういうとアンリエッタが甘えたように俺に寄りかかってきた。

「ちよつとアンリエッタ。人が来たらまずいぞ？」

「人払いをしてるわ。少しの間なら人は来ないわよ」

そう言う問題だけじゃないんだがな。

「アンリエッタ！ あんまりマスターといちゃつかないで！」

「あら、いいじゃない。ノルンなんかいつもアレスと一緒になんですよ？」

「だからって、マスターに甘えるな！」

「嫌よ」

俺に抱きつくアンリエッタ。

それを引き離そうとアンリエッタを引っ張るノルン。

……緊張感がない。

「アンリエッタ？ 俺達の結婚はあくまで計画を遂行するための仮のものだぞ？」

「ええ知ってるわ。

でも、わたしだって誰かに甘えたいの。

本当はウェールズ様に甘えたいけど今は叶わないわ。

だったら、わたし達のお兄ちゃんに甘えてもいいんじゃない？」

「な！」

無邪気な笑顔でお兄ちゃんとは……。

正直強力すぎる。

「マ・スター！ この、浮気者！」

「いや、この場合違うだろう！」

あたふたしたままだった俺のセリフはとても説得力が無かったと後にノルンは語るのだった。

こうして、どうにも緊張感無く新たな生活が始まった。
だが、それでもいいと思う。

これからを思うと、このくらいは。

何せ、二つの国を統合するためへの第一歩はこれからなのだから。

第三十二話（後書き）

大変、お待たせしましたm（――）m
何といたら良いか……。

本業、家庭、プライベートといろいろとありましてなかなか書くに至りませんでした。

何度か書こうとPCの前には座っても手が進まず他の作品に流れると言う始末で。

さて、このところ数日単位の話ばかりでなかなか進まないのですが、私の中ではようやくアレスが王になる前段階まで書けたと言う感じですよ。

今回の話は、母親からの説教とノルンとの関係を中心に書いています。

特にノルンは最近、アレスと二人つきりと言う場面も多いのでこういうシーンが多くなりました。

それではまた次回に。

次は二ヶ月以上も掛からないようにしたいですね（^^）；

第三十三話（前書き）

この小説は「ゼロの使い魔」の二次創作になります。

また、独自解釈、独自設定などあり、表現も作者の都合で書いています。

そのため、真に「ゼロの使い魔」のファンと言う方には不快な思いをさせる可能性があるのをご了承ください。

また、読んでいる途中、感情的になったり、気分が悪くなった場合はすぐに閲覧するのを止めて気分を落ち着かせることをお勧めします。

第三十三話

王宮に迎え入れられた俺には国王になるまでの二週間で一つやらなければいけない仕事があった。

非魔法研究開発機関の立ち上げである。

これは俺が元々頼まれていたことだ。

基本的な構想についてはヴァリエール公爵と父さん、マザリーニ枢機卿が固めてくれた。

必要な部門は二つ。

研究開発部門、調査部門だ。

研究開発部門は、自由な発想の下兵器の研究・開発を行う部門だ。調査部門は、研究開発部門とは違う視点で平民の兵へのヒアリング。どんな武器があったらメイジと対抗出来るかである。

開発した武器は実験部隊による実用試験を行い、実験結果の上で武器を採用するかを決定するらしい。

主に軍事目的としたこの機関ではあるが、基本構想を元には俺が自由に構想することになっている。

俺はこの基本構想に一部門追加することにした。
量産部門である。

トリステインではメイジ至上主義が強いため、工業的な思考があまりない。

つまり、武器にしてもメイジが剣を錬成したりするのだ。

一部の平民が弓を作ったりすることはあるが、基本的にはメイジが工業的な作業を担っている。

だから俺はここに量産部門を追加したのだ。

王宮の一室に俺は父さん、ヴァリエール公爵、マザリーニ枢機卿と非魔法研究開発機関の基本構想の資料を受け取って量産部門について話していた。

「ふむ、量産か」

父さんが面白そうに俺を見て言う。

俺の発想が楽しいらしいのだ。

ヴァリエール公爵もマザリー二枢機卿も俺の案に頷いて見せる。

「量産化については以前、お話ししたとおりです。

量産部門を組み込むことで効率的に武器の量産が出来ますから。

部品の規格化を行って、組み立て手順を確立すれば流れ作業で熟練した職人も不要です」

流れ作業、いわゆるライン生産方式にすれば部品の組み立て程度で労働力を確保できる。

ライン生産方式による作業のマニュアル化を行えば職人的な技量も不要なので、熟練度はそれ程必要としない。

ゆくゆくは非魔法研究機関が民間組織になる。もしくは平民による工場の設立なども起こりえるかも知れない。

そうなればハルケギニアの発展にも良い刺激になると思うのだ。

「アレス君の考えはなかなか先進的で私も刺激を受けるよ」

マザリー二枢機卿はそう言ってソファに身を任せる。

新たな発想は人に刺激を与える。

とりわけ野心的な人間や向上心のある人間は尚更だ。

マザリー二枢機卿のような国をまとめるような人間としては刺激になる。

「それで、この機関のトップですが私以外の人間にしたいと思っています」

「アレスが国王になるからか？」

ヴァリエール公爵があごに手を当てながら尋ねてきた。

それに頷いて続ける。

「はい。私が国王になれば国にある機関の総責任者は最終的に私になります。

事実上、私が全責任を負うことになります。

一々全ての機関の運営を私一人で行うのには非効率なので私の代

わりを立てる必要があると思うのです」

「それはそうだな」

ヴァリエール公爵を始め、二人も頷いた。

俺一人に負担が乗っては事が回りにくい。

だから俺は俺の代わりを立てようと思っていた。

それもただ代わりが出来ただけじゃない。

この機関に理解があつて情熱がある人間だ。

情熱があれば、責任感も出てくる。詰まるところ、やらされ根性の人間ではなくやってくれる人が必要と言つわけである。

それにはこのトリステインの常識破りな人間が必要なのだ。

「三人に伺いますが、トリステインの貴族で変わり者はいませんか？魔法以外の事に興味がある、もしくは魔法を新たな視点で研究している人物で」

俺が求める人間は情熱がある人物。

だからある程度、変わり者の方がこの研究機関を担うにはふさわしい。

俺の質問に三人が考える中、ヴァリエール公爵が思い出したように声を出す。

「たしかウェルスタン伯爵の息子に一人いたな。

魔法の研究もしているが、もっぱら魔法の新しい利用方法を探していたらしい。

もしかしたら非魔法研究にも興味があるんじゃないか？」

「魔法の新しい利用方法ですか？ 詳しく聞かないと何とも言えませんが。

彼は実家に？」

もし非魔法研究にも興味を持って貰えるなら好都合だ。

面白い人材になるかも知れない。

「ああ、確かあまり外には出ないと聞いている。

私も一緒に赴こう」

「お願いします」

どんな人物かは分からないが、ヴァリエール公爵の知り合いなら彼に来て貰えると話が早い。

尋ねる日程などを詰めるとこの話題を終えることにした。

部屋に戻ると、陽が落ちかけている時間だと言っことに気がついた。

「随分と時間が経っていたんだな」

確か昼過ぎくらいから話をしていた。

と言う事は三、四時間くらいは話していたのか。

「マスター、あたし疲れたんだけど」

実はノルンは一言もしゃべらなかったが俺の肩に座ってずっと話を聞いていたのだ。

別に待ってて貰っても良かったのだが、付いてくると行ったため連れてきていた。

硬い話だけにきつと詰まらなかったのだろう。

「退屈だったよな。何か甘い飲み物を頼もつか」

「ホント！ 嬉しいな！」

俺の頬にスリ付きながら言う。

全く甘えん坊な使い魔だな。

とは言え、俺もノルンに愚痴ったりとかするからおあいこだろう。入り口付近まで来ると部屋に備え付けの紐を引く。

これは使用人室へと繋がっていて、これを引くと誰かしら来てくれるのだ。

俺がそれを引くと、一分と掛からずにドアがノックされる。

「空いているよ」

ドアが開かれると一人のメイドが入ってくる。

薄い紫色セミロングの髪をした少女だ。

ルイズよりやや背が大きく、少し頼りなさそうな表情の子である。メイド服もまだ新しいから恐らく新人だろう。

「何の御用でしょうか」

手を前で組みながら俺の表情を伺いながら尋ねる。

まだ慣れないのだろう。

緊張した感じがまた初々しい。

「あ、僕の使い魔に何か甘い飲み物を用意して貰えないかな？」

肩に乗るノルンを見せる。

ノルンを見るとメイドの少女は表情が笑顔になった。

「可愛い、使い魔ですね」

「可愛いけど、頼もしいパートナーだよ」

俺がそう言くと、ノルンが照れたように言う。

「ちょ、ちよつとマスター。照れるよ」

そんな姿が余計に可愛いらしく、メイドの少女はくすりと笑う。

「照れる姿も可愛いのですね」

「も、もう！ マスターが変なことを言うからよ！」

ノルンが顔を赤くしながらそっぽを向いた。

拗ねた姿も可愛いとまでは言わなかったが、メイドの少女の緊張をほぐすには丁度良かったようだ。

「今の時期に取れる果物の絞り汁で作ったジュースがメイドの子達の間で流行っているんですが、もし宜しければそれをお持ちしましょうか？」

「うん、お願いできるかな？」

「はい」

メイドの少女はそう言ってお辞儀すると部屋を出て行く。

可愛いメイドだったな。

「マスター、鼻の下伸びてるわよ」

少し不機嫌そうに言う。

ノルンも女の子だからああ言った姿を見られるのが恥ずかしいんだろうな。

「可愛いと思ったからな。ま、ノルンの可愛さには負けるんだけど」
だからノルンの頭を撫でながらそう言った。

ノルンも頬をふくらませながら片目を開けて俺を見る。

「もう、そうやって優しいんだから……。許して上げる」

「それは良かったよ」

ノルンのご機嫌も取れたことだし、俺はノルンの飲み物を待ちながら羊皮紙を取り出してある構想を練る。

練る構想は情報機関の構想だ。

「マスター、また考え事するの？」

「ああ。今のトリステインは昔に比べれば比べものにならない程、軍事面において向上しているんだけど国の情報機関は無いんだ」
国内に入ってくる情報は各貴族の情報力に頼るのが現状。

それらの情報の内、重要なものは国が動くのが今までのあり方だった。

だが、最初から情報を収集する機関が必要だと思う。
情報の収集、統制、操作。

まだハルケギニアではそこまで高度な情報機関は無いはず。

今後、ハルケギニアは俺の突拍子もない提案から改革期を迎えることになると思う。

その時、国の情報統制能力がないと国内を混乱させる可能性が多いのだ。

レコンキスタに取り込まれる案も、情報を上手く操作できるようになればより有利に事を運ぶことが出来る。

アルビオンとの合併するまで何が起きるか分からない以上、あらゆる事を想定して準備をしないとならない。

本当は数年掛かりでやりたいんだが、そんな時間は無い。

「また難しい事を考えてるんだあ。」

こういう事柄はあたし手伝えないんだよね」

齒がゆそうに言うノルン。

こればかりは仕方ない。

そもそも俺だってここまでするつもりなんて毛頭無かったんだ。

ノルンを呼び出した頃はせいぜいレコンキスタとの戦争を有利に進ませただけ。

メインはルイズとの事をだった。

そのはずが俺が国に深く関わりすぎたせいで国王になることになったのだ。

「ノルンはさ、俺が疲れた時に愚痴ればいいんだ」

「あ、それなんだけどね。ちよつとマスターを驚かせる魔法を使えるようになったんだ」

ノルンがそういうと嬉しそうにニヤける。

一体何だろう？

どんな事が出来るようになったのかを尋ねようとした時、再びドアがノックされる。

先ほどのメイドだろう。

俺は返事をするメイドを中に入れるのだった。

運ばれた果物の絞ったジュースは人間サイズのコップに入っていた。

さすがにノルンサイズのコップは王宮に用意していないから仕方ない。

ノルン用のコップは俺が以前作って置いたので、運ばれたジュースをそれに入れて飲んで貰おうとする。

「あ、マスター。もう入れ替える必要もないよ」

「それはどういうことだ？」

「マスターを驚かせる魔法にちよつとね」

嬉しそうにノルンが言うのと、俺の肩から離れて魔法の詠唱をする。

「我をまといし風よ、我の姿を変えよ」

ノルンに風が纏うと一瞬光って、次の瞬間。

「ま、まさか……。変身魔法？」

目の前には人間サイズのノルンがいたのだ。

服はルイズなどが着ていた学院の制服だ。

マントは着てないが、ブラウスを着て紺のスカートを穿いている。しかし、変身魔法は韻竜などが使う高度な魔法じゃなかったのか？

「マスター、どうかな？」

その場で一回転する。

ノルンの金髪のロングヘアがふわりと舞い、スカートもふわりと浮かび上がるがそれは片手で浮かび上がるのを押さえる。

わずかに恥じらった笑顔を俺に向けてきた。

思わず俺は息を飲んだ。

確かにノルンは可愛いと思っていた。

容姿も抜群だし、金髪のロングヘアもとても綺麗である。

あまり触れなかったが、胸もそこそこあったのだ。

そんなノルンが人間サイズに変身となったわけである。

「あ、ああ。とてもいいと思うぞ」

思わずときめきそうになってしまった。

これは反則だろう。

「ところで、その魔法は？ 変身魔法か？ とても高度な魔法じゃないのか？」

「変身魔法だけど、本当の変身魔法は姿形を変えるの。

あたしはそこまで使えないから、大きさを変えられるようにしたんだ。

ついでに服装もね。これは物体を変えるくらいならそれ程大変じゃないから」

「しかし、驚いたな。

まさか人間サイズになるとは……。

だけど、あまり人間サイズになる必要はないんじゃないのか？」

「そう思うでしょ？ でも、ね」

ノルンが俺に近づく。

俺は椅子に座っているわけで、今の体勢だと俺の顔の位置が彼女の胸の位置になる。

ノルンが何をするのかと思えばなんと俺を自分の胸元に引き寄せたのだ。

「お、おい、ノルン！」

俺はノルンに抱きしめられる格好になり慌てて離れようとした。

「ちよつと静かに。マスター力を抜いて、あたしに身を任せて……」
だが、ノルンは俺を押さえつけてそう言う。

「し、しかし！」

「いいから」

諭すように言われて俺は従うことにした。

別に変な意味でこういう事をしているわけじゃないはずだ。

「マスター目を閉じてみて」

言われたとおりに目を閉じる。

ノルンの胸の柔らかさを感じながら少し落ち着かないと思ったが、
思いの外心が落ち着く。

例えるなら母親の胸の中にいるような感じた。

まるで子供の頃に戻ったような、そんな感じがする。

「どう、マスター？ 落ち着く？」

「ああ。不思議だな……」

「ふふふ、マスターって頑張り屋さんだからね。」

友達に聞いたことあって、こうしてあげると落ち着くんだった。

マスターって誰にも頼れないでしょ？ だからこうしてあげたか
つたんだ。」

母性というのはこれ程までに人の心を癒すものなのか。

ノルンが言うとおりとでも落ち着くのだ。

使い魔は主人を守ると言うのは俺も知ってる。

だけど、こうして俺の心まで守るとは。

「ありがとう、ノルン。」

やっぱり君は最高のパートナーかも知れないな」

「そうでしょ。あたしはマスターの使い魔なもの」

ノルンがそう言った時、突然部屋のドアが開いた。

俺達は驚いてノルンは素早く体を離す。

慌ててドアの先を見ると、そこには驚いた表情のアンリエッタが
いたのだった。

第三十三話（後書き）

お待たせしました！ 三ヶ月ぶりです。
いや、いろいろとあってなかなか進まなかった話がようやく進みました。

実は、最初の内容はこんなじゃ無かったんですが最初に考えた三十三話の内容が上手くまとまらなかったんですね。
それで、アレスが王になって何をするのかをまとめ直してようやく書けました。

さて、いかがでしたでしょうか？

ノルンの人間サイズ。

いつかはやってみたいと思っていたんで。

あと非魔法研究開発機関もようやく進み始めます。

ルイズはまだこちらに呼ばれていないので学院生活をおそらく不安な気持ちで過ごしているでしょう。

そして最後に驚いた表情のアンリエッタ。
次回はこの続きから書きたいと思います。
また数ヶ月先にならないことを祈りつつ。

それでは！

第三十四話（前書き）

注：この小説は、独自設定や独自解釈があるため、真に「ゼロの使い魔のファン」の方は気分を害する可能性があるため、ご遠慮下さい。二次創作である以上、そこには望むものとは違う形の作品があるのをご理解戴いた上で読んでいただけると幸いです。

第三十四話

ドアの前に立つアンリエッタは俺と、人間サイズのノルンを見比べる。

何かに気がついたのかノルンを驚いた表情で見た。

「ま、まさか、ノルンなの？」

「う、うん」

ノルンは少し気まずさを感じて、元の姿に戻る。

再びフェアリーとなって俺の肩の上に乗ると、頬をかいた。

「今のこういうことなの！」

やや憤った口調でアンリエッタが言う。

「これはな」

「アレスに聞いているんじゃないの！ ノルン、今のはどういふことよ！」

俺じゃなくてノルンかよ？

それってもしかして嫉妬とかじゃないだろうな……。

ノルンは照れ笑いをしながらアンリエッタの言葉に応える。

「だって、あたしもマスターの役に立ちたかったから」

「役に立つのと、そ、その、抱きしめるのと、どういう関係があるのよ！」

抱きしめると言う時に、頬を少し朱に染めながら俺をちらりと見てきた。

身内だけになると、可愛いところもある。

「頑張りすぎのマスターに甘えて貰うためよ」

ノルンは堂々としながらアンリエッタに言う。

確かに甘えられる存在だとは思っ。

俺だってそれは否定しない。

だけど、アンリエッタにとって面白くないわけで……。

「アレス？」

矛先が俺へと向けられた。

「なんだ？」

「わたしじゃ、頼りにならないの？」

今にも泣きそうな顔で言うのは正直反則だろう。

これはどう答えるべきか……。

「アレス、わたしじゃダメなの？ ウェールズ様と結ばれるまでの間はわたし達、夫婦なのよ？」

頼ってはくれないの？」

夫婦を持ち出してくるなんて、無しだ。

だが、俺達の結婚はあくまで新たな国家を誕生させるための仮初めのもの。

万が一、アンリエッタの情が俺に移ったらそれは大変なことになる。

何せ、俺の本命はあくまでルイズなのだ。

あそこまで俺を思ってくれる子は他にはいない。

「アンリエッタ、俺との結婚は仮初めだぞ？ 下手に情が移ったらウェールズとはどうするつもりだ？」

アンリエッタの最終目的はウェールズと結ばれること。

確かに俺は、アンリエッタが国内で唯一心許せる男性だとしても彼女が一番愛するべき人を差し置いて俺がそのポジションを奪うような事は出来ない。

だからこそ仮初めの結婚に、俺が完全に甘えるわけには行かない。小さい頃から知っているアンリエッタを兄として支えることはあっても、夫として支えるわけには行かないのだ。

「それは……。でも、それじゃわたし、アレスのお荷物みたいじゃないの」

「お荷物ってね……。アンリエッタ、君は正真正銘の王族ってこと忘れてない？」

例えば、あくまで例えばだけど、俺とアンリエッタの命ならどちらが大事か？

そう考えた時、国家としてアンリエッタ、君の方が俺の命よりも何十倍、何百倍も大切なんだ」

命にどっちが大切なんで本来ない。

だが、もし俺とアンリエッタの命ならどちらを選ぶべきか？

王族の血を引くアンリエッタを優先されて当たり前なんだ。

もつとも俺が死んだらルイズが悲しむからそんなことがあつてはならないわけだが。

それにこの計画を遂行するには俺が必要不可欠だ。何せ俺の案でこつという結果になっているわけだから。

とは言え、アンリエッタは支えられても良い。

だが俺が彼女に支えられると言つのはない。

それだとウェールズに申し訳が立たないからな。

「アレスの命だつて大切よ！」

「そうだよ、マスターの命だつて大切！」

例えばなんだが、やはり話題が悪かったみたいだ。

二人から猛烈に反論させる。

「だから、例えばと言つただろ？ でも、それくらい重要なのは分かつて欲しい。

万が一計画が破綻した場合、最優先事項はトリステイン、アルビオン両王家の存続だ。

そのためにはアンリエッタとウェールズには何が何でも生き残つて貰う必要がある。

それは二人とも分かるだろ？」

やや強引な言い分だが、王家を持ち出すことで二人とも黙った。

アンリエッタに甘えないと言う事とは違う話にすり替えて誤魔化したわけである。

ま、それでアンリエッタに甘えられないと捉えて貰えれば問題ない。

「分かったわ。でも、わたしに出来ることは言つて欲しいの。

その……、抱きしめるくらいでいいなら、わたしにだって……」

頬を染めて言われてもな……。

「アンリエッタ、その役目はあたしがやるんだからアンリエッタはいいの」

俺とアンリエッタの間に腰に手を当てたノルン割り込んで言う。
どうやら俺への甘えさせポジションは渡さないと云ったふうだ。
せつかくだから、俺もそれに乗ることにする。

「ノルンに甘えるからと言うは、置いておいて。
アンリエッタは魅力的だからさ、アンリエッタに抱きしめられたらそこから先何をするか俺だって分からないぞ？」

それこそ大切なウェールズより先に俺に奪われたりしたら嫌だろ？」

「そ、それは……」

俺って女の子になんてことを言っているんだろう？

まあ、でもこれくらい釘を刺しておいて問題はないはずだ。

「そうよ。マスターってこう見えて結構やる時はやるのよ？ ルイズとだって、ね？ マスター」

「そうさ。……っておい、ノルン！ あの時、ノルンはいなかったはずだぞ？」

アルビオンへの出兵の前（第十一話）、ルイズに抱いてくれと言われて抱いた事がある。

だが、あの時ノルンはいなかったはずだ。

それなのに何故ノルンが？

「その……ね？ マスターが遅いんで探しにルイズの部屋まで行ったら二人ともお取り込み中だったから」

ノルンが顔を真っ赤にしながら頬をかいて誤魔化す。

確かにそういう事なら知っているかも知れないんだが。

「それで、わざわざ窓から覗いたって訳か？」

「そうそう……って！ マスター、今の無し！ 今の誘導尋問だよ！」

「いや、単にノルンが迂闊なだけだけだな」

ふとアンリエッタを見ると、口元を抑えながら真つ赤な顔をしていた。

少々、刺激の強い話題だったかも知れない。

「アンリエッタ、まあそう言うわけだから。

俺だって理性を無くしたらそう言うことだって平気で出来るわけなんだよ」

「わ、分かったわ」

とりあえず色々話題が混ざって完全に誤魔化せたようだ。

「で、アンリエッタが来た理由って何なんだい？」

かなり遠回りしたが、本来の用件を聞くことにするのだった。

二日後、俺はラグドリアン湖へと馬車を走らせていた。

正面に座るのは数年ぶりの再会となるシルファとラウードだ。

五年前、意識を取り戻してから少しの間は関係が続いていたのだが、俺がヴァルガードの将軍となって国内の賊狩りなどを始めてからは久しい。

アンリエッタが俺の部屋を訪れた理由。

それはラグドリアン湖の水位が増していると言うことを俺に伝えるにきたからだった。

今までも何度か王宮へ対策を求める文書が送られてきていたらしいが、高官の一人が大したとではないと高を括り上まで報告が上がっていかなかったらしい。

今回、ヴァリエール公爵を通してこの話が持ち込まれたらしく二人を派遣する事にしたと言う。

五年前からすると顔の彫りが深くなってますます男らしさが増したラウード。

シルファはポニーテールをやめて髪の毛を下ろしていた。

金髪の髪は腰まで届き、女性としての魅力が増して俺も思わずドキリしてしまう程だ。

「それにしても、アレスが国王とはな」

「ホントね。まさかアレスが国王にまでなるなんて思わなかったわ。それに策略家になってるなんて」

二人とももう何度目か分からない程この話題に驚いている。

ちなみ、ノルンは俺の肩で眠っている。

自己紹介をしてはじめての内はシルファと話していたが眠くなったらしい。

「あの、二人とも？ 何度も言うけど僕はまだ国王になって無いんだけど？」

しみじみ言う二人に一応の反論を試みる。

確かに驚くのも無理はない。

二人が知っているのは俺が十四歳の頃なんだから。

「仮初めとは言え、ルイズお嬢様はどうするだよ？」

「ルイズにも一応納得してもらっているからさ。問題はないよ。最終的にルイズと結婚はするんで」

「でも、女ってそうだと分かっているけど愛する人が他の人と一緒にいるのは我慢できないものよ？」

ちゃんとルイズお嬢様の事も大切に上げてあげないと、あの子とても寂しがり屋だから」

シルファが真剣な眼差しで言う。

やはり年上の女性だ。

その辺の事をしっかりと心配している。

俺はどれだけ年を取っても所詮は男だ。女性の気持ちは女性にしか分からないところもある。

「分かっているつもりだよ、シルファ。

僕だってルイズに寂しい思いをさせたままにすることはしないさ」

「そう。でもね、ちゃんとルイズお嬢様を捕まえておかないと寂しさからふらりといなくなっても知らないからね？」

「肝に銘じておくよ」

シルファはさすがに容赦が無いな。

でも、彼女が言っていることに間違いはない。

ルイズが寂しがりやなのは確かだ。今はサイトが付いていてくれるから大丈夫だと思うが。

万が一俺から離れるなら、相手はサイトってことになるのだろうか？

サイトは……。

サイトは確かにルイズを大切にしている。

俺なんかよりずっと真っ直ぐな心を持っているし、日本の価値観で物事を判断しているからな。

何せ、まだ高校生だ。

血の気も多い、もしかしたらって考えもないわけではないんだ。

シルファに言われて始めてその可能性を認識させられた思いがする。

「全く、好きなら絶対に離さないようにしておけばいいだろう？」

「まあ、そうなんだけど。今はこの話はやめにしよう。」

そろそろ湖のはずだから」

あと三十分も馬車を走らせれば湖に着く。

だから、調査についての打ち合わせをしようとした時だった。

突然、馬車が止まったのである。

「おい、まだ湖まで距離があるだろう？」

そう言って、ラウドが馬車を降りた。

俺もシルファも馬車を降りると、言葉を失って道の先を見ていた。馬車が止まった理由。

水位が増しているとは聞いていた。

だが、これは……。

「なあ、ラグドリアン湖ってまだ先だったよな？」

ラウドが前方を見ながら言う。

「ええ、まだ先のはずよ」

「僕もまだ先だったと記憶してるけど」

「じゃあ、何で俺達の目の前に水があるんだよ？」
そう。

目の前に広がるのは報告にあった水位が増していると言うラグドリアン湖だった。

ここまで水が来ていると言うことは周辺の村は完全に水没していることになる。

「この問題を受けていた高官は明日にでも解雇しないと。」

これだけの問題を報告するほどじゃなかったと言う理由じゃ済まない。

一体、どれだけの人間が被害を受けたと思っているんだ」

俺が聞いた話ではラグドリアン湖の増水に関する報告は約一年と少し前からあったと言う。

大したこと無いとずっと放っておかれたこの問題、とんでもない事になっていた訳だ。

「これは…… とんでもない事だわ。」

ランドリアン湖には水の精霊が住んでいるの知ってるけど、もしかしたら水の精霊が何かしら怒っているのかも知れない」

シルファが湖を見渡しながら言う。

「水の精霊が？」

「ええ。自然でここまで水位が増すなんてあり得ないわ。」

それこそ、何らかの形で長い間湖に水が流れ込みでもしない限りは、ね」

湖が出来る理由はいろいろとある。

地殻変動や、人工的に作られること、海面の変化の際に海水が取り残されて出来たりと。

そう言うことを考えればシルファが言うことは正しい。

「これは、一悶着ありそうってとこだな」

ラウドが俺達を見て言う。

水の精霊が絡むとなればただ事じゃない。

「シルファ、水の精霊が絡んでいるとなると対策はどうすればいいんだい？」

僕は、水の精霊との交渉とかは出来ないよ？」

「わたしがするわ。」

「だけど、わたしの家は水の精霊とは契約をしてないの。ちゃんと出てきてくれるかどうか……」

水の精霊と契約していないとなると呼び出すのは難しいはず。

「あのさ、あたしが聞いてみて上げようか？」

「今まで俺の肩で寝ていたノルンが声を掛けてきた。」

「え？ ノルンちゃん、出来るの？」

シルファが起きたノルンに尋ねる。

「人間がやるよりは交渉出来るはずよ？ あたしが風の精霊を通して水の精霊に聞いてみてあげる。」

精霊同士ならある程度話を通じるはずだから」

ノルンが俺の肩から降りて、俺達の前に出ると胸の前で手を組んで祈りを捧げるような格好を取った。

「どうやら風の精霊を通して水の精霊に尋ねているらしい。」

しかし、風の精霊と交流があるフェアリーがまさか水の精霊とも話が出来るとは驚いた。

しばらくして、ノルンが俺達の方を振り向く。

表情が少し困った感じだ。

「ノルン？」

「マスター、水の精霊は秘宝を探してるらしいわ」

「秘宝を？」

聞き返すと頷き返す。

「秘宝って、まさかアンドバリの指輪？」

シルファの言葉に深刻な顔をして頷くノルンであった。

第三十四話（後書き）

久しぶりの短期更新です。

第三十五話（前書き）

注：この小説は、独自設定や独自解釈があるため、真に「ゼロの使い魔のファン」の方は気分を害する可能性があるため、ご遠慮下さい。二次創作である以上、そこには望むものとは違う形の作品があるのをご理解戴いた上で読んでいただけると幸いです。

第三十五話

俺達は水の精霊を通して湖の水位が上がった理由を知ることが出来た。

だが、ノルンが深刻な顔をしたままなのが気になる。

「ちょっと聞きたいんだけどさ、アンドバリの指輪ってどんな秘宝なんだい？」

だから俺はアンドバリの指輪について聞くことにした。

秘宝があると言うのは俺も聞いたことはある。

ただアンドバリの指輪がどんなものかは知らなかった。

「アンドバリの指輪は偽りの命を与えと言われている秘法よ。

わたしもお父様から聞いたことがあるくらいだから詳しくは無いけど」

シルファが腕を組みながら答えてくれた。

「偽りの命？」

「それについてはあたしが話すわ。

あたしも族長から聞いた話なんだけどね、何でも死んだ者には偽りの命を与えて、生きているものはその心を操ることが出来る。

確かそうだったはずよ」

ノルンの言葉にシルファも頷いた。

だとしたらとんでもない秘宝が無くなったわけだ。

「ところで、そのアンドバリの指輪ってのはどうして無くなったわけなんだ？」

ラウドが馬車に寄りかかりながら尋ねる。

確かにどうしてそんな秘宝がなくなったのか？

「……水の精霊は、人間達によって奪われたと言っているわ」

ノルンは言いずらそうに言った。

たぶん、深刻そうなのは人間達が盗んだということが起因しているようだな。

俺はここで一つ疑問を感じた。

探すにしても水位を上げるだけじゃ途方もないのでは？　と言うことだ。

「ところで水の精霊が湖の水位を上げているのは指輪を探すためってことだよな？」

それってさ、見つかるまでどんどん水位を上げ続けるって事？」

「そうみたい」

「でも、それじゃ時間が掛かりすぎるんじゃない？」

疑問をノルンに尋ねると、これまた困った顔をして言う。

「あたし達みたいに世代を重ねる種族はそうなんだけど、精霊みたいな種って世代を重ねる必要がないのよ。」

だから……いつまでも生きていられるから水位を上げ続けられればいいかは見つかるわ」

「つまり下手すればハルケギニアが水没するってことか？」

ラウドがまさかと言う感じで尋ねるとノルンは苦笑いをしながら頷いた。

つまりノルンが深刻なのはアンドバリの指輪が見つからない限り水の精霊が全てを飲み込んでも探し出そうとするからと言うわけだ。となると水の精霊の怒りを静めるには一つしかない。

「僕達で探すってのはどうなのかな？」

「おいおい、その指輪を俺達で探して返すってか？　それだって厳しくないか？」

どこの誰が持ち去ったのなんかわからないんだぜ？」

俺の提案にラウドの言うことはもつともだ。

探すにも誰が持ち去ったのか？

それが分からなければ探しようが無い。

「ノルン、誰が持ち去ったのかって分かっているのかな？」

「ちよつと待って……」

ノルンがそういうと再び風の精霊を通して尋ねる。

さっきより交渉が長い。

二分くらいして、ノルンが首を振りながら言う。

「秘宝を奪った人間達を信用することなんて出来ないらしいわ」
ある意味正しい判断だと思う。

秘宝を奪った同族のものがわざわざ奪い返すとは思えないのだ。
案外、頭が固いのかも知れない。

「だったらどうしたら信用できるのか聞いてみてくれないか？」
「うーん。あたし通すと時間掛かるから直接出てきてもらう？」

ちよつと疲れた顔をしたノルンがそう提案してきた。

確かにそうかも知れない。

現在だと、ノルン、風の精霊、水の精霊と伝言ゲーム状態だ。

ノルンは人間の言葉から精霊の言葉に変換して意思を伝えている
のだろうがこれだと時間が掛かって仕方ない。

通訳を挟んだ居るわけだが、双方に通訳がいるわけじゃないから
余計だ。

「それが出来るならお願いできる？」

ノルンは俺の言葉に頷くと、再び風の精霊を通じて水の精霊に説
得を試みる。

一体どう交渉しているのか気になるが今は待つのが先決だった。
少してノルンがこちらを振り向く。

「交渉オツケー。向こうがあたし達に分かる形で実体化してくれる
って」

「ありがとうノルン」

「マスターのためだもん」

嬉しそうに言いながら俺の肩に座る。

ノルンの頭を軽く撫でてやると嬉しそうに俺の頬に寄りかかった。
「アレスって、結構女の扱いに慣れてるのね？」

「案外女っ垂らしだな」

二人の突っ込みに俺はただ苦笑いで返す。

反論できないんだよな。これには。

そんな事をしている間に目の前の水がゆらゆらと形を変えながら

人と同じような形を取った。

水の精霊だろう。

「我との交渉を望む、単なるものは汝らか？」

ほぼ無表情な水の精霊が俺達を見て言う。

俺は二人を見ると、一步前に出た。

「私があなたと交渉を望むものです。水の精霊、私達はあなたの秘宝であるアンドバリの指輪を探し出し怒りを鎮めたいと思っているのです」

「単なるものよ。指輪を盗みしものは汝らが同胞だ。汝らを我は信用できぬ」

水が揺らぎながら言葉を発する。

何かしらの感情が出ているのだろうか？

気になるところだが話を続ける。

「あなたは指輪を探すために水位を上げています。

このまま水位が上がり続けると私達が住め場所がなくなりとても困るのです。

そのため私達もあなたの指輪を探してあなたに返したい。

指輪を盗んだのは私達人間の同胞なのは認めます。

ですが、私達は平穩に暮らすのが望み。

水の精霊である、あなたと争いなど起こしたくないのです。

あなたは指輪が戻ればわざわざ他の種族を巻き込むことはしない。水の精霊、あなたも平穩に暮らすのを望むと思いますすがいかがですか？」

今度は水が激しくゆらぐ。

どうやら感情が動いているらしい。

もう一押しなのかも知れない。

「水の精霊よ。私達が信用に足るにはどうしたらいいのですか？

もしあなたの信用が得られるのであれば私達は何でも致しましょう」

俺は効果があるか分からないが、水の精霊の前に跪いた。

これが俺に出来る精一杯の誠意。

少しの間が空いて、再び水の精霊が語りかける。

「単なるものよ。もし私の信用が得たのであれば、我を襲撃し汝ら同胞を倒してみせよ」

「あなたを襲撃する私達の同胞がいるのですか？」

「そうだ。毎日のように我を襲撃し風と火を操る者が汝ら同胞が二人いる。」

我は指輪を探すのに手一杯だ。汝らが倒して見せよ。さすれば汝らの話を聞こうぞ」

水の精霊はそう一方的に言うとは再びただの水に戻っていった。

俺達はひとまず馬車の中に戻った。

「それにしても水の精霊を説得するとはわな。やっぱりアレスだ」
ラウードが感心したように言う。

「あれは単に出来る限りの誠意を尽くただけだよ。それに何でもする覚悟でも見せなければ信用なんてしてもらえないでしょ？」
人間同士でさえ、信用を得るにはそれ相応の態度が必要だ。

必要であれば無償で何かをすることだってあり得る。

それが水の精霊に通用するかまでは分からなかったが、結果オーライってわけだ。

「でも、アレスって無茶が好きよね。アルビオンに行ってた時もそうだったけど」

「いや、無茶と言うならシルファ、君の方が上だよ？ 情報収集のためにしようとした事なんて男の僕でさえハラハラものだったさ」
情報収集のためなら身体さえ使おうとしたシルファを俺とラウードが必死に止めたのも今となってはいい思い出だ。

「あれは必要だったからしようとしただけよ」

全く反撃に応えていない様子。

言い合っても無駄なので話をここで切ろう。

「分かってるよ。で、確認だけだ」

俺がそういうと二人の顔が引き締まる。

今から冗談は抜きだ。

「精霊が言うには風と火を操るもの、つまり風と火のメイジが水の精霊に攻撃を加えていることになるわけだね」

二人も頷いて応える。

「水の精霊に攻撃を加えるわけだから二人ともトライアングル以上と見た方がいいと思うわ」

シルファが付け加えて言う。

確かにトライアングル以上と見た方がいいだろう。

「それに関しては同感だね。過小評価は出来ないよ」

「だな」

ラウドも真剣な顔で答える。

「倒すと言っても恐らく水の精霊は襲撃さえなくなれば問題が無くなる。」

戦闘は必要だろうけど殺す必要はないと思うんだ。相手の杖さえ奪うだけで十分だよ。

「どうかな？」

「異議なし」

「わたしも」

水の精霊に攻撃を加えるメイジも何らかの理由があるからだ。

つまりその理由が分かり解決の目処が立つなら襲撃を止めるはずなんだ。

わざわざ危険を冒してまで水の精霊に攻撃を加えるなんて余程のことと考えていい。

だけど、俺の感が正しければ攻撃を加えるものも目的は俺達同じではないだろうか？

もっとも二人でつてところがあまりに無謀すぎる気がしてならない。

「ところで、その襲撃者つてのはどこに現れるんだ？」

ラウドの素朴な疑問に、俺達は一同固まってしまったのだった。

その後、ノルンに頼んで風の精霊から水の精霊を攻撃するメイジがどこに現れるかを聞いてもらった。

ノルンが居なかったら今頃水の精霊と交渉も出来ず、メイジがどこに現れるかも分からず仕舞いのところだった。

「ホント、すっかりしてよね！」

本日何度もお願いをしているせいでノルンがご立腹。

最初こそ俺の役に立つからと頑張ってくれたが、いい加減疲れが溜まっていたらしい。

腰に手を当てて俺を上から見下ろしながら頬を膨らませていた。横には呆れ顔のラウドとシルファ。

「こりゃ、アレスは尻に惹かれるタイプだな」

「そうね。ノルンちゃんがみたいなのタイプなのが余計に効いているのでしょけど」

正直、面目が立たない。

二人に言われたい放題だ。

ここで反論するにも材料が無い。

でも、こうする他無かったわけだ。

俺達でやろうとすれば時間が掛かったわけだし。

水の精霊と交渉の出来るメイジをアンリエッタに頼んで同行してもらった方が良かったか？

でも、こういう事態だったのはさっき知ったばかりだしな。

とは言え今はノルンのご機嫌取りが先だ。

「今度、好きなもの何でも食べさせてあげるから許してくれないか？」

ぴくんとノルンが反応する。

片目だけ開いて俺をじつと見る。

「ノルンも甘いのが好きでしょ？ だから街に出かけたときにさ」

「うつつうつつ……。食べ物なんかにあたしは釣られないわ！」

一度は落ちるかと思ったノルンも再び心を硬くしてそっぽを向いてしまった。

くそ、食べ物で釣るには材料不足か。

なら仕方ない。

これはノルンが人間サイズになったからこそその奥の手だ。

「それじゃ、今度ノルンが人間サイズになった時にデートなんてどうかな？」

「ホント！」

さっきまで不機嫌さはどこへ行ったのやら。

今度は目を輝かせながら俺を見るノルン。

俺に好意を持っているからこそこれで何とかなるわけなんだけど。ルイズ、ごめん。

アンリエッタに続いてノルンも相手しなくなってきた。

「もちろんさ。僕がノルンに嘘を付いた事あったかい？」

俺の言葉にノルンは少し考えて首を振った。

ほっ。ノルンには包み隠さずいろいろと話しておいて良かった。

「それじゃ、許してくれるかな？」

「いいわよ」

とても嬉しそうに俺の頬に擦り寄ってきた。

良かった。ノルンが機嫌悪いとどうもやりにくくてな。

「シルファ、アレスってあんな奴だったか？」

「さあ、わたしが知るアレスはもう少し紳士的だったと思ったけどね？」

しかし、二人からの株は下げる羽目になってしまった。

風の精霊から二人のメイジが現れる場所を聞くと、俺達はその場所まで張り込みをすることにした。

いつ来るかは分からないが昼間から仕掛ける事はないだろう。

それではいくらなんでも目立ちすぎる。

だから俺達は後退で休憩しながら張り込んだ。

だが、一向にメイジ達は現れない。

すでに陽は落ちて数刻が過ぎてる。

「今日は来ないのかな？」

「毎日と言っていたからもうしばらく待ってみないと分からないでしょう？」

今、ラウードが張り込みのために出ているためシルファだけが答えた。

まだ掛かるのかと思っていた時に、馬車のドア軽く叩かれる。
ラウードの合図だ。

「来たようだぜ？」

小声で言うラウードに、俺達は頷くと馬車からそっと降りる。
ラウードに付いて行くと茂みの先に水辺に立つメイジらしき人間を二人確認した。

黒い布に身を包んでこちらからではどんな人間かは窺い知れない。
「まずは僕が先制しようと思う。その後を二人が連携しながらどちらかをお願い」

「分かった」

「了解」

二人が頷くと俺は身を低くしながら小さく詠唱を開始する。
使う魔法はエア―ハンマーだ。

正体不明のメイジ二人の間に放って分散させる。
恐らく二人組みと言うことは連携に長けている可能性が強い。
だったら個別に対応するのがいい。

詠唱が終わり、いつでも発動できる状態にして更に茂みを使って近づくと一気に茂みから出て魔法を放った。

「エア―ハンマー！」

完全な不意打ちだ。

正体不明のメイジも驚き一瞬反応が遅れる。

空気の塊が二人の間に着弾して爆発した。

「行くよ！」

俺がそういうとラウードとシルファも茂みを駆け抜けて正体不明のメイジに向かう。

向かってくる俺達に分散されたにも関わらず正体不明のメイジが連携プレイで迎撃に来た。

風と火の併せ技だ。

エアリーニードルの強化版にファイアーボール。

空気の渦に炎がミックスされて巨大な火炎放射が俺達に迫った。

「任せろ！」

ラウドがそういうとアースウォールを唱える。

地面から分厚い大地の壁が現れて、火炎放射を防いだ。

だが、超高温のためか少ししてアースウォールが脆くも崩れ去っていく。

「くそ、相手とんでもない使い手だ！」

ラウドがそう言いながらゴーレムを生成し始めた。

「シルファ、ラウドは火のメイジを！ 僕は風のメイジをやる！」

今の攻撃でどっちが風のメイジが分かった。

だから俺は風のメイジに向かうことにする。

火のメイジには水と土が有効だ。

そもそも二人なら連携も取りやすいし、火が相手ならたとえトラ

イアングルでも苦戦するはずだ。

「お前の相手はこつちだ！」

俺はそう叫ぶと素早くエアーカーターの詠唱をして、放つ。

風のメイジはそれを難なく避けると向こうはウィンディ・アイシクルを放ってきた。

「つち。シールド！」

俺はとっさにシールドを張りウィンディ・アイシクルに突っ込んでいく。

下手に避けるより進んだ方が被害は少ない。

シールドに数本の氷の矢が刺さる。

威力が高い。

刺さった場所からシールドに亀裂が入ったのだ。

シールドは魔力で作った障壁。

だからそうそう罅なんて入らないんだ。

目の前のメイジは明らかに一流の部類に入る。

杖を奪いたいがそう簡単に行かないのが分かった。

だから俺は全力で叩くことにする。

「ライトブリッド！」

四つの光弾を生み出す。

地面を蹴って相手に接近しつつ、一つの光弾を敵に放った。

高速射撃だ。

だが、敵メイジも慌てることは無かった。

冷静に俺の放った光弾をエアースールドで軌道だけを逸らす。

「やるね」

俺は更に一つを放つ。

今度は誘導弾。

先ほどと比べると速度がやや落ちる。

敵メイジは光弾を今度は避けると、エアースールドを放ってきた。

しかも連発。

「っち」

再度シールドを張りつつ、俺はエアースールドを回避する。

外れたいくつかのエアースールドが地面を抉り取りその威力の高

さが伺えた。

俺は意識を、放った光弾に向けて敵メイジへと軌道を直す。

避けたはずの光弾が軌道を変えて向かってくることにさすがの敵

メイジも驚いたようだ。

だが、冷静さを失っては居ない。

軌道を良く見ながらエアースールドをぶつけて来たのだ。

光弾がエアースールドと接触して爆発。

一瞬、眩い光が辺りを照らした。

「まずいな」

長期戦になると先制攻撃の意味がなくなってくる。

俺は更に四つの光弾を作ると全て高速射撃で打ち出した。

さすがに四つ同時は考えていなかったらしい。少し怯んだのが分かった。

だが、それでも右に左にと回避していく。
身軽な奴だ。全ての光弾を避けてしまう。

だが、最後に回避した時バランスを崩したのを俺は見逃さなかった。

俺は一気に敵メイジに接近する。

敵メイジが慌てて杖をこちらに向けるが、時すでに遅し。

俺は杖を向けている腕を掴むと、一気に敵メイジを押し倒して杖を奪う。

「っ」

小さくうめく声にわずかに聞き覚えを感じつつ、俺はメイジの顔を見て驚いた。

「た、タバサ？」

「……」

返事することなくただ俺を睨み付けて来る。

「何で、君が？　じゃあ、向こうはキュルケ？」

俺がそう尋ねるとタバサを俺を睨み付けながらも頷いて答えるのだった。

第三十五話（後書き）

アンドバリの指輪イベント。

本編と違ってルイズはいません。

さて、ようやくアレスが王様になるというのにその前のイベントに時間が取られています。

ルイズも最近ご無沙汰ですし。

ルイズファンの皆さん、もう少しお待ちください。

戴冠式&結婚式前にはルイズ復帰予定です。

2010/09/28

一部修正。

第三十六話（前書き）

注：この小説は、独自設定や独自解釈があるため、真に「ゼロの使い魔のファン」の方は気分を害する可能性があるため、ご遠慮下さい。二次創作である以上、そこには望むものとは違う形の作品があるのをご理解戴いた上で読んでいただけると幸いです。

第三十六話

あの後、すぐにキュルケに俺の姿を見せて一応話し合う形にした。今、俺達は馬車の近くに集まっていた。

俺、ラウド、シルファと向かい合う形でキュルケ、タバサだ。キュルケが腕を組み、タバサは無表情で何を考えているかは伺えない。

「で、どうしてアレスがここに来ているわけなのよ？」

「湖の水位が上がっているって言う報告を聞いて調査に来たんだよ」

「そう。それで、あたし達を止めた理由は？」

鋭い目つきで俺を射抜いてくる。

この辺はさすがゲルマニアの貴族だ。

眼力だけで迫力がある。学校では見せない一面を見た気がした。

「ノルンに水の精霊と交渉してもらって水位を下げるための条件の一つが君達を止めることだったんだ」

ノルンを見て言うとなルンもそうだという風に頷く。

「水位を下げられるの？」

ちらりとタバサを見ながら尋ねてくるキュルケ。

「そうだね。何でも水の精霊は人間に盗まれた秘宝を取り返すために水位を上げてたんだ。」

つまり秘宝さえ戻れば水位は元に戻すと。

取り戻すに当たって、僕達が代わりに行くことにしたんだけど信用できないと言うことから水の精霊の依頼としてまずは水の精霊を襲撃するものたちを止める事になったんだよ」

俺がそついい終わるとキュルケとタバサが顔を見合わせる。

「本当に水位は下がるの？」

タバサが俺を睨みながら言う。

どういう理由かは分からないが、邪魔されたのが余程腹立っているのだろうか？

「そのはずさ。まずは水の精霊と話して襲撃が無くなったことを告げない」と

小さく頷き、タバサは下がった。

聞きたいことはそれだけらしい。

「それで、どうしてあなた達は水の精霊を襲撃してたの？」

シルファが二人を見て不思議そうに尋ねる。

本来なら二人とも俺の同級生。つまりはまだ学生なのだ。

学生が水の精霊を襲撃する理由がない。

「こっちにもいろいろとあってね。ただ言える事はこっちも水位が上がっている事に困ってるってことよ」

ため息を吐き出すようにキュルケが言う。

確かにラグドリアン湖はトリステインとガリアに跨って存在している。

そうなればガリアの方でも増水を何とかしたいと思うのも頷けた。

「確かに水位が上がればなしってのは困るよな」

ラウドも頷きながら言う。

困っているのは何もトリステインの民だけではないんだ。

「でも、水の精霊を攻撃するなんて下手したら返り討ちにあったたわよ？」

「そんなことは分かってるわ。でも、それでも何とかしたかったのよ」

シルファは釈然としない様子で言うと、キュルケも困ったように言うしかないようだ。

「まあ、とにかく要は水位が下がれば問題は解決ってことでいいんだよね？」

このままここで話していても仕方が無い。

俺がまともに入ると、皆も頷いた。

水位を下げるなら早く下げたいのはどちらも一緒なのだから。

俺はノルンを通して再び水の精霊を呼び出した。

前回と同じく、水の精霊は形を人と同じくして現れる。

「水の精霊よ。あなたを襲撃する者を捕らえ襲撃を止めさせました」
「単なる者よ。我に触れよ。汝が偽りを告げていないかを汝の心に問おう」

水の精霊に触れる。

これは相手の領域に踏み入れることになる。

もし、これで俺が虚偽を言っているとすれば一瞬にして殺されるのだろう。

「分かりました」

「アレス！」

「マスター！」

水の精霊に頷くと、シルファとノルンが驚いたように声を上げた。

水メイジであるシルファにとって水の精霊に触れることがどれ程危険か分かっているんだろう。

ノルンもまた精霊に身を任せることがどういうことか分かっていたようだ。

「大丈夫だから」

俺はそれだけ言っと、水の精霊に歩み寄って水の精霊に触れた。
ひんやりとした感触、水そのものの感触だ。

判断は一瞬だった。

「汝が虚偽を告げていないことが確認できた。汝らの言うことを聞いてやるう」

「ありがとうございます」

頭を下げつつ、俺は水の精霊から離れた。

さすがに緊張したな。

「それで、一体誰がアンドバリの指輪を持ち去ったのですか？」

「今から月が三十程交わる前の晩だ。汝ら数個体が風を駆使して秘宝を盗んだ。その時の一個体がクロムウェルと呼ばれていたのを覚えてる」

「クロムウエル……」

俺の記憶違いじゃなければ、現レコンキスタの総帥の名前だ。シルファとラウドを見ると驚いた顔をしてやはり俺の方を見ている。

キュルケは首をかしげて、タバサは興味がなさそうだ。

「水の精霊よ。分かりました。それではアンドバリの指輪は私共で探させていただきます」

「汝ら是我との約束を守った。汝らを信じ我は待つことにしよう」

「あ、一つ。いつまで探せばいいでしょうか？」

「汝らの命が尽きるまででよい。」

我は世界があり続ける限りある。だが汝らはそうはいかぬ。

ならば汝らの命が終わるまでよい。それでも探せぬのなら我が探せばよい事だ」

「ありがとうございます」

再度俺が頭を下げると、水の精霊は形を崩していく。

「待つて」

水の精霊が去ろうとした時にタバサが呼び止めた。

一体、何があるというのだろう。

「水の精霊。あなたに一つ聞きたい」

「なんだ？」

「あなたはわたし達の間で誓約の精霊と呼ばれている。その理由を聞きたい」

「単なるものよ。我と汝らでは存在が根本から異なる。ゆえに汝らの考えに我は深く理解できぬ。だが、察するに我の存在自体がそう呼ばれているのではないか。我に決まった形はない。しかし変わらぬ。汝らが目まぐるしく世代を入れ替える間、我はずっとこの水と共にあった。」

変わらぬ我の前ゆえ、汝らは変わらぬ何かを祈りたかったのだろう」

水の精霊がそっくり終わると、タバサは頷いた。

そしてひざまづくと、両手を合わせて祈りを捧げる。一体、何を約束しているのかは分からない。

だが、その姿に俺は悲壮な何かを感じ取った。

彼女もまた何かをその胸に抱えているのだろう。

タバサが立ち上がると、今度こそ水の精霊は跡形も無く水に溶けて消えていった。

ラグドリアン湖の増水の件はこれで終わった。

俺とシルファ、ラウドはキュルケ達と別れるトリスタニアへと向かう。

道中は皆、何か思うことがあるのか黙ったまま馬車に揺られていた。

そしてその雰囲気になんか耐えかねたようにノルンが俺達に声をかける。

「みんな黙っちゃってどうしたの？」

「いやね、指輪を盗んだ人間のことでさ」

俺がそういうと、きっかけを待っていたかのようにシルファが口を開く。

「アレスも何か引つかかるのね？」

「そうだね。湖の水位が上がりはじめた時期。そしてレコンキスタの勢力が拡大していた時期。」

この二つがどうしても重なるような気がするんだ」

月が三十交わる前の晩。

確か二年位前のことだ。

俺がトリステイン魔法学院に入った頃のこと。

確かにその頃からアルビオン、トリステイン連合軍が押され始めている。

「俺も同じ事を考えてた。クロムウェルと言えばレコンキスタの総帥だ。俺達で調べたんだ忘れもしねえ」

「そうなんだよね。レコンキスタが急激に勢力を伸ばしてアルビオンを今や取り込もうとしている。クロムウェルはただの司祭だった

し、特別な何かがあったわけじゃない。そもそも彼が総帥の器とも思えなかったんだよね」

「俺も同じ意見だ」

「わたしもね」

俺達はそういつと頷き合った。

「ねえ、あたし除け者にされてる気がするんだけど？」

盛り上がる俺達にノルンがジト目で俺を見る。

「ごめん。とんでもないことが分かったからさ」

「レコンキスタってマスターがアルビオンで戦った奴らでしょ？」

「そうだよ。しかし、クロムウエルだけじゃとてもアンドバリの指輪は手に入れられないはず」

クロムウエルは司祭だ。

ただの司祭がアンドバリの指輪を手に入れることは愚か、その使い方だって分かるわけがない。

それなら、誰かが？

「協力者が居たんじゃね？ アレス、もしかすると黒幕が居るかもしれないぜ？」

ラウドがまるで俺の思考を先読みするように言う。

「僕も今、ちょうどそう思ったところだよ。ノルン、アンドバリの指輪で心を操られた人間ってどうなるんだい？」

「確か、指輪の持ち主の忠実な僕になるんじゃないかなかったかしら？ あなたはどう？」

ノルンがシルファに話を振ると、シルファも頷いて答える。

「わたしもそうだと記憶してるわね」

「そうか……」

それだけ強力なマジックアイテムとなるといかにクロムウエルがただ司祭であっても総帥に成り上がることも出来る。

問題は、誰が、一体、何のためにクロムウエルに指輪を託したのか？ だ。

「シルファ、ラウド。アルビオンに行っていた時にクロムウエル

に支援する人間の噂とかつて聞いたことあったっけ？」

「いいや、俺は知らないな」

ラウードがシルファを見ると同じく頷く。

「だよな……。当時のパブリックユニオンの誰かがアンドバリの指輪を持つならまだ分かるんだ。彼らの悲願はあくまでアルビオンでの地位向上だからね。」

でも、当時のクロムウエルは純粋に聖地を目指すことを叫んでいた。

あ那时的話からすると、とても彼がアンドバリの指輪にたどり着くとは考えにくい。

となると、クロムウエルを祭り上げるメリットが思い浮かばないんだよね」

当時パブリック・ユニオンとレコンキスタの利害が一致していたのは知っていた。

彼らが頻繁に接触しているのも。

その後、レコンキスタと統一しクロムウエルが総帥となるわけだが。そして二年前にアンドバリの指輪がクロムウエルに渡る。

アンドバリの指輪ほどのマジックアイテムなら普通、自分が使いたいところだろう。

それがクロムウエルに渡すとなるとそいつに欲があるのか、ないのか。

「一体誰が、何のためにこんなことをしたんだろう？」

「それが分かったら悩まないで済むだろうな」

「ホントね」

二人の言葉に俺も頷くしかなかった。

トリスタニアに戻ると、報告書の作成を二人に任せて俺は自室に戻った。

正直、考えないとならない事が多い。

俺が国王になって、レコンキスタとアルビオンを支持してと考え

だが今回の話を聞く限りかなり厄介かもしれない。

アンドバリの指輪。

死んだ人間を操ることが出来る上に、生きている人間はその心をも操る。

下手に俺が会えば俺の心も操られる可能性があると言っわけだ。

そして気になるのがウェールズ。

俺の予感が杞憂に終わればいいが、ウェールズが本当の意味で向こうに落ちた可能性がある。

これはただの予感だから何とも言えないが。

「マスター、随分と怖い顔をしてるわよ」

「ああ。ウェールズのことが気になってな」

そついうと俺は座っていた椅子から立ち上がる。

窓の方へ行き、外を見た。

陽が落ち始めて空を朱に染めている。

この空の向こうにアルビオンがあるんだ。

「アンドバリの指輪はクロムウエルが持つてるのは間違いない。ウェールズは奴と会見しているんだ。もしかしたらと思うとちよつとな」

「不安なの？」

「まあな。俺の考えていた構想の前提が崩れるかも知れないからな。ウェールズが正気ならいい。もし向こうの手の中に落ちたとなるなら外交は難しくなる上にアルビオンとトリステインの統一も難しくなる」

甘かった。

本当に考えが甘かった。

クロムウエルがアンドバリの指輪を持っているとなると全ての前提が崩れる。

そつ肩を落としているとノルンが肩の上に乗って、俺の頬を撫でる。

「元気出して、マスター。まだ何も始めてないんだから。」

マスターは考えるの好きなんだし、ここからどうするか考えようよ」

優しい声でノルンが言う。

ホントこういう時はノルンがいて良かったと思う。

「ありがとう、ノルン。確かにその通りだ」

そうだ。

まだ何も始めてない。

逆に動き始める前に分かったんだ。

だったらまた練り直せばいい。

アンドバリの指輪を持ったクロムウエルをどうするか、を。

「全てはここからか」

「そうだよ、マスター！　ここから！」

につこりと笑って俺を励ますノルン。

いい使い魔だ。

「それに、ルイズのためなんですよ！　それなら尚更、頑張らないと」

「ああ。そうだな」

ルイズのため。

ルイズと平穏に暮らすために今を頑張っているんだ。

だったら、こんな所で挫けていたんでは仕様がな。

「やってやるか、ルイズのため」

「マスター、その意気！」

俺は改めて、本来の目的と言っものを思い出すのであった。

第三十六話（後書き）

一ヶ月半ぶりの更新になります。

最近、業務が忙しくてなかなか更新が出来ません。
やりたい事も多いんですがね。

さて、今回でランドリアン湖は終わりです。

2・5話に渡る事になってしまいましたが、これでようやくアンドバリの指輪が出せました。

歴史が変わっている状態で、どうやってここに結び付けようか考えてましたがようやく結び付けられました。

次回は久しぶりにルイズを登場させようと考えています。

ここ数話ルイズ出ていませんでしたから。

それでは今回はこれで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5224h/>

死の先に待っていた新たな世界

2011年9月17日05時05分発行